

NHK連続テレビ小説と視聴者

— “朝ドラ” はどう見られているか —

メディア研究部 二瓶 亘・齋藤 建作・
吉川 邦夫・亀村 朋子

要約

テレビドラマの視聴率が長期的に低落傾向にある中、NHKの朝ドラ（連続テレビ小説）は好調が続いている。2010年の『ゲゲゲの女房』を起点に視聴率はV字回復ともいえる様相を呈している。SNS上で大きな話題になったいわゆる「あまちゃんフィーバー」、今世紀最高視聴率を獲得した『あさが来た』、その後もほとんどの作品が視聴率20%を超えるなど、近年の朝ドラは存在感を増している。「何が朝ドラの好調を支えているのか」を探るべく、『まれ』から『まんぷく』に至る8作品についてWEBアンケート調査とグループインタビューを行い、そのうち6作までは『放送研究と調査』に報告した。さらに18年秋には朝ドラの非視聴者も含めたより広範なWEBアンケート調査を行い、19年春のシンポジウムで議論した。本稿は以上の朝ドラ研究の総括を中心とする。【歴史編】では、『なつぞら』で朝ドラが100作となるのを機に、可能な限りの正確な資料に基づきこれまでの歴史を振り返る。次に【総論編】では、WEBアンケート調査で得られた朝ドラ視聴の実態を報告する。朝ドラを見たことのある人は65%に及ぶが、その中で『ゲゲゲの女房』以来近年の朝ドラ好調に寄与している人は44%であった。続いて、8作品の調査に共通する項目、および朝ドラのイメージについてまとめて提示した。【各論編】では「習慣視聴」「朝ドラの多様性」などについて各テーマを分析した。まず視聴率回復の起点となった『ゲゲゲの女房』の視聴率を分析し、背景に習慣性の活性化があったことを指摘した。習慣はマンネリに陥りかねないが、朝ドラの持つ多様性がそれを防いだのではないかと思われる。「朝ドラらしさ」の比較を通して、作品や視聴層の多様性について考えている。続いて、習慣視聴の実態、および作品をまたいだ継続視聴について分析した。一方、朝ドラ視聴には視聴者の見方の多様性も見られる。朝ドラの見方として「長期視点」と「短期視点」の実態を分析し、加えて「中間派」の実態を詳述した。朝ドラに関するSNS接触者は14%あったが、朝ドラ視聴には積極的な視聴者であることが分かった。最後に、『放送研究と調査』で報告する機会がなかった『半分、青い。』と『まんぷく』の調査結果をまとめた。【シンポジウム編】には、2019年春のシンポジウムを抄録した。

目次

はじめに……………	8	Ⅲ-4 作品をまたいだ継続視聴の実態～5クラスターの分析～	
I 歴史編 ～朝ドラ100作史～……………	13	Ⅲ-5 長期視点・短期視点～視聴者の多様性理解への試み～	
II 総論編……………	27	Ⅲ-6 SNS接触者はどのような人たちか	
II-1 視聴者はどのように朝ドラを見ているか		Ⅲ-7 『半分、青い。』と『まんぷく』～挑戦と王道～	
II-2 朝ドラ各作品はどう見られたか		IV シンポジウム編……………	126
II-3 朝ドラのイメージ		シンポジウム「検証<100%>朝ドラ!!」抄録	
III 各論編……………	52	おわりに……………	148
III-1 『ゲゲゲの女房』はなぜ視聴率が急伸したのか		付表 [作品一覧表] [編成年表]……………	152
III-2 朝ドラの多様性			
III-3 習慣視聴の実態～それは不名誉なことなのか～			

はじめに

朝ドラ研究チーム発足のきっかけ

私たちNHK放送文化研究所（以下、文研）の朝ドラ研究チーム¹が連続テレビ小説（通称・朝ドラ）の研究の緒についたきっかけは、2013年度前期に放送された『あまちゃん』であった。『あまちゃん』は、劇中で使用された「じぇじぇじぇ」という驚きを表す岩手の方言が2013年新語・流行語大賞に選ばれるなど、世間で大変話題になった。インターネットのSNS上でも、“あまちゃんフィーバー”と名づけられるような大きな盛り上がりを見せていた。全156話の平均世帯視聴率（以下、特別なことわりがある以外、視聴率はビデオリサーチ社 関東地区のNHK総合テレビ朝8時台放送分の全話平均世帯視聴率を指すこととする）は20.6%。決して低い数値ではないが、同じ年に大ヒットした『半沢直樹』（TBS系列放送）の最終回の視聴率が42.2%だったことと比べると、特別に高い視聴率とは言い難いものであった。『あまちゃん』の、こうした視聴率と世間の話題性とのギャップは何に由来するものなのか、を解明することを目指してチームを結成し、調査研究を始めた。

研究成果の一端を紹介すると、『あまちゃん』に関するTwitter上の発言数は半年間で613万件、前年同時期放送の『梅ちゃん先生』の12倍に達する多さであった。また、『あまちゃん』では発言者（88万人）のうちの0.8%の人が発言全体の約4割を占める発言をしている。つまり、少数ではあるが非常にたくさん発言する＝発言したいことが非常にたくさんあるという、『あまちゃん』に対する“熱”の高い人が存在してい

るのであった。視聴率には表れない視聴者の“熱”の存在が、SNS分析によって明らかとなり、私たちは“視聴熱”と名づけた。調査結果の詳しい分析と、それをもとにしたシンポジウムの採録は『放送研究と調査』2014年3月号・6月号を参照されたい。

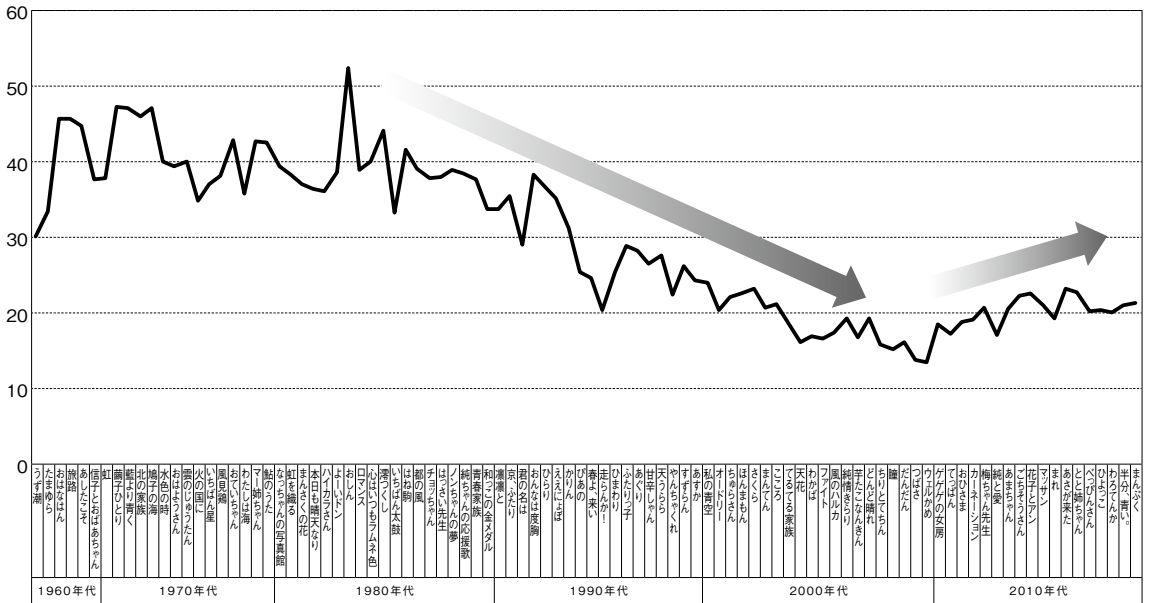
朝ドラ視聴率の変遷と、近年視聴率が好調な朝ドラ

朝ドラの視聴率は、長期スパンで見ると図1のように、1983年放送の『おしん』（52.6%）を頂点に、2009年度後期の『ウェルかめ』まで20年以上にわたる長期下落傾向が続いていた。

その朝ドラ視聴率が2010年度前期の『ゲゲゲの女房』（18.6%）から上昇基調に変わり、2012年度前期の『梅ちゃん先生』（20.7%）で20%を回復。以降、大部分の作品でコンスタントに20%台をキープし続けている。

近年は、高視聴率のドラマ番組が減少する傾向にある。表1は2000年以降5年ごとに、2015年までと2018年の、年間高視聴率番組ベスト50（ビデオリサーチ社 関東地区・世帯視聴率）に入ったドラマ番組を列挙したものである。ベスト50に入るドラマ番組の数は年によりまちまちだが、その年のドラマ番組のトップの視聴率を見てみると、2000年には41.3%と4割を超える高さであったが、2005年は3割台、2010年以降は2割台に下がっている。ドラマ番組がだんだん高い視聴率をとりにくくなってきていることが見て取れる。そして、2015年と2018年では、上位3番組は朝ドラ作品が占めている。その年に放送された3作品がトップ3を独占したのである。個々の作品の視聴率が高いということにとどまらず、朝ドラという“枠”が高視聴率を維持しているのである。このように、視聴率

図1 朝ドラの視聴率一覧 (ビデオリサーチ社 関東地区・世帯視聴率・全話平均) (%)



※NHK総合テレビ朝8時台放送分(以下同)

表1 年間高視聴率番組ベスト50にランクインしたドラマ番組 (ビデオリサーチ社 関東地区・世帯視聴率)

年 (ランクイン作品数)	順位	番組名	放送局	放送日	曜日	放送開始時刻	放送分数	視聴率(%)
2000年 (8作品)	3	日曜劇場・ビューティフルライフ・最終回	TBS	2000/03/26	日	21:03	81	41.3
	9	やまとなでしこ・最終回	フジテレビ	2000/12/18	月	21:00	74	34.2
	11	2000年ドラマスペシャル・百年の物語・第3夜	TBS	2000/08/30	水	21:00	138	32.6
	26	連続テレビ小説・私の青空	NHK総合	2000/07/08	土	08:15	15	28.3
	29	日曜劇場・オヤジい。・最終回	TBS	2000/12/17	日	21:00	69	28.0
	33	連続テレビ小説・あすか	NHK総合	2000/03/24	金	08:15	15	27.3
	40	伝説の教師	日本テレビ	2000/04/15	土	21:00	54	26.1
	48	渡る世間は鬼ばかり2000年年末スペシャル	TBS	2000/12/28	木	21:00	144	25.0
2005年 (10作品)	9	ごくせん・最終回	日本テレビ	2005/03/19	土	21:00	84	32.5
	16	義経	NHK総合	2005/02/06	日	20:00	45	26.9
	18	24時間テレビスペシャルドラマ・小さな運転士最後の夢	日本テレビ	2005/08/27	土	21:15	120	26.6
	22	木曜劇場・電車男・最終回	フジテレビ	2005/09/22	木	22:00	84	25.5
	23	エンジン	フジテレビ	2005/04/18	月	21:00	74	25.3
	23	女王の教室・最終回	日本テレビ	2005/09/17	土	21:00	84	25.3
	27	日曜洋画劇場・特別企画・TRICK新作スペシャル	テレビ朝日	2005/11/13	日	21:00	134	24.7
	42	スローダンス	フジテレビ	2005/07/04	月	21:00	69	22.5
	44	金曜ドラマ・花より男子・最終回	TBS	2005/12/16	金	22:00	69	22.4
49	連続テレビ小説・ファイト	NHK総合	2005/08/26	金	08:15	15	21.9	
2010年 (6作品)	23	龍馬伝	NHK総合	2010/01/31	日	20:00	45	24.4
	26	連続テレビ小説・ゲゲゲの女房・最終回	NHK総合	2010/09/25	土	08:00	15	23.6
	33	月の恋人・Moon Lovers	フジテレビ	2010/05/10	月	21:00	69	22.4
	45	フジテレビ開局50周年特別企画・わが家の歴史	フジテレビ	2010/04/09	金	21:04	138	21.2
	49	相棒	テレビ朝日	2010/12/15	水	21:00	54	21.2
2015年 (7作品)	5	連続テレビ小説・あさが来た	NHK総合	2015/12/04	金	08:00	15	27.2
	9	連続テレビ小説・マッサン	NHK総合	2015/03/20	金	08:00	15	25.0
	16	連続テレビ小説・まれ	NHK総合	2015/04/07	火	08:00	15	22.7
	20	日曜劇場・下町ロケット・最終回	TBS	2015/12/20	日	21:00	79	22.3
	32	相棒season13 2時間SP・最終回	テレビ朝日	2015/03/18	水	20:00	129	20.3
	33	24時間テレビドラマスペシャル・母さん、俺は大丈夫	日本テレビ	2015/08/22	土	21:13	120	20.2
	46	木曜ドラマ・アイムホーム・最終回	テレビ朝日	2015/06/18	木	21:00	69	19.0
2018年 (5作品)	20	連続テレビ小説・半分、青い。	NHK総合	2018/08/08	水	08:00	15	24.5
	22	連続テレビ小説・まんぶく	NHK総合	2018/10/01	月	08:00	15	23.8
	26	連続テレビ小説・わろてんか	NHK総合	2018/02/16	金	08:00	15	22.5
	35	日曜劇場・99.9-刑事専門弁護士・SEASON2・最終回	TBS	2018/03/18	日	21:00	108	21.0
48	火曜ドラマ・義母と娘のブルース・最終回	TBS	2018/09/18	火	22:00	67	19.2	

※同一ドラマで複数ランクインした作品は、最も視聴率が高かった1本のみ掲載した。

低下傾向にあるドラマ番組の中で、“枠”として視聴率20%台をキープし続け、ドラマ番組の視聴率トップを占める存在になっている朝ドラは、希有な存在といえるであろう。

研究が目指したものと研究の推移

文研朝ドラ研究チームは、こうした朝ドラの視聴率好調に注目し、何が支えているのかを解明することを目指して2015年度から改めて調査研究に着手した。予備調査として行ったMROC調査（インターネット上で行うグループインタビュー調査）で視聴者の朝ドラに対するスタンスや思いを聞き出そうとしたが、少し前の作品になると大雑把な印象は語れても、視聴ときに抱いていた思いや評価理由のディテールは忘れていて具体的には語れない人が多いことが判明した。

そこで、視聴したばかりの朝ドラ作品であれば評価や印象、作品に対する思いなどをより具体的に答えてもらえるのではないかと考え、2015年度前期の『まれ』の際に、放送終了後にWEB上で試験的な調査を行った。また、それと並行して、より具体的な視聴者の反応を知るためグループインタビュー調査も実施した。

その結果も踏まえ、次の『あさが来た』から継続的に調査を実施することを計画した。朝ドラ各作品について、定期的に調査し、結果を比較することで、個々の作品の特徴を明らかにすると同時に、作品間に共通する要素を探り、あわせて、視聴者の朝ドラの見方や思いの特徴を明らかにすることを目指した。その際に、朝ドラは放送期間が半年間と長いので、視聴途中で評価や印象が変化することもあると考え、放送期間の序盤（放送開始約1か月後）と中盤（放送開始約3か月後）にもWEB調査を行い、視

聴状況や視聴者の意識・感覚の変化を見ることにした²⁾。

研究の成果

2015年度前期の『まれ』から2018年度後期の『まんぷく』までバラエティーに富んだ8作品の朝ドラを調査することで、各作品の特徴が明らかになってきた。たとえば、『あさが来た』は、実在の人物をモデルにしながらも、起伏をやや抑えた展開で視聴者が安心して楽しめる作りの中で、機微にあふれた人間関係を描いて多くの視聴者に高い満足度を与えた。

『べっぴんさん』は、主人公が自らの思いを具体的な言葉であまり述べななかったり、物語の進展の方向が分かりにくかったりするなど、“非明示的表現”の多い作品であったが、そうした点を良いと思えたかどうか、当作品の評価の良し悪しを分ける大きな鍵になっていたことが明らかになった。

『わろてんか』では、主人公を取り巻く周辺人物の中に魅力的な人物がいることが作品評価を下支えすることや、「気楽に見られる」ことが最後まで視聴を離脱させない大きな力となることが判明した。

個別作品を超えた、朝ドラの共通性に関する要素としては、たとえば、『とと姉ちゃん』までの3作品を比較することを通して、朝ドラが高視聴率を維持する理由を解明するための仮説を構築できた。

視聴者には全体のストーリー展開を中心に楽しむ長期視点派と、日々のエピソードや登場人物、小ネタなどを中心に楽しむ短期視点派が存在するが、両派はともに長期視点的要素・短期視点的要素を楽しむ素養を持っており、作品に合わせて楽しみ方を変えていることが、『ひ

表2 調査結果を掲載した文研の月刊誌『放送研究と調査』一覧

タイトル	掲載
朝ドラ『あまちゃん』はどう見られたか～4つの調査を通して探る視聴のひろがりと視聴熱	2014年3月号
2014年春の研究発表とシンポジウム 特別セッション“ソーシャル”が生むテレビの視聴熱!?	2014年6月号
朝ドラ研究 最近好調な「朝ドラ」を、視聴者はどのように見ているか?～『まれ』視聴者調査結果より～	2016年3月号
朝ドラ研究 最近好調な「朝ドラ」を、視聴者はどのように見ているか? 続編 ～視聴実態分析と視聴率分析～	2016年4月号
朝ドラ研究 連続テレビ小説『あさが来た』はどのように見られたか～視聴者調査から見た特徴と成功の要因～	2016年9月号
朝ドラ研究 『とと姉ちゃん』と前2作の視聴者調査を通して朝ドラ高視聴率維持の要因を探る	2017年3月号
朝ドラ研究 視聴者調査を通して見た朝ドラ『べっぴんさん』の特徴と、朝ドラの高視聴率を支える視聴継続要因の検証	2017年9月号
朝ドラ研究 視聴者は朝ドラ『ひよっこ』をどう見たか～柔軟に見方を変えて楽しむ視聴者～	2018年3月号
朝ドラ研究 視聴者は朝ドラ『わろてんか』をどう見たか～過半数の“まあ満足派”が支えた評価～	2018年9月号

よっこ』『わろてんか』『まんぷく』において確認された。詳しくは、各作品の報告を行った『放送研究と調査』(表2)を参照されたい。

総合的分析を試みた、2018秋・視聴者調査と2019春・シンポジウム

8作品について行った個別作品調査(以下、「各作調査」)は、各作品を最後まで比較よく見た人が対象の調査である。8作品続けて行うことで、朝ドラをよく見る人の特徴は、かなり分かってきた。そこで、もう少し視聴頻度の低い人も含めた視聴者の姿や、朝ドラを見ない人の特徴なども明らかにすることを目指す調査も必要と感じるようになり、「2018秋・視聴者調査」を実施した。そして、これらを統合して総合的に分析・議論するシンポジウムを2019年春に実施するに至った。

当論文の構成

当論文は、4年間に及ぶ各作調査の総合的分析、2018秋・視聴者調査結果の分析、シンポジウムの採録を通して、近年の朝ドラ視聴率が

好調な理由の解明と、近年の朝ドラ視聴者像の探求を目指す。

構成としては最初に【歴史編】として、2019年度前期放送の『なつぞら』で100作目を迎えたことを機に、朝ドラの歴史についてまとめる。朝ドラの歴史に関しては、さまざまな雑誌等にエッセーや談話、取材記事、論文などの形で掲載されてきた。それらを総合的に一覧化して出典を明らかにしたものがこれまでなかったので、統合を試みた。

次に【総論編】で、客観的なデータを中心に、近年の朝ドラ視聴の“実態”をまとめて報告する。【各論編】では「何が朝ドラの好調を支えているのか」「好調を支える視聴者はどのような人たちなのか」という問いに対する考察を中心に、より踏み込んだ分析を試みる。最後に、これらの調査研究を踏まえて行われたシンポジウムを抄録する。

注:

1) 文研朝ドラ研究チーム・メンバー一覧

<現在のメンバー>

二瓶 亙／齋藤 建作／原由美子／吉川 邦夫（「シンポジウム『検証<100%>朝ドラ!!』～視聴者と歩む過去・現在・未来～」から参加）／亀村 朋子（『とと姉ちゃん』調査研究から参加）

<発足時のメンバー>

土屋 喜嗣／二瓶 亙／齋藤 建作／原由美子／関口 聡／三矢 恵子／中野 佐知子／重森 万紀

2) 実施調査一覧

視聴者調査

調査名	手法	対象者条件	サンプル数	実査期間
5視聴者タイプ個別インタビュー調査	WEBアンケート+個別インタビュー	20～79歳男女/テレビ視聴時間が1日平均30分以上・「ケケケの女房」以降の朝ドラ視聴者	30人	2019年8月2～8日
2018秋・視聴者調査	WEBアンケート	20～79歳男女/テレビ視聴1日30分以上	3,000人	2018年9月14～17日
「まんぶく」③調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「まんぶく」視聴経験あり	1,000人	2019年3月30-31日
「まんぶく」②調査	WEBアンケート	20～79歳男女/「まんぶく」視聴経験あり・「ケケケの女房」以降の朝ドラ視聴者	500人・600人	2019年2月2-3日
「まんぶく」①調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「まんぶく」視聴経験あり	500人	2018年11月10～12日
「半分、青い。」②調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「半分、青い。」視聴経験あり	1,200人	2018年9月29日～10月1日
「半分、青い。」①調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「半分、青い。」視聴経験あり	500人	2018年5月26～27日
「朝ドラ」視聴者インタビュー	デプスインタビュー	首都圏在住/30～69歳女性/朝ドラ視聴量が増えた人	4人	2018年4月22日
「わろてんか」②調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「わろてんか」視聴経験あり	1,000人	2018年3月31日～4月1日
「わろてんか」①調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「わろてんか」視聴経験あり	500人	2017年11月25～27日
「ひよっこ」④調査	グループインタビュー	関東4県在住/20歳以上男女/「ひよっこ」視聴者	20人	2017年10月14-15日
「ひよっこ」③調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「ひよっこ」視聴経験あり・ライト・非視聴	1,480人	2017年9月30日～10月2日
「ひよっこ」②調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「ひよっこ」視聴経験あり	500人	2017年7月22～25日
「ひよっこ」①調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「ひよっこ」視聴経験あり	500人	2017年5月13～15日
「べっぴんさん」④調査	グループインタビュー	関東4県在住/20歳以上男女/「べっぴんさん」視聴者	30人	2017年4月14～16日
「べっぴんさん」③調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「べっぴんさん」視聴経験あり	1,000人	2017年4月1-2日
「べっぴんさん」G1②調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「べっぴんさん」視聴経験あり	500人	2017年1月21～23日
「べっぴんさん」①調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「べっぴんさん」視聴経験あり	500人	2016年11月12-13日
「とと姉ちゃん」④調査	グループインタビュー	関東4県在住/20歳以上男女/「とと姉ちゃん」視聴者	30人	2016年10月14～16日
「とと姉ちゃん」③調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「とと姉ちゃん」視聴経験あり	1,000人	2016年10月1-2日
「とと姉ちゃん」②調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「とと姉ちゃん」視聴経験あり・視聴離脱者	600人	2016年7月23～25日
「とと姉ちゃん」①調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「とと姉ちゃん」視聴経験あり・視聴離脱者	600人	2016年5月14～16日
「あさが来た」④調査	グループインタビュー	関東4県・関西3府県在住/20歳以上男女/「あさが来た」視聴者	20人	2016年4月9-10, 16-17日
「あさが来た」③調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「あさが来た」視聴経験あり	1,000人	2016年4月2-3日
「あさが来た」②調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「あさが来た」視聴経験あり・視聴離脱者	600人	2016年1月23-24日
「あさが来た」①調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「あさが来た」視聴経験あり・視聴離脱者	600人	2015年11月7～10日
「まれ」③調査	グループインタビュー	関東4県・関西3府県在住/20歳以上男女/「まれ」視聴者	20人	2015年10月3-4, 10-11日
「まれ」②調査	WEBアンケート	15歳以上男女/「まれ」視聴経験あり	1,000人	2015年9月28～30日
「まれ」①調査	MROC	20～69歳男女/近年朝ドラ2作品以上視聴	60人	2015年4月6～26日
「あまちゃん」に関する世論調査	個人面接法	全国16歳以上男女/エリアサンプリング層化3段抽出	1,298人	2013年10月4～14日

ソーシャルリスニング調査

対象番組	調査対象メディア	分析対象期間	クローリング・キーワード
「あまちゃん」	ツイッター, ブログ	2013年3月25日(月)～10月5日(土)	あまちゃん, #あまちゃん
「梅ちゃん先生」	ツイッター, ブログ	2012年3月26日(月)～10月6日(土)	梅ちゃん先生, #梅ちゃん先生
「ごちそうさん」	ツイッター, ブログ	2013年9月23日(月)～12月31日(火) シリーズ前半13週のみ	ごちそうさん, #ごちそうさん
「半沢直樹」	ツイッター, ブログ	2013年6月30日(日)～9月29日(日)	半沢直樹, #半沢直樹

調査実施: トランスコスモス株式会社



歴史編

～朝ドラ100作史～

亀村 朋子

100作目の朝ドラ放送を記念した特設サイト「朝ドラ100」¹⁾に、2019年1月に掲載された文章がある。会長定例会見で「朝ドラ100作特別番組」が発表された際に使われた文章と同じだが、それをそのまま借りると、「朝ドラ」とは、以下のようなものである。

昭和36年4月に始まった“朝ドラ”は、「朝にドラマを見る」という視聴習慣を生み出しました。女性の一代記という朝ドラの一つのスタイルを確立した昭和41年放送の『おはなはん』、歴代の朝ドラで最高視聴率を記録した昭和58年放送の『おしん』、SNSなどで幅広い世代から支持をいただいた『あまちゃん』など、半世紀以上もの間、みなさまに親しまれてきました。

簡単に言おうと思えば、たったこれだけのペースで、それがどういうものであるかを言ってしまう「朝ドラ」ではあるが、今日まで58年以上1度も途切れることなく継続してきた歴史を、以下に少し詳しく見ていくことにする。過去の論文や書籍、あるいは当時の雑誌記事など、出典を明らかにしながら、「朝ドラ100作のあゆみ」を紹介していきたい。

① 朝ドラの成立

日本人の生活習慣に根づいているともいえる

番組「朝ドラ」。正式名称は「連続テレビ小説」という。始まったのは、テレビ放送開始（1953年2月1日）から8年後の1961（昭和36）年4月3日。

テレビドラマ史を考えると、「連続テレビ小説」が誕生するまでの布石となったであろう、いくつかの出来事がある。それを見ながら、朝ドラが誕生するまでを見ていこう。

- 1940年4月13日、日本初のテレビドラマとして『夕餉前^{ゆづりまえ}』がNHKで実験放送される。放送時間12分。
- 1953年2月4日、NHKのテレビ本放送開始後初のテレビドラマ『山路の笛^{さんろふえ}』が20:00-20:30に生放送される。
- 1955年8月、テレビドラマに初の帯番組が登場する。日本テレビ『轟先生』。21時台に5分間の生放送（のちに18時台に移動）。

テレビ放送の開始後しばらくは、番組は昼と夜の時間帯のみ放送されていた²⁾。1957（昭和32）年10月にNHKは朝7時から1時間の放送を始めたが、昭和30年代前半においては、まだ朝の時間にテレビを見る人は少なかった³⁾。

朝にテレビを見てもらう工夫として、ラジオの人気番組であった「連続ラジオ小説」や「朝の口笛」「朝の小説」⁴⁾が、テレビにあってもよいのではということになり、「連続テレビ小説」が企画された。ラジオの習慣がまだなお残っている時代である。家事をしながらでもラジオと同様に、聞いているだけでわかるドラマ⁵⁾。過去に新聞小説から「連続ラジオ小説」などが生まれたのと同様に、いわば新聞小説のテレビ版として「連続テレビ小説」は誕生することになる。

さらに、このころにはVTR収録が可能になったことも、生放送だけでは難しい連続テレビドラマを実現させるきっかけになった。1956年に

アメリカで2インチVTRが開発され、1958年に日本に輸入。同年10月にKRT（現在のTBS）で放送された『私は貝になりたい』では、本格的にビデオ録画が実用化された（まだ編集はできなかった）。同じく1958年には、NHKで次の2本のドラマが始まった。

- 1958年4月からNHKで放送された連続ドラマ『事件記者』（毎週水曜日21:00-21:30）がヒットする。
- 同じく1958年4月から『バス通り裏』も放送開始。7時のニュースに続いての放送。月～金（のちに土まで）19:15-19:30。放送開始当初は生放送。

帯ドラマ『バス通り裏』では、1960年4月には、生放送に交じって、週2日はVTR収録により放送されるようになっていた⁶⁾。

この『バス通り裏』の実績が、「連続テレビ小説」を立ち上げるには必要だった、と番組企画者の1人である岩崎修は述べている⁷⁾。帯ドラマを毎日放送することは、当時困難だと考えられていたが、『バス通り裏』の実績によりそれが可能だと証明されたのである。

- 1961年元日から3夜連続で、テレビ小説『伊豆の踊子』が放送される。22:15-22:40の25分番組⁸⁾。

朝ドラ開始の3か月前に放送された『伊豆の踊子』も、ナレーションを多用したドラマ番組の試みとして、朝ドラのパイロット版の役割を担った。岩崎によれば、「朝ドラ」は、以下のような番組を目指していたようである。

「『バス通り裏』が毎日日常に徹しているところに、強さがあるのだが、あまりに「日常的」な

『バス通り裏』に対して、ロマンが語れるようなスタイルを考えたいというのが、「テレビ小説」であった。テレビで苦手な時空の拡がりや、ナレーションで飛躍し、心理描写もナレーションによってよりの確にし、原作の文章のニュアンスまで利用できたらというわけである⁹⁾」。

小説の持つ世界観を生かし、主人公の独白ナレーションで物語が進行した『伊豆の踊子』は、放送後の評判もよかった。そのことで岩崎は「1年計画で長編の「テレビ小説」を実施しようという決心がついた」と語っている。

ナレーションが多用されるという独自のスタイルを持つドラマ。「朝に放送する」という事情が大きく関わって成立した「連続テレビ小説」は、ほかのテレビドラマとは違う「特殊なドラマ番組」として誕生した。

これ以降は朝ドラ100作の歴史を、I～V期の時期区分を設定して見ていくことにする。5つの時期区分に関しては、IからIVまでは、『おしん』『はね駒』のプロデューサー小林由紀子が2009年に提示した区分¹⁰⁾にならうが、加えて、朝ドラが転機を迎えた2010年『ゲゲゲの女房』以降をV期とする¹¹⁾。

I期 1作目『娘と私』から14作目『鳩子の海』まで：明治・大正・昭和に生まれた女性が、家族とともに戦中戦後を生き抜く話が多数。

II期 15作目『水色の時』から41作目『純ちゃんの応援歌』まで：新人女優が演じるヒロインが中心となり、社会進出して活躍する女性を描く「職業もの」、懐かしさを誘う「時代もの」が続く。

III期 42作目『青春家族』から61作目『あすか』まで：平成の新時代を感じさせる生き方の多様性や、現代を生きる等身大の女性の姿などを描く。

IV期 62作目『私の青空』から81作目『ウェルかめ』まで：家族、夫婦、自分らしい生き方、現代、等身大の女性を主題とする。制作側の模索が続く。

V期 82作目『ゲゲゲの女房』以降：昭和などの懐かしい時代を背景に、共感される女性の生き方を描く。実在のモデルがある作品が多い。メディアや社会が注目し、社会的反響を得る。

なお、本稿末に「朝ドラ作品一覧表」(付表1)と「朝ドラ編成年表」(付表2)を添付するので、照合しながら読み進んでいただきたい。

② I期 1作目『娘と私』から14作目『鳩子の海』まで(1961～1974)

1作目の『娘と私』は1961年4月から1年間放送された。放送は月～金8:40-9:00。20分番組だった。『娘と私』はもともと1958年にラジオ番組として1年間放送されており¹²⁾、その実績があったことは、この作品が選ばれた理由の1つだった。1人称で書かれた、原作者・獅子文六の自伝的要素が強い作品で、「私」が語るナレーションを多用したドラマとなった。

2作目『あしたの風』(1962年度)からは、月～土8:15-8:30放送の15分番組となり、その後、81作目の『ウェルかめ』まで、実に48年間変更されることはなかった。このことは、視聴習慣を定着させる、大いなる助けになったと考えられる。

4作目の『うず潮』(1964年度)には、いくつか初めての出来事が重なった。

ビデオリサーチ社による視聴率が、この作品で初めて公表された¹³⁾。

さらには、大阪放送局(BK)が初めて朝ドラを制作することになった。この年だけ東京放送局(AK)からBKに制作班が移ることになった

理由としては、東京オリンピックの準備でAKが手いっぱいだった、などの見方もあるが定かではない。前年にBKの新館が落成し、スタジオの設備が整ったことも、理由の1つだと考えられる。

また、24歳の林美智子が主演に抜擢された。若手女優が主演する朝ドラは初めてだった。それは、原作者・林芙美子をモデルとした主人公・フミ子の若いときからドラマが始まっていたことが、理由としては大きい。19歳から47歳までを演じた林美智子は、まっさらの新人ではなく、前年度の単発ドラマで主演するなど、BK制作ドラマの若きホープであった¹⁴⁾。しかし、キャリアは浅かったため、朝ドラの主演には違いなかった。年長の視聴者から見ると、24歳のヒロインは娘のように映り、たちまち林美智子はお茶の間の人気者となった。その年の『紅白歌合戦』の司会者にも起用される勢いだった。

初期の朝ドラの主演俳優の年齢を見ると、『娘と私』は当時50歳の北沢彪、『あしたの風』は当時38歳のNHK東京放送劇団出身女優・渡辺富美子、3作目『あかつき』(1963年度)は当時54歳の佐分利信が演じる父親を中心とした家族の物語だった。『うず潮』ヒロインの人気を見て、「次作も同様に若い女性を主人公にすれば人気が出るのでは」という手応えも、制作陣にはあったかもしれない。しかし、視聴者の反響が見えた時点では、次作『たまゆら』(1965年度。主演は、テレビ初出演、当時61歳の笠智衆)の準備はすでに始まっていたために、次々作の『おはなはん』にその経験は活かされたようだ¹⁵⁾。

朝ドラの最初期にあたる1960年代前半は、家庭へのテレビの普及が急速に進んだ時代である。内閣府の統計によれば、朝ドラが始まる前

年（1960年）のテレビ（白黒）の世帯普及率は44.7%。これが5作目『たまゆら』が放送された1965年には90%にまでなっている¹⁶⁾。

普及の一方でNHKと民放は、放送時間の拡大や新しい番組の開発をすることで、視聴者を獲得した。視聴者を拡大することに成功した番組の1つが朝ドラだといえる¹⁷⁾。

表I-1は、NHK国民生活時間調査による1960年と1965年のテレビ視聴の変化である。15分単位の行動を尋ねる調査で、朝8:15から8:30までの時間帯を抽出したデータだが、朝ドラが始まる前の1960年には、全体では0.8%だったものが、1965年は12.3%と15倍以上の数字に跳ね上がっている。注目すべきは30～50代の女性で、朝ドラが始まる前はほとんどテレビを見ていなかったのが、1965年には2割以上の人が見るようになり、朝のテレビ視聴の拡大を支えた。朝は家事で忙しい主婦層を視聴者として取り込むために、朝ドラは「ながら視聴」に対応する工夫をして制作され、その結果、朝の視聴習慣を形成したのである¹⁸⁾。

6作目『おはなはん』（1966年度）が人気を博し、朝ドラを軌道に乗せたことにより、以降、若手新人女優が主役の「女性一代記」路線が、

表I-1 8:15～8:30のテレビ視聴の変化

	1960年		1965年
国民全体	0.8%	→	12.3%
男性	0.7	→	6.3
女性	0.9	→	17.2
20代女性	1.4	→	17.7
30代女性	1.5	→	20.3
40代女性	0.3	→	20.9
50代女性	0.9	→	26.5

NHK国民生活時間調査より

朝ドラの軸を担うことになる¹⁹⁾。主演は当時24歳の檜山文枝。劇団民藝所属の新人女優であり、戦争を生き抜き何があっても笑顔を失わないソバタリティーあふれる女性を演じて、全国的な人気を誇った。夫の死後、助産師になるべく懸命に努力し、前向きに生きるその姿は、多くの女性の共感を得た。高度経済成長期で専業主婦が増えていた時代であり、「主婦にとっては『もっと頑張って社会に出たかった』『もっと自立したかった』という願いがあり、それを応援したいという思いから、共感を呼んだのではないでしょうか」と、当時演出を担当していた齊藤暁は語っている²⁰⁾。「東京都の水道局員がNHKに『朝8時15分になると水道の出が良くなります』と伝えてきた」という逸話もあるようだ²¹⁾。真偽はともかくその話は、当初は「聞いているだけでわかるドラマ」、つまり「ながら視聴」を想定して作られた朝ドラが、『おはなはん』の放送時には、家事の手を止めてテレビを見るファンを増やしていたのではないかと、という推測の裏づけになっている。平均視聴率45.8%、最高視聴率56.4%を記録した『おはなはん』は、朝ドラ100作の中でも3本の指に入る代表作になったのである。

『うず潮』や『おはなはん』で新人女優ヒロインが成功したことは、朝ドラが、「新人女優の登竜門」といわれるきっかけを作った。例外もあるが、以降、新人女優が抜擢される作品が増えていく。

7作目『旅路』（1967年度）はその例外の1つ。男性が主人公だが、『おしん』に次ぐ歴代2位の最高視聴率56.9%を記録した。

以降は、特筆すべき出来事のあった作品のみ紹介していくことにする。

14作目『鳩子の海』（1974年度）では、斎藤

こず恵が主人公の子ども時代を演じ、「日本よ日本…どどんがどん」と劇中で唄う歌が流行した。戦争孤児の鳩子が健気に生きる姿は、ちょうど翌年が戦後30年という節目であり、戦争体験を思い起こす視聴者に寄り添うものとなった。『鳩子の海』は高視聴率だったが、脚本家が途中で降板したことから、1年間の放送はリスクがあると判断して、次の15作目『水色の時』(1975年度前期)からは、半年間の放送とし、東京と大阪が半年交代で制作することが決まる(以降、31作目『おしん』(1983年度)の前まで半年間放送の作品が続いた)。

ところで、ここまで繰り返し「朝ドラ」という通称を用いてきたが、「連続テレビ小説」はいつごろから「朝ドラ」と呼ばれ始めたのだろうか。

NHKの局内広報誌『ネットワークNHK』1967年12月号に“朝ドラ”早くも出演者発表」というタイトルの記事が載っている。「『旅路』好調の半ばにしてすでに次のドラマが『あしたこそ』に決定。11月10日にその原作者とヒロインが記者会見」という内容だが、放送開始から6年目の、意外と早い段階で、「朝ドラ」という通称で親しまれていたのである。

③ II期 15作目『水色の時』から 41作目『純ちゃんの応援歌』まで (1975～1988)

放送期間が半年となった1975年の2作『水色の時』『おはようさん』は、ヒロインを中心とした家族の数年間を描いた現代劇で、一代記ものとはスタイルが異なる作品だった。『鳩子の海』までは4作連続で46～47%あった平均視聴率が、『水色の時』は40.1%、『おはようさん』では39.6%まで低下した。

次の17作目『雲のじゅうたん』(1976年度前期)は、日本最初の女性パイロットとなった主人公の物語で、「女性一代記」に回帰した作品。反対するガンコ親父とやり合いながらも、主人公が信念を貫き夢を実現する姿を、コメディータッチで描き、「『おはなはん』以来の人気」といわれるほどの好評ぶりだった²²⁾。「『うず潮』以降、やはり女性の一代記ものをやれば当たるのか」という実感を、このときの制作者は得ていたかもしれない。BK制作の次作『火の国に』は、すでに準備が進んでいてその教訓は生かせなかったものの、その次の19作目『いちばん星』(1977年度前期)以降、昭和最後の作品となった41作目『純ちゃんの応援歌』までの12年間にわたり、「新人女優が、明るく前向きなヒロインの半生(または一生)を演じるスタイル」を、ほぼ全作品で踏襲した。その多くは、年配視聴者の懐古の情を誘う「時代もの」であり、さらには、その12年間のほぼすべての作品が「主人公が何らかの職業に就き、誰かと結婚する」という内容の「職業もの」であった。「新人女優・時代もの・職業もの」。それこそが「朝ドラの王道」であり、定番路線として朝ドラの安定期をもたらすことになる。

ただし、この12年間の中にあっても、27作目『まんさくの花』(1年9か月の短い期間を描いた現代劇)や、35作目『いちばん太鼓』(男性主人公で、昭和40年代という比較的現代に近い時代を描いた)などの例外は存在した。

現在もおお「朝ドラといえば女性の一代記」というイメージを持つ人が多く、それは「この12年間の印象が強烈だから」なのかもしれない。実際、この12年を含んだII期と『ゲゲゲの女房』以降のV期は、「実在の人物をモデルとした女性の一代記(あるいは半生記)」が集中した

時期でもある(付表1「作品一覧表」を参照)。

21作目『おていちゃん』(1978年度前期)は、沢村貞子の自伝エッセーを原作とした。長谷川町子の自伝風漫画を原作とした、23作目『マー姉ちゃん』(1979年度前期)は、主人公であるマリ子が出版社を立ち上げて、妹マチ子の名作『サザエさん』を世に送り出すまでをコミカルに描き人気を博した。36作目『はね駒』(1986年度前期)は、女性新聞記者の草分け的存在である磯村春子をモデルとした作品だった²³⁾。

逆に、原作のないオリジナル作品でありながら特に好評だったのは、34作目『滯つくし』(1985年度前期)である。昭和60年を還暦と捉え、昭和を見直すというコンセプトで制作された。そのため物語は、大正15年の主人公の学生時代から始まる。銚子の醤油醸造家と漁師の家を舞台とした、純愛を軸に描かれた物語で、主人公の初恋成就を願う女性視聴者に支持され、Ⅱ期の作品の中では2番目の記録となる、平均視聴率44.3%を誇る人気作となった。

高度成長期を終え、安定成長期に移行した時代。女性が社会進出し、「女性の生き方」への関心が高まった時代。女性は「運命に耐える」ことをやめ、「自分で運命を切り開く」ようになった。Ⅱ期はそんな時代であり、女性の生き方をあぶり出すように描く朝ドラが、どの作品も安定してよく見られていた。その中であって、突出した存在となる作品がまさに『おしん』なのである。

朝ドラ最大のブームを引き起こした、31作目の『おしん』(1983年度)。NHKテレビ放送開始30周年作品ということで1年間の放送とした。明治から大正、昭和にかけての激動の時代を、関東大震災や太平洋戦争を経験し、人生の岐路に何度も立たされながらも、前向きに生きた

女性の一代記。主人公おしんの少女期を小林綾子、成人してからを田中裕子、晩年を乙羽信子が演じたが、主人公をリレー形式で複数の俳優が演じるのは、朝ドラ初であった(その後『すずらん』や『カーネーション』などでリレー形式が踏襲された)。加えて、「新人女優がヒロインに起用されない」点や、「ヒロインの夫がダメ男に描かれている」点などにおいて、Ⅱ期の中では異例の作品となった。

幼いおしんが大根めしで空腹をしのぎ、奉公先のイジメにひたすら耐える姿に、視聴者は涙し、テレビにくぎづけとなっていった。「このドラマを子どもたちにも見せたい」という投書がNHKに多数寄せられたため、放送開始から3か月後の夏休み期間中に「おしん少女編アンコール」や「夏期特集・もうひとりのおしん」が放送されたのも、異例のことだった²⁴⁾。おしんの国民的人気を表す言葉として「おしんどローム」という言葉も流行。『おしん』は、最高視聴率62.9%、平均視聴率52.6%という、日本のテレビドラマ史上、後にも先にも例のない驚異的な数字を記録した。

一方で、Ⅱ期の途中から新しい時代への流れは起こり始めていた。たとえば、1981年度前期の『まんさくの花』は、前述のとおり、朝ドラの王道ものが続いた時期の中では、「時代ものでも職業ものでもなく、一代記でもない」いわば型破りの作品だった。さらに、1984年度前期には、『旅路』以来、17年ぶり25作ぶりに男性を主人公とする『ロマンス』が放送された。29作目『ハイカラさん』(1982年度前期)は、明治15年から物語が始まる、最も古い「時代もの」²⁵⁾に挑戦した作品だった。これらの現象を指して、前出の小林由紀子はこう語っている。「昭和50年代後半(1980年以降)からは、価値観が多

様化して、テレビ小説にも既成のパターンがなくなってきた。男性の主人公が出てきたり、少し古めかしい形も登場したりして、その作品なりの個性が出てきた²⁶⁾。いつの時代も「マンネリを打ち砕きたい」という願望が、制作者にはあるものである。常に「守り」と「挑戦」を繰り返してきたのが、朝ドラの歴史なのだろう。

④ Ⅲ期 42作目『青春家族』から 61作目『あすか』まで (1989～1999)

1989年、平成の時代が幕を開けた。平成最初の朝ドラは、42作目『青春家族』(1989年度前期)。その内容は、新しい朝ドラを感じさせるものだった²⁷⁾。「『まんさくの花』以来8年ぶりの現代劇」「母と娘、世代の異なるダブルヒロイン」「1年間という短期間を描く」など異例づくしだったが、1986年に男女雇用機会均等法が施行され、個人個人が活躍する場が増えたことで家族の分裂が問題視されつつあった時代であり、『青春家族』はその問題に正面から取り組んだ作品だった²⁸⁾。45作目『京、ふたり』(1990年度後期)も同様に、母と娘のダブルヒロインとした作品だった。

1991年度には、朝ドラ放送開始から30周年を記念して、46作目『君の名は』が放送された。「『おしん』以来8年ぶりに、放送期間を1年間とした」ことや、「ラジオドラマで一世を風靡した(1952年)作品を選んだ」ことで、「連続テレビ小説の原点に戻ろう」とした意図が見える。このとき、ドラマ部長だった小林由紀子は、『君の名は』をやることにした理由として「日本人のいまのありようを振り返ったとき、原点として戦後というものがある。(中略)日本人がエネルギーだった時代の群像劇を描くことで、21世紀

に向けて私たちがどう生きていいかということを探る、ひとつのよすがにしてもらえればというつもりで、この作品にかかった」と語っている²⁹⁾。しかしながら、この時期はいわゆるトレンドードラマ全盛期であり、『君の名は』は、時代錯誤的な印象を視聴者に与えてしまうドラマだったのかもしれない。『君の名は』が放送される直前の1991年1月クールには、『東京ラブストーリー』がフジテレビ系で放送されて人気を博していた³⁰⁾。電話やFAXは、あって当然のものとして日常的に使われ、ポケベルがまもなく流行ろうとしていたこの時代に、「度重なるすれ違いでなかなか会えない2人のドラマ」は、共感しにくかったのかもしれない。平均視聴率は、朝ドラでは初めて20%台まで低下してしまう³¹⁾。

47作目『おんなは度胸』(1992年度前期)はBK制作だったが、ここからは、「大阪が4月から放送の前期」「東京が10月から放送の後期」と、放送時期が逆転する。48作目『ひらり』(1992年度後期)では、オープニング主題歌に初めて人気アーティストの曲(ドリムズ・カム・トゥルー『晴れたらいいね』)が採用されヒットする。ちなみに、歌詞入り主題歌が初めて使われたのは、『ひらり』よりさかのぼること8年。『おしん』の次に放送された32作目『ロマンス』であった(『夢こそ人生』作詞:岩谷時子,作曲:山本直純,歌:芹洋子,榎木孝明,ロイヤル・ナイツ)。

『おんなは度胸』から『ひらり』,49作目『ええによぼ』,50作目『かりん』までの4作は、平均視聴率が回復し、30%台を維持した。

トレンドードラマの影響か、従来の朝ドラのイメージとは異なり、Ⅲ期は現代劇が多くなって³²⁾。さらには未来を描いた朝ドラも登場し

た。55作目『ふたりっ子』(1996年度後期)は、(放送当時から見て)未来にあたる時代を初めて描いた朝ドラである。女流棋士となったヒロインの香子が、羽生善治氏と対局する場面を描くために「未来の設定であれば、男女混合の名人戦が行われるようになるに違いない」というのが、その理由だ³³⁾。

Ⅲ期には、『ひらり』の内館牧子、54作目『ひまわり』(1996年度前期)の井上由美子、『ふたりっ子』の大石静をはじめ、90年代の民放の連ドラブームを支えた脚本家たちが、朝ドラに次々と登板するようになっていた。Ⅲ期に現代劇が多いのも連ドラブームの影響なのだろう。その中において、1990年からTBSで『渡る世間は鬼ばかり』をスタートさせていた橋田壽賀子が、自身4作目の朝ドラを執筆する³⁴⁾。NHK放送開始70周年を記念して1年間放送された、52作目『春よ、来い』(1994年度)は、橋田自身の自伝的要素を含んだオリジナル作品であった。

『春よ、来い』のあとは、東京と大阪の放送時期が再度逆転し、東京が4月から放送の前期、大阪が10月から放送の後期を担当することになった。『春よ、来い』以降、すでに制作が発表されている103作目『おちょやん』(2020年度後期)までの25年間は、半年間ごとに東京と大阪で交互に制作されている。

「時代もの・職業もの・女性の一代記」というキーワードでくることができたⅡ期と比べて、Ⅲ期の作品は、平成という新時代を生きる主人公の「生き方の多様性」を探るようなものが多い。朝ドラの既存のイメージに固執することなく、脚本家の個性を生かした多彩な作品が並ぶ。現代劇も多い。さらには、節目の年の記念作として、意欲的に放送期間を1年とした作品が2本あった。この時期は、朝ドラが、新時代とと

もにあるべき姿をさまざまな形で模索していた「挑戦期」だったといえることができる。

⑤ IV期 62作目『私の青空』から 81作目『ウェルカム』まで (2000～2009)

ミレニアム・イヤーを迎えた年の朝ドラは62作目『私の青空』(2000年度前期)。「シングルマザー」という朝ドラでは前例のないヒロイン像を打ち出した。「茶髪のヒロインも初」といわれた。小学校の給食室で働く設定で、「個食」の問題にも切り込み、家族の理想と現実を描いた。幼い息子を抱えて明るく生きるヒロインの姿は好評で、朝ドラで初めて続編が放送された作品となった³⁵⁾。

64作目『ちゅらさん』(2001年度前期)では、初めて沖縄が舞台となった。八重山諸島小浜島に暮らす家族、大自然の雄大な景色、ヒロインの初恋の行方、さわやかで明るい作風など、視聴者に愛される要素が多い作品。劇中に登場する「ゴーヤマン人形」が実際に販売され、話題となったのも初めてだった。2019年3月に放送された『朝ドラ100作!全部見せますスペシャル～歴代ヒロインがチョコちゃんに叱られる!～』の人気投票「朝ドラ イチオシRANKING」では、放送から18年という月日が経過していても、『ちゅらさん』は5位にランクインしている。トップ10のうち8作品が、2010年以降に放送された作品であることから³⁶⁾、『ちゅらさん』が、年数を経ても、いかに記憶に残る作品だったかがうかがい知れる。続編として放送された番組の数は100作の中でも最多で、パート4まで続いた³⁷⁾。

69作目『てるてる家族』(2003年度後期)は、なかにし礼の小説を原作とする。なかにし礼の妻

が四女となる四姉妹とその家族がモデル。戦後から昭和40年代の大阪府池田市を舞台に、懐かしの昭和歌謡にのせて届ける“踊る朝ドラ”。ミュージカル演出が話題になった。

77作目『ちりとてちん』（2007年度後期）には、従来の朝ドラの主人公とはあえて真逆の性格に設定したヒロインが登場した。心配性で物事をつい悪いほうに考えてしまう「後ろ向きのヒロイン」が上方落語の魅力にハマリ、落語家を志す物語。前出の『朝ドラ100作!〜』の人気投票では100作中8位と健闘するほど、好評を得た作品だった。放送終了後に、「特別番外編」と称する、「スピンオフ作品」が制作された^{38・39}。朝ドラの中では「最もDVDが売れた作品」とされる⁴⁰。

IV期に連なる作品から抽出できるキーワードは、「自分らしい生き方の模索」や「等身大のヒロイン」「現代劇」（IV期の20作品中『てるてる家族』『純情きらり』を除く18作品が現代劇⁴¹）。男性を主人公とするものはない。作品ごとにタイプの異なる現代のヒロインが描かれたことで、昔の朝ドラのイメージが強い「習慣視聴者」は、期待外れだと感じて離脱することがあったかもしれない。テレビ界全体のドラマ離れも進行する中で、朝ドラ史上最も視聴率が低下した厳しい時期である。

制作側のチャレンジとは裏腹に、IV期の10年間で視聴率は10%以上低下し、81作目『ウェルかめ』で平均視聴率は13.5%となった。しかしこの次の作品で朝ドラは転機を迎えることになる。

⑥ V期 82作目『ゲゲゲの女房』 (2010)以降

82作目『ゲゲゲの女房』がスタートしたのは

2010年3月29日。同じ日に、朝ドラに続いて始まる『あさイチ』もスタートした⁴²。平日朝8～9時台を、女性視聴者を意識したゾーンとして刷新し、朝の視聴習慣を変える大幅な改定であった⁴³。

朝ドラは、それまで1962年の『あしたの風』から48年間変わることなく、8時15分から8時半に放送されていたが、このときから8時ちょうどの開始となった。

『ゲゲゲの女房』は、戦後から物語が始まり、貧しくても前向きに夫を支えるヒロインの姿など、かつての朝ドラのイメージに近い作品が徐々に帰ってきた感があった。視聴率は、初回こそ14.8%で過去最低であったが（100作中でも初回視聴率は最低となっている）、その後「物語が進むにつれてきれいに右肩上がりに上昇する」という、ほかにあまり例を見ない上昇傾向を示し、最終回には番組最高の23.6%を記録した。平均は18.6%となり、前作より5%上昇した。

作り手の立場からすれば、この時期もIV期と同じように、朝ドラの模索は続いていた。放送時間に変更された最初の作品として、「久しぶりに現代劇ではない」「久しぶりに原作のある」作品、すなわち『ゲゲゲの女房』がたまたま選ばれた。放送が開始され、1か月、2か月と経つにつれて徐々に視聴率の上昇が社会的に認知され始め、週刊誌などの媒体も注目し始めた。最終的には、「ゲゲゲの〜」という言葉が、その年の新語・流行語大賞に選ばれ、主演の松下奈緒は、朝ドラヒロインとしては『ひらり』の石田ひかり以来17年ぶり⁴⁴に『紅白歌合戦』の司会を務める。さらには、翌年の選抜高等学校野球大会の開会式入場行進曲に主題歌『ありがとう』が選ばれるなど、非常に社会的反響が大きな作品となった。

「モデルのある、女性の一代記」として、『ゲ

ゲゲの女房』に続いたのは、3作あとの85作目『カーネーション』（2011年度後期）だった。デザイナーのコシノ姉妹の母・小篠綾子をモデルとしたヒロインは、芯が強くバイタリティーあふれる人物。妻帯者との禁断の恋も描かれたが、本音で生きるヒロインに共感する人々の支持を集め、人気の高い作品となった。

88作目『あまちゃん』（2013年度前期）は、朝ドラ100作の中でも、エポックメイキングな作品となった。人気脚本家・宮藤官九郎が担当するというので、「朝ドラに何か面白いことが起こるのでは」という期待が開始当初から集まっていたが、オープニング曲からすでに今までとは違う「振り切れた感」があり、視聴者の高揚感をあおって、番組を好調の波に乗せた。

『あまちゃん』は「現代劇」であり、「従来の朝ドラにとらわれないオリジナル作品」である点で、新しい視聴者を呼び込みやすかった。女性3代の物語に基本を置きながらも、海女修業をしていたヒロインが、町おこしのために地元アイドルになる、という意外な展開で、SNSで話題となるには絶好の「小ネタ」も多く含まれていたため、投稿される数が増え続け、やがては社会現象となるほど「口コミ」が広がった。初めて「朝ドラを見た」という人も多く、朝ドラの代名詞「習慣視聴」に頼らずに新しい視聴者層を開拓した。ヒロインが驚いたときに発する「じぇじぇじぇ」は「今でしょ!」「倍返し」「お・も・て・な・し」などとともに入賞に選ばれた。話題となったのはユニークな部分だけではない。三陸が舞台となっていたことから、東日本大震災に正面から向き合う場面も描かれた。『あまちゃん』が人々の記憶に残る作品となったことで、我々朝ドラ研究プロジェクトが朝ドラを研究し、視聴率では測れない「視聴熱」という

ものの存在に気づく、きっかけにもなった。

SNSというツールを使って朝ドラについて語り合う、という「朝ドラの楽しみ方」も、『あまちゃん』をきっかけにさらに広がった。毎日放送があることは、何らかの毎日の新しい発見につながる。発見した喜びを、非常に多くの人々と共有できる「朝ドラ」は、非常にSNS向きのネタになり得たのだ。

91作目『マッサン』（2014年度後期）は、国産ウイスキーを完成させる夫婦の物語で、主人公のモデルとなったのが、ニッカウヰスキーを創業した竹鶴政孝と妻のリタ。53作目『走らんか!』以来19年ぶりとなる男性が主人公の作品だが、妻役には初の外国人ヒロインが抜擢され話題となった。

93作目『あさが来た』（2015年度後期）は、初めて江戸時代を描いた朝ドラとなった（ヒロインの18歳ごろまでが江戸時代という設定）。通常の時代劇と同じように、鬘姿の武士や、日本髪女性が登場する。ただでさえ収録の効率が求められる朝ドラにおいて、あえて時間のかかる時代劇に挑戦した、意欲作と捉えられる作品。生命保険会社や女子大学などを経営する女性事業家のさきがけ、広岡浅子をモデルとして描かれた。ヒロインの夫・新次郎や支援者の五代友厚などの男性像も人気となり、視聴者に広く好感を持たれた作品となった。2001年以降の作品としては最高となる平均視聴率23.5%を記録し、前出の『朝ドラ100作!〜』の人気投票では100作の中の第1位に選ばれている。

96作目の『ひよっこ』（2017年度前期）では、86作目『梅ちゃん先生』（2012年度前期）に続いて、放送終了後に、「その後の主人公たち」が描かれた「続編」が放送されている⁴⁵⁾。また、100作目の『なつぞら』（2019年度前期）では、

歴代の朝ドラヒロインが15名キャスティングされて話題となった⁴⁶⁾。

V期の特徴としては、江戸・明治・大正・昭和の時代を描いた「時代もの」が多くの作品で復活したことが挙げられる。現代劇と呼べるのは、V期の19作品中6作品である⁴⁷⁾。『ゲゲゲの女房』が好評を得たことに端を発して、それ以降は「実在した人物をモデルとした主人公」の設定も多くなっている。長らく20%を下回っていた平均視聴率も、『梅ちゃん先生』では20.7%となり、68作目『こころ』（2003年）以来18作、9年ぶりに20%台を記録した。V期の19作品中、20%を超える平均視聴率を残したのは、13作品。V期では、朝ドラが全般にわたり社会的反響を得て注目されることが多くなり、好調を維持した。

⑦ まとめ

朝ドラは、その時代時代の女性の生き方を反映するドラマでもあった。

初期には、戦争を体験した主人公の一代記が、同時代を生きた視聴者の共感呼んだ。12作目『藍より青く』（物語の終盤で戦後20年を経て、夫が戦死したサイパンを主人公が息子とともに訪れる）や、14作目『鳩子の海』（原爆で記憶を失った戦争孤児の主人公が、戦後をたくましく生きる）などがその例である。

そのあとは次第に、社会進出し職業に就いた女性を描くものが多くなる。17作目『雲のじゅうたん』（女性パイロット）、19作目『いちばん星』（流行歌手）、20作目『風見鶏』（パン屋）、23作目『マー姉ちゃん』（漫画家とその姉）、25作目『なっちゃんの写真館』（カメラマン）、28作目『本日も晴天なり』（アナウンサー）などがその例である。

時代が平成に移ると、朝ドラも様変わりしていく。現代を舞台にしたものが増え、さまざまなタイプのヒロインを描くことに挑戦し、ヒロインの多様化時代に入る。42作目『青春家族』と45作目『京、ふたり』（世代観の違う母娘がダブルヒロイン）、62作目『私の青空』（シングルマザー）、66作目『さくら』（ハワイで育った日系4世）、75作目『芋たこなんきん』（37歳のヒロイン）、77作目『ちりとてちん』（ネガティブ思考）、91作目『マッサン』（外国人）がその例である。

「朝ドラは時計代わり」と言われ続けて58年。「時計代わり」という言葉には、揶揄もあるが、安心感のような意味も含まれていると思う。58年間休みなく続いてきた朝ドラは、視聴者にとって「いつもそこにある」という安心感を与るとともに、習慣視聴を根づかせた枠であった。主人公は、いつも時代を映す鏡であった。新しい時代の到来を感じる節目には、朝ドラはいつも新しいことに挑戦してきた。「変わらないこと」と「挑戦」を繰り返してきた58年だったように思う。

関わった制作者たちによれば、Ⅲ期やⅣ期には「そろそろ朝ドラも終わるんじゃないか」と思うことが幾度となくあったというが、2010年『ゲゲゲの女房』以降のV期の盛り返して、「もうしばらくは終わりそうもない」枠へと変貌した。個々の作品の好き嫌いはあれども、作品を越えた「朝ドラという枠」として習慣で見られている番組は、ほかにはほとんど例を見ない。朝ドラは唯一無二の「特殊な番組」なのだ。

（かめむら ともこ）

注:

- 1) 2019年4月から放送された『なつぞら』が100作目の連続テレビ小説となるのを記念して、「朝ドラ100」特設サイトが開設された。内容は作品一覧に加えて、3月に放送された朝ドラ特番の告知や、視聴者による人気投票など。
<https://www.nhk.or.jp/asadora/>
- 2) 朝のテレビ放送については「東京では、昭和31年8月のNTVをはじめ32年10月にNHK、33年1月にKRT (TBS) がそれぞれ朝7時台の放送を始めている」(『テレビ視聴の30年』NHK放送世論調査所編p.13)。
- 3) 1960 (昭和35) 年に行ったNHK国民生活時間調査では、朝7時から8時にかけてテレビを見ている人は3%にすぎないことが分かっている。8時から9時にかけては1%とさらに低くなる(牧田徹雄「NHK連続テレビ小説の考察」(『年報21』1976) 参照)。
- 4) ラジオ第1で放送された3番組についての補足。いずれも出典は『NHK年鑑』。
「連続ラジオ小説」: 1951年11月に開始。月～土 16:00-16:15などの時間帯に、語りと会話による長編小説の立体化形式で、毎日聞ける帯番組として放送。1958年3月に終了したが、1962年4月からの1年間は「連続ラジオ小説」の枠が復活し月～土 8:30-8:45に放送。
「朝の口笛」: 1955年11月に開始。月～土 9:10-9:25などの時間帯に放送。最初の作品は『青春家族』。1961年3月に終了。
「朝の小説」: 1959年4月に開始。月～金 7:35-7:40などの時間帯に放送。最初の作品は『坂の上の家で』。1961年3月に終了。
- 5) NHKドラマ『山路の笛』などを演出した畑中庸生は、毎朝の視聴習慣を形成させる番組作りについて「朝の忙しい時間に誰もまともに見てくれはしませんよ。あれ(朝ドラ)は耳で聞いただけでわかるように作ってあるんです。それに2、3回とばして見られない日があってもちゃんと筋がわかるようにしてあります」と語っている(放送学研究28「日本のテレビ編成」p.111)。
また1960年にNHKに入局し、のちに朝ドラのプロデュースを手がけた小林由紀子は「朝の忙しい時間帯に放送するので画面を見なくても音声だけで話の筋が分かるよう、小説の地の文を生かして、心理や情景の描写をナレーションで説明する新しい演出手法が採られたわけです」と語っている(「NHKテレビドラマカタログ」(2011)より)。
- 6) 出典は、NHKの局内広報誌である『ネットワークNHK』1960年4月号p.6。「(『バス通り裏』)は現在、スタジオ不足のために、週二回はVTRで放送しているが、ナマ放送が夜の七時半に終わったあと、セリフをつけ、リハーサルをしてVTRへ持ち込むのだから、週に二回はいつも夜中の二時ごろになるという」とある。
- 7) 岩崎修「テレビ小説の誕生」『放送文化』日本放送出版協会1962年7月号
- 8) 『放送研究と調査』2019年3月号掲載の「テレビ小説『伊豆の踊子』関連史料～朝ドラのパイロット版から見えてくるもの～」を参照。
- 9) 岩崎修「テレビ小説の誕生」『放送文化』日本放送出版協会1962年7月号
- 10) 小林由紀子「新興の文化—テレビドラマの源流—」(『日本文化の源流を求めて 第4巻』立命館大学文学・2012年発行) 参照。2009年読売新聞・立命館大学連携リレー講義より。
- 11) I期からIV期は小林の区分にならったが、V期も加えた時期ごとの特徴については、今回の分析を踏まえて筆者が補足した。
- 12) ラジオで放送された「連続ホームドラマ『娘と私』」は1958年4月から放送開始。ラジオ第1、月～土 午前10:15-10:30。「脚本: 山下与志一、音楽: 斎藤一郎」は、同コンビがテレビ小説も担当した。
- 13) 『うず潮』の平均視聴率は30.2%、最高視聴率は47.8%だった。
- 14) 『こちらJOBK～NHK大阪放送局七十年～』p.195「朝ドラの性格変えた『うず潮』」より。1963年度のBK制作のドラマ『美しき遍歴』『青春の構図』に林美智子が出演し、単発ドラマの主演を演じたとの記述あり。
- 15) 同様に、2010年前期放送の『ゲゲゲの女房』は視聴率が上がり人気が出たことで、「次作も同様に、モデルあり・歴史ものにしたい」という考えが、ドラマ部執行部にはあったかもしれないが、それができたのは、3作あとの2011年後期放送の『カーネーション』だった。
- 16) 内閣府「主要耐久消費財等の普及率」(全世帯)より。
- 17) 朝ドラ開始直前の1960年10月の各局の編成では、朝8時台の1時間すべてにわたり放送していたのはNTVとKRT (TBS) の2局のみ。NHKは8時から8時15分に『けさのニュースから』と『天気予報』を放送していただけだった。午前8時台に全局の番組が出そろい時間帯として埋められたのは、1961年4月の改編であった。このときに朝ドラが始まった(『放送学研究』28「日本のテレビ編成」p.110)。
- 18) 『テレビ視聴の50年』NHK放送文化研究所編(2003

- 年)のp.19「速やかな普及のための編成戦略・「ながら視聴」の呼び水となった朝の連続テレビ小説」の項を参照。
- 19) 5作目までは自伝小説を題材とした文芸作品ドラマの趣が強かったが、『おはなはん』は、元新聞記者の林謙一が『婦人画報』に載せた8ページほどの随筆(母の林ハナの思い出をつづった)をもとに、小野田勇が1年間の長編ドラマにふくらませたもので、オリジナル感が強い脚本となった(牧田徹雄「NHK連続テレビ小説の考察」(1976)参照)。
- 20) 田幸和歌子著『大切なことはみんな朝ドラが教えてくれた』(2012)p.204参照。
- 21) 『週刊TVガイド』1967年2月3日号「いやァ参った参ったこの騒ぎ 空前!!おはなはんブームの総決算」参照。NHKに寄せられた『おはなはん』の反響の大きさを「おしよせる投書も毎日フロがわかせるくらいある」とも表現している。
- 22) 『週刊明星』(1976年6月6日号)には「『雲のじゅうたん』異常人気秘密全公開」の記事がある。さらには、『NHKネットワーク』1983年6月号に、「視聴者からの反響に答えて『おしん』の再々放送が決定した」という記事があり、そこに「これまでに総集編としての放送も含め再々放送をしたテレビ小説は『おはなはん』『旅路』『雲のじゅうたん』の三作品」という記述がある。いずれも『雲のじゅうたん』の人気ぶりがうかがえる。
- 23) 『はね駒』主役の斉藤由貴は、その前年にデビュー曲『卒業』、初主演連続ドラマ『スケバン刑事』がともにヒットしていた。トップアイドルが主役にキャスティングされたのは、当時は希有な例であった。斉藤は『はね駒』が放送された1986年の『紅白歌合戦』の司会を務めた(朝ドラのヒロインが紅白の司会を務めたのは林美智子以来2度目のこと)。
- 24) 当時の『ネットワークNHK』(1983年8月号)には「記録的な反響に答えて、夏期特集を放送することになった」とある。
- 25) その後、『あさが来た』(2015年)が最も古い時代を描いた朝ドラの記録を更新する。
- 26) 『ネットワークNHK』1991年3月号「朝の連続テレビ小説30年特別座談会」より。
- 27) 平成初の朝ドラ『青春家族』が、新時代の幕開けと同時に、今までと違うスタイルの朝ドラとして登場したが、何度か述べているように、朝ドラには、1年以上の準備期間が必要なため、おそらく偶然の産物だと思われる。
- 28) 『青春家族』のチーフ演出だった宮沢俊樹は、視聴者の反応を手応えとして感じつつ脚本に生かすことができたという意味で「時代のジャーナルな部分
- をほとんど同時進行的に(脚本に)取り込んでいった」と話している(『ネットワークNHK』1991年3月号。「朝の連続テレビ小説30年特別座談会」より)。
- 29) 『ネットワークNHK』1991年3月号「朝の連続テレビ小説30年特別座談会」より。
- 30) 朝ドラシンポジウムでも、矢部真紀子氏が「民放の元気がよくて、私がよく覚えているのは、『東京ラブストーリー』で、「カンチ、セックスしよ」なんて言っているわけですね。そのときに朝ドラはちょうど『君の名は』をやっていたんですよ。これは駄目だろうと思いました」と語っている(本稿p.131参照)。
- 31) 付表1『君の名は』の欄を参照。平均視聴率は29.1%、最高視聴率は34.6%。ともに過去最低となった。
- 32) Ⅲ期の20作中、現代劇は(現代に近いものや現代を含む長期を描いたものも入れると)16作品(『青春家族』『京、ふたり』『おんなは度胸』『ひらり』『ええによぼ』『びあの』『走らんか』『ひまわり』『ふたりっ子』『天うらら』『やんちゃくれ』。長期を描きその最後に現代も含まれるのは、『和っこの金メダル』『春よ、来い』『甘辛ちゃん』『すずらん』『あすか』。このうち『ふたりっ子』は未来も描いている)。
- 33) 『ふたりっ子』以外の未来を描いた朝ドラは、『まんてん』(2002年度後期)、『だんだん』(2008年度後期)である。名人戦のエピソードについては、『ふたりっ子』制作統括の二瓶互談。
- 34) 朝ドラ登板回数が多い脚本家は、4回の橋田壽賀子(『あしたこそ』『おしん』『おんなは度胸』『春よ、来い』)、3回の岡田恵和(『ちゅらさん』『おひさま』『ひよっこ』)である。
- 35) 2002年4～5月に月曜ドラマシリーズで『私の青空2002』として放送。43分×全8回。
- 36) 2019年3月29日放送の『朝ドラ100作!全部見せますスペシャル～歴代ヒロインがチョコちゃんに叱られる!～』の中で発表された「朝ドラ イチオシ RANKING」。番組のHPのWEB投票アンケートで「視聴者の好きな朝ドラを3作選んで投票してもらった結果」を発表した。
- 10位以内に入ったのは、5位『ちゅらさん』(2001年度前期)と8位『ちりとてちん』(2007年度後期)を除いて、すべて2010年以降の作品である。
- <あなたのイチオシ朝ドラ投票TOP10>
- | | | |
|----|-----------|---------|
| 1位 | 『あさが来た』 | 39,198票 |
| 2位 | 『あまちゃん』 | 28,754票 |
| 3位 | 『ひよっこ』 | 14,998票 |
| 4位 | 『カーネーション』 | 14,611票 |
| 5位 | 『ちゅらさん』 | 12,089票 |

- 6位 『ごちそうさん』 11,592票
 7位 『半分、青い。』 10,539票
 8位 『ちりとてちん』 9,267票
 9位 『まんぷく』 8,446票
 10位 『ゲゲゲの女房』 7,381票
- 37) 『ちゅらさん2』:2003年3～4月に月曜ドラマシリーズで放送。43分×全6回。
 『ちゅらさん3』:2004年9～10月に月曜ドラマシリーズで放送。43分×全5回。
 『ちゅらさん4』:2007年1月に土曜ドラマ枠で放送。58分×前後編の全2回。
- 38) 朝ドラ作品に対する続編の流れは、現在はスピンオフ作品などに受け継がれている。スピンオフ作品が作られるようになったのは『ちりとてちん』(2007年度後期)以降となる。
- 39) 『ちりとてちん外伝 まいご3兄弟』2008年7月「かんさい特集」で放送。8月には全国放送もされた。44分。「徒然亭3兄弟のある特別な一夜の出来事」を描いた。
- 40) DVDが発売されている朝ドラ作品の中で、最も売れたのが『ちりとてちん』DVDBOXの全3巻の中の1巻。時代によってビデオテープやブルーレイなど媒体も違うため、単純に朝ドラ全体で売り上げを比較することはできない。
- 41) 『オードリー』(2000年度後期)は、1953年からドラマがスタートしているが、終盤の設定は放送当時の現代を含んでいるので現代劇とした。
- 42) 2010年4月に始まった『あさイチ』では、番組の冒頭で司会者の井ノ原快彦や有働由美子アナウンサー、キャスターの柳澤秀夫により、放送開始直前までスタジオのモニターで見ていた朝ドラの感想を語り合う、通称「朝ドラ受け」が行われるようになった。自然発生的にアドリブで朝ドラに関する話が始まったが、井ノ原は「ひとり暮らしのおばあちゃんが朝ドラを見て、感想を言い合えないと寂しいじゃないですか。せめて、テレビに話しかけてくれたらと思ったのがきっかけ」と語っている。視聴者からの反響が大きく、「朝ドラからあさイチの朝ドラ受けまで」を1つのパッケージとして見る習慣にしている視聴者も少なくない。
- 43) 『NHK年鑑2011』p.101「4月の番組改定」の項より。
- 44) 石田ひかりは『ひらり』が放送されていた1992年とその翌年も2年連続で司会に選ばれている。ちなみに『紅白歌合戦』の司会者となった朝ドラヒロインは、次のとおり。林美智子、斉藤由貴、石田ひかり、松下奈緒、井上真央、堀北真希、吉高由里子、有村架純、広瀬すず。
- 45) 『梅ちゃん先生スペシャル』:2012年10月に放送。54分×前後編の全2回。
 『ひよっこ2』:2019年3月に放送。30分×全4回。
- 46) 北林早苗、藤田三保子、浅茅陽子、原日出子、小林綾子、田中裕子、山口智子、戸田菜穂、松嶋菜々子、三倉茉奈、岩崎ひろみ、藤澤恵麻、比嘉愛未、貫地谷しほり、安藤サクラ(主演した朝ドラ作品の放送順)。
- 47) 現代劇と呼べる6作は『てっぱん』『カーネーション』『純と愛』『あまちゃん』『まれ』『半分、青い。』。そのうち長期を描き最後に現代が含まれるのは『カーネーション』『半分、青い。』。

II

総論編

齋藤 建作／二瓶 亘

II-1 視聴者はどのように朝ドラ を見ているか

① 調査概要

2019年3月に文研が実施したシンポジウム『検証<100%>朝ドラ!!～視聴者と歩む 過去・現在・未来～』での議論に資することを主な目的として、前年の9月にWEBアンケート調査を実施した（以下、この調査を「2018秋・視聴者調査」と呼ぶ）。本章ではこの2018秋・視聴者調査の結果の概要を報告する。

朝ドラ研究チームでは、近年の朝ドラがなぜ好調なのかを探るにあたり、まず各作品がどのように評価されたのかを確かめる調査を2015年度後期の『まれ』以降、作品ごとに実施してきた。そうした調査を積み重ねる中で、各作を越えて好調が続く意味を解き明かす方法はないか、模索してきた。各作調査の中でも、途中脱落者に調査したり、前作からの継続者に状況を聞いたりなどしたが、思ったほどの成果は得られなかった。むしろ調査を続けているうちに感じたのは、「朝ドラは日々新たな番組を見続けることで視聴者の記憶が次々と上塗りされ、過去については思いのほか早く印象があいまいになり、的確なことが聞きにくくなっていく」という実感であった。

2018年度には各作調査を締めくくり、朝ドラ100作を区切りにシンポジウムを行うことになり、いよいよ個別作品の評価を問うことは別枠の調査の必要に迫られた。しかしながら、すでにその段階で、各作についてはWEBによるアンケート調査だけでも（作品ごとに複数回の調査を実施したため）16回に及ぶ調査を実施してきており、そのたびに朝ドラ好調の核心に迫る問いかけはないか、検討を積み重ねてきていた。そのうえで新たな調査を行うことになり、さらに議論を続けたが、正直なところ「記憶の上塗り」問題の克服も含めて、それまでの各作調査を超える調査設計を見いだすことはできなかった。

したがって本調査は、朝ドラの好調理由をこの調査だけで解き明かすという野望を捨て、朝ドラ視聴の過去・現在の状況をきちんと押さえて、その結果をシンポジウムの議論に提供することを第1目的として設計されたものである。

調査規模としては、各作の調査が各作の視聴者だけを対象とした1,000人規模であるのに対して、今回は朝ドラの非視聴者も含む3,000人規模で、総務省統計局の人口推計に沿ったサンプル構成とした。調査概要は表II-1-1にまとめた。

なお、視聴者の「記憶の上塗り」問題については、そのような実態があることを理解したうえで設問を作成し、また結果を解釈したつもりである。

② 朝ドラを見る人・見ない人

朝ドラを見たことがあるかをストレートに聞いた結果、「朝ドラという番組を知らない」という人はわずかに2%（1.5%）、「知っているが見たことがない」という人が34%（33.6%）で、合わせて35%の人が朝ドラを見たことがないと答え

表Ⅱ-1-1 調査概要

対象者条件: インターネット・リサーチ会社に登録しているモニターで、国内在住の20～79歳の男女。
 テレビ視聴時間が1日平均で30分以上
 割り付け: 人口構成比と対象者出現率(テレビ視聴時間)に沿って、性×年代(20～70代,6セル)
 実査期間: 2018年9月14～17日
 調査方法: インターネット上で行うアンケート調査(略称:WEB調査)

総務省統計局の人口推計(2018年1月1日現在)の構成比 (%)

	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70-79歳
男性	6.8	8.0	10.1	8.4	9.1	7.1
女性	6.5	7.8	9.9	8.4	9.5	8.4

「テレビ視聴時間が1日平均30分以上」の出現率(事前の出現率調査による) (%)

	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70-79歳
男性	65.4	68.6	73.6	76.0	90.6	95.9
女性	79.4	83.2	81.8	82.0	94.7	93.0

サンプル構成 (人)

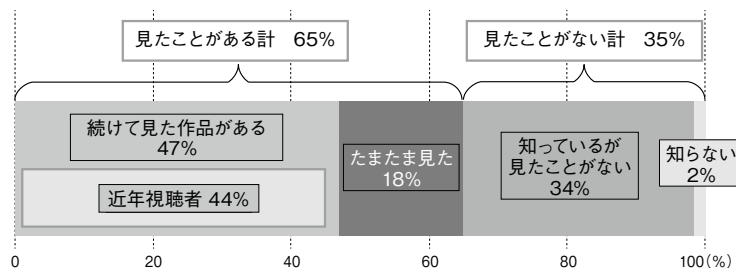
	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70-79歳	合計
男性	162	201	272	233	300	249	1,417
女性	187	236	295	251	329	285	1,583
合計	349	437	567	484	629	534	3,000

ている。大まかに視聴者の3人に1人程度は朝ドラをまったく見たことがない、という結果であった(図Ⅱ-1-1)。

残りの65%、3人に2人程度の人は何らかの度合いで朝ドラを見たことがあることになるが、そのうち18%の人は「たまたま見たことはあるが、1つの作品を続けて見たことはない」と答え、47%の人が「朝ドラをある程度続けて見た作品がある」と答えている。調査対象者の半数弱が「朝ドラを1作以上見たことがある」という自覚を持っている。

「朝ドラを見たことがあるか」という大まかな設問に続けて、最近約10年間の作品それぞれ

図Ⅱ-1-1 朝ドラを見る人・見ない人 (母数は対象者全員 n=3,000)



について見たことがあるかどうかを聞いた。その結果は表Ⅱ-1-2のとおりである。

(なお、この設問についてクラスター分析を行ったところ、興味深い結果が出たので、【各論編】Ⅲ-4「作品をまたいだ継続視聴の実態」で詳細な分析を加える)。

さて、我々の関心は近年の朝ドラが好調である理由を問うことであった。具体的には、2010年度前期の『ゲゲゲの女房』を起点に視聴率が「V字回復」したとも

いえる現象に注目している。この現象に寄与しているのは、『ゲゲゲの女房』以降の作品を視聴したことのある人々である。朝ドラは100作に及ぶ長寿番組であるから「朝ドラを1作以上見たことがある」という人の中には、子どものころに見たことがある、という類の人も含まれている。そこで『ゲゲゲの女房』以降の作品を見たことがある人を「近年視聴者」として分けし、主な分析対象とすることにした。集計の結果、「朝ドラを1作以上見たことがある」人(47%)のほとんどは「近年視聴者」に分類された(44%)(図Ⅱ-1-1参照)。

表Ⅱ-1-3に、朝ドラの近年視聴者と非視聴者の対比を主な項目についてまとめた。朝ドラの非視聴者に比べて近年視聴者は年齢の高い人の比率と女性の比率が高い。また、テレビ好きな人が多めで、朝ドラに限らず普段からドラマを見る人が多い。そして、朝ドラに対するイメージは、近年視

表Ⅱ-1-2 2009年以降の各朝ドラを見たことがあるか

(100%＝朝ドラを見たことがある人 n=1,947)

(%)

作品名(主演/放送年度)	見たことがある (半分以上)	見たことがある (半分より少ない)	見たこと がある計
半分、青い。(永野芽郁/2018)	36	20	56
わろてんか(葵わかな/2017)	32	18	50
ひよっこ(有村架純/2017)	33	18	51
べっぴんさん(芳根京子/2016)	28	15	43
とと姉ちゃん(高畑充希/2016)	33	17	50
あさが来た(波瑠/2015)	37	16	53
まれ(土屋太鳳/2015)	25	18	43
マッサン(シャーロット・K・フォックス/2014)	34	21	55
花子とアン(吉高由里子/2014)	32	17	49
ごちそうさん(杏/2013)	31	18	49
あまちゃん(能年玲奈(のん)/2013)	34	22	56
純と愛(夏菜/2012)	16	16	32
梅ちゃん先生(堀北真希/2012)	26	17	43
カーネーション(尾野真千子/2011)	23	15	38
おひさま(井上真央/2011)	20	14	34
てっぺん(瀧本美織/2010)	17	14	31
ゲゲゲの女房(松下奈緒/2010)	29	25	53
ウェルかめ(倉科カナ/2009)	10	13	23
つばさ(多部未華子/2009)	9	12	21

※「半分、青い。」は調査時点で放送中

聴者は肯定的なものが上位にのぼるが、非視聴者は「高齢者が見るもの」「変わりばえがしない」などネガティブなイメージを持つ人も少なくない。

なお、自分自身は朝ドラを見たことのない非視聴者でも、身近な人が朝ドラを見ているとい

表Ⅱ-1-3 朝ドラの近年視聴者と非視聴者

	近年視聴者 (n=1,324)	非視聴者 (n=1,053)
60歳以上の比率	48%	33%
男女比	男42%・女58%	男52%・女48%
「テレビが好きだ」	40%	28%
「国内ドラマを普段見る」	76%	47%
「テレビをよく見るほうだ」	52%	33%
「テレビは感動を与えてくれる」	53%	36%
朝ドラのイメージ (上位6位)	①健全な ②新人が活躍する ③さわやか ④女性・主婦向き ⑤明るい	①高齢者が見るもの ②女性・主婦向き ③健全な ④変わりばえがしない ⑤新人が活躍する

※注：「朝ドラのイメージ」は、「情緒的イメージ」と「機能的イメージ」を通じた順位を表示した。【総論編】Ⅱ-3「朝ドラのイメージ」参照

う人は少なくない。朝ドラの非視聴者(n=1,053)を母数とすると、「家族など周りの人が朝ドラを見ていた」という人が18%、「友人や同僚など、身近に朝ドラを見ている人がいる」という人が10%、さらに同居している家族の誰かが朝ドラを見ているという人が14%。以上のうち誰か1人でも身近な人が朝ドラを見ている人は非視聴者の33%にのぼる。

一方、近年視聴者の定義は「1作以上見た」というものだが、見た作品数の平均は『ゲゲゲの女房』以降の17作のうち10.1作に及んでいる。さらに17作すべてを見ている人が近年視聴者の4人に1人(25%)。これは非視聴者も含めた調査対象者全体の11%にあたる割合である。

③ ここ10年で朝ドラのプレゼンスが上がった

『ゲゲゲの女房』で視聴率が急伸し、それ以降おおむね上昇傾向にある。この現象はおよそ10年間に及ぶ。そこで、ここ10年ほどで朝ドラの印象がどう変わったか、アンケートで聞いてみた。ただ、「10年」という数字で聞いても、朝ドラの10年がどうだったかを思い浮かべられる人は少ないだろう。そこでアンケートでは図Ⅱ-1-2を提示して、Aの時期とBの時期とで感じる変化はあるか、と聞いた。

集計の結果は表Ⅱ-1-4のようになった。こちらで提示した選択肢にマルチアンサーで答えてもらったものを、近年視聴者について多い順に並べたものである。その結果、最も多かったのは「朝ドラに出演した俳優の活躍をよく目にする

図Ⅱ-1-2 アンケートで提示した「Aの時期」と「Bの時期」

放送年度	朝ドラ作品名	
2007	どんと晴れ ちりとてちん	Aの時期
2008	瞳	
2009	だんだん つばさ ウェルかめ	
2010	ゲゲゲの女房	
2011	てっぱん おひさま	
2012	カーネーション 梅ちゃん先生	
2013	純と愛	
2014	あまちゃん ごちそうさん	
2015	花子とアン マッサン	
2016	まれ	Bの時期
2017	あさが来た とと姉ちゃん べっぴんさん	
2018	ひよっこ わろてんか 半分、青い。	

表Ⅱ-1-4 10年前に比べて朝ドラの何が変わったとを感じるか (%)

	近年視聴者 (n=1,324)	全体 (n=3,000)	非視聴者 (n=1,053)
朝ドラに出演した俳優の活躍をよく目にするようになった	59	37	15
朝ドラをよく見るようになった	54	27	4
朝ドラを好きになった	44	22	4
出演者が豪華になったと感じる	38	24	10
朝ドラに関するニュースを見聞きするようになった	37	24	10
作品のテーマや、モデルとなる人物が魅力的になったと感じる	37	21	6
周りの人と、朝ドラの話をするようになった	28	15	4

ようになった」というもので、近年視聴者のほぼ6割の人が選んでいる。記事や番組表などで「朝ドラ女優」といった表現を見かけることもあるが、女優に限らず朝ドラに出た俳優がほかのドラマや映画などで活躍している姿を、10年前のころに比べてよく目にするようになった、と感じているようだ。対象者全体で見ると4割近くの人がそのように感じている。

いわばその裏返しで、朝ドラの「出演者が豪華になったと感じる」人が近年視聴者のほぼ4割。朝ドラに出演した人がよそでも活躍するようになり、逆にすでによそで活躍している「豪華な」出演者が朝ドラによく出るようになったとも感じている。非視聴者でも1割の人が、朝ドラの出演者が「豪華」だと感じている。

このように朝ドラに出演の俳優が活躍したり豪華であったりすれば、記事やニュースに取り上げられることも多くなる。また朝ドラは視聴率も注目されていて、好調でも不調でも記事になる。こうした「朝ドラに関するニュースを見聞きするようになった」と感じている人も多く、近年視聴者の4割弱、全体でも4人に1人程度の人に、そう感じられている。このような好印象が広範に広がり相乗的に作用したことが、朝ドラの評判を押し上げたかもしれない。

ここ10年ほどで、朝ドラの世間でのプレゼンスが上がってきたようだ。それに加えて、作品自体の魅力も増したと感じている視聴者が少なくない。「作品のテーマや、モデルとなる人物が魅力的になったと感じる」と答えた人が、近年視聴者の中ではおよそ4割に近い。

こうした印象の向上の結果、近年視聴者の半分以上が「朝ドラをよく見るようになった」と感じ、4割強の人が「朝ドラを好きになった」と答えている。

④ 朝ドラを見る理由・効用

【朝ドラが好きか】

アンケート設問の終盤で「総合的にみて、あなたは朝ドラが好きですか」と聞き、5択で答えてもらった。その結果、近年の朝ドラを1作以上継続的に見ている近年視聴者の答えは「好きである」が24%、「まあ好きである」が42%、合

わせて「好き計」が66%となった。好きな人が3人に2人程度いる反面、好きではない人も3人に1人いるわけで、朝ドラを見ている人の全員が必ずしも朝ドラが好きで見ているわけではないようだ。

もちろん、数ある朝ドラの中には好みでないものもあるだろうから「総合的に」見れば必ずしも好きではないのも不思議ではない。好みのものは見るが、好みでないものは見ない、という見方があるが、自然である。だが事実はそのとも少々違う。朝ドラは実際に好みにかかわらず見られているのである。

「総合的に」とは別に、「作品ごとに」好みかどうかを聞いた結果を、その作品を半分以上見た人について集計した結果が表Ⅱ-1-5である。17作を通算して、「好みだった」のは63%、上の「総合的に」好き計とあまり変わらない。やはり、必ずしも朝ドラが好きで見ているだけではないようだ。

【つまらなくても見る】

朝ドラの見方として「多少つまらなくなっても、なるべく見続ける」かどうかを聞いたところ、近年視聴者の40%が「あてはまる」と答えた。そのように答えた人が、各作品を半分以上見た人の中にどれだけ含まれているのかを集計した結果を表Ⅱ-1-5の右の欄に示した。「好み」な人が少ない作品ほど「多少つまらなくなっても、なるべく見続ける」人の比率が高い傾向がある。また、近年の朝ドラ17作のすべてを見ている人を母数（n=333）とすると、「多少つまらなくなっても、なるべく見続ける」人は68%に及ぶ。

朝ドラ視聴は、作品が必ずしも「好み」ではなくても「なるべく見続ける」視聴者に支えられている部分が小さくない。

表Ⅱ-1-5 各作品を見た人は、その作品が好みだったのか（母数は各作品を半分以上見た人）

作品名(主演/放送年度)	(人)		(%)
	半分以上 見た人数	好み だった	多少つま らなくなっ ても、な るべく 見続ける
半分、青い。(永野芽郁/2018)	707	56	62
わろてんか(葵わかな/2017)	614	46	60
ひよっこ(有村架純/2017)	651	69	59
べっぴんさん(芳根京子/2016)	539	44	63
とと姉ちゃん(高畑充希/2016)	646	66	57
あさが来た(波瑠/2015)	717	80	52
まれ(土屋太鳳/2015)	485	46	62
マッサン(シャーロットK・フォックス/2014)	670	71	54
花子とアン(吉高由里子/2014)	625	68	54
ごちそうさん(杏/2013)	606	70	55
あまちゃん(能年玲奈(のん)/2013)	664	77	50
純と愛(夏菜/2012)	310	22	66
梅ちゃん先生(堀北真希/2012)	499	66	57
カーネーション(尾野真千子/2011)	456	69	57
おひさま(井上真央/2011)	386	52	59
てっぱん(瀧本美織/2010)	324	45	61
ゲゲゲの女房(松下奈緒/2010)	558	80	47
加重平均	9,457	63	

【朝ドラを見る理由】

「朝ドラは習慣で見ている」という発言を、グループインタビューなどでしばしば聞いた。各作調査でも、朝ドラ視聴が「習慣になっている+ある程度習慣になっている」という人はおおむね8割前後に及んだ。朝ドラ調査の早い段階から「習慣視聴」が重要なポイントだという認識を研究チームで共有した。「つまらなくても見続ける」というのは、朝ドラ視聴の習慣を簡単にやめたくない、という気持ちを含んでいるのではないか。

各作調査の設問は、習慣視聴を「事実」として聞いたもので、「視聴理由」として聞いたものではない。2018秋・視聴者調査の設問を作るにあたり、習慣視聴がどの程度、朝ドラを見

る「理由」として意識されているのか、少しでもその実態に迫りたい思いから、聞き方を工夫した。設問では視聴理由として「内容が面白そう」「習慣になっている」など8つの選択肢を示し、その1つ1つが各個人にとって「視聴理由の何%を占めているか」、各理由の占有率の合計が各個人の100%になるように答えてもらった。結果は表Ⅱ-1-6のようになった。

表Ⅱ-1-6 朝ドラを見る理由

(母数は近年視聴者 n=1,324)

	少しでもこの理由を選んだ人の比率	占有率が50%以上を占めた人の比率	占有率の平均(占有率の%値)
1 内容が面白そう、興味をひかれる	74	51	44
2 視聴率や、まわりの評判が良い	25	4	6
3 朝ドラを見るのが習慣になっている	43	19	19
4 家族が見ている	24	7	8
5 時計代わりになる	23	5	6
6 他に見たい番組がない	12	1	2
7 なんとなく	32	11	13
8 その他	4	3	2

まず各選択肢が少しでも視聴理由になっていたとした人の比率（「占有率が0%でない」ということ。表の一番左の列）を集計すると、「内容が面白そう、興味をひかれる」という真っ当な理由が最も多く74%、ほぼ4人に3人という比率、次が「朝ドラを見るのが習慣になっている」で43%だった¹⁾。そのほかにも視聴理由として2～3割程度の人を選んだものが、「なんとなく」も含めていくつかある。たとえば「視聴率や、まわりの評判が良い」ということが朝ドラを見る理由として含まれている人も4人に1人ほどに及ぶ。だが、この理由は重要度としてはさほど高くないようだ。

表の左から2番目の列には、その理由が「占有率の50%以上を占める」と考えている人の比

率を集計した。すると視聴率や評判を理由にする人は4%と非常に少なくなる。上位の順番は変わらず、最も多いのが「内容」でほぼ半数、次いで「習慣」が2割、「なんとなく」が1割、それ以外はどれも1桁と少ない。

さらに表の右の列には、各理由の占有率の平均を示した。この結果は、上の「占有率50%以上」の人の比率と近い数値になった²⁾。

以上の結果、視聴者が朝ドラを見る理由は、「内容が面白そう、興味をひかれる」「習慣になっている」の順で多いこと、そして、「習慣」の度合いは視聴理由の2割程度を占めているらしい、ということが分かった。

なお、朝ドラは「習慣的に見るもの」と思うかどうかを、次節の表Ⅱ-1-7の形で聞いたところ、近年視聴者の半数が「そう思う」を選んだ。視聴理由として「習慣」（43%）を聞いたときよりも多少多かった。「習慣視聴」については【各論編】Ⅲ-3「習慣視聴の実態」でさらに分析を加える。

表Ⅱ-1-7 朝ドラの効用など（多い順）

(母数は近年視聴者 n=1,324)

設問文「あなたにとって、朝ドラとはどのようなものですか」と聞いて、以下の項目が「そう思う」に選ばれた比率

		(%) (分類)
1	習慣的に見るもの	50
2	自分に感動を与えてくれるもの	43 (内容)
3	自分の生活リズムを作ってくれるもの	39 (機能)
4	自分をリラックスさせてくれるもの	38
5	自分を元気にしてくれるもの	36 (内容)
6	自分をわくわくさせてくれるもの	33 (内容)
7	周りの人ととの会話に役立つもの	32 (機能)
8	家族団らんに役立つもの	27 (機能)
9	暇つぶしで見るもの	23
10	自分が知らなかったことを教えてくれるもの	22 (内容)

【朝ドラの効用など】

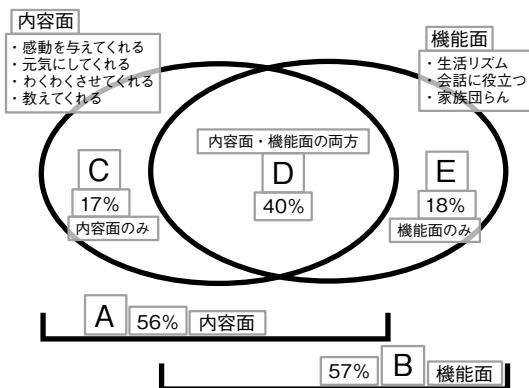
朝ドラを見ることによって得られる「効用」の類を表Ⅱ-1-7のような項目を挙げて、「そう思う」かどうかを聞いた。その結果を近年視聴者について多い順に並べた。

「習慣的に見るもの」を除き、朝ドラ視聴で得られることとしては「感動を与えてくれる」「生活リズムを作ってくれる」などが順に並んでいるが、おおむね3～4割の人にまんべんなく選ばれたという印象である。

これらの項目の中にはドラマの内容を見ることによって直接得られるもの（「内容面」と、朝ドラの放送があることによって派生的に生活行動などに役立つもの（「機能面」）の両方が含まれている。これらの項目のうち、どちらかの面に分類できるものを選んで再集計してみた。

図Ⅱ-1-3に示したように、A「内容面」には「感動を与えてくれる」「元気にしてくれる」「わくわくさせてくれる」「教えてくれる」のうち1つ以上を選んだ人を、B「機能面」には「生活リズムを作ってくれる」「会話に役立つ」「家族団らん」に役立つのうち1つ以上を選んだ人を集計した。

図Ⅱ-1-3 朝ドラの効用 内容面と機能面の分布
(母数は近年視聴者 n=1,324)



*小数点以下第1位を四捨五入している

以上をまとめると、視聴者が朝ドラを見ることによって得られると感じている効用は、内容面と機能面の両方が、ほぼ同じ6割の人に感じられており、そのどちらも得られると感じている人(D)が全体の4割、どちらかだけを感じている人(CとE)が2割弱ずつであった。表Ⅱ-1-7に示したような個々の効用について特に多いものがなく、朝ドラからはさまざまな効用が幅広く得られるということが視聴者に感じられていると同時に、内容面、機能面に分けてもどちらかだけがより強く感じられているということもなかった。このように、多くの効用がバランスよく感じられていることが、朝ドラが支持されている1つの要因であるかもしれない。

ここでもう一度「習慣的に見るもの」という選択肢の選ばれ方を見てみたい。内容面を選んだ図のAを母数とすると、「習慣的に見るもの」は57%、一方、機能面を選んだBを母数とすると66%となり、機能面を重視する人のほうがやや多い。さらにAのうち内容面だけを選んでいるCを母数とすると、「習慣的に見るもの」は32%とかなり少なくなる。このように、習慣は内容面よりも機能的側面との関連が強い。「習慣的に見るもの」というワードは朝ドラを見ることによって得られる「効用」とはいえないものの、「生活リズムを作ってくれる」「会話に役立つ」「家族団らん」などに近い機能的な性格を帯びているのではないかと考えられる。

⑤ 朝ドラを見るのに重要なこと

視聴者が朝ドラを見続けるのに重要なことを放送形態などの機能面と、ドラマのテイストなどの内容面とに分けて聞いた。

まず形態・機能面については、表Ⅱ-1-8のようになった。「1回の放送が15分間である」「朝

表Ⅱ-1-8 朝ドラを見るのに重要なこと、形態・機能面（多い順）

（母数は近年視聴者 n=1,324） (%)

	重要	まあ重要	重要計
1 1回の放送が15分間である	26	41	67
2 朝に放送している	23	35	58
3 日曜を除く毎日放送がある	22	39	61
4 全国各地が舞台になる	19	37	56
5 気に入った俳優に出会える	15	28	43
6 放送が半年間続く	15	34	49
7 いろいろな時間帯に放送している	15	33	47
8 毎回同じテーマ音楽が流れる	15	31	45

に放送している」「日曜を除く毎日放送がある」が上位3つに選ばれた。視聴者は習慣的な視聴を続けるのに、こうした放送形態が重要だと感じているのではないか。放送が短時間だから負担にならず、習慣的な生活行動を行っている人の多い朝に放送があり、それが毎日放送されている、だから続けて見やすい、ということになる。

同様にドラマのテイスト・内容面についても、上位には、習慣的に見続けるのに妨げとならないようなものが選ばれている（表Ⅱ-1-9）。70%以上の人に重要だ（重要計）と感じられているのは「気楽に見られる」「気持ちが温まる・ほっとする」「気分が明るくなる・元気になれる」な

表Ⅱ-1-9 朝ドラを見るのに重要なこと、内容面

（多い順）（母数は近年視聴者 n=1,324） (%)

	重要	まあ重要	重要計
1 気楽に見られる	27	48	75
2 気持ちが温まる・ほっとする	27	49	76
3 気分が明るくなる・元気になれる	26	46	72
4 登場人物に共感できる	23	41	65
5 家族で見られる	23	38	61
6 笑える・面白い	22	45	67
7 感動できる・泣ける	21	38	59
8 やる気・勇気がわいてくる	20	39	59
9 気づきを得る・考えさせられる	17	34	51
10 ハラハラドキドキできる	13	34	47

どであり、多くの視聴者に「軽い気持ちで見られるもの」が求められている。

その一方、「登場人物に共感できる」「感動できる・泣ける」「やる気・勇気がわいてくる」など、ドラマとしての見応えを求める人も6割前後に及び、習慣的に気軽に見続ける中でも感動したり、時には「ハラハラ・ドキドキ」（47%）したりもできることが朝ドラには求められている。習慣視聴を支えている、いわば日常的で無難なテイストが求められると同時に、ちょっと日常を超えるような「感動」「ハラハラ・ドキドキ」を見たい人も負けずに多い。このような朝ドラ感の二面性が、朝ドラが支持されている一因であるかもしれない。

⑥ 朝ドラの視聴中断理由、再開理由、非視聴理由

朝ドラ視聴者には、前述のとおり、すべての作品をずっと中断なく見ている人もかなりいるが、もちろん見るのを中断、あるいは中止した作品がある人のほうが多数派である。アンケートで、視聴の中断や中止の理由を複数回答で聞いた。集計結果を多い順にみると（表Ⅱ-1-10）、最も多いのは「仕事や家事が忙しくなったから」という理由、次にほぼ同率で「作品が面白くな

表Ⅱ-1-10 朝ドラの中断・中止理由（多い順）

（母数は近年視聴者 n=1,324） (%)

1 仕事や家事が忙しくなったから	43
2 作品が面白くなかったから	42
3 興味を持った作品以外は、見るつもりがなかったから	30
4 放送時間に外出するようになったから	30
5 朝ドラを見る時間に、他のテレビ番組を見るようになったから	9
6 テレビを見なくなったから	5
7 家のなかで、一緒に朝ドラを見る人がいなくなったから	4
8 その他の理由	3
どれもあてはまらない(朝ドラを見始めて以来、すべての作品を見続けている)	10

かったから」という理由だった。前者はドラマの内容の問題ではなく視聴環境に関するもの、そして後者がドラマの内容に関わる理由である。これまで述べてきたように、朝ドラ視聴の諸背景には「機能面」と「内容面」とが併存しつつ絡み合っている様子が見られるが、ここにもよく似た構図がある。以下に続く理由も、「興味を持った作品以外は、見るつもりがなかったから」という内容面の理由と、「放送時間に外出するようになったから」という視聴環境の理由がほぼ同率で続く。中断・中止の理由では、2つの側面がほぼ拮抗している。

次に、朝ドラ視聴を中断・中止したことがある人に、視聴を再開した理由を聞いてみた(表Ⅱ-1-11)。ここでは「見たいと思う作品が始まったから」という内容面の理由が半数の人に選ばれていて、最も大きい。とはいえ、2番目以下には環境面の理由が並んでおり、やはり両側面が併存している。

一方、朝ドラを視聴したことのない人に見ない理由(非視聴理由)を聞いた。この設問は、先に述べた「④朝ドラを見る理由・効用」の視聴理由と同様に「理由の占有率」という形で聞いたので、視聴理由をまとめた表Ⅱ-1-6と同じ形で表Ⅱ-1-12にまとめた。非視聴理由で最も大きいのは「朝ドラに興味がない／知らない」とい

表Ⅱ-1-11 朝ドラ視聴の再開理由(多い順)

(母数は朝ドラ視聴を中断したことがある人
n=1,193) (%)

1	見たいと思う作品が始まったから	50
2	放送時間に家にいられるようになったから	32
3	テレビを見る、時間的な余裕ができたから	27
4	再放送や録画を活用して見られるようになったから	16
5	まわりから朝ドラの評判を聞いたから	12
6	その他の理由	2
	どれもあてはまらない(一度見るのをやめたあと、朝ドラは見えない)	11

表Ⅱ-1-12 朝ドラを見ない理由

(母数は朝ドラを見たことがない人 n=1,053) (%)

	少しでもこの理由を選んだ人の比率	占有率が50%以上を占めた人の比率	占有率の平均(占有率の%)
1 朝ドラに興味がない／知らない	77	58	55
2 見たいと思う内容ではない	34	10	12
3 番組の評判や、イメージが良くない	9	0	1
4 放送時間が自分の生活と合わない	41	20	19
5 週6日、半年間の放送を見続けるのが大変そう	29	6	8
6 1回の放送が15分と短い	14	2	3
7 その他	3	2	2

うもので、ドラマの内容云々という以前に、朝ドラそのものに意識が向かない人が過半を占めている。しかしそれを除くところでも、上で見た中断・再開理由と似たように、内容面の理由と視聴環境面の理由とが見られる。もっとも、非視聴者の大半は朝ドラの内容をよく知らないはずだから、環境面のほうが大きな部分を占めているのも不思議ではない。

⑦ 朝ドラを見ている同居家族

朝ドラは家族と一緒に見ているケースが多いのではないかと、というイメージも強い。そこで、アンケートでは、家族と同居している人に、家族の中で朝ドラを見ている人がいるかを聞いた。表Ⅱ-1-13には全体の集計結果と、性別・年層別の結果をまとめた。

同居家族のいる近年視聴者の4割は1人で見ているが、残りの6割は家族の誰かが朝ドラを見ている。最も多いのは配偶者で4割。これは男女差が大きくて、男性では6割の人が妻も見ているのに対して、女性で夫も見ている人は3割にとどまる。前述の「④朝ドラを見る理由・効用」で視聴理由に「家族が見ている」を少しでも選んだ人は24%であったが(表Ⅱ-1-6参照)、これを男女別でみると、男性29%に対し

表Ⅱ-1-13 朝ドラを見ている同居家族

(母数は家族と同居している近年視聴者 n=1,150) (%)

	全体	性別		年齢					
		男性	女性	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳
配偶者	42	57	31	15	18	23	36	54	65
父	5	7	4	20	19	5	3	1	-
母	13	13	13	40	35	18	12	5	1
子ども	9	7	11	7	10	14	12	7	6
兄弟・姉妹	2	3	1	14	4	1	-	1	1
家族に朝ドラを見ている人はいない	41	28	50	40	41	54	48	37	30

(「全体」で1%以上のものを記載した) ■ 注目点

て女性20%と男性のほうが多く、妻が見ていることが視聴理由である男性が少なくないと思われる。また、配偶者が朝ドラを見ている人を年齢別に見ると、年齢が上がるほど比率が高くなっている。70代では同居家族のいる朝ドラ視聴者の3人に2人は夫婦ともに見ている。

一方、1人で見ている人(「家族に朝ドラを見ている人はいない」を選んだ人)の比率は男女差が大きい。女性では半分の人が1人で見ているが、男性で3割弱となっている。

若い人では親、特に母親とともに見ている比率が高い。20・30代では3～4割の人が同居する母親も朝ドラを見ている。また20代では7人に1人が兄弟・姉妹も見ている。

なお、同居家族が朝ドラを見ているということは、必ずしも「一緒に」見ていることを意味しない。アンケート設問では聞いていないが、こ

れまでのアンケートの自由記述やグループインタビューの発言などから推測すると、同じ朝ドラを別の時間、または別の部屋で見ているというケースが少なくない印象がある。

⑧ どんな朝ドラを見たいか

表Ⅱ-1-14のような選択肢を挙げて、視聴者が見たいと思う朝ドラを選んでもらった。半数以上の人を選んだのは「功績を残した人をモデルとした作品」と「主人公の成長を描く一代記」であった。どの選択肢も男性より女性のほうが選んだ人の比率が高いが、「主人公を無名の新人がつとめる作品」だけ男性のほうが高かった。

表Ⅱ-1-14 見たい朝ドラ(見たい+まあ見たい計)

(全体の多い順)
(母数は近年視聴者 n=1,324) (%)

	全体	男性	女性
1 功績を残した人をモデルとした作品	62	57	65
2 主人公の成長を描く一代記	59	59	60
3 モデルのないオリジナル作品	46	44	48
4 さまざまな登場人物が活躍する群像劇	45	41	48
5 現代を描いた作品	45	44	46
6 主人公を無名の新人がつとめる作品	42	45	41
7 古い時代を描いた作品	42	37	45
8 主人公を実績のある俳優がつとめる作品	41	36	44

Ⅱ-2 朝ドラ各作品はどう見られ たか ～8作の各作調査比較から分かること～

朝ドラ研究チームでは、朝ドラ作品に対する視聴者の具体的な反応（印象・評価・満足度など）を知るために、『まれ』（2015年度前期放送）から『まんぷく』（2018年度後期放送）までの8作品について作品ごとに調査を行った。表Ⅱ-2-1が8作の調査の概要である。

この各作調査では、作品の特徴に合わせた個別質問と、8作品共通の質問を並行して行っている³⁾。本稿では、この共通質問項目を中心に、各作品を比較分析し、8作品に共通する傾向と作品ごとの特異性を明らかにしたいと思う。

ここで1つ留意しておきたいのは、各作調査の対象者は各作品を半年間通じてよく見た人で

あるということである。2018秋・視聴者調査の近年朝ドラ視聴者1,324人に比べると、より一層頻度高く見た人が多い集団である。

① 総合評価と満足度比較

まず、各作品の総合評価と満足度から見ていこう。各作調査では、100点満点で点数をつける総合評価と、満足度を[とても満足][まあ満足][どちらともいえない][あまり満足していない][まったく満足していない]の5段階で聞く質問を行っている⁴⁾。

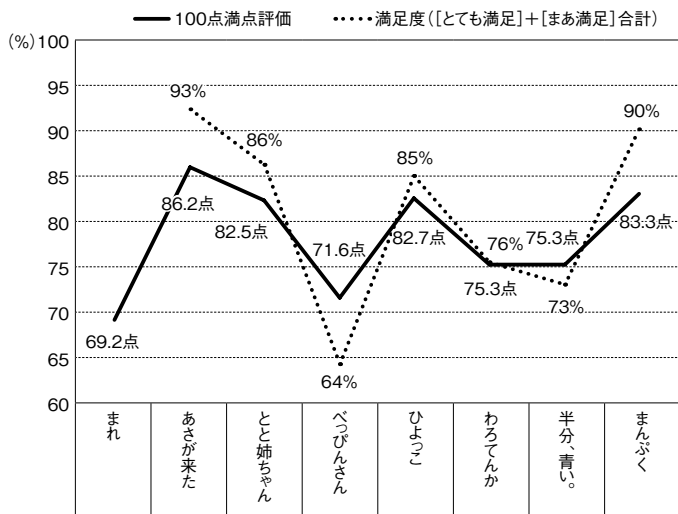
作品ごとの総合評価と満足度を折れ線グラフにしたのが図Ⅱ-2-1である。満足度は、満足合計＝[とても満足]＋[まあ満足]の合計値（％）を使用した。基本的にはどの作品も評価・満足度がかかなり高いというべきであろう。総合評価が8作品中で最も低い『まれ』（69.2点）でも70点に近く、満足度を尋ねた『まれ』以外の7

表Ⅱ-2-1 8作の各作調査の概要

※すべて、8作の放送終了後調査（WEBアンケート調査）の結果を比較することとする。

作品名	『まれ』	『あさが来た』	『とと姉ちゃん』	『べっぴんさん』	『ひよっこ』	『わろてんか』	『半分、青い。』	『まんぷく』
調査方法	8作品とも、インターネット上で行うアンケート調査（略称：WEB調査）：量的調査							
調査時期	2015年9月26～29日	2016年4月2～5日	2016年10月1～4日	2017年4月1～3日	2017年9月30日～10月2日	2018年3月31日～4月1日	2018年9月29日～10月1日	2019年3月30～31日
調査対象者	インターネットリサーチ会社に登録しているモニターで、国内在住の15歳以上の男女。全放送期間（6か月間）を5～6パートに区切ったうちの、少なくとも4パートで視聴経験が、①「放送をすべて見た」、②「だいたい見た」、③「ある程度（半分くらい）見た」、④「あまり見ていない」、⑤「まったく見ていない」のうち、①～③に該当する人。『まれ』についてはパート分けせず全編を対象としている。 本稿では、当該作品を「比較的好く見た人」と呼ぶこととする。							
調査人数	男女それぞれ15～29歳・30代・40代・50代・60歳以上について、100人ずつ割り当て。合計1,000人							
調査目的	事前に実施したMROC調査で得られた“朝ドラ視聴実態”について量的に検証する。『まれ』のドラマ作品としての印象や評価等を聞くことを通じて、視聴者から見た『まれ』の特徴を析出する。 該当作品全体についての視聴状況および番組印象と評価、朝ドラ全般に対する意識等を聞くことを通じて、視聴者から見た当該作品の特徴と朝ドラ視聴の特徴を析出する。各作品に共通する質問を設け作品間の比較を通して、朝ドラに共通の要素を明らかにするとともに、各作品固有の特徴の析出を目指す。 また、調査研究を進める中で新たに生じる問題意識に応じて、各調査で独自の質問も行うこととする。							

図Ⅱ-2-1 朝ドラ8作品総合評価（100点満点）と、満足度（[とても満足] + [まあ満足] 合計）の比較



※「まれ」の調査では満足度を聞く質問は実施していない

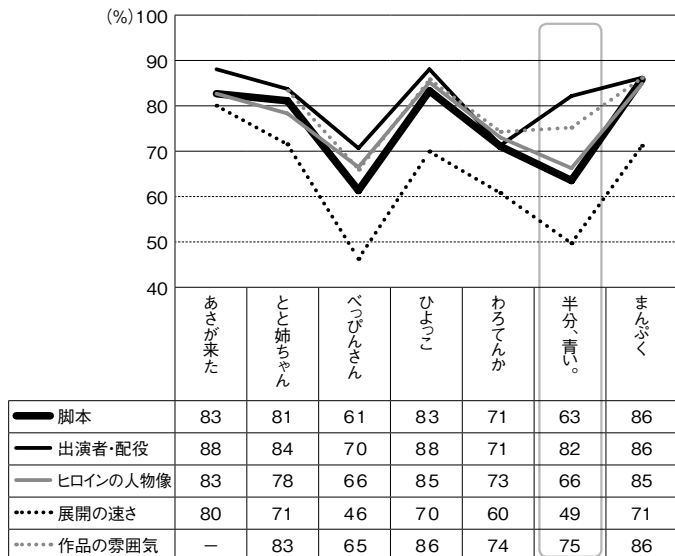
作品中で最も低い『べっぴんさん』でも64%と、過半数を大きく超える人が満足しているのである。調査概要にあるように、回答者は各作品を“比較的良好に見ていた”人たちなので、評価や満足度が高くなるのは当然のことといえるかもしれない。

然と見ているわけではなく、作品の良さや物足りなさを見分けたり感じ分けたりしていることが分かる。

② ドラマの主要要素評価比較

では、ドラマを構成する要素についてはどう評価しているのだろうか。『あさが来た』以降の7作品では、ドラマの構成要素をいくつか提示して[良かった][まあ良かった][どちらともいえない][あまり良くなかった][良くなかった]の5段階で評価を聞いている。図Ⅱ-2-2・3・4は、その「良かった」合計（[良かった]+[まあ良かった]）を比較したグラフである。

図Ⅱ-2-2 7作品の「良かった要素」比較（「良かった」合計）



※「あさが来た」では「作品の雰囲気」は設問に入らなかった

まず、図Ⅱ-2-2のドラマ主要要素の「脚本」「出演者・配役」「ヒロインの人物像」「展開の速さ」「作品の雰囲気」を見てみよう。「展開の速さ」が『べっぴんさん』(46%)と『半分、青い。』(49%)で5割を割っている

以外は、どの項目も6割以上の人が「良かった」と答えており、基本的にはドラマ主要要素の評価はどの作品でも高かったといえよう。

グラフの形に注目すると、「脚本」「ヒロインの人物像」「展開の速さ」はグラフの形がよく似ている。『あさが来た』『とと姉ちゃん』『ひよっこ』『まんぷく』が高く、それに比べると『べっぴんさん』『わろてんか』『半分、青い。』が低めである。「脚本」「ヒロインの人物像」は数値も大変近い。この2要素に比べると「展開の速さ」は『べっぴんさん』『ひよっこ』『わろてんか』『半分、青い。』『まんぷく』では1割強～2割ほど低い。これら5作品の各作調査では、話の流れの滞りや中だるみ(＝展開の遅さ)や、逆に、いろいろな要素を詰め込みすぎて展開が速すぎるといふ指摘がされており、それを反映した結果といえよう⁶⁾。

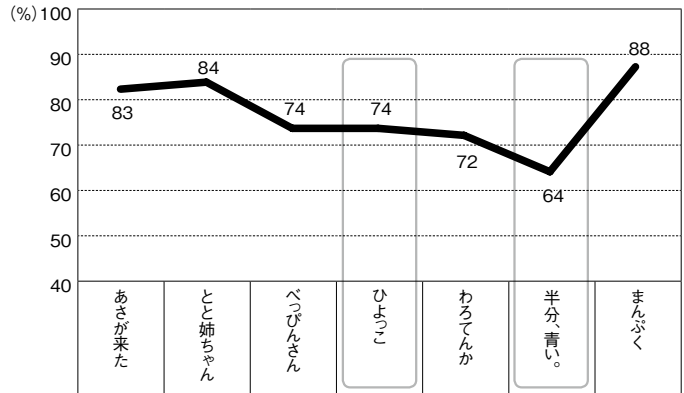
「出演者・配役」と「作品の雰囲気」は、『半分、青い。』のみ、ほかの作品とグラフの形が異なり、高めの評価となっている。

③ モデルあり作品・オリジナル作品の比較

朝ドラは、モデルのあり・なしで大きく2種類に分けることができる。1つは実在の人物をモデルやモチーフにしてその半生をもとにしながら、創作的要素を加えて作られた作品である⁷⁾。もう1つは実在の人物をモデルにするのではなく、登場人物や物語展開をすべて作り手が創作するオリジナル作品である。

『ゲゲゲの女房』以降、近年はモデルありの作品が多く、モデルがあるほうが視聴者に好まれ、評価も高いのではないかと、という意見もある。実際にはどうなのであろうか。図Ⅱ-2-3は、

図Ⅱ-2-3 「モデルがあること」が良かったという人と「モデルがないオリジナル作品であること」が良かったという人の比較(「良かった」合計)



『あさが来た』以降の7作品について、各作品が「実在の人物をモデルにしていること」や「モデルがないオリジナルの作品であること」が良かったかどうかを5段階で聞き、トップ2の合計値を示したものである。7作品のうち『ひよっこ』と『半分、青い。』はモデルがないオリジナル作品であり、そのほかの5作品は実在の人物をモデルやモチーフにしながらか創作的要素を加えて作られた作品である。オリジナル作品である『ひよっこ』『半分、青い。』で「オリジナル作品であること」が良かったという人はそれぞれ74%・64%で、一見モデルありの5作品に比べると低めのポジションにとどまっているかのようである。しかし、モデルあり作品どうしを比べると、5作品すべてで「良かった」という人が多いわけではなく、『あさが来た』『とと姉ちゃん』『まんぷく』は8割台、『べっぴんさん』『わろてんか』は7割台で、作品により高低がある。『べっぴんさん』『わろてんか』はオリジナル作品の『ひよっこ』と同レベルである。つまり、モデルのあり・なしの評価は作品ごとに異なり、必ずしも一致していないのである。「モデルがあるほうが視聴者の評価が高い」というような一面的な言い方

はできないということであろう。

④ 時代設定比較

朝ドラには、第二次世界大戦を間にはさんで戦前・戦中・戦後を描いた作品が少なくない。今の視聴者には、そうした動乱の時代を背景に波乱万丈の人生を描いた作品が好まれるのか、逆に、戦争の時代は雰囲気が暗いので見たくないのか…。はたして、作品の背景となる時代設定に、視聴者の好みや評価の違いはあるのだろうか。個別調査を行った7作品の時代設定は、『あさが来た』＝江戸時代末期～明治末期、『わろてんか』＝明治末期～終戦直後、『とと姉ちゃん』『べっぴんさん』『まんぷく』＝戦前・戦中・戦後の時代、『ひよっこ』＝昭和の高度経済成長期、『半分、青い。』＝高度経済成長期後半～バブル期～現代である。これら7作品の「時代設定が良かったかどうか」を聞いたのが図Ⅱ-2-4である。戦争をはさんだ時代を描いた4作品『とと姉ちゃん』『べっぴんさん』『わろてんか』『まんぷく』の時代設定を「良かった」という人の割合は作品によって1割前後～2割弱の差がある。昭和の高度経済成長期

以降を描いた2作品『ひよっこ』『半分、青い。』でも時代設定の評価は1割あまり差がある。時代設定も「どの時代だから良い・悪い」といった一面的な言い方はできないということであろう。

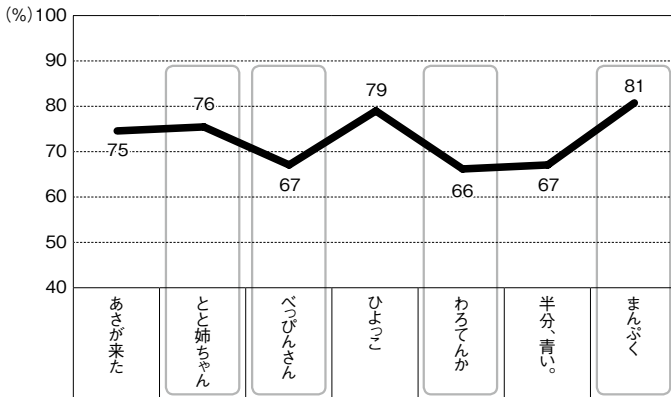
前述の「モデルのあり・なし」や、時代設定など、ドラマの枠組みに類する要素は、ドラマを作る側からすると、物語を上手く・面白く語るための要素でもある。視聴者からすると、それらは、見る前は“興味を引き”“見たいと思うかどうか”に影響する要素であるが、見始めたあとは物語が上手く・面白く語られた場合に「良かった」要素として認識されるものようである。

⑤ 視聴熱を測る試み

『あまちゃん』調査のSNS分析で、視聴率には表れない視聴者の“熱”の存在が明らかになり、私たちは「視聴熱」と名づけたが、この視聴熱をどう測定し顕在化させるかは、なかなか難しい課題であった。視聴熱を測る唯一のスケールは存在しない。満足度の高さはその総体といえるであろうが、その内実までは分からない。

一方、部分的ではあるが高い視聴熱は、見る人の視聴態度や視聴意欲に反映される側面があると思われる。逆に、視聴熱が冷めかかって低くなっている人では、作品に対する不満や視聴離脱が意識されているのではないかと推測される。こうした視聴態度や視聴意欲、不満や離脱の自覚を聞くことで、視聴者の熱量の高低の一端をある程度具体的に知ることができ、総合的な満足度と重ねてみることで視聴

図Ⅱ-2-4 7作品の時代設定の「良かった」度合い比較
（「良かった」合計）



熱の可視化に近づけるのではないかと考えた。『とと姉ちゃん』以降の6作品の各作調査では、視聴熱の高さの一端を示していると思われる高視聴意欲要素として「「一話も見逃したくない」と思いながら見ていた」「テレビの前を離れずに、じっくり見たい」と思いながら見ていた」「今までに見た、他の朝ドラ作品よりも熱心に見ていた」の3項目、視聴熱が冷めかかっている低視聴意欲要素（不満や視聴離脱意識）として「見続けてはいたが、物足りなさを感じていた」「見続けるのをやめようと思ったことが、時々あった」の2項目を設定して、視聴熱の高低の一端を捉えることを試みている。

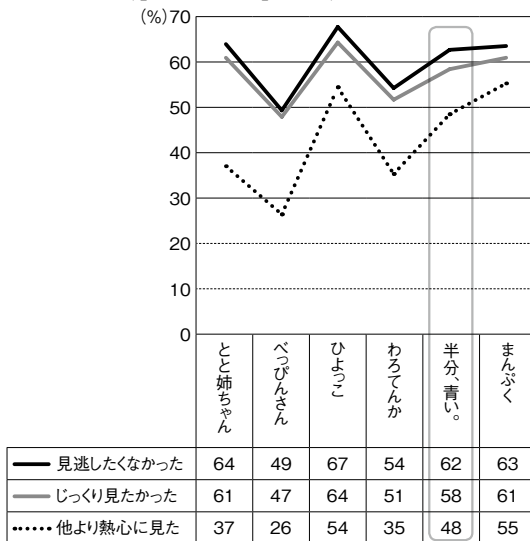
図Ⅱ-2-5・6は、上記5項目を提示して[あてはまる][まああてはまる][あまりあてはまらない][あてはまらない]の4段階で聞き、[あてはまる]合計（[あてはまる]+[まああてはまる]）をグラフにし6作品を比較したものである。

まず、満足度の比較的高かった『とと姉ちゃん』（満足度86%）・『ひよっこ』（同・85%）・『ま

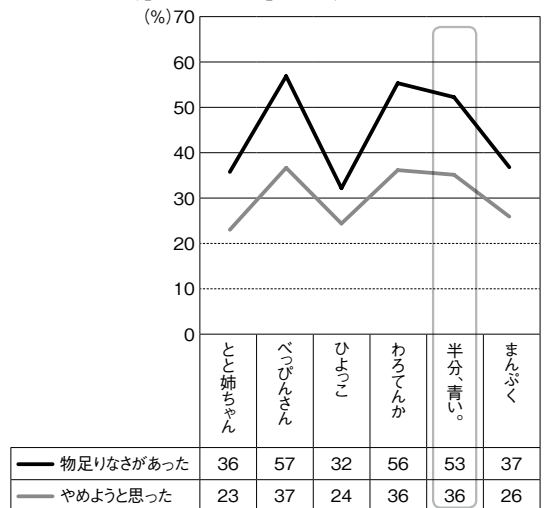
んぷく』（同・90%）を比べてみると、低視聴意欲要素（不満・視聴離脱意識）は総じて低い。高視聴意欲要素では、「「一話も見逃したくない」と思いながら見ていた」と「テレビの前を離れずに、じっくり見たい」と思いながら見ていた」は3作品とも6割台と高いが、「今までに見た、他の朝ドラ作品よりも熱心に見ていた」は『まんぷく』（55%）・『ひよっこ』（54%）は5割を超えているが、『とと姉ちゃん』（37%）は3割台にとどまり、視聴の熱に差が出ている。

満足度が比較的低めだった『べっぴんさん』『わろてんか』『半分、青い。』を見てみよう。『べっぴんさん』『わろてんか』は高視聴意欲要素のうち「「一話も見逃したくない」と思いながら見ていた」と「テレビの前を離れずに、じっくり見たい」と思いながら見ていた」は5割前後にとどまり、「今までに見た、他の朝ドラ作品よりも熱心に見ていた」は2～3割台と低い。低視聴意欲要素（不満・視聴離脱意識）では、「物足りなさ」を感じていた人は6割弱とかなり多いが、

図Ⅱ-2-5 視聴熱～高視聴意欲要素比較
（[あてはまる]合計）



図Ⅱ-2-6 視聴熱～不満・視聴離脱意識比較
（[あてはまる]合計）



「見続けるのをやめようと思ったことが、時々あった」人は3割台にとどまった。

この2作品に比べると、『半分、青い。』は「「一話も見逃したくない」と思いながら見ていた」(62%)・「「テレビの前を離れずに、じっくり見たい」と思いながら見ていた」(58%)・「今までに見た、他の朝ドラ作品よりも熱心に見ていた」(48%)と高めである。低視聴意欲要素(不満・視聴離脱意識)の「見続けてはいたが、物足りなさを感じていた」(53%)・「見続けるのをやめようと思ったことが、時々あった」(36%)は2作品と同レベルの高さであった。

このように、『半分、青い。』は、視聴熱が高い要素・低い要素ともに高めであるという特異な結果となっている。先ほど②ドラマの主要要素評価比較のところでも『半分、青い。』はほかの6作品と異なる結果となっており、『半分、青い。』は近年の朝ドラ作品の中で特異な作品であるといえそうである。この『半分、青い。』については、【各論編】Ⅲ-7において、その特徴を掘り下げる。

Ⅱ-3 朝ドラのイメージ

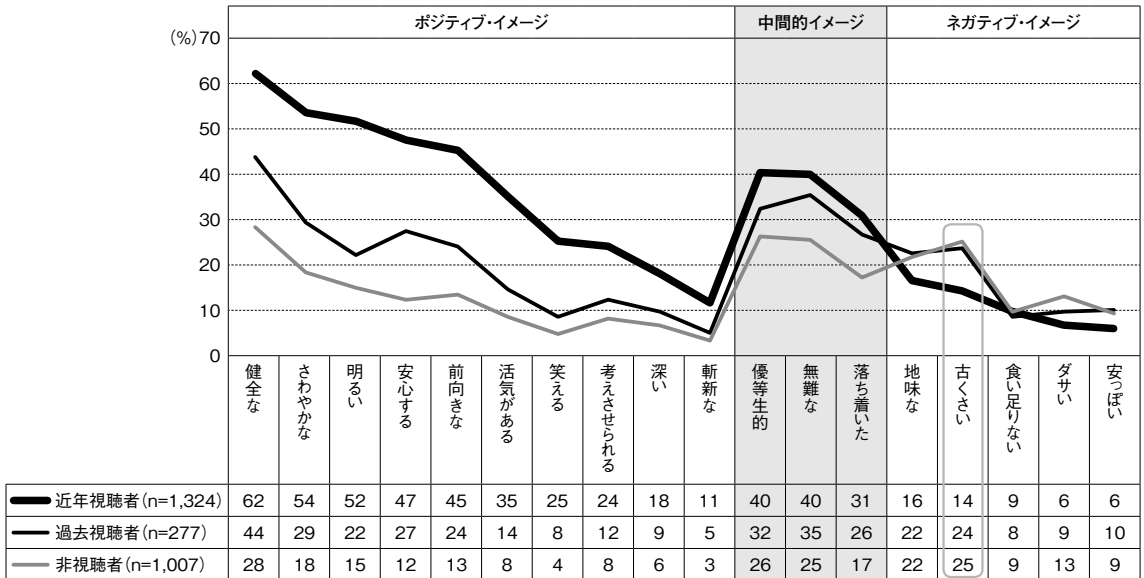
『あさが来た』以降の各作調査では、作品のイメージを知るために、情緒的イメージ18項目、機能的イメージ18項目を列挙し、[そう思う][どちらともいえない][違うと思う]の3択の質問を設けている。そして、作品間のイメージの違いを比べられるように、同じワーディングで各作品のイメージを聞いている⁸⁾。各作調査結果報告では、この設問を使って作品間のイメージ比較を行い、それぞれの作品の特徴を分析してきた。そして、2018秋・視聴者調査においても、これらと同様に、情緒的イメージ18項目、機能的イメージ18項目を列挙して視聴者の作品イメージを聞く設問を設けている。ここでは、この共通の設問を使って、2018秋・視聴者調査と、『あさが来た』から『まんぶく』までの7作品の各作調査の作品イメージを比較することを通して、視聴者が朝ドラに抱くイメージについて理解を深めたいと思う。

① 2018秋・視聴者調査～近年視聴者・過去視聴者・非視聴者の抱く朝ドライメージ

まず、2018秋・視聴者調査を使って、朝ドラの近年視聴者・過去視聴者・非視聴者の抱く朝ドラのイメージの違いを見てみよう。視聴者の区分は下記のように設定している。

- 近年視聴者：『ゲゲゲの女房』以降の朝ドラ作品の中に、続けて見た作品がある人
- 過去視聴者：『ゲゲゲの女房』以前は「続けて」あるいは「たまたま」見た作品があるが、『ゲゲゲの女房』以降は「続けて」も「たまたま」も見していない人

図Ⅱ-3-1 情緒的イメージ（「そう思う」）～視聴者層比較（近年視聴者・過去視聴者・非視聴者）



●非視聴者：朝ドラを見たことがない人

ア 情緒的イメージ

図Ⅱ-3-1は、朝ドラの近年視聴者・過去視聴者・非視聴者で、情緒的イメージ18項目について「そう思う」と答えた人の割合をグラフにしたものである（近年視聴者の回答が多い順に並べた）。

近年視聴者では、ポジティブ・イメージである「健全な」62%・「さわやかな」54%・「明るい」52%が5割を超えており、「安心する」47%・「前向きな」45%も4割台と比較的高めである。良い面と悪い面の両方の意味合いのある中間的イメージである「優等生的」40%・「無難な」40%も4割に達している。その一方で、ネガティブなイメージである「地味な」16%・「古くさい」14%・「食い足りない」9%・「ダサい」6%・「安っぽい」6%などは2割未満と低く、総体的には近年視聴者の朝ドラのイメージはかなり良いといえそうである。

それに対し、過去視聴者は、5割を超えるポジティブ・イメージはなく、「健全な」44%が最も高い。それ以外のポジティブ・イメージは3割に届かない。中間的イメージ「優等生的」32%・「無難な」35%が3割台である。「健全な」以外の良いイメージはさほど高くない過去視聴者層であるが、ネガティブ・イメージ群は2割台以下と低めで、悪いイメージを抱いているわけではなさそうだ。その中でも「古くさい」が近年視聴者14%より1割高い24%で、やや多めであった。

非視聴者は、ポジティブ・イメージでも中間的イメージでもネガティブ・イメージでも3割を超えるイメージはない。非視聴者層は朝ドラに対して具体的な情緒的イメージを持っている人があまり多くないのかもしれない。そうした中では、ポジティブ・イメージの「健全な」28%が順位でトップではあるものの、第2・3位は中間的イメージの「優等生的」26%・「無難な」25%であり、第4・5位にはネガティブ・イメージの「古

くさい」25%・「地味な」22%が続き、必ずしもイメージが良いわけではなさそうである。

㊦ 機能的イメージ

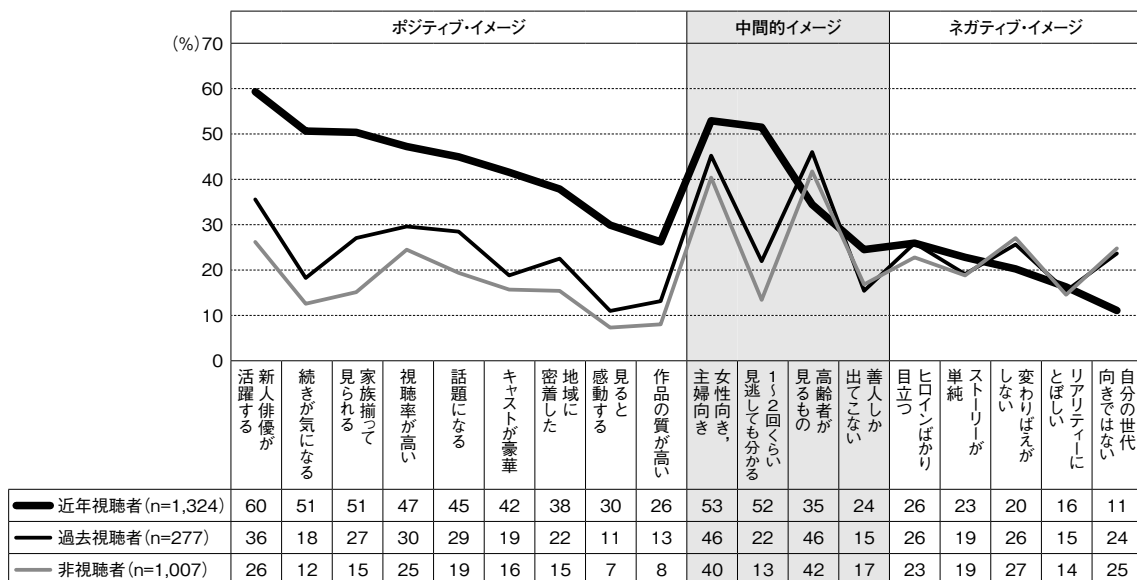
図Ⅱ-3-2が機能的イメージのグラフである。近年視聴者は、機能的イメージでは5割を超えるポジティブ・イメージが3項目（「新人俳優が活躍する」60%・「続きが気になる」51%・「家族揃って見られる」51%）、4割台が3項目（「視聴率が高い」47%・「話題になる」45%・「キャストが豪華」42%）ある。中間的イメージの「1～2回くらい見逃しても分かる⁹⁾」が52%に達する。その一方で、ネガティブ・イメージはすべて2割台以下にとどまっている。このように、比較的イメージが良い側面もあるが、「女性向き、主婦向き」53%・「高齢者が見るもの」35%など視聴者が限定されるというイメージを持つ人も少なくないようだ。また、「作品の質が高い」は26%にとどまり、「見ると感動する」といった心を揺り動かす強い力を持ったドラマであるというイ

メージを持つ人も30%とさほど多くない。

過去視聴者は、「女性向き、主婦向き」46%・「高齢者が見るもの」46%が4割台に達していて多めであり、順位で見ても、この2項目がトップである。第3位は「新人俳優が活躍する」36%、第4位「視聴率が高い」30%、第5位「話題になる」29%と続く。視聴率が高く世間で話題になっているという感触を持っている人もいるが、視聴者が女性や高齢者に限定されているドラマであるというイメージが最も強いようだ。

非視聴者は、「高齢者が見るもの」42%・「女性向き、主婦向き」40%が4割台に達しているが、それ以外のイメージは2割台以下と総じて低い。その中では、第3位が「変わりばえがしない」27%、第4位「新人俳優が活躍する」26%、第5位は「自分の世代向きではない」「視聴率が高い」が同率25%で並ぶ。少ないながらも良いイメージと悪いイメージが混ざり合っている感じだが、視聴者が女性や高齢者に限定され、「自分向けの番組・ドラマではない」というイ

図Ⅱ-3-2 機能的イメージ（「そう思う」）～視聴者層比較（近年視聴者・過去視聴者・非視聴者）



メージが強いようだ。

過去視聴者と非視聴者は、現在放送されている朝ドラを見ていない人であるので、今の朝ドラに関心そのものが低く、自分が見るものではないというイメージを持つ人が少なからずいるということなのかもしれない。

② 近年視聴者と各作調査の視聴者が抱く朝ドライメージの比較

次に、近年視聴者と『あさが来た』以降の7作品の視聴者を比べてみたい。どちらの視聴者も、『ゲゲゲの女房』以降の作品を「続けて見た」人ではあるが、視聴条件はかなり異なる。近年視聴者は『ゲゲゲの女房』以降の作品の中に「続けて見た」作品があるという、比較的緩やかな視聴条件に合致した人である。一方、各作調査の視聴者は、それぞれの作品を物語の進展に合わせて5～6パートに分け、そのうち4パート以上で「半分くらい以上見た」人なので、近年視聴者に比べかなり頻度高くその作品を視聴した人である。この両層を比べることで、視聴頻度の違いで作品イメージが異なるのかど

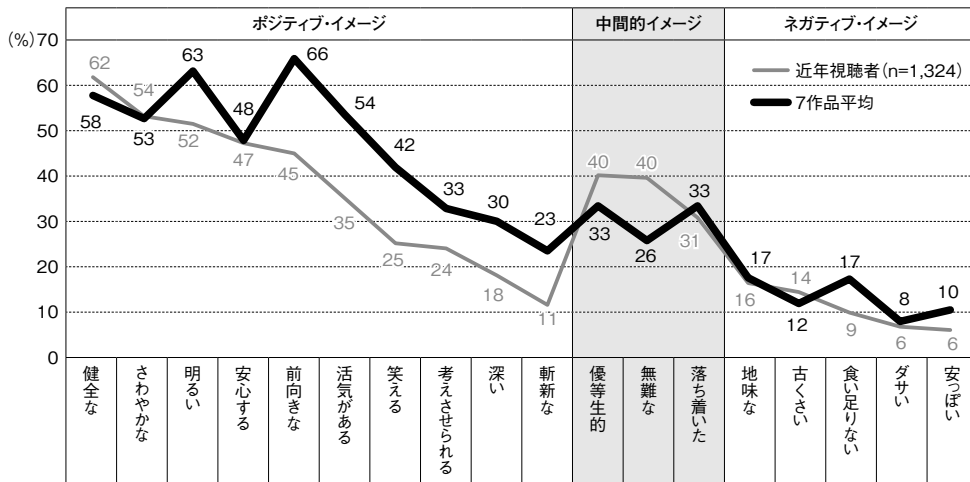
うかを知ることができるのではないかと考えたのである。

比べるにあたって、7作品それぞれの視聴者と個別に比較するのは大変煩雑になるので、ここでは7作品視聴者の平均値と近年視聴者を比べることとした。

㊦ 情緒的イメージ

図Ⅱ-3-3を見ると、7作品視聴者の平均値のグラフは、近年視聴者同様に、ポジティブ・イメージ群が高く、ネガティブ・イメージ群が低い。近年視聴者より一層高いポジティブ・イメージがあることが分かる。7作品平均値が近年視聴者より1割以上高いのは「前向きな」66%・「明るい」63%・「活気がある」54%・「笑える」42%・「深い」30%・「斬新な」23%の6項目にのぼる。7作品視聴者は、10個あるポジティブ・イメージのうち5つが5割を超えており、4割台に達する項目も2つと、近年視聴者よりかなり朝ドラのイメージが良いといえよう。また、中間的イメージの「無難な」26%は逆に1割以上低く、7作品視聴者は近年視聴者よりも、朝ドラを、

図Ⅱ-3-3 情緒的イメージ（「そう思う」）～視聴者層比較（近年視聴者・7作品平均）



当たり障りのない「無難な」ものというより、自分自身が積極的に楽しめるものと感じているようである。

④ 機能的イメージ

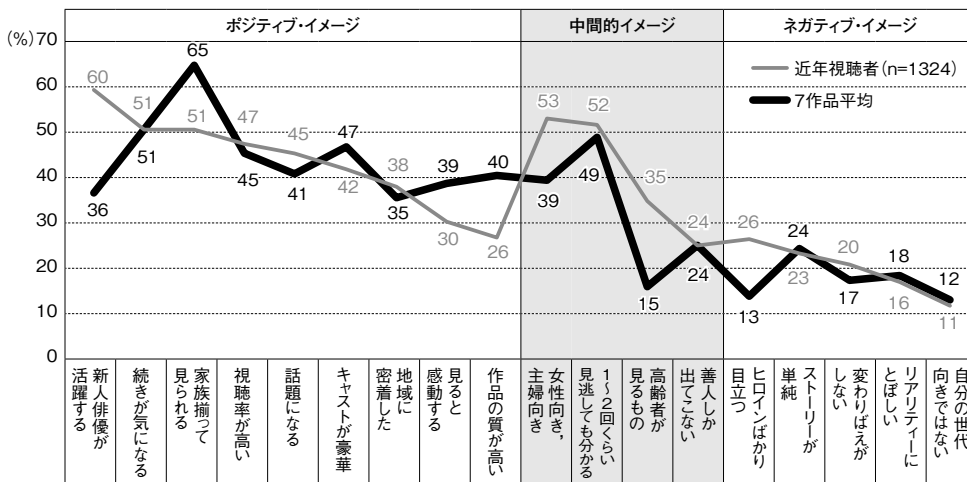
図Ⅱ-3-4のように、機能的イメージでも、7作品視聴者はポジティブ・イメージが高めでネガティブ・イメージが低めである点は近年視聴者と同様であるが、1割以上数値が異なる項目も少なくない。「家族揃って見られる」65%は7作品視聴者のほうが1割以上高く、「女性向き・主婦向き」39%・「高齢者が見るもの」15%は1割以上低い。7作品視聴者は、朝ドラを、視聴者が限定されない、より幅広い人が見て楽しめるものと感じているようである。「新人俳優が活躍する」は7作品視聴者は近年視聴者より2割以上低く36%にとどまった。最近の朝ドラ7作品は、主人公が新人ではなく、かなりキャリアや人気のある女優が演じた作品も少なくない。この数値はそのことを反映したものと考えられよう。また、「作品の質が高い」は近年視聴者では26%と低めであったが、7作品視聴者では1

割以上高い40%と4割台に達し、「朝ドラの質が高い」と感じている人が少なくない。7作品視聴者は、かなり機能的イメージが高いといえようである。

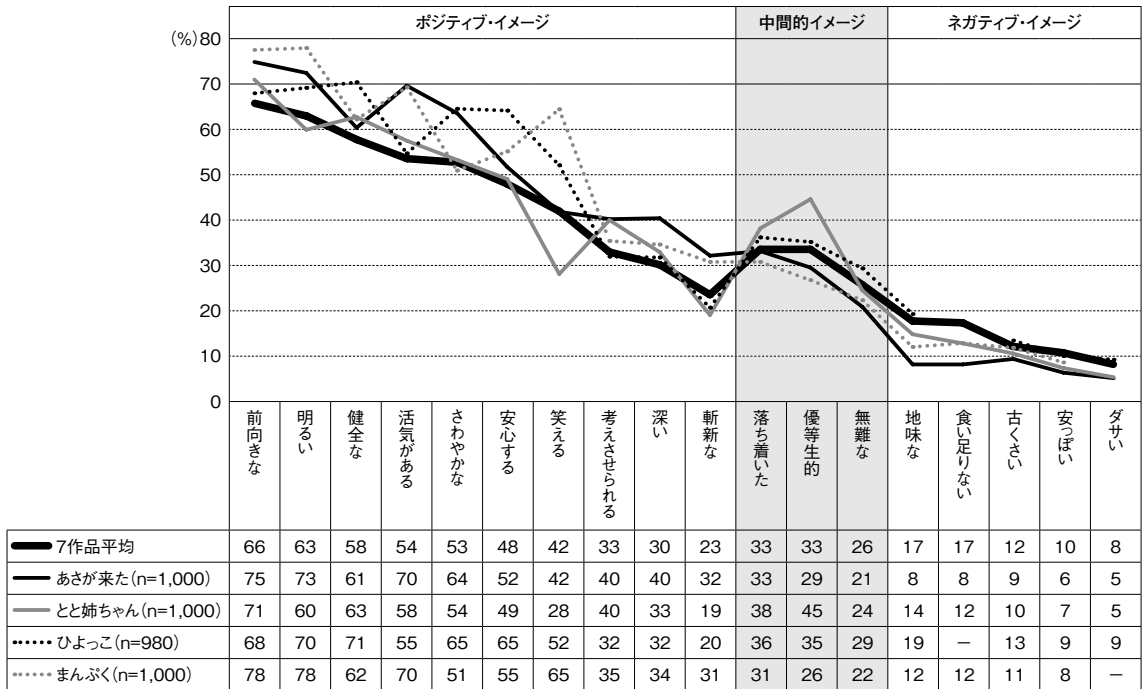
⑤ 7作品の朝ドライメージ比較

最近の朝ドラ7作品のイメージを7作品平均値と比較してみよう。グラフを見やすくするために、満足度が比較的高めだった4作品（『あさが来た』『とと姉ちゃん』『ひよっこ』『まんぷく』）と満足度が比較的低めだった3作品（『べっぴんさん』『わろてんか』『半分、青い。』）に分けて図表化した。満足度が比較的高めだった作品の情緒的イメージのグラフが図Ⅱ-3-5、機能的イメージのグラフが図Ⅱ-3-6である。満足度が比較的低めだった作品の情緒的イメージのグラフが図Ⅱ-3-7、機能的イメージのグラフが図Ⅱ-3-8である。作品それぞれでイメージが異なる部分があって、大変バラエティーに富んだ折れ線グラフが並んでおり、作品の多様性が表れているといえよう。

図Ⅱ-3-4 機能的イメージ（「そう思う」）～視聴者層比較（近年視聴者・7作品平均）

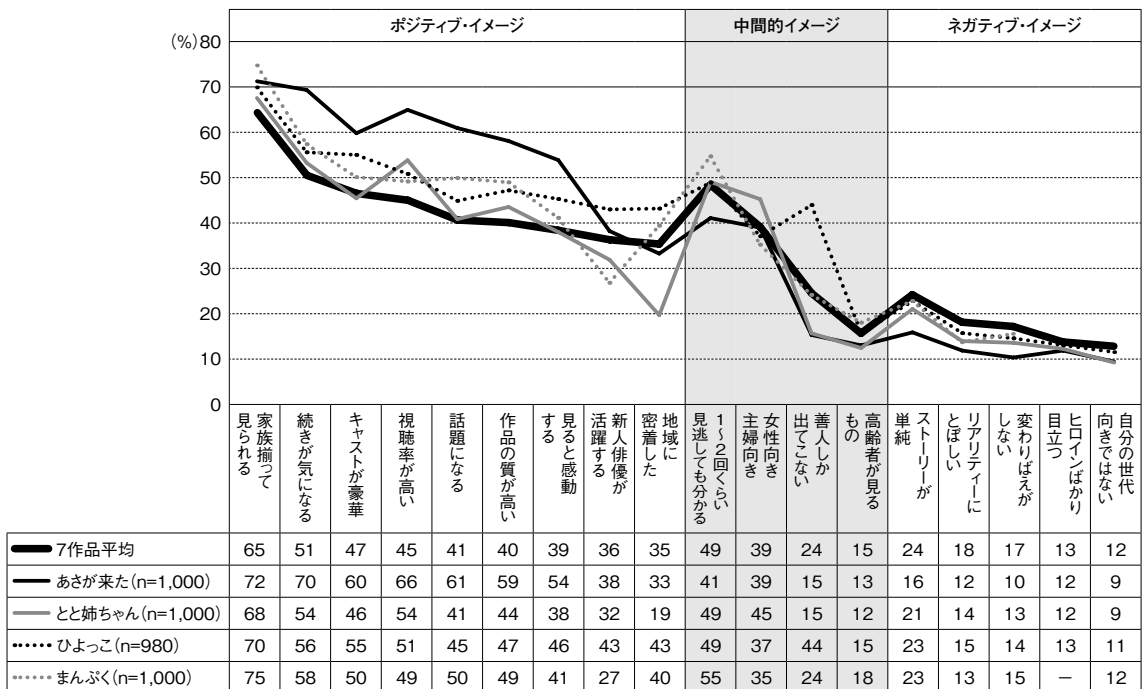


図Ⅱ-3-5 満足度高め作品グループ比較（「そう思う」）～情緒的イメージ



※「ひよっこ」調査では、「食い足りない」はイメージ項目に入れなかった
 ※「まんぶく」調査では、「ダサイ」はイメージ項目に入れなかった

図Ⅱ-3-6 満足度高め作品グループ比較（「そう思う」）～機能的イメージ



※「まんぶく」調査では、「ヒロインばかり目立つ」はイメージ項目に入れなかった

㊦ 満足度高め作品のイメージ

満足度が比較的高め作品のグラフ図Ⅱ-3-5と図Ⅱ-3-6で大きな傾向を見ると、情緒的イメージでも機能的イメージでもポジティブ・イメージの値が高くネガティブ・イメージが低い。

個々の作品の特徴について7作品平均値との差を中心に少し言及すると、『あさが来た』は情緒的イメージの「明るい」73%・「活気がある」70%・「さわやかな」64%などが7作品平均値より1割以上高く、機能的イメージでは「続きが気になる」70%・「視聴率が高い」66%・「話題になる」61%・「作品の質が高い」59%などが7作品平均値より2割前後高く、「キャストが豪華」60%・「見ると感動する」54%は7作品平均値より1割余り高く、総じて良いイメージが高い。その中でも特徴的なのは、7作品の中で唯一『あさが来た』だけが、情緒的イメージの「深い」40%が4割台に達しており、機能的イメージの「見ると感動する」54%が5割を超えている点である。作品評価の高い朝ドラであったと言える。

『とと姉ちゃん』は、情緒的イメージの「優等生的」45%が高めで「笑える」28%が低めである。これは、このドラマの主人公が、早世した父親代わりとなって、自らの恋・結婚もあきらめるなど、自分のことより家族を優先し支え続ける側面の強い物語であったことを反映しているようにも受け取れる。また、機能的イメージの「地域に密着した」19%が7作品中最も低いのは、主人公が若いうちに東京に出てきてずっと東京で暮らし、地方の方言があまり出てこなかったことや、主人公の仕事が全国誌の出版社の編集部員という地元性を発揮しにくいものだったことによるところが影響したのかもしれない。

『ひよっこ』は、茨城県から集団就職で上京

した女の子を主人公に、“善き人”たちに囲まれた庶民のありふれた日常を丁寧に描く物語であった。情緒的イメージの「健全な」71%・「さわやかな」65%・「安心する」65%が7作品平均より1割以上高く、機能的イメージの「善人しか出てこない」44%が7作品中で最も高く4割台に達しているのは、そうした作品の特徴を反映したものと思われる。

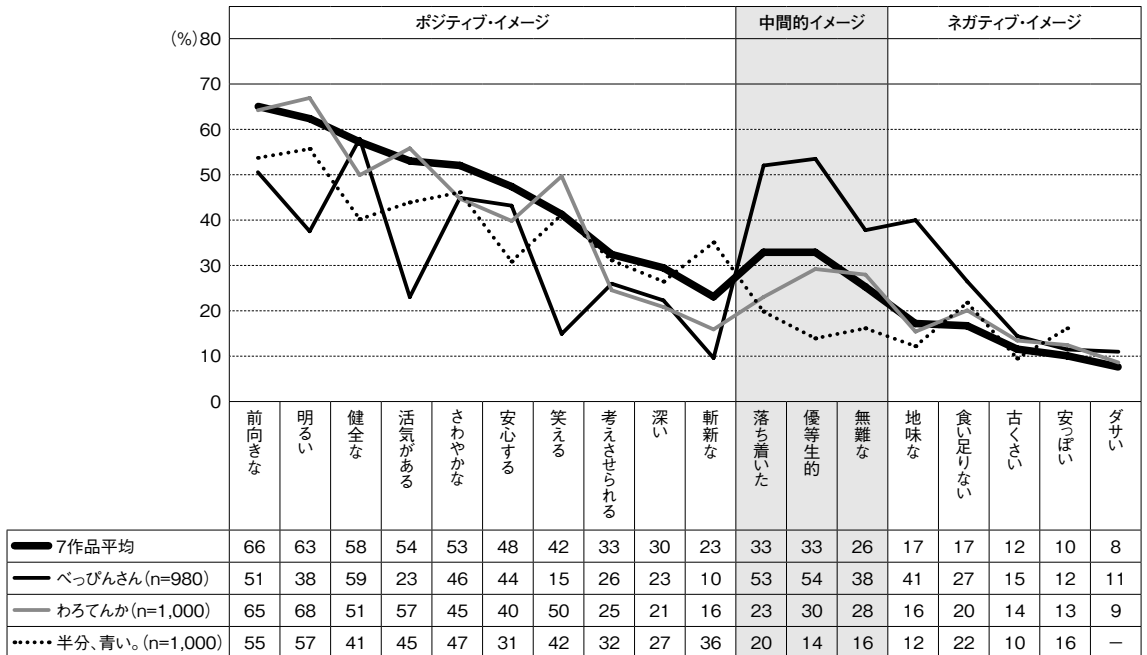
『まんぶく』は、即席ラーメンやカップヌードルの発明～事業的成功という到達目標地点が大変明確で、そこに向かって邁進する物語であり、“お約束的”な笑える小ネタやツッコミどころ、短期的エピソードなどに富んだ作りになっていた。情緒的イメージの「前向きな」78%・「明るい」78%・「笑える」65%、機能的イメージの「家族揃って見られる」75%が7作品中最も高い作品であったことは、こうした当作品の特徴に由来するものと考えられるのではないだろうか。

㊧ 満足度低め作品のイメージ

満足度が比較的低め作品のグラフが図Ⅱ-3-7と図Ⅱ-3-8である。大きな傾向を見ると、ポジティブ・イメージ群で7作品平均を下回る項目が多いようだ。

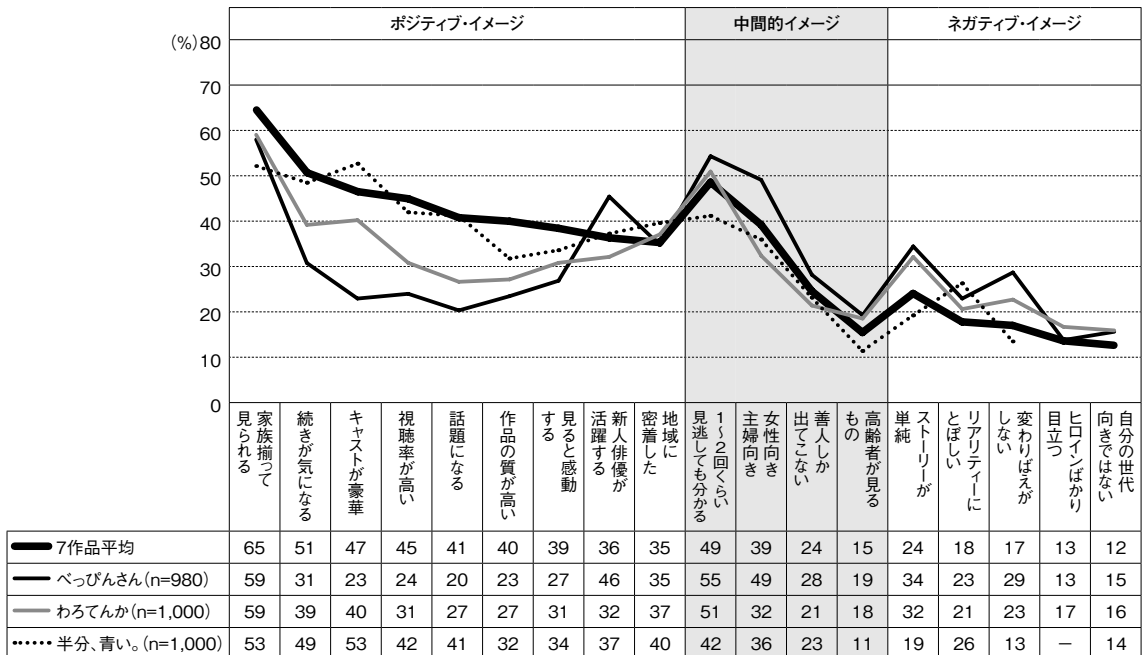
個々の作品の特徴を少し見てみよう。『べっぴんさん』は各作調査結果報告¹⁰⁾で明らかになったように、主人公が自らの思いを具体的な言葉であまり述べなかつたり、物語の進展の方向が分かりにくかつたりするなど“非明示的要素”の強い作品であり、そのことを良い（面白い）と思えるか否かで、見た人の評価が大きく分かれる作品であった。情緒的イメージの「前向きな」51%・「明るい」38%・「活気がある」23%・「笑える」15%、機能的イメージの「続きが気になる」31%・「見ると感動する」27%・「作

図Ⅱ-3-7 満足度低め作品グループ比較（「そう思う」）～情緒的イメージ



※「半分、青い。」調査では「ダサイ」はイメージ項目に入れなかった

図Ⅱ-3-8 満足度低め作品グループ比較（「そう思う」）～機能的イメージ



※「半分、青い。」調査では、「ヒロインばかりが目立つ」はイメージ項目に入れなかった

品の質が高い」23%などが7作品中最も低めであり、情緒的イメージの「優等生的」54%・「落ち着いた」53%・「地味な」41%が7作品中で最も高いなどの点は、当作品の“作り”に影響されたところが大きいのではないかと推測される。

『わろてんか』は、情緒的イメージでは「落ち着いた」23%が7作品平均より1割低いが、それ以外の項目は7作品平均と同レベルで、最近の朝ドラの平均的な情緒的イメージの作品であったようだ。機能的イメージでは、「続きが気になる」39%・「作品の質が高い」27%・「話題になる」27%などが7作品平均より1割あまり低く、見続けさせる力や質的な部分がやや弱めで、話題性もさほど高くなかった様子がうかがえる。

『半分、青い。』は、品行方正とはあまりいない主人公が、漫画家志望の夢破れ、挫折後の人生を歩むなど、“挑戦的”要素の多い作品であった。情緒的イメージの「斬新な」36%が7作品中最も高いことや、「健全な」41%・「安心する」31%・「落ち着いた」20%・「優等生的」14%、機能的イメージの「家族揃って見られる」53%が7作品中で最も低い結果は、当作品の“挑戦的”要素の反映と考えられるのではないだろうか。

④ まとめ

以上見てきたように、当然のことではあるが、朝ドラへの接触度合い・視聴度合いが高いほど朝ドラに対するイメージを具体的に持っている人が多く、イメージも良くなる傾向にあった。朝ドラを現在見ていない非視聴者・過去視聴者は、そもそも朝ドラに対して具体的なイメージを持つ人が少ない模様で、最近の朝ドラ作品を続けて見た経験のある近年視聴者とは、イメージを抱く人の割合に大きな差があった。近年視聴

者は、「健全な」「さわやかな」「明るい」「続きが気になる」「家族揃って見られる」といったポジティブ・イメージを抱く人が過半数に達し、朝ドラに対するイメージはかなり良いといえそうである。近年視聴者より最近の朝ドラ作品を見ている度合いが高い7作品視聴者は、より一層朝ドラのイメージが良く、「前向き」で「明るく」「健全」で「活気があり」「さわやかな」「家族揃って見られる」「続きが気になる」ドラマ枠であるが、作品ごとのイメージの違いも顕著で、近年の朝ドラ作品の多様性を反映しているようだった。

なお、各作品のより詳しいイメージ分析は各作品の調査結果報告を参照されたい¹¹⁾。

(さいとう けんさく／にへい わたる)

注:

- 1) 各作調査で「習慣になっている」とした人の比率よりは低いですが、この違いは各作調査の対象が全員現視聴者なのに対して、近年視聴者には現在見ていない人も含まれること、また「理由」として聞いたことも影響しているかもしれない。
- 2) 占有率を答えてもらう方法で聞いたが、結果としては、マルチアンサー→シングルアンサーの聞き方とほぼ同じことになった。
- 3) 共通質問も研究の進展に沿って一部、新・廃設や変更を行っている。
- 4) 最初の個別調査である『まれ』では100点満点の総合評価質問のみ行ったが、点数評価では各回答者がどこまで満足したのかが明確ではないので、次の『あさが来た』調査から、5段階の満足度質問も行うことにした。したがって、図II-2-1のグラフには『まれ』の満足度は記載されていない。
- 5) なぜ満足度が総合評価より差が大きいのか。おそらく、満足度は回答者の主観的で率直な感情で答える人が多いのに対し、総合評価は回答者の周囲の反応なども勘案した客観的な要素も含めた“評価”をしがちなので、総合評価のほうがやや緩やかな回答になったのではないかと推測されるが、研究課題の優先順位もあり、アンケート調査やグループインタビューで確認するまでには至っていない。
- 6) 詳しくは、各作調査結果を掲載した『放送研究と調査』参照。本稿「はじめに」の表2に掲載誌の一覧あり。
- 7) このモデル・モチーフあり作品は細かく分けると2つに分類される。(a) 実在の人物の半生を比較的忠実に描く作品。この場合、登場人物の名前は実名を使うことが多い。(b) 実在の人物の半生を参考にしながらも、創作的要素(フィクション)を多く盛り込んで作る作品。この場合、登場人物の名前は架空の名前であることが多い。なお、モデルとモチーフという言葉の使い分け方であるが、より創作的要素を多く含む場合にモチーフという言葉を使うことがあるようだ。
- 8) 各作品の特徴をより明らかにすることを目指して、作品に応じて若干のイメージ・ワードの入れ替え・追加も行った。
- 9) 「1～2回くらい見逃しても分かる」というのは、物語の進展が遅いので「1～2回くらい見逃しても分かる」というネガティブな意味合いのイメージとともとれるが、「1～2回くらい見逃しても分かる」ので“途中で視聴脱落しにくく”“最後まで見続けやすい”という利点として捉える人が朝ドラ視聴者の中では少なくないことが、これまでの調査で分かっ

きている。

- 10) 「朝ドラ」研究 視聴者調査を通して見た朝ドラ『べっぴんさん』の特徴と、朝ドラの高視聴率を支える視聴継続要因の検証』『放送研究と調査』2017年9月号
- 11) 本論文「はじめに」のところに提示した「調査結果掲載誌一覧」(表2)参照。

III

各論編

齋藤 建作／二瓶 亙

III-1

『ゲゲゲの女房』はなぜ視聴率が急伸したのか

【視聴率の分析】

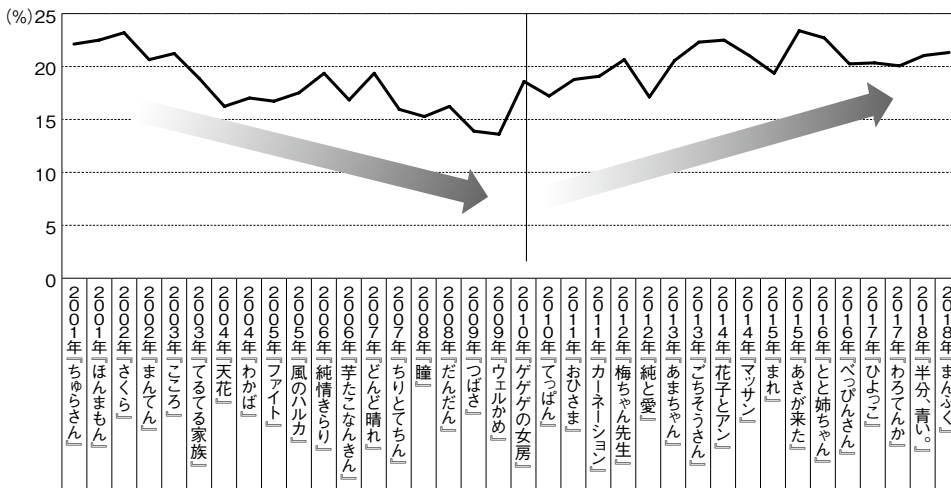
近年の朝ドラが高視聴率を続けている、その起点となった2010年度前期放送の『ゲゲゲの女房』の視聴率は、前作に比べて全話平均で5%上がった。改めて今世紀の視聴率の推移を見ると（図Ⅲ-1-1）、21世紀の始まりには最近作と同じくらいの視聴率であったものが、2003年に朝ドラ史上初めて20%を割り込み、以来2012年度前期の『梅ちゃん先生』で20.7%を獲得するまで8年半、10%台にとどまってい

た。以後は、2作品を除いて20%台をキープし続けている。この間、小さな上がり下がりはあるが大きな流れとしては00年代に下降傾向であったものが、10年代に上昇傾向に転じたように見える。前述のとおりその起点となったのが『ゲゲゲの女房』で、前作の平均13.5%から18.6%に5.1%上昇した。

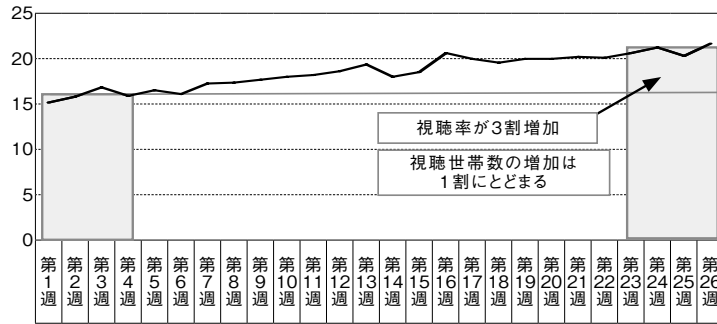
しかし、最初から一気にこれほど高い視聴率を記録したわけではなかった。前作の最終週に比べて、『ゲゲゲの女房』の第1週は平均で1.8%高いだけだった。図Ⅲ-1-2（週平均推移）を見ると、番組の始まりから終わりへかけての半年間、ほぼ一貫して上昇を続けているのが分かる。このように明確な右肩上がりのグラフを示す例は少ない。2013年度前期の『あまちゃん』が似た形であったが、上昇の度合いはもっと小さかった¹⁾。

さて、『ゲゲゲの女房』の視聴率は、最初4週間の平均16.0%から最後の4週間の平均20.8%へ4.8%増加した。これは最初の4週を母数とするとちょうど3割の増加率であった。『ゲゲゲの女房』を見た世帯が4月より9月のほうがそれ

図Ⅲ-1-1 朝ドラの視聴率・今世紀（ビデオリサーチ社 関東地区・世帯視聴率・全話平均）



図Ⅲ-1-2 『ゲゲゲの女房』週単位視聴率の推移
(ビデオリサーチ社 関東地区・世帯視聴率)



だけ増えた、ということであろうか。

そこで、最初の4週と最後の4週とで「1度以上番組を見た世帯」の比率(累積到達率)を調べてみた。すると、最初の4週の累積到達率が41.1%であるのに対して最後の4週が45.7%と、その増加率はおよそ1割にすぎない。仮に最初の4週も最後の4週も、視聴者が同じ割合で番組を見ていたとしたら、視聴率は1割しか増加しないはずである。しかし実際には視聴率が3割増加したのであるから、視聴の割合、すなわち視聴回数(視聴頻度)が増えたということである。そこで世帯の平均視聴回数を調べてみると、4週間で24回の放送があるうち、最初の4週は10.0回であったが、最後の4週は11.5回と15%の増加であった²⁾。

以上をまとめると、『ゲゲゲの女房』の序盤から終盤に向けての視聴率の大きな上昇は、視聴世帯の数が増えたことよりも、視聴者の視聴頻度が高くなったことの寄与が大きかった、ということである。ちなみに、集計ではこの間の視聴頻度の増加は15%であったが、番組をずっと見てきた視聴者の視聴頻度は実質ではもっと高かったと予想される。なぜなら、視聴世帯が増えているということは、番組の評判を聞きつけていわゆる「ひやかし」で見るといった

新規世帯が加わった可能性が高いので、視聴世帯の増加は視聴頻度を押し下げる効果があると考えられるからである。

【放送開始時間の変更】

『ゲゲゲの女房』から総合テレビ朝の放送が15分早まり、それまでの8時15分開始から8時ちょうどの開始に変わった。この

編成変更が視聴率の大きな上昇をもたらしたのではないかと考える研究者や放送関係者は少なくない。しかし我々朝ドラ研究チームではこの考えに疑問を抱いていた。その理由は、1つには前項で示したように、視聴率が半年をかけて徐々に上昇したことである。編成変更は年度の変わり目に即日で行われたことであるから、それが要因となって視聴率に変動があったとすれば、もっと早い反応になったはずではないか。また、作品的にも戦争を絡めた時代の実在のモデルを扱うストーリーはしばらくなかったことや、主人公夫婦の配役が話題になったことなど、内容的な評判も高まっていた印象があり、こうしたことが編成的な要因よりも大きかったのではないかと考えられる。

そこで、編成変更が朝ドラ視聴にどれほどの影響があったのか、2018秋・視聴者調査の中で対象者に聞いてみた。ただ、放送から10年近い年月が経っているので、多くの人はそのことを覚えていないことが想定できた。実際、朝ドラを見たことのある人の中でも「時間の変更は覚えていない/気づかなかった」と答えた人が4割を超えた。それ以外の人たち(n=960)を母数とすると、最も多かったのは「開始時間の変更は自分にとってほとんど関係なかった」が

69%で、こう答えた人の場合は編成変更が朝ドラ視聴に影響した可能性は小さい。一方、「8:15開始のころから見ていたが、8:00開始になって見やすくなった」という人が18%、「8:00開始になったことで、朝ドラを見ることができるようになった」という人が8%いて、この部分で編成の変更が朝ドラ視聴に寄与した可能性がある。反面、「8:00開始になったことで、朝ドラを見づらくなった」という人が6%いた。以上から、編成の変更が視聴率上昇に一定程度寄与したことは間違いないが、その効果は限定的だったのではないかと考える。

【過去番組の分析】

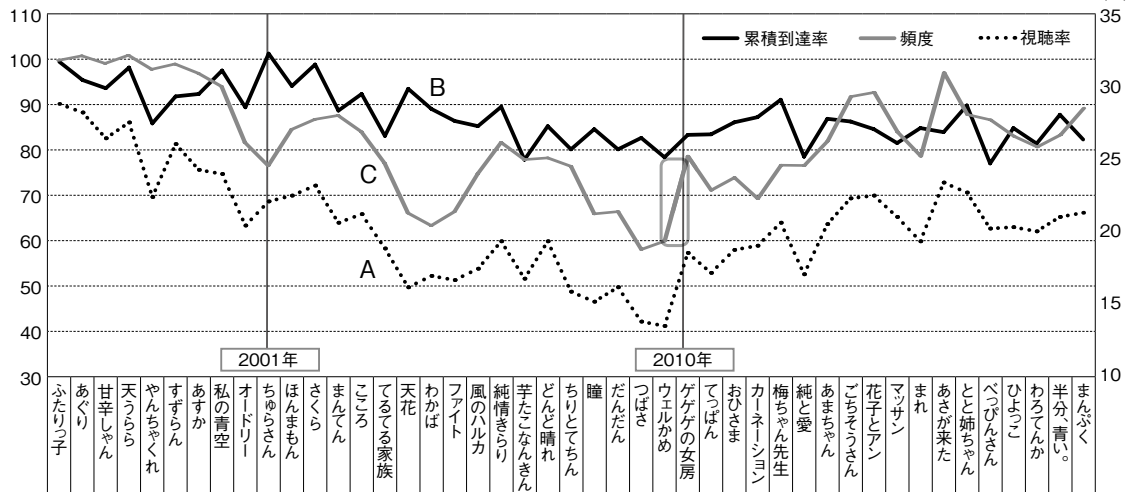
さて、[視聴率の分析]で、番組の序盤から終盤に向けて視聴頻度が高まったことが視聴率上昇の主因であったことを述べたが、これは番組内での上昇の説明であって、実のところ前作に比べて高くなった理由の十分な説明にはなっていない。後者の説明は、『放送研究と調査』2016年4月号「最近好調な「朝ドラ」を、視聴者はどのように見ているか？ 続編」で述べ

た内容のほうが的確であるので、『ゲゲゲの女房』が前作に比べて視聴率が急伸した背景を中心に、再度ここで説明したい。

図Ⅲ-1-3は、上記論稿で掲載した図に、それ以後の『あさが来た』から『まんぶく』まで7作のデータを加えたものである。グラフ内の折れ線Aは、1996年度後期に放送した『ふたりっ子』以降の視聴率（総合テレビで朝8時台に放送した本放送の関東地区平均世帯視聴率）の推移である。『ふたりっ子』を起点とするのは、ビデオリサーチ社の現在の視聴率分析システムで分析できる最初の朝ドラだからである。折れ線A（視聴率）の値はグラフ右のスケールである。

グラフでは、Aの視聴率をさらに累積到達率（視聴世帯数の比率）と視聴頻度（視聴の度合い）に分解して示している。折れ線Bは、各番組の累積到達率を『ふたりっ子』のそれを100として計算し直したデータ。同様に折れ線Cは、『ふたりっ子』の視聴頻度を100とした場合の各番組のデータである。B、Cの値は左スケールに対応している。なおグラフの説明について

図Ⅲ-1-3 視聴率・視聴頻度・累積到達率（ビデオリサーチ社 関東地区・世帯視聴率・全話平均）



の詳細は前出論稿を参照されたい。

視聴率は、累積到達率か、視聴頻度か、あるいはその両方が上下することで上下する。グラフ左端を見ると、『ふたりっ子』から数作は、視聴頻度 (C) がほぼ変化しない中で累積到達率 (B) が下がったときに視聴率 (A) が下がっていることが分かる。しかしその後2000年代にかけて視聴率が下降傾向を続ける中で主因として先導しているのは、視聴頻度 (C) のほうである。下降傾向の中でも、視聴頻度 (C) が大きく下がると視聴率が下がり、視聴頻度 (C) が回復すると視聴率も回復している。全体として視聴頻度 (C) の変動が大きく、累積到達率 (B) の変動は下がっても80程度までであり、ある範囲にとどまっている。

さて、本題の『ゲゲゲの女房』の視聴率がなぜ前作から急伸したか、についてであるが、ここでも視聴頻度 (C) の大きな上昇が主因となっている (図中□で囲った部分)。『ゲゲゲの女房』以前、数作にわたり視聴率が低迷しているが、そのあいだ、累積到達率 (B) は小さな変動しかしていない。この時期に視聴率が低迷したのは視聴頻度が下がったことである。『ゲゲゲの女房』になってこの視聴頻度が大きく回復した。累積到達率は前作よりわずかに上がっただけである。つまり『ゲゲゲの女房』を見た人の数は、前の数作とほとんど変わらないのである。

このことも、『ゲゲゲの女房』の視聴率が上がったのが編成の変更によるものではない、ということを推測させる。つまり、開始時間が変わったことでそれまで見られなかった視聴者が流入したことによって視聴率が上がったのであれば、その要因は累積到達率の増加に表れるはずだからである。視聴率の上昇は視聴頻度の増加、すなわち視聴の度合いの高まりによっ

てもたらされたものである。もちろん、視聴の度合いを高めるのに編成の変更が無力であったとは言わないが、視聴頻度が放送の終盤に向かってより高まっていったことも併せて考えると、個々の視聴者が作品の内容面に惹きつけられて番組をより熱心に見るようになった、すなわち見逃さずに見ることが増えた、と考えるほうが自然であろう。

前述のとおり、番組内 (4~9月) の視聴率の上昇が視聴頻度の高まりによるものであったのと同様、前作から視聴率が急伸したのも視聴頻度の大幅な回復が主因であった。

なおその後の朝ドラ視聴率の変動については、累積到達率 (B) が先導している場面も見られるが (特に『てっぱん』~『梅ちゃん先生』)、視聴頻度 (C) が堅調であることが高視聴率を支えている重要な要因であると考えられる。

【習慣性の活性化】

視聴率を支えるのが視聴頻度であることは、【総論編】Ⅱ-1で指摘した「朝ドラは習慣的に見るもの」という視聴者の意識と関連があると考えられる。近年の朝ドラ視聴率が回復傾向にある背景には、朝ドラ視聴の習慣性が活性化していることがあるだろう。

Ⅲ-2 朝ドラの多様性

【習慣とマンネリ】

習慣とマンネリは裏腹の関係にある。同じ習慣が長く続くと「飽き」や「マンネリ」を招きがちである。そうなれば「習慣的視聴」はむしろじり貧に陥っていく。視聴率が下降傾向の時期には、習慣性が弱まる要因があったのかもしれない。逆に、近年の朝ドラは「マンネリ」に陥らない要素を備えていたのではないか。

「マンネリズム」、『広辞苑』ではこう説明している。「一定の技法や形式を惰性的に反復慣用し、固定した型にはまって独創性と新鮮さを失うようになる傾向。マナリズム。マンネリ」。

朝ドラの放送形態は「一定」「固定」を頑固に守っている（毎朝、15分、半年間）。それが視聴の習慣性を支えている。反面、それは「独創性」や「新鮮さ」を失わせかねない。それらが失われると、習慣はじりじりと弱まっていく。だが近年の朝ドラがそうならなかった背景には、「惰性的」で「反復慣用」ではないものがあつたはずだ。それは朝ドラの持つ「多様性」だったのではないか。朝ドラの多様性については【総論編】Ⅱ-3「朝ドラのイメージ」でも論及したが、ここでは「朝ドラらしさ」という視点から分析を行ってみたい。

【なぜ朝ドラ「らしさ」か】

2018年に『半分、青い。』の調査を行っていたとき、SNS上に「私の朝ドラを返して!」という声が多く出ているということが研究チームの中で話題になった。朝ドラファンを自認する視聴者の中に「この作品は朝ドラではない」と感じ

た人たちがいたのだ。確かに『半分、青い。』は視聴者からの見られ方の点でもいろいろと特色のある番組であった。これについては【各論編】Ⅲ-7で分析を加えたい。

さて、一口に朝ドラといっても、長い歴史の中ではさまざまな個性の作品が…。と言いかけたところで、言ったほうから話の腰を折って申し訳ないが、そもそも「一口に」と名指しできる朝ドラのようなテレビ番組がどれほどあるであろうか。『サザエさん』や『水戸黄門』のように同一の番組が長く続くケースはある。しかし朝ドラはそれとは違って、100作にも及ぶ多彩な作品が入れ替わり続いてきたのである。これに近いものが挙げられるとしても「大河ドラマ」やTBSの「日曜劇場」などごく少数だろう。「一口に朝ドラ」といえること自体が、朝ドラという存在の特殊性ともいえる。そして「一口に朝ドラ」といえるためには、多数の朝ドラを外側から見て、単に放送形態が同一であることだけではないある種の共通性や類似性がある、と視聴者に認識されている、ということをも前提としている。

『半分、青い。』は、ある意味で朝ドラらしくない作品だったようだ。それが「私の（朝ドラらしい）朝ドラを返して!」という声を生んだ³⁾。それでは朝ドラらしい朝ドラとは何なのか？ どの作品が朝ドラらしくないと感じられているのか？ この議論の時期はちょうどシンポジウムに向けて2018秋・視聴者調査を企画している最中であつたので、「朝ドラらしさ」を聞く設問が調査項目に盛り込まれた。その結果をもとに、ここでは「どの朝ドラが朝ドラらしい・らしくない朝ドラなのか」について考えたい。

マンネリに陥らないためには、「朝ドラらしい朝ドラ」から逸脱する作品がときには必要なのかもしれない。朝ドラらしくない作品、それを

調べてみることで朝ドラの多様性を確認することになると考えた。分析を進めてみるとそこには二面があることが分かった。1つはもちろん朝ドラ作品自体の多様性である。もう1つ見えてきたのは視聴者側の「朝ドラらしさ」イメージの多様性であった。

【らしさと好み】

設問では「以下の朝ドラ作品は、朝ドラらしい作品だと思いますか。あなたの考える「朝ドラらしい作品」「朝ドラらしくない作品」としてあてはまるものを、それぞれお選びください」という聞き方をした。

『半分、青い。』が「朝ドラらしくない」と感じた人の中には、「朝ドラにふさわしくない」という否定的なニュアンスを含めた人も少なくなかったと思われる。「らしい」はやや肯定的なニュアンスを帯びるきらいがある。そこで「朝ドラっぽい」はどうだろうか、という意見も出た。だが「っぽい」のほうが肯定感は弱まるものの、設問文としてはおさまりが悪い。そこで「らしい」については上のようにストレートに聞くこととし、合わせて「好み」であったかどうか聞くことにした。

ちなみに、「朝ドラらしくない」あるいは逆に「いかにも朝ドラらしい」と感じることで、それが理由で作品自体は見えていない、という人がいるだろう。あまり見ていなくても何らかの理由で「らしい」「らしくない」と感じることはあるだろうから、朝ドラの存在としての多様性を確かめるうえでそういう判断も意味があると考え、ここでは母数を近年の朝ドラを見ている視聴者（近年視聴者）ではなく、少しでも朝ドラを見たことがある1,918人（全体の64%）とした。また、「らしい」「らしくない」については、『ゲゲゲの女

表Ⅲ-2-1 朝ドラらしい作品・放送が新しい順
(n=1,918)

		(%)
半分、青い。	43	
わろてんか	49	
ひよっこ	52	
べっぴんさん	44	
とと姉ちゃん	53	
あさが来た	54	
まれ	39	
マッサン	49	
花子とアン	49	
ごちそうさん	49	
あまちゃん	50	
純と愛	21	
梅ちゃん先生	45	
カーネーション	38	
おひさま	37	
てっぱん	32	
ゲゲゲの女房	52	
ちゅらさん	47	
おしん	53	
どれもあてはまらない	18	

□ 40%以上 ■ 50%以上

房』以降の近年の朝ドラに加えて、朝ドラの話題によく登場する『おしん』と『ちゅらさん』も含めた。

「朝ドラらしい」作品についての結果は表Ⅲ-2-1のようになった。半数以上の人々が「朝ドラらしい作品」に選んだのは19作品中6作品、4割以上の人々が選んだという区切りで見ると、19作品中14作品の多数に及ぶ。このように多くの作品が「朝ドラらしい」という資格を備えていることが、「一口に朝ドラ」といえる背景にある。

次に、「朝ドラらしい」作品の上位に選ばれた作品と「好みだった」作品のランキングを比べてみると（表Ⅲ-2-2）、半数以上の人々が「朝ドラらしい」に選んだ作品の大半が「好みだった」にも選ばれている（『おしん』は近年の作品ではないので「好み」の選択肢には含めなかった）。やはり「らしい」には肯定的なニュアンスが含ま

表Ⅲ-2-2 朝ドラらしい作品と好みだった作品・ランキング (n=1,918)

	「朝ドラらしい」	(%)
1	あさが来た	54
2	とと姉ちゃん	53
3	おしん	53
4	ゲゲゲの女房	52
5	ひよっこ	52
6	あまちゃん	50

	「好みだった」	(%)
1	あさが来た	36
2	あまちゃん	34
3	ゲゲゲの女房	33
4	マッサン	31
5	ひよっこ	28

■ 「らしい」でも「好み」でもランキング

れていると考えられる。

一方、「朝ドラらしくない」作品の上位6位までのランキングは表Ⅲ-2-3のようになった。1位は『純と愛』だったが、『半分、青い。』は2位で、やはり「朝ドラらしくない」作品の上位であった。「朝ドラらしい」に比べて「朝ドラらしくない」を選んだ人の比率は全体に小さいが、上位作品では1～2割以上の人々が「らしくない」を選んでおり、これらを「朝ドラらしい朝ドラ」から逸脱する作品と感じた人は少なくなかったようだ。なお表には「好みだった」という人の結果も併記した。『半分、青い。』や『あまちゃん』は

「朝ドラらしくない」の上位でありながら「好みだった」人も少なくない。「らしくない」が必ずしも否定的とは限らないようだ⁴⁾。

【年層分析】

ところで上位のランキングを見ると、「朝ドラらしい」と「朝ドラらしくない」のどちらにも『おしん』と『あまちゃん』がランクインしている(表Ⅲ-2-4)。このように、同じ作品が人によって「らしい」とも「らしくない」とも捉えられるということ自体、視聴者の朝ドラらしさのイメージにも多様性があるということを示している。

さらに次のような分析を加えてみることで、視聴者の多様性の中にある構造の一端が見えてきた。表Ⅲ-2-5は、「朝ドラらしい」作品のランキングを年層別に比較したものである。全体のランキングで1位と2位にある『あさが来た』と『とと姉ちゃん』はすべての年層で上位に位置しており、各年代にまんべんなく「朝ドラらしい」作品だと感じられている。ある意味で「王道」の作品といえるかもしれない。

ここではむしろ、特定の年層で現れない作品、特定の年層でしか現れない作品に注目してみたい。まず『おしん』は、若い20・30代には出てこないが、これは作品との接点が乏しいのだから当然のことであろう。

さて『ゲゲゲの女房』は、70代だけ現れない。そして60代以下の各層で順位が高い。放送は

表Ⅲ-2-3 朝ドラらしくない作品と好みだった作品・ランキング (n=1,918) (%)

		「朝ドラらしくない」	「好みだった」
1	純と愛	23	5
2	半分、青い。	17	24
3	まれ	12	15
4	あまちゃん	11	34
5	ちゅらさん	10	28
6	おしん	9	

表Ⅲ-2-4 朝ドラらしい作品とらしくない作品のランキング

「朝ドラらしい」		「朝ドラらしくない」	
1	あさが来た	1	純と愛
2	とと姉ちゃん	2	半分、青い。
3	おしん	3	まれ
4	ゲゲゲの女房	4	あまちゃん
5	ひよっこ	5	ちゅらさん
6	あまちゃん	6	おしん

表Ⅲ-2-5 朝ドラらしい作品・年層別ランキング

全体		20代	30代	40代	50代	60代	70代
1	あさが来た	ひよっこ	ひよっこ	おしん	おしん	あさが来た	あさが来た
2	とと姉ちゃん	ゲゲゲの女房	ちゅらさん	あさが来た	ゲゲゲの女房	とと姉ちゃん	とと姉ちゃん
3	おしん	とと姉ちゃん	とと姉ちゃん	ゲゲゲの女房	あさが来た	ゲゲゲの女房	マッサン
4	ゲゲゲの女房	あまちゃん	ゲゲゲの女房	とと姉ちゃん	とと姉ちゃん	花子とアン	おしん
5	ひよっこ	あさが来た	あさが来た	ひよっこ	ごちそうさん	ひよっこ	あまちゃん
6	あまちゃん	半分、青い。	花子とアン	ちゅらさん	ひよっこ	マッサン	わろてんか

およそ10年前であるから、当時この人たちは50代以下であったことになる。朝ドラ視聴者の実態から見れば50代以下は比較的若い部類に入る視聴者である。その人たちが当時、『ゲゲゲの女房』に出会って、「これこそが朝ドラらしい作品だ」と感じ、そのことが新たに朝ドラを見続けるきっかけとなったのではないか。当時すでに60代以上であった現在の70代の人たちとは、少し違った新しい感覚で受け止めたのかもしれない。もっとも、『ゲゲゲの女房』は70代でも表にはない次点の7位に入っていて、大きな差があるわけではない。

だが朝ドラとの出会いの時期と「朝ドラらしさ」の感覚に関係がありそうなのは『ゲゲゲの女房』のケースだけではない。『ちゅらさん』はランキングでは30代と40代にだけ現れる。『ちゅらさん』は今世紀最初の朝ドラで、20年近く前から、30・40代は当時まだ10・20代の若さだった。彼らが最初に強い印象を受けた作品であった可能性が大きい。ところで前の表(表Ⅲ-2-4)を振り返ってみると、『ちゅらさん』は全体分母ではむしろ「朝ドラらしくない」作品に顔を出している。表にはしていないが、「朝ドラらしくない」作品の年層を調べてみると、『ちゅらさん』は60代では4位に、70代では3位に選ばれている。当時すでに中年であった彼らにとっては「朝ドラらしくない」作品と思われたものが、その当時若くして出会った年層には、それが「朝ドラらしい」という感覚を植えつけたのではないか。

『ひよっこ』は20～60代の各層に選ばれてはいるが、若い20・30代ではトップで、より上の層との差が大きい。『ひよっこ』は若くして出会った年層にとってこそ、これぞ朝ドラと感じられたのではないか。

ところで、「朝ドラらしくない」の上位『ちゅらさん』と「朝ドラらしい」の上位『ひよっこ』は、ともに岡田恵和脚本作品である。そこで、シンポジウムに向けて岡田氏に朝ドラ作りについてインタビューを行った。その一部はシンポジウム会場で披露したが、紹介できなかった発言の中で岡田氏は、『ちゅらさん』で初めて朝ドラを担当したとき、従来の作り方にこだわらない作品を目指したとの趣旨のことを語っている。それが当時すでに中年以上だった視聴者には「朝ドラらしくない」作品と感じられた一方で、若くして出会った視聴者にはそれが「朝ドラらしい」作品として印象づけられたということではないか。そして『ひよっこ』のころになると、岡田作品がすでに多くの世代にとって「朝ドラらしい」もの、つまり新たな朝ドラのスタンダードとして受け入れられることとなった。

さて、20代のランキングにだけ、「朝ドラらしい」作品として『半分、青い。』が登場する。全体では「朝ドラらしくない」作品の2位である。新たに朝ドラに出会った若い年層の一部には、今度は『半分、青い。』が「朝ドラらしい」作品として印象づけられたらしい。

以上のように、時代や年層により「朝ドラらしさ」というものが変遷していることが判明した。と同時に、次々に新たな視聴層が参入してくることで、さまざまな「朝ドラらしさ」の感覚が視聴者の中に混在していることも見えてきた。新たな作風の作品が生み出され、新たな視聴層の感性に出会う、そんなダイナミズムがあって、朝ドラの「習慣的視聴」をマンネリから防いでいる、というのは言い過ぎだろうか。

Ⅲ-3 習慣視聴の実態

～それは不名誉なことなのか～

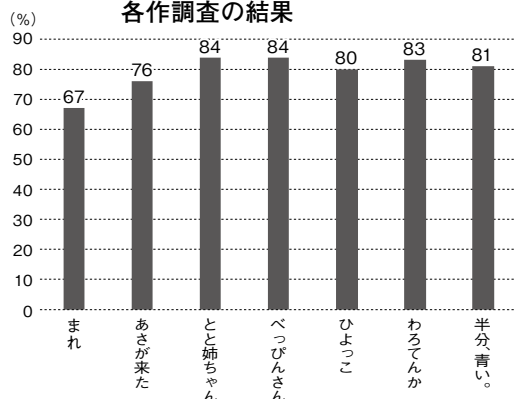
制作者は自分の番組を「習慣で見ている」と言われるより、「面白くて好きで見ている」と言われたほうがうれしい。習慣視聴は、自主的で積極的な視聴態度と対置されるようなものだというイメージがある。しかし「習慣で見る」のはたしてそんな「不名誉」なものなのだろうか。習慣視聴の実態を分析してみよう。

結論から言うと、朝ドラは「習慣的に見るもの」だという人は、朝ドラが好きで、熱心に見ているのであって、「朝ドラは習慣的に見られている」という言い方は不名誉なものにはあたらないと考えられる。

【朝ドラを習慣的に見る人】

まず朝ドラを「習慣的に見る」と思っている人はどれくらいいるか。各作調査では「作品を問わず、朝ドラを見続けることが習慣になっているか」と聞いて、「習慣になっている+まあ習慣になっている」を比較してきた。その結果をグラフ

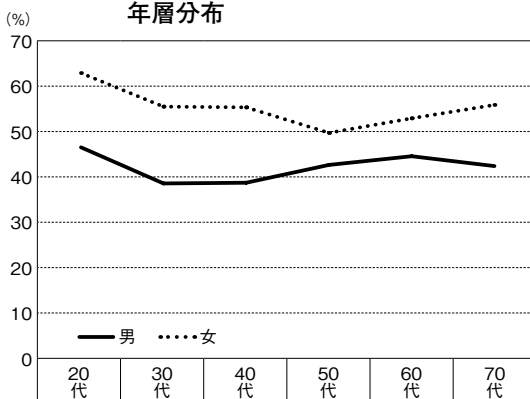
図Ⅲ-3-1 朝ドラを「習慣的に見る」人の比率・各作調査の結果



にすると図Ⅲ-3-1のように、『まれ』の結果はやや低いが、おおむね8割前後に及んでいる。習慣視聴をしていると思っている人がかなり多い。一方、2018秋・視聴者調査では、前述のとおり、朝ドラは「習慣的に見るもの」と答えた人は半数（50%）、視聴理由の1つに「朝ドラを見るのが習慣になっている」を含めた人は4割程度（43%）と、各作調査よりだいぶ少なかった。この原因については調査対象の違いが大きいだろう。各作調査では、対象者のすべてが現在進行形で朝ドラを見ている人であるのに対して、2018秋・視聴者調査ではここ10年ほどの間に継続して1作品以上の朝ドラを見たことがある人（近年視聴者）が対象となっていて、中には現在では視聴をしていない人も含まれている⁵⁾。

また結果が異なった原因のもう1つは、2018秋・視聴者調査の中でも「視聴理由」として聞いた場合と、朝ドラは「習慣的に見るもの」と思うかと聞いた場合とで異なる2つの結果が出ているように、設問の仕方によっても違いが出てくる。いずれにしても我々が持つ材料だけでは上のような結果の違いの原因を確定することはできないので、ここでは2018秋・視聴者調査の「習慣的に見るもの」と答えた人を土台に分析を

図Ⅲ-3-2 朝ドラを「習慣的に見る」人の性・年層分布



行うこととする。

【20代に多い習慣視聴?】

朝ドラを「習慣的に見るもの」と答えている人の比率は、近年視聴者全体では50%だが、男性では43%であるのに対して女性は53%と、女性のほうが多い。さらに年層別も加えて比較すると(図Ⅲ-3-2)、どの年層でも女性のほうが男性より多い。

年層的に見てまず目を引くのは、若い層に意外と多いことである。朝ドラ視聴といえば、引退した高齢者が夫婦で朝食を食べながら日々の習慣で朝ドラを見る、そんな図をイメージしていたが、これまでの認識に修正を迫られた。高齢層に夫婦の視聴が多いことは事実だが、男女とも習慣視聴の比率が最も多いのは20代である。この背景には、若い人は日々新たな出会い、さまざまな変化に囲まれた生活をしている分、「毎日、朝ドラを見る」という自らの行為が際立って「習慣的」と感じられる、そんな面も少なくはない

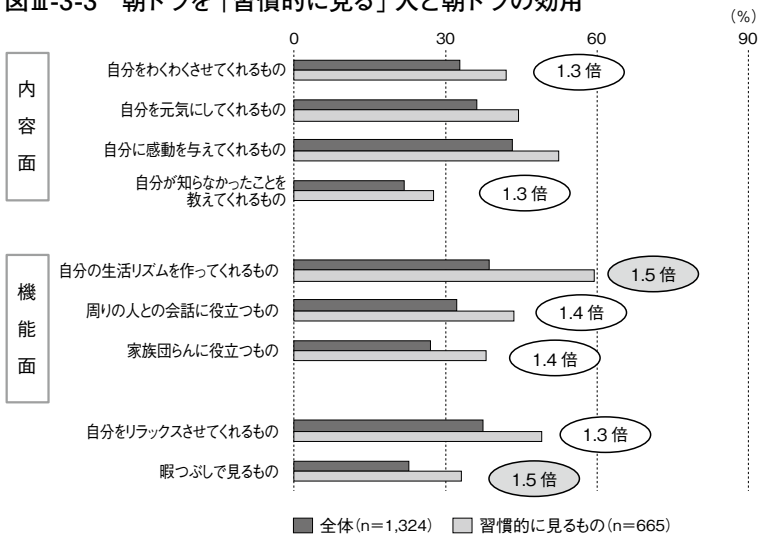
かもしれない。この解釈の是非は別として、習慣視聴は20代に多いものの、年層との間に目立った関係がない、というのが実態のようだ⁶⁾。

【習慣的に見る人の朝ドラの見方】

以下では、2018秋・視聴者調査のいくつかの設問について、近年視聴者のうち、朝ドラは「習慣的に見るもの」と答えた人(n=665)と近年視聴者の全体(n=1,324)とを比較してみる。

朝ドラが「自分をわくわくさせてくれるもの」とか「自分の生活リズムを作ってくれるもの」など、朝ドラの効用について聞いた設問に対して、近年視聴者全体と「習慣的に見るもの」と答えた人とを比べた結果を図Ⅲ-3-3に表示した。どの効用についても「習慣的に見るもの」と答えた人は全体よりも高い。つまり、「習慣的に見るもの」と思っている人のほうが朝ドラを見ることによって多くの効用が得られると感じている。また、【総論編】図Ⅱ-1-3で示したように、これ

図Ⅲ-3-3 朝ドラを「習慣的に見る」人と朝ドラの効用



1.5倍 : 全体に比べて「習慣的に見るもの」の層の結果が「1.5倍」

らの効用を「内容面」と「機能面」とに分けてみると、「機能面」のほうが「内容面」よりも多く選ばれている。「機能面」の効用はどれも「習慣的に見るもの」とした人のほうが全体より1.4~1.5倍多い。習慣性は機能面の効用との関係が深い。一方で、「暇つぶしで見るもの」も1.5倍と多い。習慣的に見る人の中には「暇つぶし」程度の見方をする人が含まれていることも事実である。

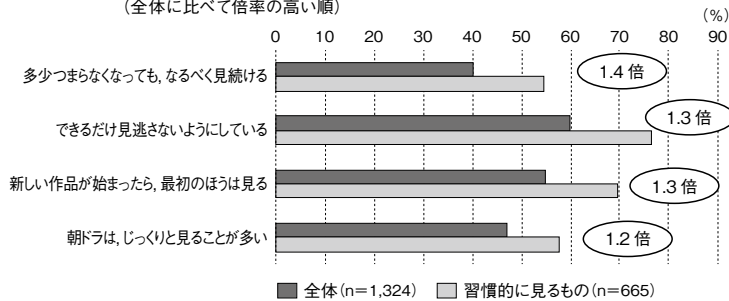
図Ⅲ-3-4には朝ドラの見方について、「習慣的に見るもの」と答えた人のほうが全体より2割以上高い項目を集計した。最も多い「できるだけ見逃さないようにしている」は「習慣で見えるもの」と答えた人の8割近くの人を選んでいる。「習慣的に見る」という言葉の意味はほとんど「見逃さずに見る」と変わらないのかもしれない。

図の一番下の項目「じっくりと見る」という言い方は、調査をする前には「習慣的に見る」とは、むしろ対立する見方であると考えていた。

しかし現実には「習慣的に見るもの」と思っている人の6割近くが「じっくりと見る事が多い」と答えている。習慣視聴は過半が熱心な視聴だと理解していいようだ。

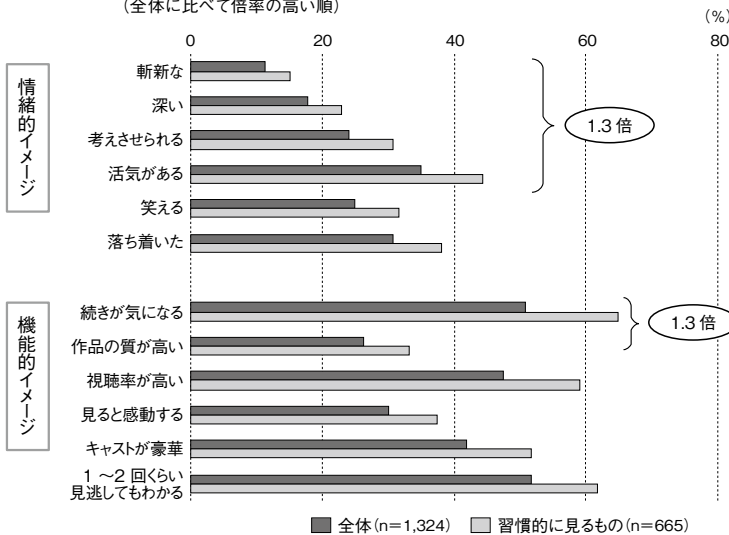
ただ、「多少つまらなくなっても、なるべく見続ける」という見方が全体に比べて1.4倍と、最も倍率が高い。この人たちは「見続けてはいても、つまらなく思っている」という可能性が高い。そのような人が「習慣的に見るもの」と思っている人では全体よりだいぶ多いのも事実である。前述のように「暇つぶし」で見ている人が多いこともあり、「習慣的に見るもの」という人の中には、いわば惰性のように見ている人から熱心に見ている人まで多様な人が含まれている、というのが実態である。

図Ⅲ-3-4 朝ドラを「習慣的に見る」人と朝ドラの見方
(全体に比べて倍率の高い順)



1.3倍 : 全体に比べて「習慣的に見るもの」の層の結果が「1.3倍」

図Ⅲ-3-5 朝ドラを「習慣的に見る」人と朝ドラのイメージ
(全体に比べて倍率の高い順)



1.3倍 : 全体に比べて「習慣的に見るもの」の層の結果が「1.3倍」

図Ⅲ-3-5は、朝ドラのイメージについて聞いた設問とのクロス集計結果をまとめた。イメージは、大まかに情緒的(内容的)なものとの機能的なものに分けて聞いたものをそれぞれ、全体に比べて「習慣的に見るもの」と答えた人の倍率が高い順に上位のものを並べた。いちいち触れることはしないが、たとえば情緒的イメージについては「深い」「考えさせられる」などの倍率が高いということは、「習慣的に見るもの」という人ほど作品に正面から向き合ってくれている感じがする。機能的イメージでは、「作品の

質が高い」や「見ると感動する」などが高く、朝ドラというものを高く評価していることも伝わってくる。

要するに「習慣的に見るもの」という人ほど朝ドラのシンパなのではないか。

そこで最後にダメ押しのデータを示したい(表Ⅲ-3-1)。結局のところ朝ドラが好きか、と聞いたところ、「習慣的に見るもの」という人は近年視聴者全体に比べて1.5倍で好きだという。「好き計」では実に8割を超える。習慣視聴は朝ドラ愛にあふれた人々の見方だったのである。

【蛇足：習慣視聴と録画視聴】

2018秋・視聴者調査では、朝ドラをどの時間帯の放送で見ているのか、あるいは録画等で見ているのか、についても聞いた。だが、それは見る作品によっても異なるし、そのときそのときの生活環境や録画機器の状況によっても大きく異なる。したがって本調査のように視聴していた時期が人によって異なる対象サンプルでは、回答の信頼性は低い。一応確認のために設問を置いた。そういう事情なので【総論編】ではこの設問については言及しなかった。しかし習

慣視聴との関係を検証するためにはそれほどの支障はないはずである。

集計の結果は表Ⅲ-3-2のようになった。一言でいえば、「習慣的に見るもの」という人と全体とはほとんど変わらない。予想では、このクロス集計こそ全体との違いが出るのではないかと考えていた。なぜなら、「毎日同じ時間に放送されるからこそ、視聴が習慣的になるはずだ」と考えたからである。実際には「習慣的に見るもの」という人がオンエアで見る割合は全体と変わらない。逆にいえば、習慣視聴の人もそうでない人と同じだけ録画などで見ている。「習慣的」な視聴とは、時間になって自然と放送が始まるから見る、というだけではなく、録画したものをわざわざ自分で再生して見ることをも普通に含んでいるのである。

表Ⅲ-3-1 朝ドラを「習慣的に見る」人は朝ドラが好きか

(%)

	好きである	まあ好きである	(好き計)
全体 (n=1,324)	24	42	66
習慣的に見るもの (n=665)	37	45	82

「習慣的に見るもの」は「全体」の1.5倍

表Ⅲ-3-2 習慣視聴とオンエア・録画視聴

(%)

	放送時に見る 総合朝	放送時に見る 他の時間帯	録画 / その他 の方法で見
全体 (n=1,324)	46	27	27
習慣的に見るもの (n=665)	50	25	25

Ⅲ-4

作品をまたいだ 継続視聴の実態

～5 クラスターの分析～

朝ドラに対する好みの傾向を探ることを目的に、「過去にどの作品を見たか」を聞いたデータを因子分析・クラスター分析にかけたところ、当初の目的意図とは異なり、視聴者の中に朝ドラを見始めた時期（あるいは見終えた時期）がほぼ共通する5つのグループがあることが分かった。同時に、視聴者の多くが1つの朝ドラを見始めると、見ていた作品が終わったあとも、次作、また次作と続けて見る傾向があることも見えてきた。本稿ではこれまで朝ドラ視聴の習慣性や継続性についていろいろと述べてきたが、そのほとんどは日々の放送の視聴に関する習慣性・継続性であった。しかしこの分析で表れた結果は、作品から作品へ、作品をまたいだ視聴の継続性もまた行われていることを示している。

【分析の過程と結果】

2018秋・視聴者調査では、2009年度前期の『つばさ』から調査時点で放送中であった『半分、青い。』までの作品について、見たことがあるかどうかを聞いた。その結果のうち、視聴率が回復傾向に入った『ゲゲゲの女房』以降の17作品について多変量解析を試みた。まず17作品の視聴状況のデータを用いて因子分析を実施した⁷⁾。その結果、以下の3つの因子が抽出された。

因子1

2015年～2018年の作品を見た

因子2

2013年～2015年の作品を見た

因子3

2010年～2013年の作品を見た

この結果は意外なもので、意図したものとはまったく異なっていた。当初意図したのは、視聴者によってどのような傾向の作品が好んで選ばれるのか、作品の選び方で視聴者の好みの傾向が見られるのではないかと、いうものであった。噛み砕いていうと、「モデルのある実話もの」が好きの人とか、「オリジナル作品の現代もの」が好きの人、のような好みの傾向を探ってみようと考えたのである。

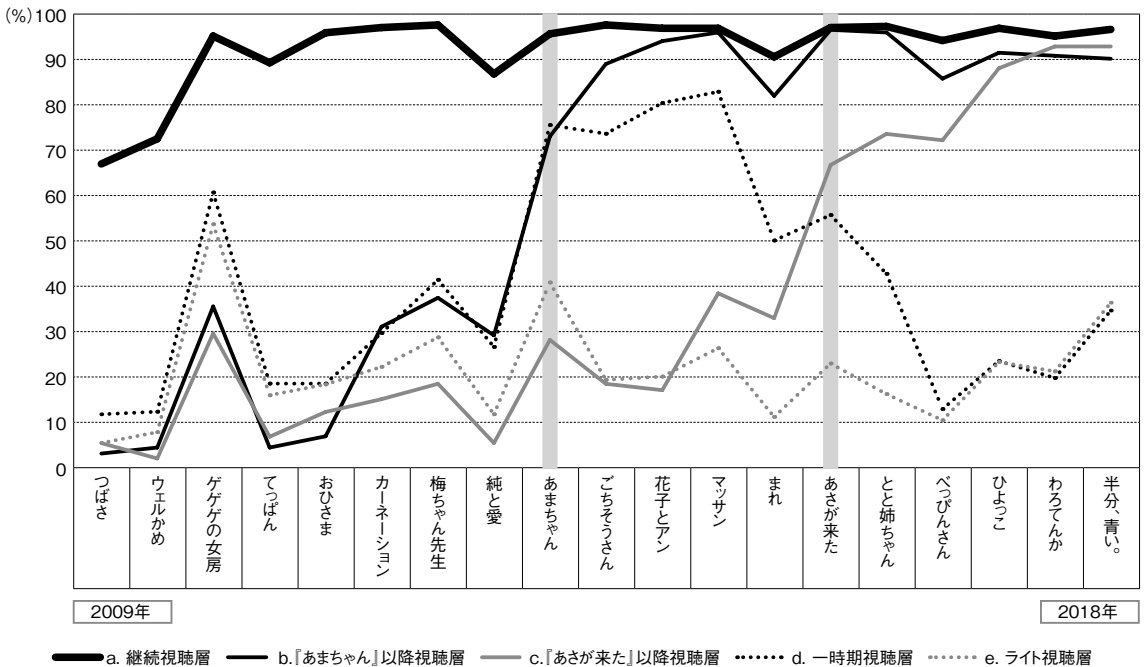
しかしながら分析の結果は、視聴者がどの作品を選んで視聴するのかということに影響を与えるのは、内容的な好みよりも、放送された時期のほうである、ということを示唆している。加えて、1つの作品を見始めると、次の作品も続けて見ている人が多い、ということも示している。

そこで、上の因子得点を用いて、クラスター分析(k-means法)を実施して、朝ドラ視聴者を5つのタイプに分類した。

- 継続視聴層：全17作について、見た割合がほぼ9割超で推移
- 『あまちゃん』以降視聴層：『あまちゃん』(2013年)で、見た割合が急上昇
- 『あさが来た』以降視聴層：『あさが来た』(2015年)で、見た割合が急上昇
- 一時期視聴層：『あまちゃん』～『マッサン』を見た割合が突出して高い
- ライト視聴層：大半の作品について、見た割合は3割以下

これらの視聴者タイプの構成比は表Ⅲ-4-1のとおりである。

図Ⅲ-4-1 5つの視聴者タイプ別の視聴パターン



表Ⅲ-4-1 クラスタ分析から作成した5つの視聴者タイプ

	構成比 (n=1,324)	(対象者全体 (n=3,000)の 中での比率)
a 継続視聴層	36%	16%
b 『あまちゃん』以降視聴層	12	5
c 『あさが来た』以降視聴層	11	5
d 一時期視聴層	12	5
e ライト視聴層	29	13

さらにこれらの視聴者タイプの視聴パターンをグラフに図示した(図Ⅲ-4-1)。

この図には近年の朝ドラが高い視聴率を回復し、維持している背景が表れている。「a. 継続視聴層」に属する人々ほどの番組についてもほぼ9割以上の人が見ている。対象者全体の中で16%を占めるこの層の人々が、朝ドラ視聴率を下支えしている。「b. 『あまちゃん』以降視聴層」と「d. 一時期視聴層」とが『あまちゃん』あたりから朝ドラ視聴に参入しており、視聴率

を押し上げた。さらに『あさが来た』で新たな視聴層の参入があり(「c. 『あさが来た』以降視聴層」)、今世紀最高視聴率を記録することになった。ただ、そのあたりから「d. 一時期視聴層」の流出があることと、「c. 『あさが来た』以降視聴層」がさらに右肩上がりに伸びていることが相殺するような形で、以後の作品で20%超の視聴率が維持されている、と読める。

5つの視聴者タイプ別に、属性の違いやテレビ視聴の傾向など、主だった項目を表Ⅲ-4-2にまとめてみた。男女比については、タイプによる違いはほとんど見られない。年齢については、「a. 継続視聴層」の60歳以上の高齢比率が6割とやや高く、「e. ライト視聴層」では逆に50代以下が3分の2を占めていて若い。朝ドラの視聴者年齢構成は高齢層が高くなる傾向があるが、多くの作品を見る「a. 継続視聴層」に高

表Ⅲ-4-2 視聴者タイプ別の属性・テレビ視聴傾向など

(%)

	n	女性比率	60歳以上の比率	テレビドラマをよく見るほうだ	同居家族が朝ドラを見ている	朝ドラは習慣的に見るもの
a 継続視聴層	482	60	60	61	64	65
b 『あまちゃん』以降視聴層	157	57	48	53	62	64
c 『あさが来た』以降視聴層	145	60	45	57	54	42
d 一時期視聴層	161	54	45	43	43	40
e ライト視聴層	379	57	35	43	34	31

年齢層が多く、見ている作品の数が少ない「e. ライト視聴層」に若い層が多いことが、そのことの構造的原因の1つになっている。

「a. 継続視聴層」「b. 『あまちゃん』以降視聴層」「c. 『あさが来た』以降視聴層」は「テレビドラマをよく見るほうだ」という人がやや多めなのに対して、「d. 一時期視聴層」「e. ライト視聴層」ではやや少なめ。同じように、前3者は同居家族が朝ドラを見ている人が多く、後2者は少なめになっている。

「朝ドラは習慣的に見るもの」と思っている人は、朝ドラをずっと見ている「a. 継続視聴層」に多いが、「b. 『あまちゃん』以降視聴層」にもほぼ同様に多い。その点、「c. 『あさが来た』以降視聴層」の人々は朝ドラをよく見るようになってからまだ2～3年という段階であるためか、「朝ドラは習慣的に見るもの」という意識は低くなっている。

以上のように、5つの視聴者タイプには属性やテレビの見方などにいくらかの違いが見られるものの、調査での回答傾向の中でほかの多くの点ではそれほど際立った違いは見られない。それでは、どのような要因からこのような視聴者タイプが生まれたのか、視聴者タイプ間に視聴の仕方などにどのような違いがあるのか、これらの問いの答えを探るために、補完の調査を行った。以下に、その結果をまとめた。

【視聴者タイプ個別インタビュー調査の実施】

2018秋・視聴者調査における近年視聴者（n=1,324）と同様の条件で、調査会社のWEBモニターの中から調査対象者を募り、5つの視聴者層に分類。この人たちに、朝ドラ視聴の実態や背景、意識を聞くアンケートを行って、インタビューに積極的に回答してくれそうな人（各クラスター6人前後、合計30人）をオンライン上のコミュニティサイトに招待し、個別に（各対象者だけが閲覧できる掲示板を使って）、テキストベースでのインタビュー（質問文と回答文のやりとり）を通して、朝ドラ視聴の仕方や意識について聞く調査を行った。表Ⅲ-4-3が、その調査概要である。

【調査結果】

5クラスターに分かれた中で最も気になるのは、同じように『あまちゃん』あたりから朝ドラを見るようになったのに、そのままずっと視聴が続く「『あまちゃん』以降視聴層」と、数作品視聴が続いたあとはあまり見なくなってしまう「一時期視聴層」に分かれた点である。この両層は何が違うのだろうか。「『あまちゃん』以降視聴層」「一時期視聴層」の記述から探ってみよう。

【『あまちゃん』以降視聴層】

各作品をどの程度見たかを聞いたところ、途

表Ⅲ-4-3 5視聴者タイプ個別インタビュー調査概要

調査目的	5つのクラスターに属する朝ドラ視聴者の人物像や、朝ドラを見る／見ないを決めるトリガーを個別インタビューにより掘り下げる
調査対象者	国内在住、20～79歳の男女 テレビの視聴時間が1日平均で30分以上 朝ドラをある程度続けて見た経験があり、かつ『ゲゲゲの女房』以降の作品を見たことがある
クラスター条件	「継続視聴者層」該当者:『ゲゲゲの女房』以降のほとんどの作品を見続けている人 『あまちゃん』以降視聴層 該当者:『あまちゃん』から視聴が増え、朝ドラ視聴が近作まで続いている人 『あさが来た』以降視聴層 該当者:『あさが来た』から視聴が増え、朝ドラ視聴が近作まで続いている人 「一時期視聴層」該当者:2013～15年ごろの朝ドラは見えていたが、以降は視聴が減っている人 「ライト視聴層」該当者:『ゲゲゲの女房』『あまちゃん』などの話題作以外はあまり見ていない人
調査方法	オンラインアンケート+個別インタビュー リクルート調査(オンラインアンケート)のスクリーニングの結果をもとに、所属クラスターを判別し、朝ドラ視聴の背景を聞く質問を実施。その回答をもとに、個別インタビュー参加者を選抜 インタビュー参加承諾者をコミュニティサイトに招待し、各対象者だけが閲覧できる掲示板にて個別にテキストベースのインタビューを実施
調査時期	リクルート調査:2019年7月19～22日 個別インタビュー:2019年8月2日 夕方～ 8月8日 23:50
調査人数	継続視聴層5人 『あまちゃん』以降視聴層6人 『あさが来た』以降視聴層7人 一時期視聴層7人 ライト視聴層5人 合計30人

中で見るのをやめずに「最後まで見た」という人が多い。表Ⅲ-4-4のように、回答者6人のうち、『あまちゃん』以降『まんぷく』までの12作品すべて「最後まで見た」という人が2人、10作品は「最後まで見た」という人が1人、9作品という人が1人、7作品が2人で、途中で視聴脱落せずに最後まで見ることが多い人たちである。しかし、必ずしもいつも面白いわけではなく、見て「夢中になった」(表中●印)作品の数が5作品という人が2人、4作品という人が1人、2作品が3人であった。

この人たちは、なぜ面白くない作品でも見続けるのだろうか。理由の1つは、面白みに欠ける作品でも、

「『ごちそうさん』のように全話楽しく見れた経験から、いつか面白くなるかもと期待し、最後まで見ていました」(女性46歳)
「(面白かった)他の作品と同じように見ているうちにもっと引き込まれるだろうと思って見ていた」(男性54歳)

※()内は筆者補筆、以下同

表Ⅲ-4-4 『あまちゃん』以降視聴層の近年朝ドラ作品視聴状況

作品名	回答者①	回答者②	回答者③	回答者④	回答者⑤	回答者⑥
まんぷく	○		○	●	●	○
半分、青い。	●		●	○	○	○
わろてんか	○	○	○	○	○	○
ひよっこ	●	○	●	●	○	○
べっぴんさん	○	○	○		○	○
とと姉ちゃん		○	○	●	○	●
あさが来た		○	○	●	●	●
まれ		○	○		○	○
マッサン		●	○		○	○
花子とアン	○	○	●	○		●
ごちそうさん	○	○	●			●
あまちゃん		●	●			●

○は全部見た作品 ●はそのうち「夢中になった」作品

のように、夢中になった経験をしているので朝ドラに対して“そのうち面白くなる”という期待感・信頼感があるからのようである。

もう1つの理由は、

「『まれ』は見るのをやめようかなと思いましたが、土屋太鳳さんと清水富美加さん門脇麦さんが魅力的だったので終わりまで見てしまいま

した。『わろてんか』も、いつ面白くなるんだろうと辛抱(?)して見ましたが最後まで今ひとつ。シロー(役名)と広瀬アリスさんの漫才コンビが興味深く見続ける気持ちになりました」(女性64歳)

「『半分、青い。』『わろてんか』はそれほど面白くなかったが、好きな俳優が何人も出ているため、最後がどうなるかまでは見たいと思った」(女性31歳)

「苦手な俳優が出ていても、ストーリーや他の出演者が魅力的だったり、なにか(魅力的な)要素があれば見続けると思います」(女性46歳)

などのように、メインの要素が面白くないと感じても、ほかの魅力を見つけてそれを楽しみに見るからである。『ひよっこ』各作調査のリポート⁸⁾の中で報告したように、朝ドラの視聴者は「視点を変えて朝ドラを楽しむ」術を心得た人たちであるが、この『あまちゃん』以降視聴者も、そうした人たちのようである。

もう1つ大きな理由として挙げられるのが、“朝ドラを語り合える仲間・家族”の存在である。

「はじめは夫が録画して一人で見ていたのを、子どもが興味を持ってふたり一緒に見るようになりました。家族の会話に朝ドラがはじめて、私も録画を見るようになりました。(中略)家族で共通の趣味があると楽しみが増えた感じで楽しいです。話が面白くないときは、その場で愚痴のように言い合ってスッキリさせていました。お互いどこが気に入らないのか話すのもそれはそれで楽しい時間だと思います。(中略)気が乗らない時もありますが、誰かが見ようという、自然と集まって見るのが習慣になって、見ないと落ち着かない気がします」(女性47歳)

「私の周りの方もみなさん見ているのでランチ

や女子会の時に共通の話題なので盛り上がります。今朝見ていないと話の輪に入れません。(中略)友人の中には登場人物が嫌い、面白くないと言っている人もいますが、それでも必ず見えています。おそらく私と同じで共通の話題があることや会話についていけなくなるからだと思います。毎朝こんなに集中して見られるものがあるのだと自分でも驚いているくらい毎朝8時が楽しみです。なくてはならないくらい生活に密着しているのだと思います」(女性54歳)

朝ドラを話題にできる家族や仲間がいると、会話を通して自分の“思い”や感情を確認・増幅・共有でき、周囲の人々との絆も深まる。朝ドラの内容に対する不満は蓄積されると視聴脱落につながると考えられるが、こうした“不満”も共通の話題にして確認し合い、共有することで、逆に視聴のモチベーションを保つことに役立っているようである。このように、同じ作品を見る家族や仲間の存在は、朝ドラ視聴継続に大きな力となり、その結果、朝ドラを楽しく続けて見る“習慣”の強化につながっているようだ。

【一時期視聴層】

この人たちは、見るかどうか、見続けるかどうか、よく吟味する人たちのようだ。

「最後まで飽きずにみられるかどうか、結構慎重に吟味しています。(中略)好きな俳優が出ているか、題材が好みかどうかで見るか見ないか決めます。よほど面白そうでなければ見ないです。一度見始めたら最後まで見るのが多いです」(女性44歳)

「新作の情報は、いつも、どのような作品か主演か確認したりはします。また、最初の何回かは視聴します。(中略)主演が好きな女優さんであることと作品のコンセプトやストー

リーが好みであることが支持する第一の理由です。(中略) 好みでなければ自然と見なくなってしまいます」(女性55歳)

事前情報で自分の好みに合うかどうかを吟味し、合いそうなら、放送を実際に見てみて見続けるかどうかを決めているようだ。

そして、途中で視聴脱落することを厭わ^{いと}ない人たちでもある。

「『とと姉ちゃん』もそのあとの朝ドラも最初は見ていましたが、自分の想像していた展開にならず、内容がだんだん面白くなり、見なくなっていきました」(女性39歳)

「『なつぞら』は子役の子の演技に胸打たれるものがありました。広瀬すずになったら、なつがすずになってしまって違和感を感じてしまい、一気に興味が失せてしまいました(視聴脱落した)」(女性55歳)

といった記述のように、「面白くなければ途中で見なくなる(見なくなった)」と自ら述べている。普通のドラマ視聴の場合と同じように、朝ドラでも面白くなければ途中で視聴脱落するのは当たり前と思っている人たちである。

旧作から新作へ移るときも“習慣”で見続けることはしないという人もいた。

「作品と共に習慣が成り立っているのだから、作品が変わって次の作品も興味があって見続けたら習慣は続きますが、見なければ終わります。惰性でなんとなく視聴しようとは思わないからです」(女性50歳)

つまり、選択視聴性が強い人たちで、見る前に好みに合うかを吟味し、見るときは大変熱心

に見る一方で、自分の好みに合うかどうかには敏感で、それだけに、面白くないと感じると視聴離脱するようだ。

選択基準については、

「忍耐力と行動力と包容力の優れた、器の大きい強く賢く美しい女性の等身大の生き様に、共感や感銘を受け、つつい応援したくなる」(女性55歳)

というような“模範的”人物像を見たいという人もいれば、

「ただ明るく純粋で、さわやかで素直でブリッ子な人だと共感できず見る気がしない。(中略) つまらないし、ワクワクしない」(女性39歳)

という人もいて、一様ではない。

『まれ』～『とと姉ちゃん』あたりの作品を見たあと、ほとんど朝ドラを見なくなっていることについては、「面白そうな作品がなかった」ことを理由に挙げる人が多い。まさに選択視聴性が強いことが理由とされているわけだが、中には「最後に見た作品が良くなかったから」という人もいる。

「自分の中では『あまちゃん』がピークで、その後の作品はそれなりに見ていたが、『まれ』があまりにも面白くなく、早々に見なくなった。その後の『あさが来た』はAKBがテーマソングだったことにゲンナリして、最初から見ようと思わなかった。そうこうしている内に、朝ドラの時間帯は別のチャンネルを流す習慣になってしまったし、朝ドラ自体、再び興味がなくなってしまった」(女性39歳)

この人は、2作続けて決定的に好みに合わなく朝ドラ視聴習慣を失った。選択視聴性が強いだけに朝ドラから離れるのも速いのかもされない。

【継続視聴層】

回答者の文章を一読して感じたのは、『あまちゃん』以降視聴層は、楽しく見続けることの熱が高く、一時期視聴層は選択視聴する熱（＝良かった作品と不満な作品への言及の熱）の高さであった。それに比べると、継続視聴層の語り口は落ち着いた感じがする。

「気がついてみると毎回必ず見ているので私にとって生活の一部かもしれませんね」（女性64歳）

「朝ドラを見るということは、「顔を洗う」「歯磨きをする」といった行動と同様の生活習慣の一部になっていると感じます」（女性30歳）

といった発言のように、この層の人たちは、朝ドラが生活の中に織り込まれているようだ。

そして、

「20年以上前には（『ふたりっこ』など）毎日見ていたが、仕事が忙しくなればらく遠のいていた。『あまちゃん』ブームでまた見るようになり、新たに魅力を発見して、それからは結構頻繁に見るようになった。（中略）この20年で歳を重ねたせいも、主人公のウソ偽りのない、努力・ひたむきさ・誠実さに惹かれると同時に、若さやはたつとした感じにより魅力を感じます。他局の奇抜で派手なストーリーはもう飽きたので（その類は映画で十分）、原点復帰した感じが新たな発見です」（男性55歳）

「激変になってついていけないほどにならない変化、舞い上がるほどに、突き抜けるほどにならないちょっとした幸せ感はストーリーが終

わるまで継続してあってほしい（中略）大事な要素です」（女性69歳）

のように、朝ドラの基本的方向性やテイストが自分にフィットしていると言う。こうした発言は年齢層の高めな人だけでなく30歳女性でも見られ、

「最近朝ドラを見ながら涙を流すことも多くなりました。自分も大人になったのか、さまざまな経験を重ねてきたことで、朝ドラを見る目も変わってきたのかな、と感じることが増えました」（女性30歳）

と、今の自分の気持ちに合っていることを自覚している。

このように基本的に朝ドラを好きで見ていることが多いのだが、面白くないと感じる作品もないわけではない。しかし、そうした面白くない作品でも、途中で見ることをやめず、最後まで見る人が多い人たちである。面白くなくても最後まで見た理由としては、

「その時代背景を知ることができたため」（男性68歳）

「脇の出来事、登場人物や場面が気に入っていて継続（視聴）することもあります。『ひよっこ』の甘味処の三宅裕司さんと古舘伊知郎さんの長男さんの親子関係と、長男さんのぼんやりぶりが大好きでした。ノスタルジックでなんか好きでした」（女性69歳）

などが挙げられ、面白くない本筋以外のところに魅力や見どころを見つけて視聴継続しているようであった。これは、『あまちゃん』以降視聴層と共通している。

夫婦で見ている人にとっては、朝ドラが夫婦間の潤滑油となり、お互い朝ドラを見続けることにつながっている側面もあるようである。

「家内の方が熱心に見ています（中略）夫婦間の共通の話題・大きなコミュニケーションツールになっています」（男性55歳）
 「リタイア後の夫婦がストーリーについて話すとコミュニケーションになり、我が夫はこんな見方をするのかなと（発見）の日常がある」（女性69歳）

朝ドラについて語り合える仲間（夫婦）が視聴継続の力になっている点も、『あまちゃん』以降視聴層と共通性がある。

継続視聴層と『あまちゃん』以降視聴層は、朝ドラ視聴期間の長さには違いがあるが、朝ドラ視聴のスタンスは大変近いといえそうだ。おそらく、継続視聴層も、最初は朝ドラの面白さを発見し、熱心に見ているうちに、さまざまなタイプの朝ドラ作品に出会い、それぞれの面白さや良さを実感する中で、見続けることが当たり前の生活習慣となった人々なのと思われる。そして、この人たちが、朝ドラ視聴者の中の多数派である。

【『あさが来た』以降視聴層】

比較的新しい視聴層であるが、朝ドラを最近まで見なかった理由と見るようになった経緯には、いくつかのパターンがありそうである。

「子どもの頃からNHKをあまり見ない家で育ち、（中略）妻と出会ってからほとんどNHKを見ることはなく、周りを見る人もいませんでした。（中略）大河ドラマで黒田官兵衛を岡田准一さんが演じたことで妻が興味を持ち、その流れで真田幸村が好きな妻が『真田丸』も

見るようになり、朝ドラも気づくと見るようになっていたという感じです。（中略）子どもがすごくハマっており、毎回子供（11歳）が見たがるので一緒に（録画で）見ると、続きが気になって仕方なくなります」（男性41歳）

この人は、もともとは非NHK視聴派だったが、妻や子どもが見るようになり、一緒に見るうちに朝ドラの魅力を発見した人である。家族がキーマンであるところは『あまちゃん』以降視聴層・継続視聴層と共通性がある。

非NHK視聴派ではないが、朝ドラが自分向きの番組ではないと思いついて見ていなかった人たちもいる。

「昔、子どもの頃、母親が熱心はずっと見ていた朝ドラは親世代が見るドラマであって、自分自身が主体的に見るものだとはとらえていませんでした。そのため、『あまちゃん』が人気の時でも見ようとは思いませんでした。（朝ドラを見るようになったきっかけは）『花子とアン』に地元の人物がモデルのキャラクターが登場すると聞いたので関心を持ったから。（見てみたら）炭鉱王を演じた吉田鋼太郎が素敵で夢中になって見ました。（中略）次のドラマ2作は最初の週あたりまでは見たのですが、あまり面白く感じなかったので、視聴習慣がもとに戻り、朝ドラを見なくなりました。『あさが来た』の主人公あさが福岡の炭鉱の経営に乗り出すエピソードがあるのですが、その炭鉱が地元なので興味を持ちました。ですので、直接視聴動機は「地元愛」でしょうか。『あさが来た』のあとは朝ドラを見る習慣ができたようで、あまり面白くないと思うものも毎日続けて見るようになり、現在に至ります。（朝ドラに続いて放送する番組）『あさイチ』の“朝ドラ受け”が面白くて、それとセットで楽しんでいます」（女性61歳）

「（朝ドラを）見ている人のイメージとしては、

年配のおじいちゃん、おばあちゃん世代が多いのかなと思っていました。内容も、昔っぽくて、私には興味ある内容じゃないんじゃないかと想像していました。(朝ドラを見るようになったきっかけは)子ども(小3娘)が、友だちの家で、たまたま『あさが来た』を見て面白かったみたいで、それから家でも朝ドラを見るようになり、(中略)今では家族全員楽しみにしています。実際に見始めてみると、15分という時間がちょうどよく、内容も、時代が古い話でも、俳優さん女優さんに若手の知っている方が出ていたりすると自然に話が頭に入ってきて、アッと言う間にハマってしまった感じです。私は家事のあと朝ご飯を食べながらリアルタイムで観ますが、娘は夕方、録画したのを見ています。娘が見るときに私もたいてい一緒に見て、感想を言い合ったりしています。(中略)ほぼ毎日、同じ時間に朝ドラを見ることで、生活のリズムが自然にできた気がします。朝ドラは、家事を終わらせた後のご褒美的な存在にもなっています」(女性41歳)

見る前は“自分たち向きでない”と勝手に思い込んでいた人が、最近になって、“地元愛”や“子ども”がきっかけで見えたら、面白さを感じて続けて見るようになり、習慣性も意識するようになったケースである。

忙しかった人が、時間に余裕ができて見られるようになったケースもあるようだ。

「小さい頃から両親が見ていたので自然と一緒に見ていた。(大人になってからは)忙しくて朝の時間にテレビを見ることができなかった。『あさが来た』のころから、(中略)子どもも朝早く登校するようになったので、家族を送り出して、台所の片付けが終わった頃にちょうど朝ドラを見て、それから掃除するというスケジュールが定着しました」(女性55歳)

このグループには選択視聴派も存在する。

「朝ドラに限らず、ストーリーが気に入れば見るという感じです。(朝ドラを見るようになったのは)ディーン・フジオカや菅田将暉、佐藤健、吉沢亮が出るという前評判を聞いたのがきっかけです。ヒロインの相手役はとても重要だと思います。朝ドラを続けて見るという行動が定着したという印象はあまりないです。(中略)作品への興味が薄れてくれば、どんなドラマでも途中から見なくなってしまうと思います。(朝ドラは)たまたま興味のある作品が続いているだけだと思います。好きな俳優さんがたくさん出ている作品が、このところ続いているのでとてもうれしいです」(女性51歳)

この人は、面白くなければ途中視聴脱落するのが当然と思っており、一時期視聴層と近いともいえよう。

このグループは、非NHK視聴派だったり、忙しかったり、自分向きでないと思いついていたりして朝ドラを見なかった人が、家族や地元愛など何かのきっかけで見始めて朝ドラの面白さに気づいて、見続け出した人々である。ただ、まだ視聴歴が短いので、朝ドラを見ることが習慣になったと思う人と、習慣ではなく選択視聴しているのだという意識の人に分かれるようだ。

【ライト視聴層】

このグループは、一時期視聴層と同じように選択視聴する人が多いようだ。

「定期的に次の朝ドラについて調べ、主演女優やストーリーを調べて興味を持つ。それで面白そうと思ったら見ることにしている」(女性33歳)

「自分の興味ある時代が昭和から現代であること、その中でも「身近な暮らしや生き方」に

関心があります。夫婦のあり方のヒントも求めています。ヒロインの女優さんの印象も視聴するか否かに関係しています。作品を見る決め手はNHKの朝ドラに関するCMを見て、自分にヒントになりそうなことがありそうだという直感です。とりわけ「苦労や困難をどう乗り越えていくのか、夫婦のあり方が決め手になっていると思います」(女性35歳)

「だいたい出演者(主人公などのキャスト)は誰か…というのがキーになっています。(中略)朝ドラの楽しさは、脇を固める俳優さん達がとても存在感のある方ばかりというのも見所の1つで、作品に対しての情報は結構見聞きするようにしています。(中略)日頃から好感を持っている方が出演される作品とそうでない作品とでは興味の度合いが違います。「そうでない作品」に対しては、時間を割いてまで見るほどの興味がどうしてもわからないという感じです」(女性50歳)

情報収集して、興味を強くひくものだけを見ようとしている人たちのようだ。

その一方で、視聴意欲の低い人も存在した。

「面白いよってママ友や家族と話題になったときや、情報番組で紹介されたり、ブロガーさんが記事にしていたら見るがありますが、自分から情報を得ようとする事はなかったです。主人公がかわいそうすぎるとか思うと見てられない(ストレスを感じる)という気持ちになって、見なくなったりします」(女性37歳)

他人から「面白いよ」と勧められると見るレベルの、視聴意欲の薄い人のようだ。この人の視聴履歴を見ると、見た作品数も少なく、しかもどの作品も「全部は見えていない」。ストレスを感じやすく、心を揺さぶられすぎずに見たい“平穏派”でもあるようだ。

【5視聴タイプ～まとめ】

継続視聴層と、『あまちゃん』以降視聴層は、“作品の基本的方向性やテイストが気持ちや気分フィットしていること”“視聴を継続する術を心得ていること”“朝ドラについて語り合える家族や仲間の存在が大きい人が少なくないこと”など、共通するところが多い。両層の差は、長らく視聴していて見続けることが定着している継続視聴層と、数年前に朝ドラの魅力に気づき継続視聴が定着して継続視聴層に近づきつつある『あまちゃん』以降視聴層という、“視聴期間の長短”に由来する差のように思われる。視聴者に占める割合では、継続視聴層が多数派である。

『あさが来た』以降視聴層は、継続視聴層・『あまちゃん』以降視聴層に近い傾向を持つが、朝ドラの魅力を発見して日がまだ浅いため、朝ドラを見続けていることについて、視聴習慣によると考える人と選択視聴の結果であると考え人との、意識が分かれている。

一時期視聴層とライト視聴層は、ともに選択視聴性が強い。一時期視聴層は、途中脱落を厭わず、面白くなければ途中で見なくなるのは当然と考えている。ライト視聴層は、視聴脱落について積極的に言及する人は少なく、むしろ、好みの範囲が狭かったり、事前情報による判断や放送を見始めてすぐの“見る／見ない”の判断がシビアであるように感じられた。その結果として、ライト視聴層は見た作品数が少なく、一時期視聴層はライト視聴層より見た作品数が多いで、途中脱落もするという違いがあるように思われた。また、一時期視聴層の中には、視聴脱落が重なり朝ドラを見なくなった人が存在し、ライト視聴層の中には、視聴意欲の低い人も存在していた。各層に属する人の特性は一色

ではなく、似た方向性にありながら、かなりのグラデーションもあることが推測された。

【今後の方向性を示唆する発言】

今回の5クラスター個別インタビュー調査で気になった人が2人存在した。

1人は、『あさが来た』以降視聴層の61歳の女性である。この人は、ツイッターなどに書き込まれる朝ドラの感想を、インターネット上の検索機能を使って、毎日の朝ドラ視聴と並行して見ている。

「ヤフーのリアルタイムを見ながら、一人じゃなくて、みんなと一緒に見るような気分を味わえるのが楽しみになっています。朝ドラはコメントの数が他のドラマより圧倒的に多いと思います。そのため、自分が感じた感想やツッコミと同じものを、ほぼ、誰かがつぶやいていて、他の人も同じなんだと楽しくもあり、共感を覚えます。みんなと一緒に見ているという楽しみ方と朝ドラは相性がいいと感じています」(女性61歳)

朝ドラを語り合える仲間や家族と同様に、インターネット上での感想共有も朝ドラ視聴の楽しさを増幅している。毎日放送される朝ドラは、毎日楽しみを共有できるよさがあり、インターネット上での感想共有と「朝ドラは相性がいい」と感じられている。インターネットを使った新しい楽しみ方が広がりつつあるということかもしれない。

もう1人はライト視聴層に属する、映画やドラマが好きな59歳の男性である。

「ドラマなどの視聴は、テレビよりネット動画を見ることが多くなった。その媒体はスマホ。

スマホというアイテムを使うと、自然にYouTubeなどを見てしまうので、素晴らしいドラマを見ようとするときには、TVerやGYAO!になっている。こんないいドラマがあったのかという体験をすることも多く、特に“ドラマ見逃し”で出会った作品でよいものが見つかったら、最終話までまとめて見てしまうことも多い。(中略)朝ドラ『なつぞら』は、先行情報(放送開始PR等)から知りました。見てみようかなと思っているのですが、(最近はテレビ番組の録画もしなくなったので)続けて見れないということから、徐々に関心が薄くなるという悲しい現実です。(朝ドラがインターネット上で見られるようになったら)『まんぷく』や『なつぞら』ならきっと見ることでしょう。大切なのはストーリーを追って見られるかどうかですから」(男性59歳)

リアルタイム視聴する人が多く、視聴率が好調な朝ドラではあるが、朝ドラ支持派の中にもこうしたネット動画視聴へ移行する人が存在し始めていることを示唆しているといえよう。今後も多くの人に見続けてもらうために、新しい方策を考えていくことも必要と思われる。

Ⅲ-5

長期視点・短期視点

～視聴者の多様性理解への試み～

朝ドラ視聴者の中には、物語の大きな柱の展開を中心に楽しむ長期視点派と、日々の小さな事象・小ネタなどを中心に楽しむ短期視点派が存在していて、両派ともに、長期視点的要素・短期視点的要素の両方を楽しむ素養を備えており、見ている番組が短期視点向きだと感じると、普段は長期視点派の人でも楽しみ方を短期視点に切り替えて見る、といった見方の使い分けをしていることが『ひよっこ』各作調査で判明している⁹⁾。『ひよっこ』は、モデルとなった特定の人物のいないオリジナル作品で、ストーリーも普通の庶民のありふれた日常を中心に4年半という短い期間を描いている。いわば短期視点的要素に富んだ作品といえる。一方、『まんぷく』は即席ラーメンの発明・成功物語で、物語の骨格としては、到達目標地点がはっきりしていて、そこに向かって進んでいく、長期視点的要素の強い作品であるといえよう。はたして、こうした長期視点的作品においても、『ひよっこ』の場合と同じように、長期視点派・短期視点派の特徴が表れるのかどうか、『まんぷく』各作調査の際に検証を行った。

(a) 長期視点・短期視点の設定

『ひよっこ』調査の際と同様に、
A: 全体のストーリー展開や結末がどうなるかを楽しみたい
(長期視点)

B: 日々のエピソードや、作品の

雰囲気・登場人物を楽しみたい(短期視点)

という2つの意見を提示し、[Aに近い][どちらかというAに近い][どちらに近いともいえない][どちらかというBに近い][Bに近い]の5択で聞き、[Aに近い]+[どちらかというAに近い]を選んだ人を長期視点派と呼び、[どちらに近いともいえない]を中間派、[どちらかというBに近い]+[Bに近い]を短期視点派と呼ぶこととする。

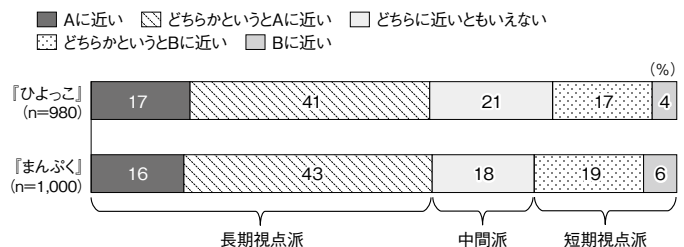
(b) 長期視点派・短期視点派・中間派の割合

まず、長期視点派・短期視点派・中間派の割合から見ていこう。図Ⅲ-5-1は『ひよっこ』と『まんぷく』の各派の割合を示したものである。『まんぷく』では、長期視点派59%、中間派18%、短期視点派25%で、3派の割合は2作品でほぼ同レベルであった。

(c) 満足度比較～今回の分析の方向性

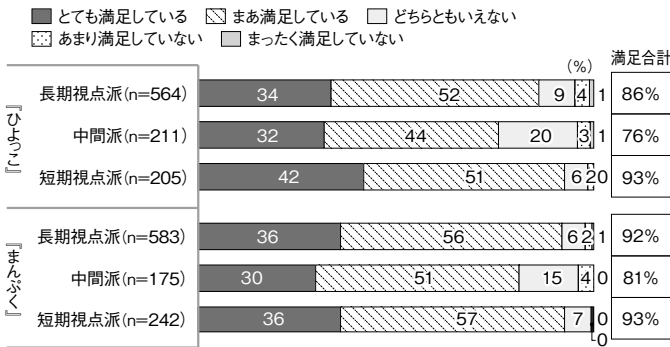
満足度を比較したのが図Ⅲ-5-2である。作品に対する満足度を[とても満足している][まあ満足している][どちらともいえない][あまり満足していない][まったく満足していない]の5段階で聞いている。満足合計=[とても満足]

図Ⅲ-5-1 長期視点派・中間派・短期視点派の割合
～『ひよっこ』『まんぷく』比較



A: 全体のストーリー展開や結末がどうなるかを楽しみたい(長期視点)
B: 日々のエピソードや、作品の雰囲気・登場人物を楽しみたい(短期視点)
*小数点以下第1位を四捨五入しているため、合計値が100%にならない場合がある

図Ⅲ-5-2 『ひよっこ』『まんぷく』満足度
～長期視点派・中間派・短期視点派の比較



*小数点以下第1位を四捨五入しているため、合計値が100%にならない場合がある

+ [まあ満足]を見ると、『まんぷく』では、長期視点派が92%、短期視点派が93%、中間派が81%。『ひよっこ』では長期視点派86%、短期視点派93%、中間派76%であった。両作品ともに、長期視点派と短期視点派の満足度はほぼ同レベルで、中間派は両派より1割あまり低いという同じ傾向を示した。

中間派は、長期視点派とも短期視点派とも「どちらともいえない」人たちのため、普通に考えると、満足度は両派の中間の値になると思われるが、調査結果は、2作品とも長期視点派・短期視点派よりも“低い”のである。

『ひよっこ』調査では、ドラマ主要要素などほかの要素でも、中間派は長期視点派と短期視点派より評価や反応の数値が低いという同じ傾向を示すことが大変多かった。しかし、なぜ中間派が総じて低い結果となるのか、『ひよっこ』調査では解明できなかった。

そこで、今回は、次のように2段階に分けて分析を行いたいと思う。

①長期視点派・短期視点派の検証：『ひよっこ』調査で析出した長期視点派・短期視点派の特徴が、『まんぷく』という異なる作品においても同様に出現するかを検証する。

②中間派分析：なぜ中間派が長期視点派・短期視点派より作品評価等が低くなるのかを解明し、中間派がどのような人たちなのかを明らかにする。

① 長期視点派・短期視点派の特徴～『まんぷく』調査における検証～

㊦ 長期視点派・短期視点派で同じ傾向を示す項目が多い

今回の『まんぷく』の調査においても、長期視点派・短期視点派の両派は、同じ傾向を示す項目が多かった。たとえば、『まんぷく』の6か月間の放送を物語の流れに沿って5つのパートに分けて、[すべて見ている][だいたい見ている][ある程度(半分くらい)見ている][あまり見ていない][まったく見ていない]の5段階で聞いたパート別視聴状況の図Ⅲ-5-3 ([すべて見ている] + [だいたい見ている]の合計値を掲載)でも、その各パートの評価を[良かった][まあ良かった][どちらともいえない][あまり良くなかった][良くなかった]の5段階で聞いたパート別評価の図Ⅲ-5-4 ([良かった]合計 = [良かった] + [まあ良かった]を掲載)でも、両派の差は10%以内と大変小さいものだった。ドラマの主要要素11項目を提示して評価を5段階([良かった][まあ良かった][どちらともいえない][あまり良くなかった][良くなかった])で聞いた図Ⅲ-5-5 ([良かった]合計 = [良かった] + [まあ良かった]を掲載)でも、長期視点派と短期視点派のグラフはほとんど重なっていて、両派の差は大変小さいものだった。

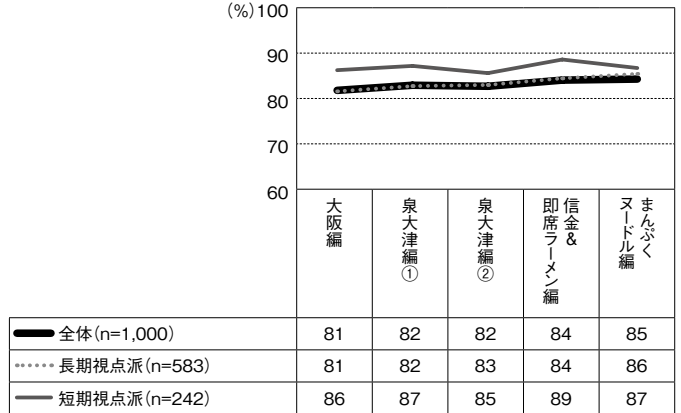
㊦ 両派の特徴が出ている項目

そうした中で、ごく一部であるが、長期視点派と短期視点派で差のある項目も存在した。

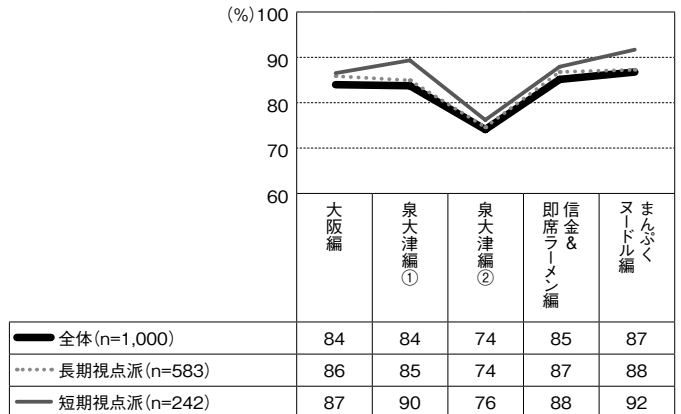
(i) 情緒的イメージ

朝ドラの各作調査では、情緒的イメージを並べて「[そう思う] [どちらともいえない] [違うと思う]」の3段階で作品のイメージを聞いている。『まんぷく』で聞いた18項目をグラフにしたのが図Ⅲ-5-6（「[そう思う]」を選んだ人の割合を提示）である。長期視点派も短期視点派も、「明るい」「前向きな」「心あたたまる」などのポジティブなイメージが大変高く、「地味な」「古くさい」といったネガティブなイメージは大変低く、同じ傾向を示していて、両派の差も大変小さい。そうした中で、唯一「安心する」は、長期視点派55%に対して、短期視点派65%と、短期視点派のほうが1割多い。両派とも

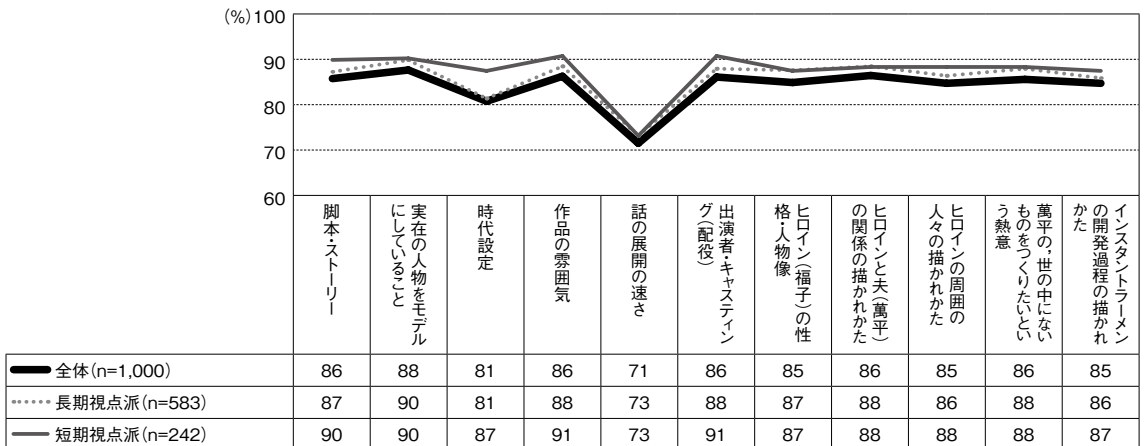
図Ⅲ-5-3 パート別視聴状況～長期視点派・短期視点派の比較（[すべて見ている] + [だいたい見ている]）



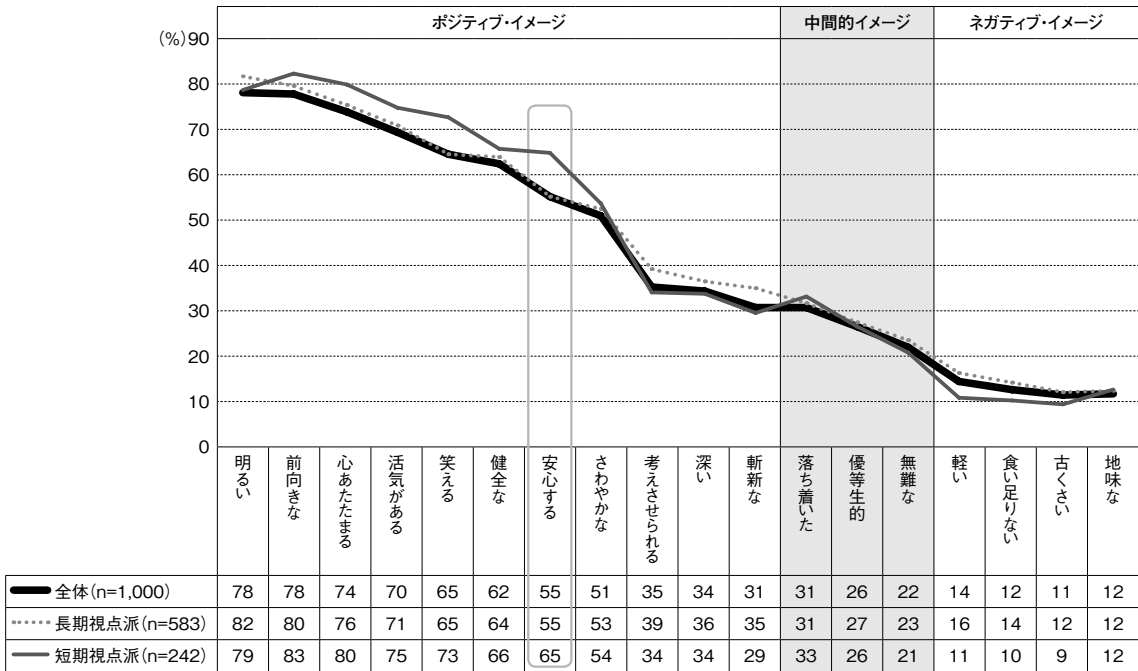
図Ⅲ-5-4 パート別評価～長期視点派・短期視点派の比較（[良かった] 合計）



図Ⅲ-5-5 ドラマ主要要素～長期視点派・短期視点派の比較（[良かった] 合計）



図Ⅲ-5-6 情緒的イメージ～長期視点派・短期視点派の比較（「そう思う」）



に過半数が『まんぷく』を「安心する」と感じているのだが、短期視点派のほうが「安心」を感じた人が多いのである。

なぜ短期視点派は長期視点派より『まんぷく』に安心感を抱いたのか…；ほかの調査項目の結果と重ねて見る中で解明していこう。

(ii) 機能的イメージ

同様に、『まんぷく』の機能的なイメージ20項目について聞いた結果が図Ⅲ-5-7である。ここでも両派のグラフはほとんど重なっており、差が小さいことが分かる。その中で、「気楽に見られる」だけ、長期視点派75%、短期視点派86%と1割以上の差がある。長期視点派の3/4にのぼる大変多くの人が『まんぷく』は「気楽に見られる」作品だと感じていたのだが、それにも増して、短期視点派は86%とより一層多い人が「気楽」と感じているのである。こうした“気

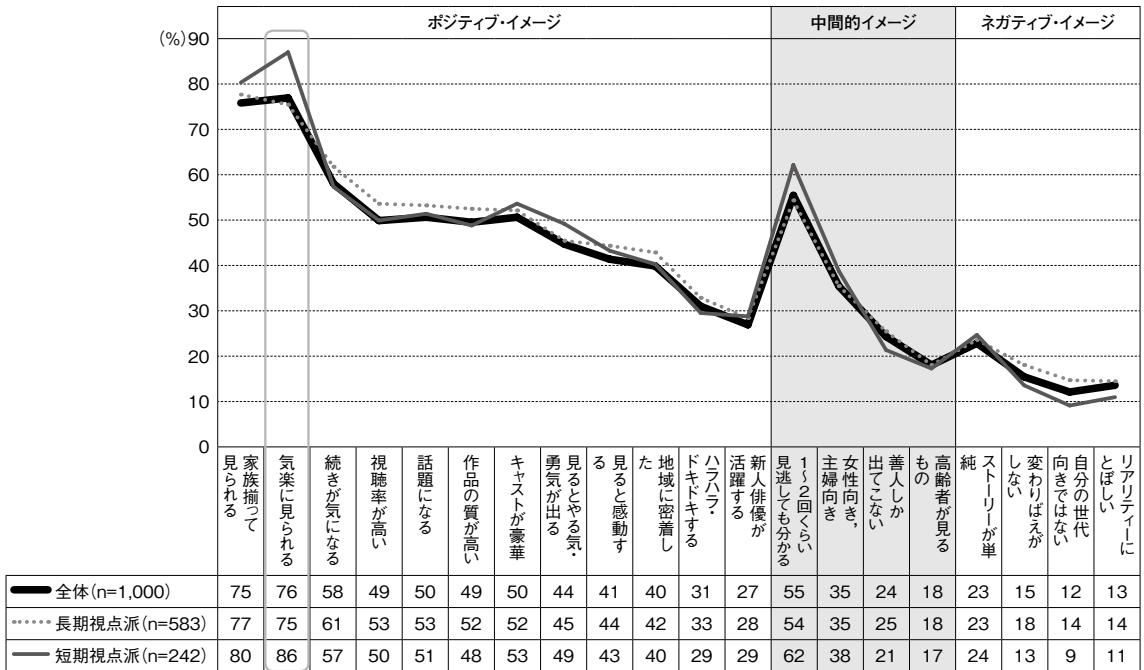
楽さ」が前述の情緒的イメージで「安心する」が短期視点派でより高いことにつながっているのかもしれない。

また、「気楽に見られる」ことは朝ドラ作品を継続視聴するうえで大きな力になることが、『わろてんか』調査の際に分かっている¹⁰⁾。『まんぷく』は、両派にとって、そして、短期視点派の人にはより一層“見続けやすい”作品でもあったようだ。

(iii) 視聴熱～視聴意欲・生活面への波及

視聴熱をどう測定し可視化するかは、当研究チームの継続検討課題である。これまでの各作調査では、視聴熱の一端を具体的に知るために視聴意欲や不満、視聴離脱意識の高低に関する項目を継続して測定してきているが¹¹⁾、よりきめ細かに視聴熱の出現の様子を捉えることも必要と思われる。たとえば、視聴熱は視聴

図Ⅲ-5-7 機能的イメージ～長期視点派・短期視点派の比較（「そう思う」）



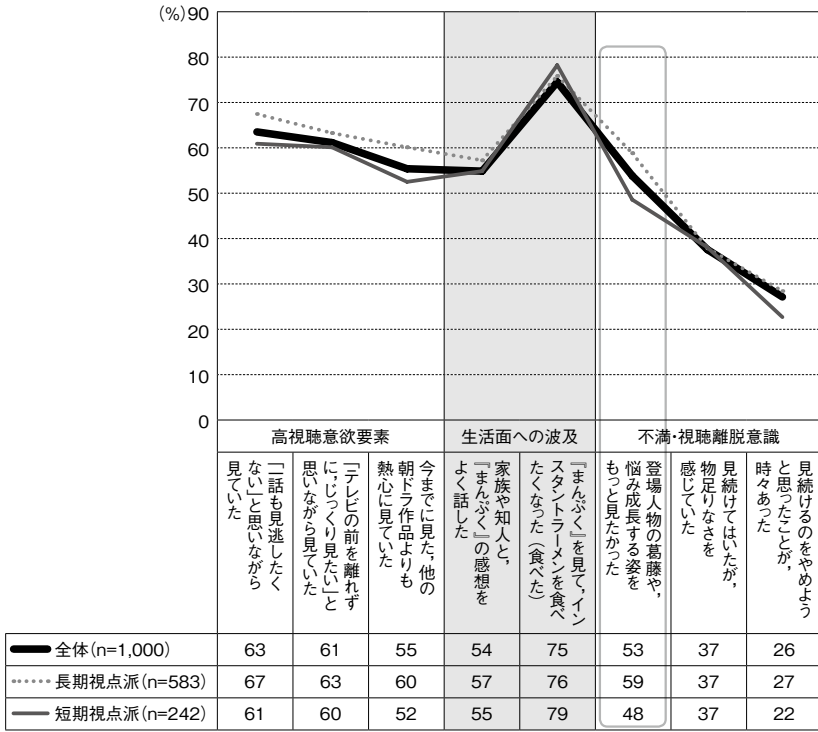
意欲や不満の高低に現れるだけでなく、視聴熱が高い場合には生活面への波及効果も現れるのではないだろうか。そこで、『まんぷく』では、生活面への波及を測る質問項目を2項目追加した。1つは、コミュニケーション面への反映を測定する項目（＝家族や知人と、『まんぷく』の感想をよく話した）であり、もう1つは、生理的欲求への影響を測る項目（＝『まんぷく』を見て、インスタントラーメンを食べたくなった（食べた））である。図Ⅲ-5-8は、これらの項目について、[あてはまる] [まああてはまる] [あまりあてはまらない] [あてはまらない] の4段階で聞き、[あてはまる] 合計（＝[あてはまる] + [まああてはまる]）の値を示したものである。

ここでも長期視点派と短期視点派のグラフは大変よく似ていて、高視聴意欲要素や生活面への波及要素はどの項目も5割を超える高さだった。一方、低視聴意欲の一端を示す不満

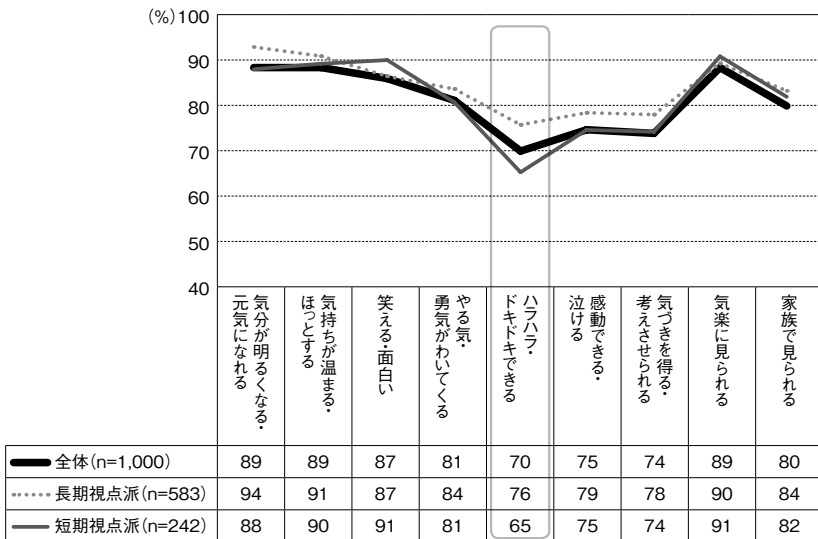
要素や視聴離脱意識のうち「見続けてはいたが、物足りなさを感じていた」「見続けるのをやめようと思ったことが、時々あった」は低めである。不満要素の1つである「登場人物の葛藤や、悩み成長する姿をもっと見たかった」は、短期視点派48%、長期視点派は59%とやや高めである。長期視点派は短期視点派より1割高く、しかも過半数に達している。葛藤し、悩み、紆余曲折を経ながら成長していく人間の姿を追っていく物語は、長期視点的ドラマの典型といえるものだろう。この結果は長期視点派の特徴をよく表しているといえよう。

また、『まんぷく』は、こうした要素が、長期視点派の人からは足りないと思われていたようだ。

図Ⅲ-5-8 視聴熱～高視聴意欲要素，生活面への波及，不満・視聴離脱意識～長期視点派・短期視点派の比較（「あてはまる」合計）



図Ⅲ-5-9 朝ドラを見続けるうえで重要な情緒的要素～長期視点派・短期視点派の比較（重要度合計「とても重要」+「重要」+「まあ重要」）



(iv) 見続けるうえで重要な情緒的要素

『まんぷく』調査では、9つの情緒的要素を提示し、「あなたにとって朝ドラを見続けるうえで重要だと思うかどうか」を「とても重要である」「重要である」「まあ重要である」「どちらともいえない」「あまり重要ではない」「重要ではない」「まったく重要ではない」の7択で聞いている¹²⁾。

図Ⅲ-5-9は、この質問について、「重要である」合計(=「とても重要である」+「重要である」+「まあ重要である」)を示したものである。

長期視点派・短期視点派ともに、どの項目も高い。中でも「気分が明るくなる・元気になれる」「気持ちが温まる・ほっとする」「笑える・面白い」「気楽に見られる」は両派ともに9割前後と、“ほとんど全員”といえそうなほど多くの人が選んでいる。朝ドラを見続けるうえで、“笑って面白く気楽に見ながら、気分が明るくなり、気持ちが温まったり、ほっとできる”ことを、両派ともに非常に重視していることが分かる。1日のスタートを切る朝は「気分が落ち込むようなものは

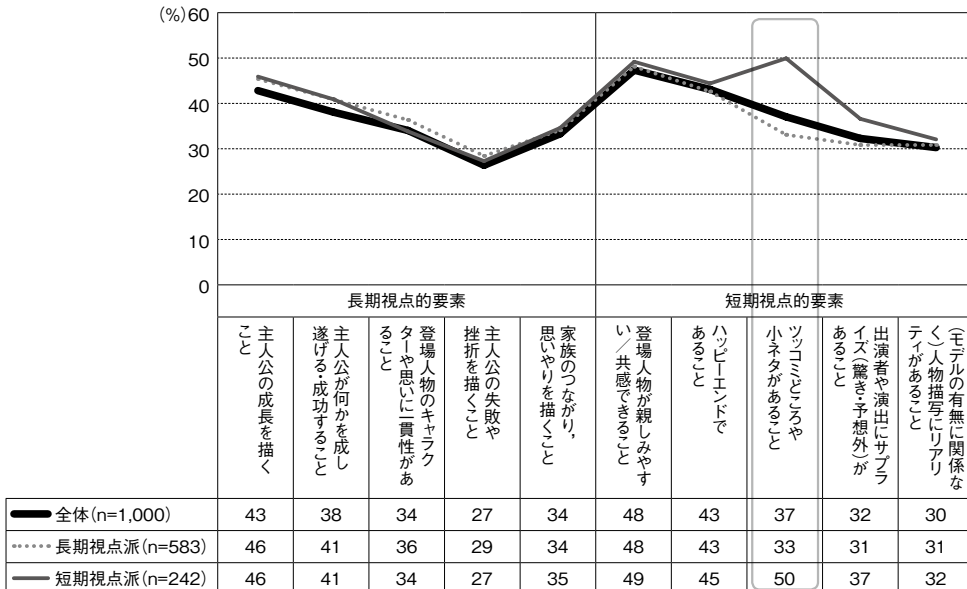
あまり見たくない」「明るく元気が出るものを見たい」という気持ちは、ごく自然なものであると考えられるが、そうした思いは長期視点派・短期視点派の大半の人が抱えていることを、このデータは示している。

それらよりは低いものの、「感動できる・泣ける」「ハラハラ・ドキドキできる」といった心を揺さぶられる要素も7割前後から8割弱とかなり高く、朝ドラを見続けるうえで重要と思われる。その中で、「ハラハラ・ドキドキできる」は長期視点派76%、短期視点派65%と長期視点派のほうが1割ほど高い。物語の大きなうねりや展開を楽しみたい長期視点派の特徴が出ているといえるのではないだろうか。

(v) 朝ドラにほしい、あれば見たい要素

朝ドラにほしい、あれば見たい要素を19項目提示し、あてはまるものをいくつでも選んでもらった。その結果の上位10項目を並べたのが図Ⅲ-5-10である。その中で、唯一「ツッコミ

図Ⅲ-5-10 朝ドラにほしい、あれば見たい要素～長期視点派・短期視点派の比較



どころや小ネタがあること」は長期視点派33%に対して短期視点派50%と差がついた。しかも、短期視点派は半数に達している。短期視点的要素の典型である「ツッコミどころ」「小ネタ」を求める人の量で差がつくのは、両派の特徴をよく表しているといえよう。

しかし、それ以外の項目は、長期視点派と短期視点派のグラフがほとんど重なっている。長期視点的要素と考えられる「主人公の成長を描くこと」「主人公が何かを成し遂げる・成功すること」「登場人物のキャラクターや思いに一貫性があること」「主人公の失敗や挫折を描くこと」でも、短期視点的要素と考えられる「登場人物が親しみやすい／共感できること」「ハッピーエンドであること」「出演者や演出にサプライズ(驚き・予想外)があること」「(モデルの有無に関係なく)人物描写にリアリティがあること」でも、両派の差は大変小さいのである。『ひよっこ』各作調査報告¹³⁾で、「両派ともに長期視点的要素・短期視点的要素の両方を楽しむ素養を持っており、作品に応じて見方を変えて朝ドラを楽しんでいる」と述べたが、今回のこの設問の回答は、『ひよっこ』で得た知見と一致していると同時に、それら両要素を求める人の割合もかなり近いということも表しているようである。

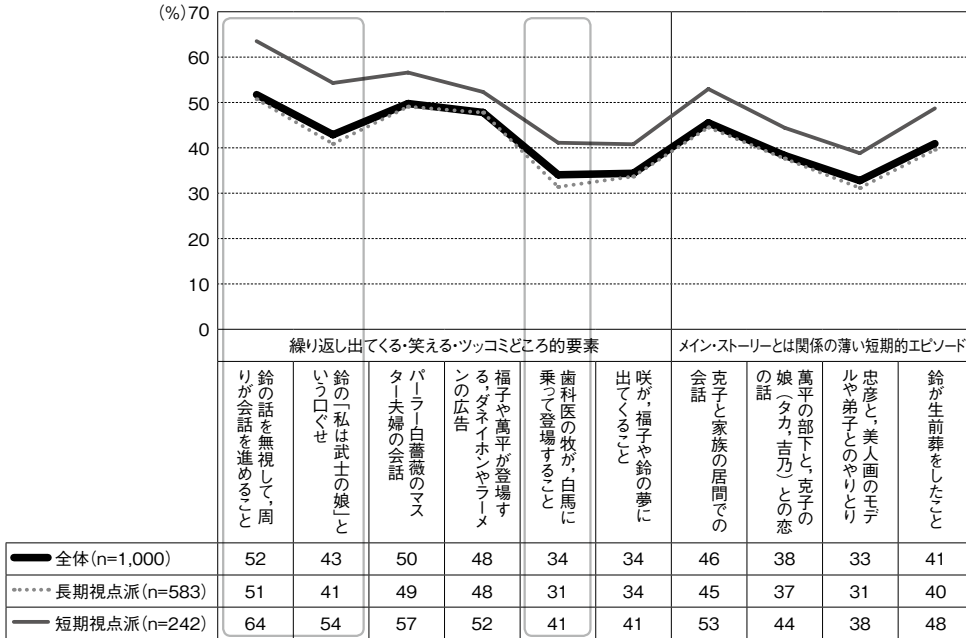
(vi) 短期的エピソードの評価

前述したように、「ツッコミどころや小ネタがあること」は、短期視点派で高く長期視点派で低めだった。『まんぷく』には、「口ぐせ」や「ワンパターンの展開」などが何度も繰り返し出てくる。いわば、笑える“小ネタ”や“ツッコミどころ”の少なくないドラマであった。また、メインのストーリー(＝即席ラーメンの発明～成功物

語)とは直接関係の薄いエピソードもちりばめられている。視聴者はこうした“短期視点的エピソード”をどう見ていたのだろうか。『まんぷく』の短期視点的エピソードを10項目提示し、[面白くて良かった][面白いが長い(多い)と思った][面白くはないが、あってもよいと思った][なくてよいと思った][この場面を見ていない/覚えていない]の5択で聞き、[面白くて良かった]という回答をグラフにしたのが図Ⅲ-5-11である。数値の大小はあるが、10項目すべて長期視点派より短期視点派のほうが高い。[面白くて良かった]という人が5割を超えた項目は、長期視点派では「鈴の話を見無視して、周りが会話を進めること」51%の1項目だけであるが、短期視点派では「鈴の話を見無視して、周りが会話を進めること」64%・「鈴の「私は武士の娘」という口ぐせ」54%・「パーラー白薔薇のマスター夫婦の会話」57%・「福子や萬平が登場する、ダネイホンやラーメンの広告」52%・「克子と家族の居間での会話」53%の5項目にのぼる。短期的エピソードに反応がいいのは、基本的には短期視点派であるということであろう。

そうした中で、短期視点派が長期視点派より1割以上高い項目が3つある。「鈴の話を見無視して、周りが会話を進めること」「鈴の「私は武士の娘」という口ぐせ」「歯科医の牧が、白馬に乗って登場すること」である。この3項目は、短いながらもある程度の尺と話の内容を持った“エピソード(話)”系ではなく、“内容”を楽しむというよりは、ワンパターン(定型)で何度も繰り返し出てくることで、笑いを誘い、ツッコミを入れることを楽しむような“お約束的”色彩の濃いものといえるだろう。そうした、より短期視点的要素の強い項目で両派の差がより大きめに出てきているのは、両派の特徴をよりはっきりと表

図Ⅲ-5-11 短期的エピソード・笑える要素・ツッコミどころの評価
～長期視点派・短期視点派の比較（「面白くて良かった」）



していると考えられよう。

(vii) 長期視点派・短期視点派のまとめ

以上見てきたことを簡単にまとめてみよう。

『まんぶく』の満足度と評価は、長期視点派・短期視点派がほぼ同レベルであった。作品イメージでは、両派ともに「明るい」「前向きな」「心あたたまる」「家族揃って見られる」「気楽に見られる」「続きが気になる」など良いイメージが高いが、短期視点派のほうが「気楽に」「安心して」見られる作品であると感じた人が少し多い。長期視点派の人は、「登場人物の葛藤や悩み成長する姿をもっと見たかった」という人が6割近くに達し、『まんぶく』はやや平坦で、主人公たちの人間的成長面では物足りなさのある作品と感じていたようである。

朝ドラを見続けるうえで重視する要素は、両派に共通するものが大変多い。その中で、長期

視点派のほうが短期視点派より「ハラハラ・ドキドキできる」ことを重視する人が少し多い。一方、笑える“お約束的”要素や、ツッコミどころ、メイン・ストーリーとの関係性の薄い短いエピソードなどは、短期視点派のほうが反応がよい。

今回の調査でも、両派は、朝ドラを楽しむうえで重視する要素では共通する部分が大変多いこと、その一方で、各派の特徴を示す典型的な要素では嗜好性の差があることがうかがえた。

『ひよっこ』各作調査で析出された長期視点派・短期視点派の特徴が、『まんぶく』調査で検証されたといつてよいと思われる。

② 中間派はどのような人たちなのか

ア 中間派を分ける試み

前述したように、長期視点派・短期視点派に比べると、中間派は、満足度や評価などが両派より低いことが大変多かった。なぜ中間派

は両派より低いのであろうか。そして、中間派とはどのような人たちなのであろうか。

中間派の人たちは、長期視点派とも短期視点派とも、「どちらともいえない」という人たちであるが、この「どちらともいえない」という人たちはいくつかの層に分けられると推測されるし、その分け方もいくつかあるように思われる。

分け方の1つは、「どちらともいえない」を基準に分ける方法である。つまり、長期的視点と短期的視点の両方を持っているから「どちらともいえない」という人たちが存在するであろうし、また、長期視点とか短期視点といったことに自覚がないので「どちらともいえない」と答えた人たちもいるであろうし、長期視点・短期視点ということに自覚があっても、それらにあまりこだわりがない人たちもいると思われる。しかし、こうした自覚がなかったり、頓着しない人々をアンケート質問で分けすることは不可能に近い。

もう1つの分け方は、中間派の評価や反応が低いことに注目して分ける方法である。どの質問にも総じて反応が弱いのは、“視聴意欲が低いことに由来する”という推測が可能であろう。そして、中間派全員が反応が弱く視聴意欲の低い人たちなのか、それとも反応が強く視聴意欲の高い人と低い人の2層いるのか…、といった分析が可能であると思われる。『まんぷく』調査では、2018秋・視聴者調査と同様に、表Ⅲ-5-1

表Ⅲ-5-1 見たい朝ドラのタイプ

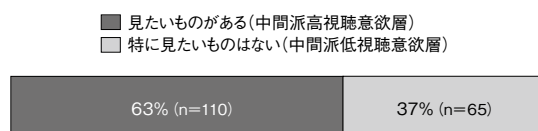
モデルの生涯を、歴史に忠実に描いた作品
モデルを下敷きに、自由度高く脚色した作品
モデルのないオリジナル作品
戦前～戦後を描いた作品
戦後の昭和を描いた作品
平成～現代を描いた作品
主人公の成長を描く一代記
さまざまな登場人物が活躍する群像劇

のような朝ドラの典型的タイプを8つ提示し、[かならず見る][たぶん見る][見るかもしれない][どちらともいえない][見ないかもしれない][たぶん見ない][絶対に見ない]の7択¹⁴⁾で、どんな朝ドラを見たいのか、とその見たい度合い(視聴意欲度)を聞いている¹⁵⁾。そこで、この質問を使って、朝ドラ作品視聴意欲の高低で中間派を分けることを試みた。「見たいものがある」人(=提示した8つのうち1つ以上[かならず見る]または[たぶん見る]と答えた人)と、「特に見たいものはない」人(=[かならず見る][たぶん見る]と答えた項目が1つもない人)に分け、中間派175人とクロス集計を行った。

その結果が図Ⅲ-5-12である。「見たいものがある」という視聴意欲高めの人(中間派高視聴意欲層と名づける)が110人、「特に見たいものはない」という視聴意欲の低い人(中間派低視聴意欲層)が65人と、おおよそ2対1に分かれた。

各作調査は、視聴者の各作品に対する満足度や評価、印象を明らかにすることを大きな目標にしているため、回答者は比較的好くその作品を見た人である。当該作品を最後までよく見ていたという人の多くは高視聴意欲層で占められることになり、“中間派を分ける試み”でその存在が明らかになった中間派低視聴意欲層のような視聴意欲の低い人の存在は多数派の高視聴意欲層の陰に隠れて、これまで見えてこなかった。そもそもアンケート調査は、扱うテーマ

図Ⅲ-5-12 『まんぷく』～中間派高視聴意欲層・中間派低視聴意欲層の割合



に関心のある人が回答者に多く含まれてしまうという現象が起きやすく、それを避けることは大変難しい。したがって、扱うテーマに関心の薄い人の分析はなかなか困難であることが多い。それだけに、この中間派低視聴意欲層は、多数派とは異なる見方をする人たちの特性を知るのが役立つ貴重な存在である。人数が65人と少なく通常では分析対象としないところだが、今回は、あえて分析する価値があると考えられる。

㊦ 満足度

図Ⅲ-5-13は満足度を比較してみたグラフである¹⁶⁾。中間派高視聴意欲層は満足合計86%で、全体平均との差は1割に満たず、2層の満足度はほぼ同じといえよう。中間派低視聴意欲層は満足合計72%で、これもかなり高い満足度を示しているといえよう。しかし、高視聴意欲層と比べると14%低い。しかも、最も満足度が高い[とても満足している]は17%で、高視聴意欲層37%の半分しかなく、熱中度合いが低めであると思われる。

㊧ パート別視聴状況

では、中間派高視聴意欲層・中間派低視聴意欲層はどの程度『まんぷく』を見ていたのだろうか。物語の進展に合わせて『まんぷく』を5つのパートに分け、それぞれのパートを「すべ

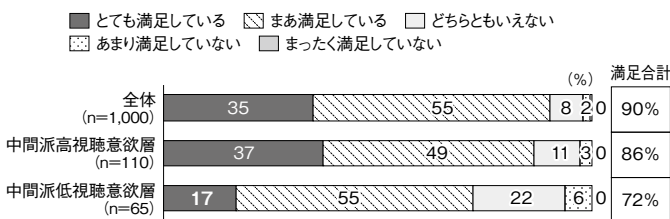
て見ている]または[だいたい見ている]と答えた人の合計値をグラフにした(図Ⅲ-5-14)。これを見てみると、5つのパートのいずれでも全体平均と中間派高視聴意欲層の差は小さく、どのパートも8割前後とコンスタントに大変よく見ている。中間派低視聴意欲層も7割前後をキープしており、『まんぷく』をコンスタントによく見ていた人であることに変わりはない。高視聴意欲層と比べると、泉大津編②は11%低い、それ以外の4パートの差は1割以内にとどまっている。

㊨ パート別評価

『まんぷく』の5つのパートそれぞれの評価をグラフにしたのが図Ⅲ-5-15である。全体平均と中間派高視聴意欲層はどのパートも「良かった」という人が8割前後もいて、大変評価が高い。中間派低視聴意欲層も各パートで6割前後に達しており、評価は高いというべきであろう。しかし、高視聴意欲層と比べると1割強～2割強低い。

グラフの形を見てみると、全体平均は第3パート泉大津編②で1割評価が下がり、第4・5パートで回復している。中間派高視聴意欲層のグラフも全体平均と同じ動きをしているが、第3パートでの下がり具合が5%にとどまり、全体平均よりは下がり方が少ない。中間派低視聴意欲層は、前半3パートはほとんど変化がなく、後半の第4・5パートで評価が上昇している¹⁷⁾。

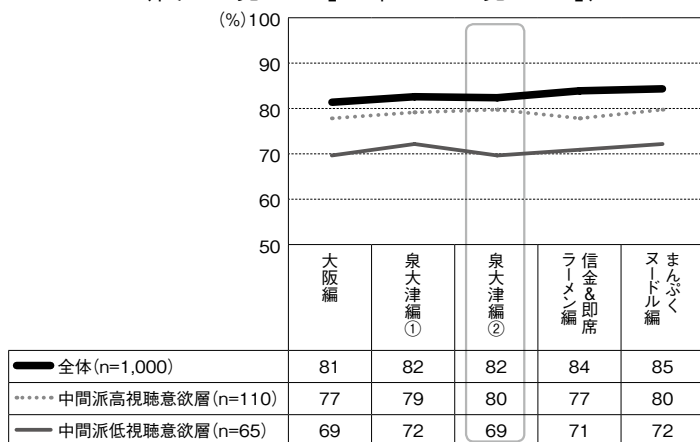
図Ⅲ-5-13 『まんぷく』満足度
～中間派高視聴意欲層・中間派低視聴意欲層の比較



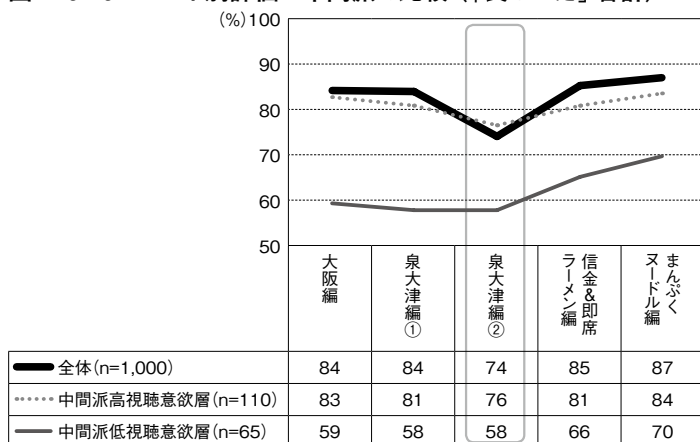
㊩ 視聴作品数

では、近年の朝ドラの視聴量に違いはあるのだろうか。今回の調査では、『ゲゲゲの女房』から『まん

図Ⅲ-5-14 パート別視聴状況～中間派の比較
 (「すべて見ている」+「だいたい見ている」)



図Ⅲ-5-15 パート別評価～中間派の比較(「良かった」合計)



ぷく』までの18作品について、[すべて見ている][だいたい見ている][ある程度(半分くらい)見ている][あまり見ていない][見たことがない/この作品を知らない]の5択で視聴度合いを聞いている。[すべて見ている]と[だいたい見ている]と[ある程度(半分くらい)見ている]の合計を「その作品を見た」とみなして視聴作品数をカウントした。その結果が表Ⅲ-5-2である。

どの層も14～15作品で、近年の朝ドラの視聴作品数には大きな差はなく、かなり多くの作

品を見ている。『まんぷく』個別作品に対する満足度やパート別評価は全体平均や中間派高視聴意欲層より低い中間派低視聴意欲層であるが、近年の朝ドラ作品の視聴に関しては、両層と同じようにたくさんの作品を見ている人であった。

㊦ ドラマ主要要素の評価

ドラマ主要要素評価を3層で比較したのが図Ⅲ-5-16である。全体平均と中間派高視聴意欲層は、どの項目もほぼ同レベルで「良かった」という人が7割～9割弱と大変多い。

中間派低視聴意欲層も、どの項目も「良かった」合計が5割以上と基本的には評価は高い。しかし、より一層高い高視聴意欲層と比べると1割強～3割弱低い。項目どうしを比較してみると、「時代設定」と「話の展開の速さ」がともに52%とほかの項目よりやや低めである。「インスタントラーメンの開発過程の描かれかた」は69%と7割近い高さで、

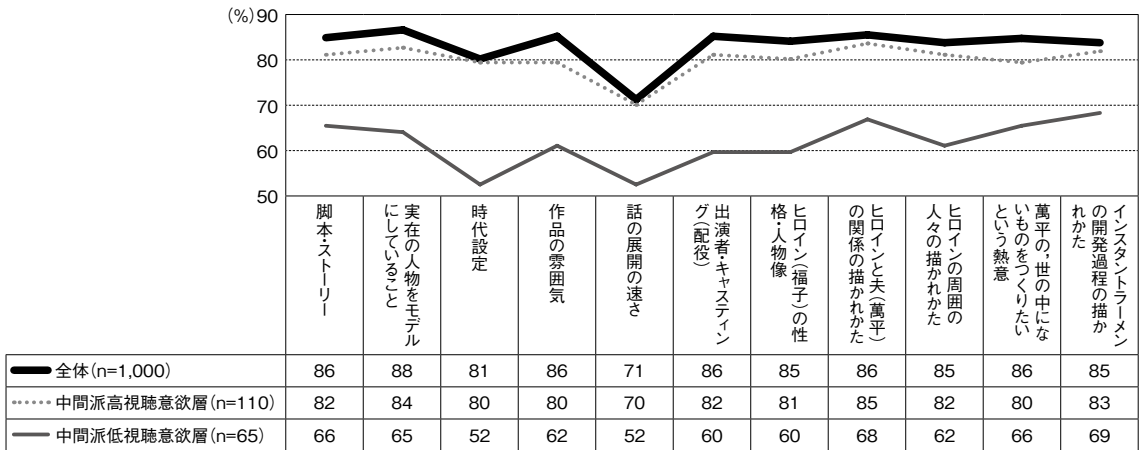
㊦パート別評価でインスタントラーメンやカップヌードルの開発～事業成功を描いた後半2パー

表Ⅲ-5-2 視聴作品数～中間派の比較

(「すべて見ている」[だいたい見ている][ある程度(半分)くらい]見ている)の合計を「見た人の数」としてカウント)

	視聴作品数
全体(n=1,000)	14.1
中間派高視聴意欲層(n=110)	15.1
中間派低視聴意欲層(n=65)	14.1

図Ⅲ-5-16 ドラマ主要要素～中間派の比較（「良かった」合計）



トの評価が高めだったことと一致する。

㊦ 作品イメージ

『まんぷく』の作品イメージでは、情緒的イメージ（図Ⅲ-5-17）でも機能的イメージ（図Ⅲ-5-18）でも全体平均と中間派高視聴意欲層は数値が近く、ポジティブ・イメージで高い項目が多い。中間派低視聴意欲層は、ポジティブ・イメージで高視聴意欲層より1～3割前後低い項目が多く、満足度やドラマ主要要素と同傾向の結果となった。一方、ネガティブ・イメージでは、3層とも「そう思う」人の割合は2割台以下と低かった。中間派低視聴意欲層は、ポジティブ・イメージで高いものはさほど多くないものの、ネガティブなイメージはあまり抱いていないようである。

(i) 情緒的イメージ

全体平均と中間派高視聴意欲層は情緒的イメージが大変良く、「明るい」「前向きな」「心あたたまる」「活気がある」「笑える」「健全な」「安心する」「さわやかな」の8項目で「そう思う」人が5割を超えている。中間派高視聴意欲層は、

「明るい」「前向きな」の2項目は7割超と大変高い。「斬新な」は、全体平均が31%であるのに対し中間派高視聴意欲層は21%で1割低い。

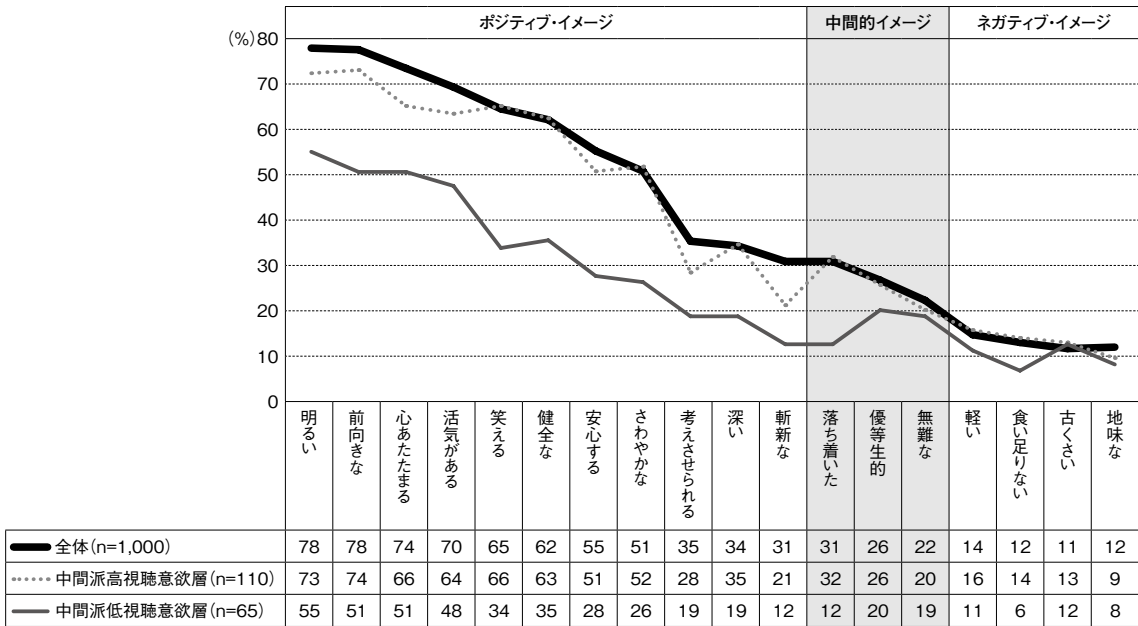
中間派低視聴意欲層では「そう思う」が5割を超えたのは「明るい」「前向きな」「心あたたまる」の3項目のみであり、「活気がある」48%が比較的高い。それ以外のポジティブ・イメージはかなり低く、「健全な」「笑える」が3割台、「安心する」「さわやかな」が2割台にとどまり、「考えさせられる」「深い」「斬新な」は1割台と大変低い。

(ii) 機能的イメージ

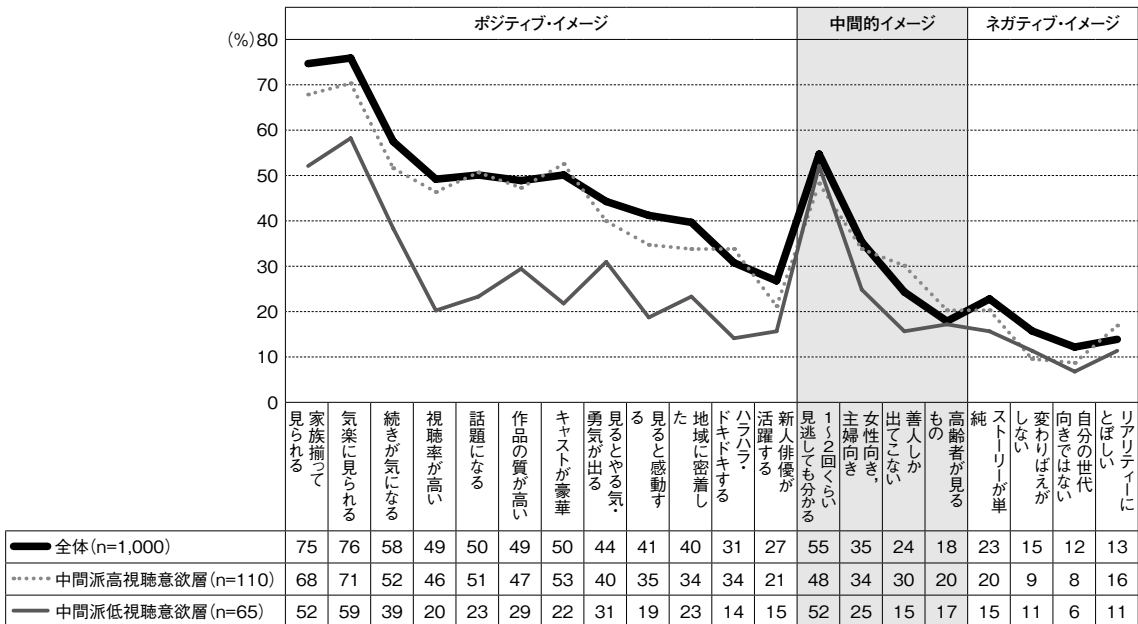
全体平均と中間派高視聴意欲層は、機能的イメージも大変良い。中間派高視聴意欲層で「そう思う」人が5割弱以上の項目は「家族揃って見られる」「気楽に見られる」「続きが気になる」「話題になる」「キャストが豪華」の5項目にのぼる。

中間派低視聴意欲層で「そう思う」が5割を超えたのは、ポジティブ・イメージの「気楽に見られる」「家族揃って見られる」と中間的イメージの「1～2回くらい見逃しても分かる¹⁸⁾」の3

図Ⅲ-5-17 情緒的イメージ～中間派の比較（「そう思う」）



図Ⅲ-5-18 機能的イメージ～中間派の比較（「そう思う」）



項目にとどまった。それ以外のポジティブ・イメージは低く、「続きが気になる」「見るとやる気・勇気が出る」は3割台、「作品の質が高い」

「話題になる」「地域に密着した」「キャストが豪華」「視聴率が高い」は2割台にとどまり、「見ると感動する」「ハラハラ・ドキドキする」は1割

台と大変低い。

中間層低視聴意欲層は、**㊦**ドラマ主要要素評価では、総じて評価が高めであったのに、作品のポジティブ・イメージでは低いものが多い結果となっていて、一見矛盾しているようである。どう解釈するのがよいのだろうか。これは、登場人物の人物像や描かれ方は良かったけれど「キャストが豪華」とは思わなかったということであり、脚本・ストーリーは破綻なく良くできていて、「インスタントラーメンの開発過程の描かれかた」も歴史的発明の経緯が分かって良かったが、中間派低視聴意欲層の人にとっては「笑えたり」「安心したり」「続きが気になったり」「やる気・勇気が出る」感じにはあまりならず、「ハラハラ・ドキドキ」したり「感動する」ことは少なかったし、作品に「深み」や「質の高さ」までは感じなかったということなのであるだろうか。そういう解釈も当然ありうると思われるが、それとは異なる理由も考えられる。ドラマ主要要素評価は、どちらかという客観的・理性的な要素を含んだ判断なのではないかと思われる。それに対して、作品のイメージは、より主観的・体感的な反応なのではないだろうか。中間派高視聴意欲層は客観的・理性的判断と主観的・体感的反応とが割合直結しているようだが、中間派低視聴意欲層は、客観的・理性的判断と主観的・体感的反応に乖離がある側面があるようである。この乖離は意図的なものなのではないだろうか…。中間派低視聴意欲層の人は、「心あたたまる」「明るい」気持ちにはなりたいたが、しかし、ドラマに一喜一憂して自分の気持ちを揺り動かされすぎるとはあまり好まず、したがって、ドラマに没入しすぎないように、「気楽に見られる」ように作品と距離をとって見ている、という解釈もありえるのではないだろうか。そうい

う見方をした結果、『まんぷく』のイメージのうち、気持ちが大きく動くことに関連するような側面の印象が低めに出ているのではないだろうか。以降、こうした点にも留意しながら丁寧に見ていこう。

㊧ 視聴熱

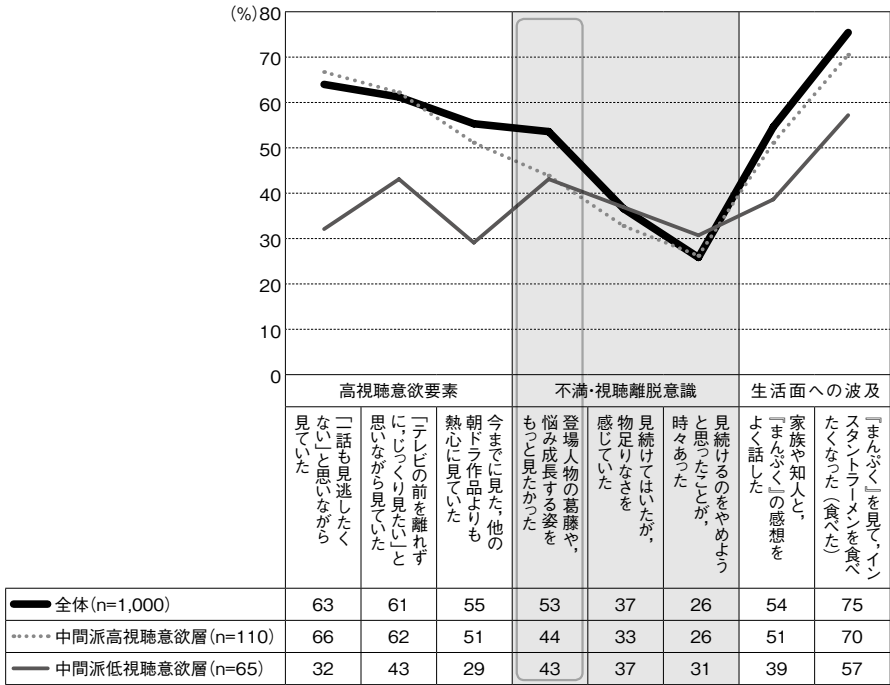
①長期視点派・短期視点派の特徴～『まんぷく』調査における検証～の (iii) 視聴熱～視聴意欲・生活面への波及のところでも行ったように、これまでの各作調査と同様の視聴熱測定項目に加えて生活面への波及効果を測る項目も含めて、中間派の高視聴意欲層と低視聴意欲層の違いを確認していこう。

㊦III-5-19に見るように、高視聴意欲要素は、全体平均と中間派高視聴意欲層が5～7割弱と高い。中間派低視聴意欲層は、「じっくり見たい」が4割台とやや高めであったが、どれも5割に達しておらず、総じて低めである。これは、視聴熱が高くなりすぎないようにコントロールして見ていた結果なのか、単純に視聴意欲が高まらなかったのか、両様の解釈が可能である。

一方、不満・視聴離脱意識では、「見続けてはいたが、物足りなさを感じていた」「見続けるのをやめようと思ったことが、時々あった」は3層とも2～3割台と低めである。しかし、「登場人物の葛藤や、悩み成長する姿をもっと見たかった」では、全体平均と中間派で少し差が出ている。全体平均が5割を超えているのに対し、中間派の2層は4割台にとどまり、1割ほど低いのである。中間派はネガティブな場面はあまり見たくないと思う傾向があるのかもかもしれない。

次に生活面への波及効果について見てみよう。「家族や知人と、『まんぷく』の感想をよく話した」という人は、全体平均と中間派高視聴

図Ⅲ-5-19 視聴熱～高視聴意欲要素、不満・視聴離脱意識、生活面への波及～中間派の比較（「あてはまる」合計）



意欲層では過半数に達している、日常の話題にした人が多かったようである。一方、中間派低視聴意欲層は、この項目は39%にとどまっている。また、「インスタントラーメンを食べたくなった（食べた）」というような生理的欲求への影響は、全体平均・中間派高視聴意欲層で7割台と高い。中間派低視聴意欲層でも6割近くにのぼった。

こうした生理的欲求は多くの人で自然に起きているようだが、中間派低視聴意欲層は、他者とのコミュニケーションなどにはあまり積極的ではないようで、1人で静かに楽しみたい傾向の強い人たちなのかもしれない。

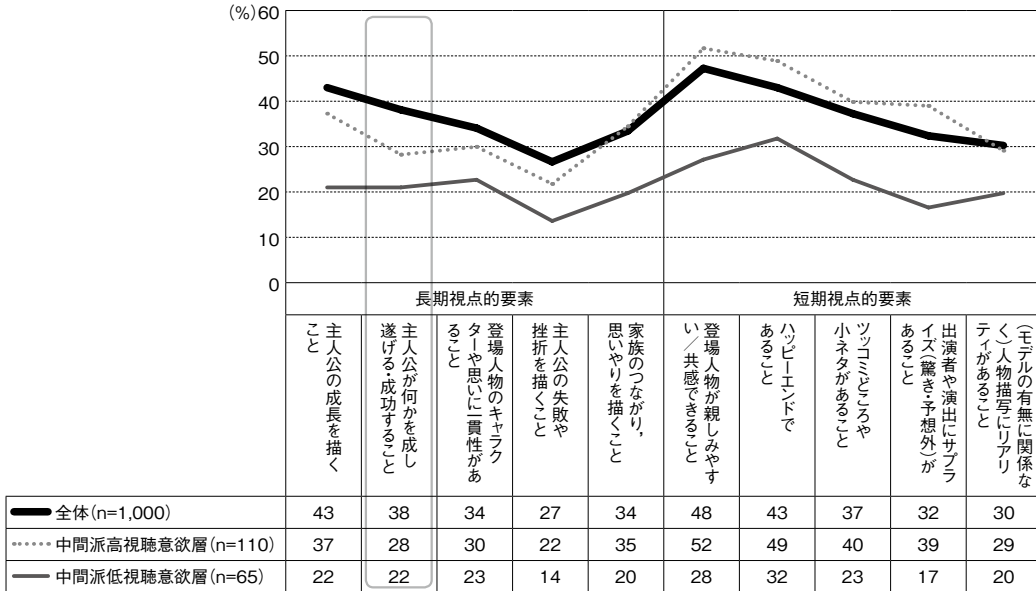
☑ 朝ドラにほしい、あれば見たくなる要素

図Ⅲ-5-20に見るように、ここでもグラフの形がよく似ている全体平均と中間派高視聴意欲層

であるが、両層で少し違いのある部分もある。まず、<朝ドラにほしい、あれば見たくなる要素>として比較的高い項目は、全体平均では「登場人物が親しみやすい／共感できること」48%・「ハッピーエンドであること」43%・「主人公の成長を描くこと」43%・「主人公が何かを成し遂げる・成功すること」38%などが挙げられる。「成長」や「成功」を見たいとする一方で、「成長」や「成功」に至る前段に体験することが多いと思われる「失敗や挫折」は、あまり見たい要素ではないようだ（27%）。

中間派高視聴意欲層は、「登場人物が親しみやすい／共感できること」52%・「ハッピーエンドであること」49%・「主人公の成長を描くこと」37%は全体平均同様比較的高く、加えて「ツッコミどころや小ネタがあること」40%・「出演者や演出にサプライズ（驚き・予想外）がある

図Ⅲ-5-20 朝ドラにほしい、あれば見たくなる要素～中間派の比較



こと」39%といった短期視点的要素も比較的高めである。しかし、「主人公が何かを成し遂げる・成功すること」は、全体平均38%に対し中間派高視聴意欲層は28%と1割低く、しかも3割に届かない低さである。「主人公の失敗や挫折を描くこと」も22%と低い。前節④視聴熱で「登場人物の葛藤や、悩み成長する姿をもっと見たかった」という人が全体平均より1割ほど少なかったことと重ねて考えると、中間派高視聴意欲層は、“葛藤”“悩み”や“成し遂げる”といった精神的軋轢・プレッシャーを強く感じるような場面はあまり見たくない人がやや多いのかもしれない。

全体平均層が朝ドラで見たいのは、「親しみやすく共感できる」主人公が「悩みながら成長し」「あまり大きな挫折や失敗」はせずに「何かを成し遂げ成功し」「Happyエンド」を迎えるドラマ(＝品行方正な主人公が人間的葛藤を通して人間的に成長し成功に至る物語)、旧来からある人間成長物語(ビルドゥングス・roman)に

近いが、昔の『おしん』のような艱難辛苦までは味わわない物語であるとすると、中間派高視聴意欲層が見たいのは、「親しみやすく共感できる」主人公が、「葛藤」とか「何かを成し遂げる」「成功する」ということとは少し違うところで人間的に成長し、Happyエンドを迎える、よりマイルドな物語のようである。そして、そこに「ツッコみどころ」や「小ネタ」「サプライズ」など、その場でパッと楽しめる短期視点的要素も含まれていることも望まれているようだ。

一方、中間派低視聴意欲層は、最も高い「Happyエンド」でも32%にとどまるなど、どの要素も「朝ドラにほしい、あれば見たくなる」意向がかなり低い。「登場人物が親しみやすい／共感できること」28%・「主人公の成長を描くこと」22%は2割台にとどまる。親しみや共感など主人公と一体化してドラマに没入することを求めないので、「主人公の成長」にもあまり関心がなく、したがって、「登場人物のキャラクターや思いに一貫性があること」もさほど重視しない、

ということであろうか。「出演者や演出にサプライズがあること」17%・「ツッコミどころや小ネタがあること」23%など、その場その場で楽しく見られる工夫（短期視点的工夫）にも関心は低いようだ。「ハッピーエンド」32%・「家族のつながり、思いやりを描くこと」20%など、この層が求めていると思われた“心あたたまる”系の要素も低いことを勘案すると、要するに「自ら特に何か見たいものがある」という欲求が薄い人たちなのかもしれない。

□ 短期視点的エピソードの評価

前述したように、「ツッコミどころや小ネタがあること」は、中間派高視聴意欲層が比較的高めであるのに対し、中間派低視聴意欲層は低めでかなり差があった。両層の短期視点的エピソードに対する反応をもう少し詳しく見てみよう。

図Ⅲ-5-21 (a～j) は、『まんぷく』に出てくる具体的な短期視点的エピソードを10個提示し、どう感じたかを「面白くて良かった」「面白いが、長い(多い)と思った」「面白くないが、あってもよいと思った」「なくてよいと思った」「この場面を見ていない/覚えていない」

図Ⅲ-5-21 笑える要素・短期的エピソード評価（「面白くて良かった」）～中間派の比較



*小数点以下第1位を四捨五入しているので、合計値が100%にならない場合がある

を見ていない／覚えていない]の5択で聞いた結果である。

まず「面白くて良かった」に注目すると、全体平均と中間派高視聴意欲層は10項目すべて差が1割以内にとどまり、ほぼ同じレベルであった。中間派高視聴意欲層で「面白くて良かった」が5割を超えたのは「パーラー白薔薇のマスター夫婦の会話」51%の1項目のみであった。先の①長期視点派・短期視点派の特徴- ㊦両派の特徴が出ている項目- (vi) 短期的エピソードの評価で見たように、短期視点派では「面白くて良かった」が5割を超えた項目が5つあったのに比べると、中間派高視聴意欲層は『まんぷく』の短期的エピソードに対する反応はさほど高くなかったといえそうだ。

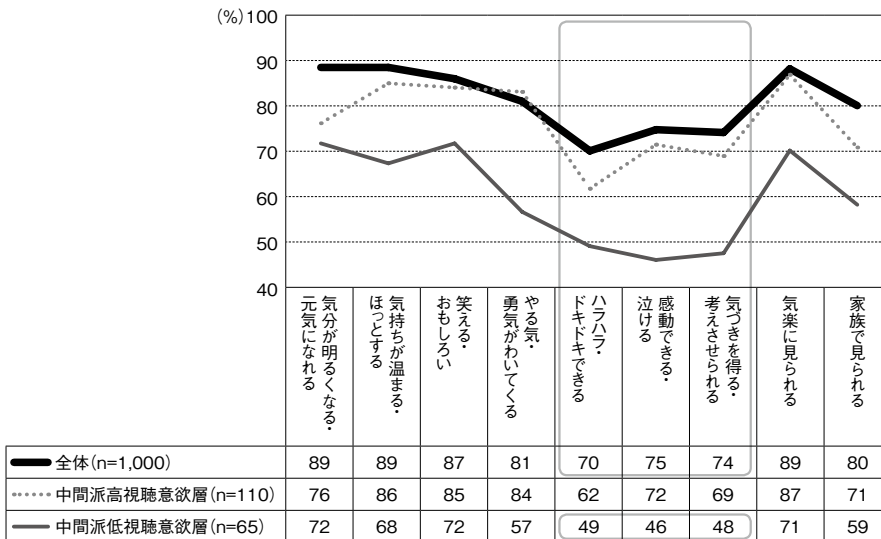
中間派低視聴意欲層は10項目すべてで「面白くて良かった」が2割前後～3割強にとどまり、回答が「面白くて良かった」「面白いが、長い(多い)と思った」「面白くはないが、あってもよいと思った」に分散している。「なくてよいと

思った」がやや多めなのは「歯科医の牧が、白馬に乗って登場すること」29%・「鈴が生前葬をしたこと」22%・「萬平の部下と、克子の娘(タカ、吉乃)との恋の話」19%の3項目で、それ以外の7項目では「なくてよいと思った」と強く否定する人は1割前後で大変少ない。そこまで強くは否定しない判断の“緩やかさ”は、この層の特徴といえるかもしれない。前に㊦朝ドラにほしい、あれば見たくなる要素のところ、で、「自ら特に何か見たいものがある」という欲求が薄い人たちではないかと述べたが、画面上に描かれたものに対しては、没入して見たりすることも、強く否定したりすることもせずに、“緩やかに”見ようとする人たちのなのかもしれない。

㊦ 朝ドラを見続けるうえで重要な情緒的要素

『まんぷく』調査では、図Ⅲ-5-22のように9つの情緒的要素を提示し、「あなたにとって朝ドラを見続けるうえで重要だと思うかどうか」を7段階の選択肢(「とても重要である」「重要である」

図Ⅲ-5-22 朝ドラを見続けるうえで重要な情緒的要素～中間派の比較
(重要度合計「とても重要」+「重要」+「まあ重要」)



[まあ重要である] [どちらともいえない] [あまり重要ではない] [重要ではない] [まったく重要ではない])で聞いている。図Ⅲ-5-22では7段階のうち上位3段階の合計値(「とても重要」+「重要」+「まあ重要」)を示した。

全体平均は、どの項目も7割以上と高い。中間派高視聴意欲層も全項目が6割以上と高く、特に「気楽に見られる」87%・「気持ちが温まる・ほっとする」86%・「笑える・面白い」85%・「やる気・勇気がわいてくる」84%の4項目は8割を超えていて大変高い。「気分が明るくなる・元気になれる」76%は全体平均と比べると1割あまり低い。

中間派低視聴意欲層は、「気分が明るくなる・元気になれる」72%・「笑える・面白い」72%・「気楽に見られる」71%・「気持ちが温まる・ほっとする」68%は7割前後と高い。その一方で、「感動できる・泣ける」46%・「ハラハラ・ドキドキできる」49%は、5割に届かない。この数値は7段階のうちの「まあ重要」までを含めた“最も広い重要度”を示したものだが、それでも過半数に届いていないのである。中間派低視聴意欲層には、心を強く揺さぶられることを重要視しない(=あまり求めない)人が多いということを示していると考えられよう。また、「気づきを得る・考えさせられる」48%も5割に届かず、自分の人生や社会などについて考えるヒントやきっかけも朝ドラにはあまり求めていないようである。

中間派低視聴意欲層は、「気楽に」「明るく」楽しく見られ「ほっとする」ことを重要視しつつ、心を強く揺さぶられず、あまり深く考えさせられることのない物語を見たいと思っている。むしろ、そういう見方をしないように、深入りしすぎないように見ようとしているのではないだろうか。

② 中間派まとめ

中間派高視聴意欲層は、全体平均に近い部分が多いが、先に①朝ドラにほしい、あれば見たくなる要素のところ得た知見と重ねて考えるなど、より詳細に見ていくと、中間派高視聴意欲層は、「気楽に」「明るく」楽しく見られ「心があたたまり」「やる気・勇気がわいてくる」ことを重要視し、その一方で「葛藤」とか「何かを成し遂げる」「成功する」とかということとは少し違うところで人間的に成長し、ハッピーエンドを迎える、よりマイルドな物語を見たいと思っている人であり、その場でパッと楽しめる「ツッコミどころ」や「小ネタ」「サプライズ」などの短期視点的要素も見たい人であった。

中間派低視聴意欲層は、全体平均や中間派高視聴意欲層に比べると、作品評価や作品の要素に対する反応がかなり穏やかな人たちであった。そして、「気楽に」「明るく」楽しく見られ「ほっとできる」ことを重要視し、より緩やかで、心を強く揺さぶられず、あまり深く考えさせられることのない物語を見たいと思っており、同じ朝ドラを見るのでも、ドラマに没入しすぎず、適当な距離をとって、心穏やかに見ようとする人のようであった。しかし、だからといって朝ドラを見る度合いが低いわけではなく、近年の朝ドラの視聴作品数も全体平均と同レベルで、朝ドラ作品を数多く見ている人である。

③ おわりに

『まんぶく』調査結果を使って、長期視点派・短期視点派・中間派について詳しく見ることで、より、各派の特徴がかなり明らかになってきた。

長期視点派・短期視点派は、朝ドラを楽しむうえで重視する要素では共通する部分が大変多かった。その一方で、各派の特徴を示す典

型的な要素では嗜好性の差があることがうかがえた。

中間派は、高視聴意欲層と低視聴意欲層に分けることができ、全体に占める割合は、中間派高視聴意欲層が11%、中間派低視聴意欲層が7%程度で、少数派である。朝ドラが面白くて熱中して見続け、見るのが習慣になっている多数派がいる一方で、同じように見続けているが、朝ドラに求めるものももっと穏やかであったり、もっと距離をとって没入しないように見ていたり、多数派とはかなり異なった見方をする人たちがいることが、今回の分析で分かってきた。

朝ドラ視聴者の多様性を理解するうえで、これらの分析が少しは役に立ったのではないかと考える。

Ⅲ-6 SNS接触者はどのような人たちが

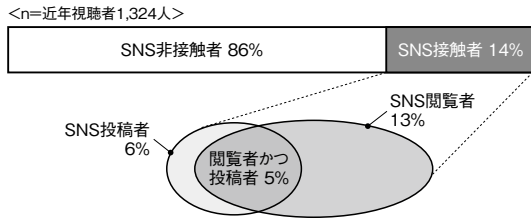
2013年度前期に放送された朝ドラ『あまちゃん』は、SNS上で多くの人に語られ、世間でも大変話題になった。今では、朝ドラについて語られる内容や方向性はバリエーションに富んだものとなり、インターネット上で朝ドラについて語り合うことは日常的なものになってきた感もある。では、朝ドラ視聴者の中のどのくらいの割合の人がSNS上の朝ドラに関する書き込みを閲覧し、投稿しているのだろうか。そして、その人たちはどのような特徴を持った人たちなのだろうか。2018秋・視聴者調査の近年視聴者の中で見てみた。

① SNS接触者・非接触者の割合

SNSで朝ドラの書き込みを読んだり、投稿したりしている人はどのくらいいるのだろうか。2018秋・視聴者調査の近年視聴者1,324人の中で、「ツイッターなどのSNSで朝ドラの感想を見ることがある」という設問文に「あてはまる」と回答した人は13%、「朝ドラの感想をSNSやネット掲示板に投稿することがある」に「あてはまる」人が6%、そのうち、両方「あてはまる」人が5%、「投稿する」が「閲覧する」は「あてはまらない」という人が1%という回答であった。その割合を図にしたのが図Ⅲ-6-1である。SNSで朝ドラについて投稿も閲覧もしない（＝朝ドラに関してSNSに接触していない）という人が86%と多数派で、朝ドラに関してSNSに接触している人は14%である。最近ではSNS上で朝ドラの話題が多く語られている印象があるが、実は、

朝ドラに関するSNS接触者は1割台と、かなり少ないことが分かる。

図Ⅲ-6-1 朝ドラに関するSNS接触者・非接触者の割合

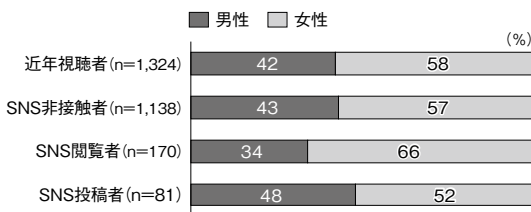


② 男女・年層別の特徴

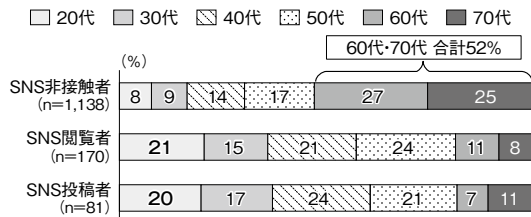
男女の比率を図にしたのが図Ⅲ-6-2である。もともと近年視聴者層は6対4で女性のほうが多いが、SNS閲覧者は女性の割合が66%とより一層多く男性の2倍近い。

図Ⅲ-6-3は年層の割合を示したものである。SNS非接触者は60代・70代の合計が52%と高齢層が多いのに比べ、SNS閲覧者と投稿者は20代が2割にのぼるなど若い年層が多めである。

図Ⅲ-6-2 SNS接触者・非接触者の比較～男女比



図Ⅲ-6-3 SNS接触者・非接触者の比較～年層比



③ 視聴作品数

『ゲゲゲの女房』以降の朝ドラ作品を提示し、見たことがあるかどうかを聞き、各層の視聴作品数を集計したのが表Ⅲ-6-1である。どの層も11～12作品とあまり差がなかった。

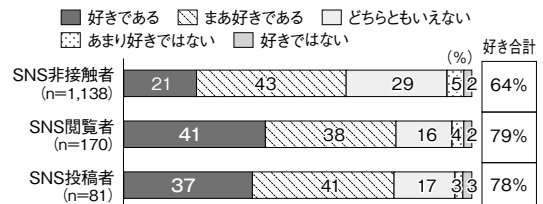
表Ⅲ-6-1 SNS接触者・非接触者の比較～視聴作品数

	見たことがある朝ドラ作品数
SNS非接触者 (n=1,138)	10.7作
SNS閲覧者 (n=170)	10.9
SNS投稿者 (n=81)	11.7

④ 朝ドラ好き具合

朝ドラが好きかどうかを「好きである」「まあ好きである」「どちらともいえない」「あまり好きではない」「好きではない」の5段階で聞いたのが図Ⅲ-6-4である。SNS非接触者は朝ドラ「好き」合計64%と好きな人が多いが、SNS投稿者・閲覧者はともに8割近くとより一層朝ドラが好きな人が多い。しかも、好きな具合が最も強い「好きである」が4割前後とかなり多く、熱中度が高いことがうかがえる。

図Ⅲ-6-4 SNS接触者・非接触者の比較～朝ドラが好き具合



*小数点第1位を四捨五入しているため、合計値が100%にならない場合がある

⑤ 朝ドラの見方・接点

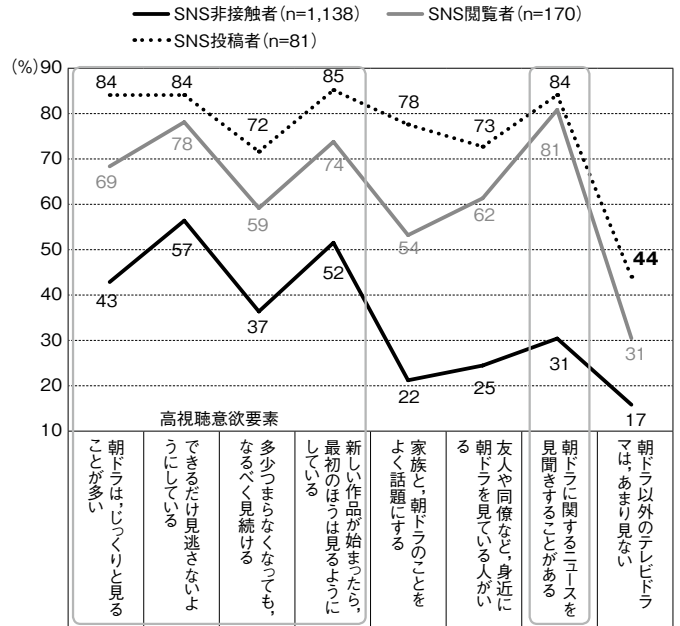
朝ドラの見方や、朝ドラとの接点について見てみよう(図Ⅲ-6-5)。「朝ドラは、じっくりと見ることが多い」「できるだけ見逃さないようにして

いる」「多少つまらなくなっても、なるべく見続ける」「新しい作品が始まったら、最初のほうは見るようにしている」など視聴意欲や視聴継続意欲の高い項目が「あてはまる」という人は、SNS非接触者で4割弱～6割弱で、SNS非接触者の視聴意欲は決して低くはない。しかし、SNS閲覧者は、この4項目は6割弱～7割台とSNS非接触者より2割以上高い。SNS投稿者はより高く7割台～8割台に達する。「友人や同僚など、身近に朝ドラを見ている人がいる」のも「家族と、朝ドラのことをよく話題にする」のもSNS非接触者は2割台と低いのに対して、SNS閲覧者は5～6割台で、SNS投稿者は7割台と大変高い。SNS接触者層、特にSNS投稿者では、朝ドラ（の話題）が周囲の人々とのコミュニケーションに役立っている様子が推察される。「朝ドラに関するニュースを見聞きすることがある」はSNS非接触者が3割台にとどまるのに対し、SNS閲覧者とSNS投稿者は8割と高く、差が大きい。SNS接触者層は朝ドラ視聴に大変熱心で、生活の中に積極的に織り込んでいる人たちのようで、その中でもSNS投稿者は特にそうした傾向がより強く、「朝ドラ以外のテレビドラマは、あまり見ない」という人も44%とかなり多くいて、“朝ドラ中心に生活が回っているのか…”と思わせるような熱の高さを感じさせる。

⑥ 朝ドラを見続けるうえで重要な情緒的要素

図Ⅲ-6-6のような10項目を提示して、朝ドラを見続けるうえで重要な要素とは何かを聞いた。

図Ⅲ-6-5 SNS接触者・非接触者の比較（「あてはまる」）～朝ドラの見方・接点



図Ⅲ-6-6は「重要である」合計（[重要である]+[まあ重要である]）を図にしたものである。

SNS接触者（閲覧者と投稿者）・SNS非接触者のどの層も10項目ほぼすべてで5割を超えており、基本的には、どの要素も重要と考える人が多い。そうした中でも、項目によって差が出ている。

「気持ちが温まる・ほっとする」「気楽に見られる」「気分が明るくなる・元気になれる」「笑える・面白い」といったハートウォーム系の要素、および「家族で見られる」はSNS接触者と非接触者の差は1割前後にとどまっている。「登場人物に共感できる」ではSNS閲覧者と非接触者の差は16%とかなり大きくなっている。そして、「ハラハラ・ドキドキできる」「感動できる・泣ける」「やる気・勇気がわいてくる」といった心を強く揺り動かされる要素の強い項目では、SNS接触者層はSNS非接触者よりも2割弱～3割

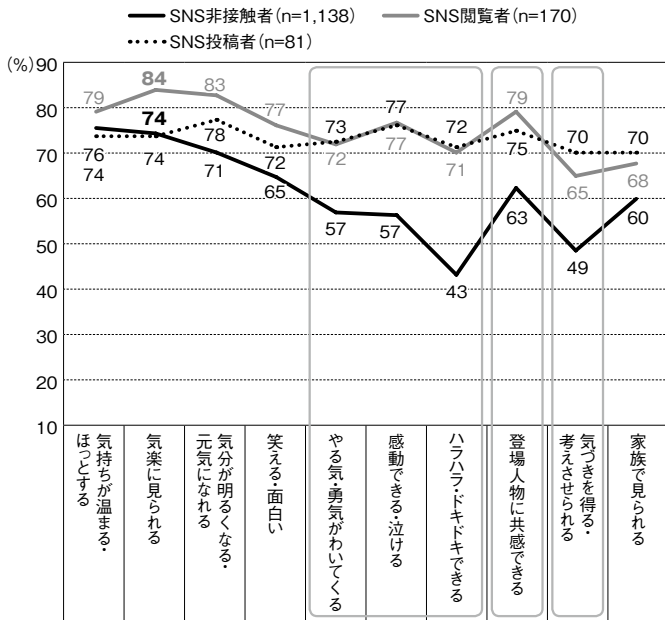
弱とかなり大幅に高い。「気づきを得る・考えさせられる」も2割前後高い。SNS接触者では大

変多くの人が、ハートウォーム系だけでなく、強く心を揺さぶられることや知的興味を満たされる

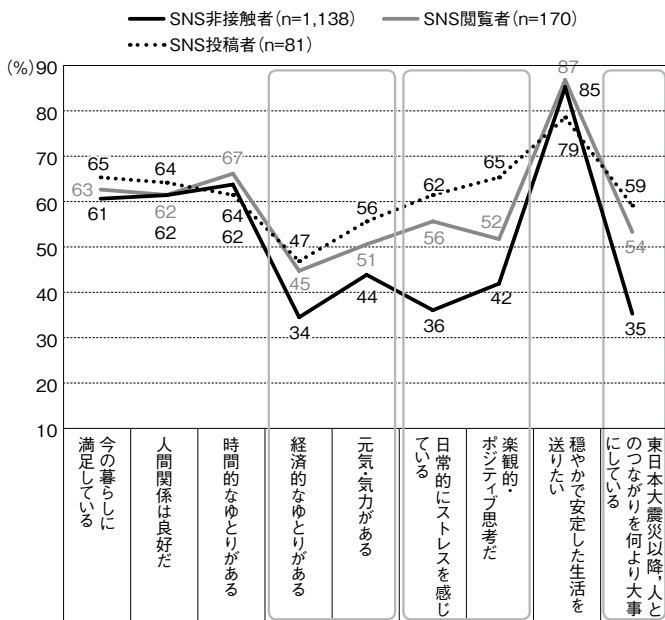
ことも朝ドラに求めているようだ。そして、前節で見たように、朝ドラの中のそうした要素を熱中度高く見ている人たちでもある。朝ドラに多くを期待し、それらを楽しんでいる人たちである。

なお、SNS閲覧者とSNS投稿者を比べると、ほとんどの項目で同レベルであるが、「気楽に見られる」だけは、投稿者のほうが10%低い。前節では閲覧者より投稿者の視聴に対する意欲や熱の高さが目立ったが、「気楽に見られる」という熱中度ということでは“ゆるめ”な要素については投稿者のほうがやや低いという結果となっており、前節の傾向と一致している。

図Ⅲ-6-6 SNS接触者・非接触者の比較（[重要である]合計）～朝ドラを見続けるうえで重要な情緒的要素



図Ⅲ-6-7 SNS接触者・非接触者の比較（「そう思う」）～現在の暮らし向き、志向



⑦ 現在の暮らし向き、志向

朝ドラ視聴者の現在の暮らし向きや志向性について聞いた質問が図Ⅲ-6-7である。「今の暮らしに満足している」「人間関係は良好だ」「時間的なゆとりがある」の3項目はSNS投稿者・閲覧者と非接触者はともに6割台と高く、差もほとんどない。「穏やかに安定した生活を送りたい」は3層ともに8割弱～9割弱と大変高く、朝ドラ視聴者の共通した思いであるようだ。

一方、SNS閲覧者・投稿者とSNS非接触者で差の大きな項目もある。「経済的なゆとりがある」「元気・気

力がある」はSNS非接触者が1割前後低い。逆に「日常的にストレスを感じている」はSNS接触者層が2割あまり高いが、同時に「楽観的・ポジティブ思考だ」という人も1～2割強高い。ストレスを多く感じながらもポジティブ思考で「穏やかで安定した生活」を目指しているのが、SNS接触者層の姿であるようだ。そして、「東日本大震災以降、人とのつながりを何より大事にしている」という人が5割強～6割近くいるのもSNS接触者層である。人間どうしのつながりの大切さ・素晴らしさを描くことが多い朝ドラが大好きで、人とのつながりに関わるSNSというツールを援用しながら、人との絆を大切に、ストレス社会の中を前向きに、穏やかで安定した生活を目指して生きている…、というのがSNS接触者層の姿のようである。

Ⅲ-7

『半分、青い。』と『まんぷく』 ～挑戦と王道～

～作品と視聴者の、朝ドラの見方の多様性のケーススタディとして～

【総論編】Ⅱ-2「朝ドラ各作品はどう見られたか～8作の各作調査比較から分かること～」（以下、【総論編】Ⅱ-2「各作調査比較」）で見たように、『まんぷく』と『半分、青い。』は、対照的な作品である。

『まんぷく』は近年の朝ドラ8作中4作品と同様に、実在の人物をモデルにした作品で、即席ラーメンやカップヌードルの開発・成功物語を縦軸に夫婦愛・家族愛を描いた。いわば朝ドラの典型のような作品である。総合評価点数が8作品中2番目に高く、ドラマ主要要素の評価も総じて高い、いわば、“王道”をいく作品といえよう。

一方、『半分、青い。』は、モデルがないオリジナル作品で、品行方正な主人公が多い朝ドラの中で、やや自己中心的ともとれるヒロインを主人公に、漫画家志望の夢が破れたあとの人生を描くなど、“挑戦的”な要素の少ない作品であった。【総論編】Ⅱ-2「各作調査比較」でも、ドラマ主要要素評価や視聴意欲の高低がほかの作品とは異なる動きを示していた。

この章では、ケーススタディとしてこの対照的な2作品を取り上げ、次のような点に注目して各作調査結果を見ていこうと考える。

- ①『半分、青い。』では、朝ドラらしさの多様性と、視聴者の見方の多様性について掘り下げる。
- ②『まんぷく』では、一見“王道的”“典型的”なこの作品の固有性（＝作品の多様性）につ

いて掘り下げる。

これを通して、朝ドラの作品の多様性と、視聴者の朝ドラの見方の多様性について理解を深めることを目指したいと思う¹⁹⁾。

①『半分、青い。』各作調査結果分析

(a)[朝ドラらしい／らしくない]と[良かった／良くなかった]を使って視聴者を分ける試み

【総論編】Ⅱ-2「各作調査比較」において、『半分、青い。』(総合評価点数75.3点・満足度73%)は、ほかの作品に比べ総合評価・満足度がやや低めであった。総合評価点数・満足度が低めの作品は、ドラマ主要要素の評価や視聴意欲も、総じて低めに出る傾向があったが、『半分、青い。』はドラマ主要要素のうちの「出演者・配役」要素の評価が高く([良かった]合計82%)、視聴意欲も高い(「一話も見逃したくないと思って見ていた」62%・「じっくり見たかった」58%)傾向を示した。

【各論編】Ⅲ-2「朝ドラの多様性」で見たように、2018秋・視聴者調査において、『半分、青い。』は“朝ドラらしくない”作品ランキングで第2位(17%)に位置した。『半分、青い。』の各作調査でも『つばさ』以降『半分、青い。』までの19作品について“朝ドラらしいかどうか”を聞いている²⁰⁾。表Ⅲ-7-1は、[朝ドラらしくない]合計(=[朝ドラらしくないと思う]+[どちらかと

表Ⅲ-7-1 『半分、青い。』調査回答者の「朝ドラらしくない」作品・ランキング上位5作品 (n=各作品視聴者) (%)

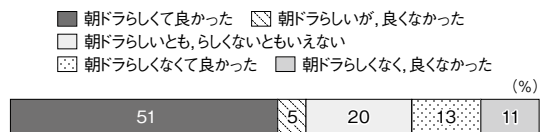
		「朝ドラらしくない」合計
1	純と愛(n=695)	28
2	半分、青い。(n=1,000)	24
3	あまちゃん(n=848)	12
4	まれ(n=824)	11
5	ウェルかめ(n=548)	7

いえば朝ドラらしくないと思う)と答えた人が多かったもの上位5作品を並べたものである。

『半分、青い。』を[朝ドラらしくない]と感じた人は24%(242人)、全体の約1/4おり、順位は2018秋・視聴者調査と同じく第2位である。[朝ドラらしくない]と感じた人が他作品に比べて多いことも、『半分、青い。』の特徴の1つといえるだろう。そこで、この[朝ドラらしい／らしくない]に注目して調査結果を分析することを通して、『半分、青い。』の特徴を明らかにしようと思う。

『半分、青い。』調査では、[朝ドラらしい][朝ドラらしくない]と感じた人それぞれに、[朝ドラらしい作品であることが・良かったかどうか][朝ドラらしくない作品であることが・良かったかどうか]を聞いている。その結果は図Ⅲ-7-1のように分かれた。[朝ドラらしくて良かった]という人が約半数、[朝ドラらしいが、良くなかった]という人は5%と大変少ない。『半分、青い。』が[朝ドラらしくない]という人24%は、[らしくなくて良かった]13%・[らしくなく、良くなかった]11%に分かれた。[朝ドラらしいとも、らしくないともいえない]という人(=[どちらともいえない]派)は20%だった。

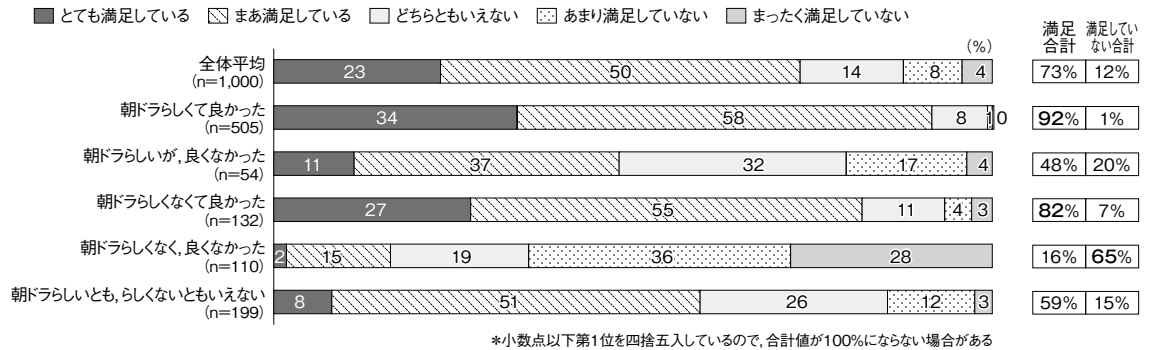
図Ⅲ-7-1 『半分、青い。』～「朝ドラらしいかどうか」とそれが「良かったかどうか」(n=1,000)



(b) 満足度

この5層の満足度をグラフにしたのが図Ⅲ-7-2である。[朝ドラらしい]と感じたか[朝ドラらしくない]と感じたかにかかわらず、そのこと

図Ⅲ-7-2 『半分、青い。』満足度の比較～「朝ドラらしいかどうか」とそれが「良かったかどうか」



を「良かった」と思えた人は作品全体の満足度が8～9割と高く、「良くなかった」と思った人は満足度が大変低い。特に「朝ドラらしくなく、良くなかった」という人は「満足していない」合計が65%にもものぼり、不満度が大変高い。つまり、「朝ドラらしい」と感じたにせよ「朝ドラらしくない」と感じたにせよ、そのことを「良かった」と思った人は、作品全体の満足度も高く、作品全体も「良い」と思ったのだといえよう。逆に、「良くなかったと思った」人は作品全体の満足度が低く、作品全体も「良いとは思えなかった」ということのようにである。

(c) 視聴意欲の高低

【総論編】Ⅱ-2「各作調査比較」で述べたように、各作調査では、視聴率には表れない視聴者の“熱”（視聴熱＝熱中度合い）を具体的に知る手立てとして、視聴意欲の高低や不満・視聴離脱意識の高低の質問を行っている²¹⁾。そして、【総論編】Ⅱ-2「各作調査比較」の分析では、『半分、青い。』は視聴意欲の高い要素と不満・視聴離脱意識ともに高いという特異性を示していた。この高視聴意欲要素、不満要素・視聴離脱意識を5層について見てみたのが図Ⅲ-7-3である。

ア 高視聴意欲要素と不満要素・視聴離脱意識

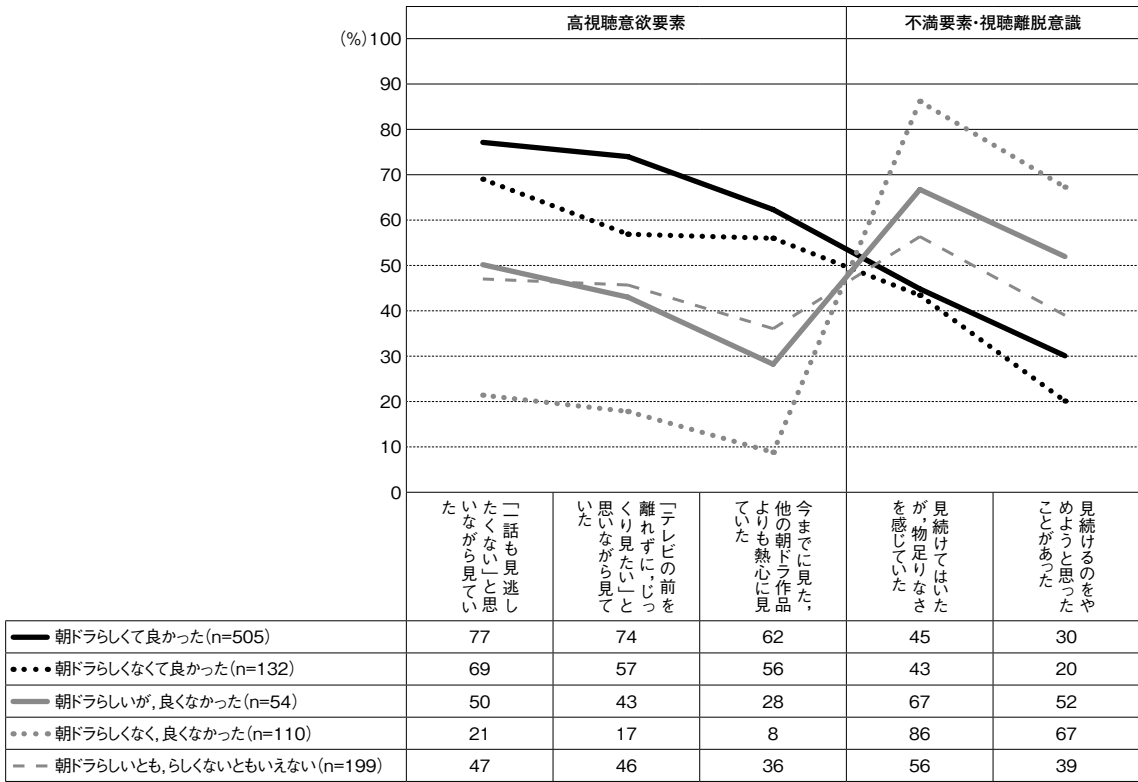
「朝ドラらしいと感じた」か「らしくないと感じた」かにかかわらず、そのことを「良かった」と思えた人は高視聴意欲要素である「「一話も見逃したくない」と思いながら見ていた」「テレビの前を離れずに、じっくり見たい」と思いながら見ていた」「今までに見た、他の朝ドラ作品よりも熱心に見ていた」が5割以上と高く、不満要素である「見続けてはいたが、物足りなさを感じていた」、視聴離脱意識の「見続けるのをやめようと思ったことがあった」が低い。

一方、「朝ドラらしい／らしくない」にかかわらず、それを「良くなかった」と思った人は、逆に視聴意欲が低く、不満や視聴離脱意識が高めであった。

「どちらともいえない」という人は両要素とも総じて中間レベルであった。

つまり、視聴熱（＝熱中度合い）の2極化は、「朝ドラらしい／らしくない」にかかわらず、それを「良かった」と思えた人と「良くなかった」と思った人の2極化であった。“良い”と感じなければ熱中はしないので、これは当然のことではあろう。

図Ⅲ-7-3 『半分、青い。』～視聴熱:高視聴意欲要素, 不満要素・視聴離脱意識の比較 (「そう思う」合計)



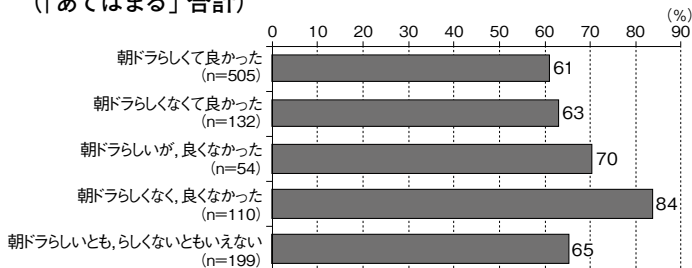
① モヤモヤ感は全層で高い

低視聴意欲要素に含まれると思われる「見ていて気持ちがモヤモヤしたり、すっきりしないことがあった」について見てみると図Ⅲ-7-4のように、[良くなかった]派で「あてはまる」と答えた人が7～8割台とより一層多いものの、どの層でも6割以上とかなり多くの人々が「あてはま

る」と答えていた。なんと、ここでは視聴熱の2極化は起きていないのである。[良かった]派・[良くなかった]派でモヤモヤの原因やレベルが異なるのかもしれない。

こうした各層における“評価の違い”の理由・原因は何なのか…。そして、何をもって[朝ドラらしい/らしくない]と判断したのか、いくつかのファクターに分けて見ていこう。

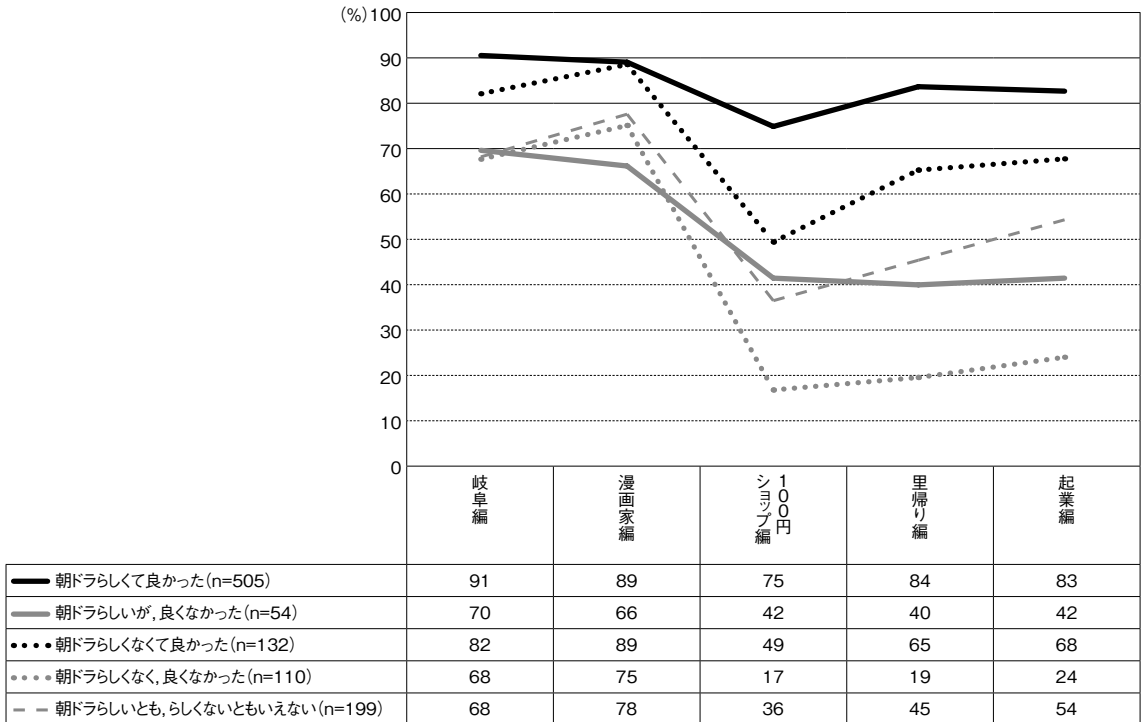
図Ⅲ-7-4 『半分、青い。』～見ていて気持ちがモヤモヤしたり、すっきりしないことがあった (「あてはまる」合計)



(d) パート別評価

まず、パート別の評価から見ていこう。調査では、『半分、青い。』を物語の展開に沿って5つの時期に分け、良かったかどうかを[良かった][まあ良かった][どちらともいえない][あまり良くな

図Ⅲ-7-5 『半分、青い。』～パート別評価の比較（「良かった」合計）



かった] [良くなかった] の5段階で聞いている。良かった合計 (= [良かった] + [まあ良かった]) を、この5層についてグラフにしたのが図Ⅲ-7-5である。

最も評価が高かったパートは、[朝ドラらしいと思った] 派 (= [朝ドラらしくて良かった] 層と [朝ドラらしいが、良くなかった] 層) では冒頭の「岐阜編」、[朝ドラらしくないと思った] 派 (= [朝ドラらしくなくて良かった] 層と [朝ドラらしくなく、良くなかった] 層)、および [どちらともいえない] 派は第2期の「漫画家編」であった。

「岐阜編」は、主人公・鈴愛の誕生から高校卒業までを描いている。主人公が失聴という障害を持っているという設定は朝ドラには珍しいが、温かい家族に囲まれて成長し、友情を育んでいくという部分はおおむね朝ドラとしてオーソドックスな物語展開であったといえよう。[朝ド

ラらしさ] を求める人々にフィットするパートであったと思われる。

「漫画家編」は、一人前の漫画家になるために修業・努力に明け暮れる日々と、恋愛に心が揺れ動く主人公の青春期が描かれ、いわゆるトレンドードラマ的なテイストも色濃くあるパートだったといえよう。当作品を「朝ドラらしくないと思った」人たちからの評価が高いというのも、うなずける結果だったのではないだろうか。

そして、どの層でも第3期「100円ショップ編」で評価が下がる。この時期は、主人公・鈴愛が漫画家志望の夢が破れたあと、転職・結婚・出産・離婚といった人生の大きなイベントを次々体験しながらも、確たる方向性を見いださずにいた時期である。明確な目標や方向に向かって突き進むことが多い朝ドラの主人公とは正反対の主人公であったといえるかもしれな

い。[どちらともいえない]派と[朝ドラらしくない]派の下落幅は4割以上と大変大きい。この「100円ショップ編」は、視聴者が『半分、青い。』を[朝ドラらしい]と思えなくなるうえで大きな要因になっている可能性が感じられる。

そして、後半2パートでは、新たな人生・生活を切り開くために、故郷・岐阜に戻って五平餅を目玉商品とするセンキチ・カフェを開店したり、再び東京に戻って“ひとり企業(発明家)”や五平餅の移動販売など、いろいろ起業を試みるが、“その場しのぎ”的な感じも漂い、なかなか展望の開けない日々が長く続く。そして最終盤で幼なじみ律との仲が回復し、一緒に取り組んだ新しいコンセプトの扇風機・そよかぜファンの開発に成功する。そよかぜファン製作発表の日に東日本大震災が起り、親友の裕子が犠牲になる。そして、ドラマは亡くなった親友の思いも受け継いで、鈴愛が律との新たな人生を歩み出すところで終わる。この後半の2パートでは、[朝ドラらしくて良かった]層と[朝ドラらしくなくて良かった]層は評価が回復傾向にあり、それぞれ8割台・7割弱の評価まで回復したのに対し、[朝ドラらしいが、良くなかった]層と[朝ドラらしくなく、良くなかった]層はほとんど回復していない。[どちらともいえない]層も回復傾向にあるものの、最終的には54%と5割を少し超えるレベルにとどまった。この結果を見ると、後半2パートを[良かった]と思えたかどうか、作品全体の評価を大きく左右したことがうかがえる。

(e) ドラマ主要要素評価

この5層について、ドラマ主要要素(11項目)の評価を聞いたのが図Ⅲ-7-6である。[良かった][まあ良かった][どちらともいえない][あま

り良くなかった][良くなかった]の5段階で聞き、良かった合計([良かった]+[まあ良かった])を示した。

[良かった]派(=朝ドラらしいと感じたか、らしくないと感じたかにかかわらず、そのことを[良かった]と思った人たち)では、11項目すべて5割を超える人が「良かった」と答えており、ドラマ主要要素の評価が総じて高い。

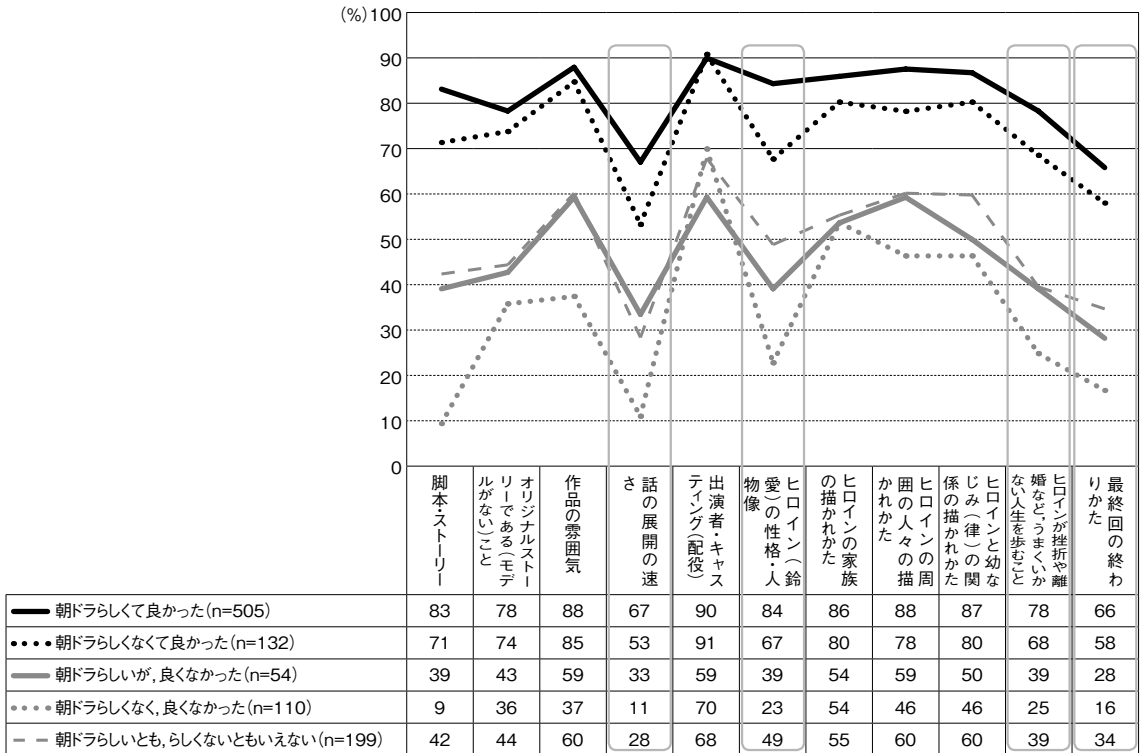
[どちらともいえない]派は、この2層に次いで高く、[良かった]という人が5割を超える項目が5つある(「作品の雰囲気」60%・「出演者・キャスト」68%・「ヒロインの家族の描かれかた」55%・「ヒロインの周囲の人々の描かれかた」60%・「ヒロインと幼なじみ(律)の関係の描かれかた」60%)。「ヒロイン(鈴愛)の性格・人物像」も49%と5割には届かなかったが低くはない。

[朝ドラらしいが、良くなかった]層は[どちらともいえない]派と同じ項目が5割を超えているが、「ヒロイン(鈴愛)の性格・人物像」「ヒロインと幼なじみ(律)の関係の描かれかた」が[どちらともいえない]派より1割低く、主人公に対してややわだかまりがありそうである。

一方、[朝ドラらしくなく、良くなかった]層は数値が低い項目が少なくない。その中で「出演者・キャスト(配役)」と「ヒロインの家族の描かれ方」の2項目は5割を超えており、特に「出演者キャスト」は70%と大変高い。「ヒロインの周囲の人々の描かれかた」「ヒロインと幼なじみ(律)の関係の描かれかた」も46%と低くはなく、「らしくなく、良くなかった」人たちは主人公周辺の出演者の魅力のみで見続けていたのではないかと推測されるような結果であった。

もう1つ注目しておきたいのは、「話の展開の

図Ⅲ-7-6 『半分、青い。』～ドラマ主要要素評価の比較（「良かった」合計）



速さ」「ヒロイン(鈴愛)の性格・人物像」「ヒロインが挫折や離婚など、うまくいかない人生を歩むこと」と「最終回の終わり方」の4項目である。[朝ドラらしい/らしくない] いずれにせよ[良かった]という人はこの4項目も高めの評価だが、[良くなかった]派では1割台～3割台とかなり低い評価である。[どちらともいえない]派でも「話の展開の速さ」「ヒロインが挫折や離婚など、うまくいかない人生を歩むこと」と「最終回の終わり方」の3項目は3割台以下にとどまっている。

「話の展開の速さ」「ヒロイン(鈴愛)の性格・人物像」「ヒロインが挫折や離婚など、うまくいかない人生を歩むこと」「最終回の終わり方」の4要素は、作品の評価を分ける大きな要因になった可能性が感じられる。そして、「ヒロイン

が挫折や離婚など、うまくいかない人生を歩むこと」と「最終回の終わり方」は中盤から後半パートにかけての要素であり、前節(d)パート別評価で後半パートが全体評価を左右したことがうかがえたのと一致している。

(f) 作品のイメージ

作品のイメージについては、【総論編】Ⅱ-3「朝ドラのイメージ」で述べたように、情緒的要素と機能的要素に分け、『あさが来た』以降の7作品について各作調査で共通の項目を設定して調査している。ここでは、その7作品の平均値(=近年の朝ドラの平均的イメージ)と比較することで『半分、青い。』の特徴を析出してみたいと思う²²⁾。

<情緒的イメージ>

図Ⅲ-7-7は、[良かった]派と[朝ドラらしいと思う]層と[朝ドラらしくないと思う]層を7作品平均値と比較したグラフである。作品イメージの分析パートのグラフは7作品の平均値が高い順に項目を並べた。

[朝ドラらしくて良かった]層のグラフは7作品平均値グラフとグラフの形が近い部分が多い。7作品平均値で5割以上と高くて近年の朝ドラの中心的イメージと考えられる「前向きな」「明るい」「健全な」「活気がある」「さわやかな」がすべて5割以上と高く、加えて「安心する」45%・「笑える」51%も高めである。また『半分、青い。』調査で追加した「心あたたまる」は70%と最も高かった。この人たちは、『半分、青い。』にほかの朝ドラ同様の朝ドラらしい情緒的イメージを感じとりつつ、より一層ドラマを楽しんでいたようだ。そうした中で、図中の□印のように「優等生的」は20%とかなり低く、「斬新な」が38%と7作品平均値23%よりかなり高い。「考えさせられる」も4割に達している。品行方正とは

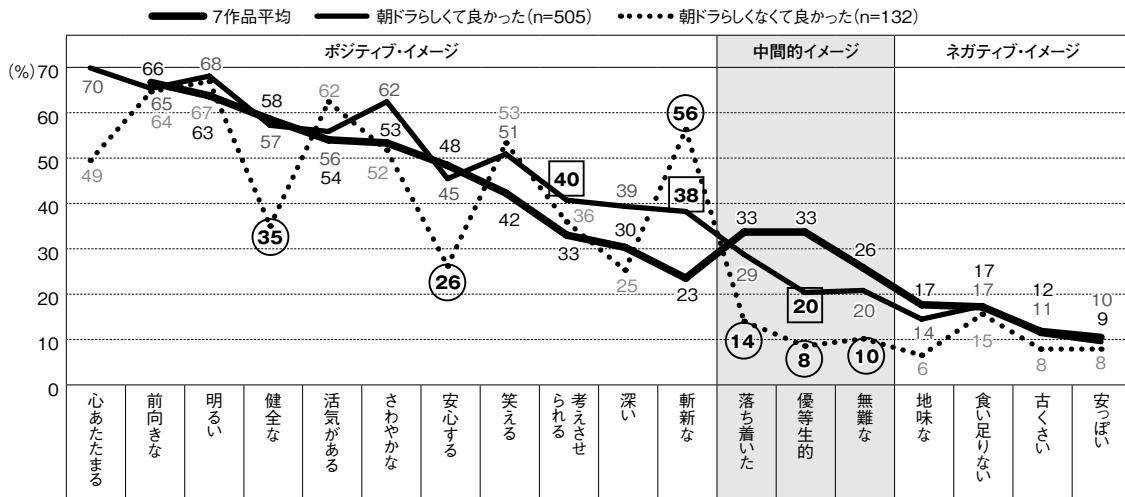
言いがたい主人公や、夢破れたあとの人生を描くなど、当作品の挑戦的な要素をある程度受け止めていることもうかがえる。

[朝ドラらしくなくて良かった]層は、グラフが凸凹している。「前向きな」「明るい」「活気がある」「さわやかな」「笑える」は、7作品平均値グラフと同様に高い。近年の朝ドラのポジティブなイメージの多くを備え持つ作品であると感じられていたといえよう。その一方で、図中の○印のように「健全な」35%・「安心する」26%・「落ち着いた」14%・「優等生的」8%・「無難な」10%はかなり低めであり、「斬新な」は56%と高い。当作品の挑戦的な要素を[朝ドラらしくて良かった]層よりも一層強く感じとっているように推察される。

図Ⅲ-7-8は、[良くなかった]派の[朝ドラらしいと思う]層と[朝ドラらしくないと思う]層、および[どちらともいえない]派のグラフである。

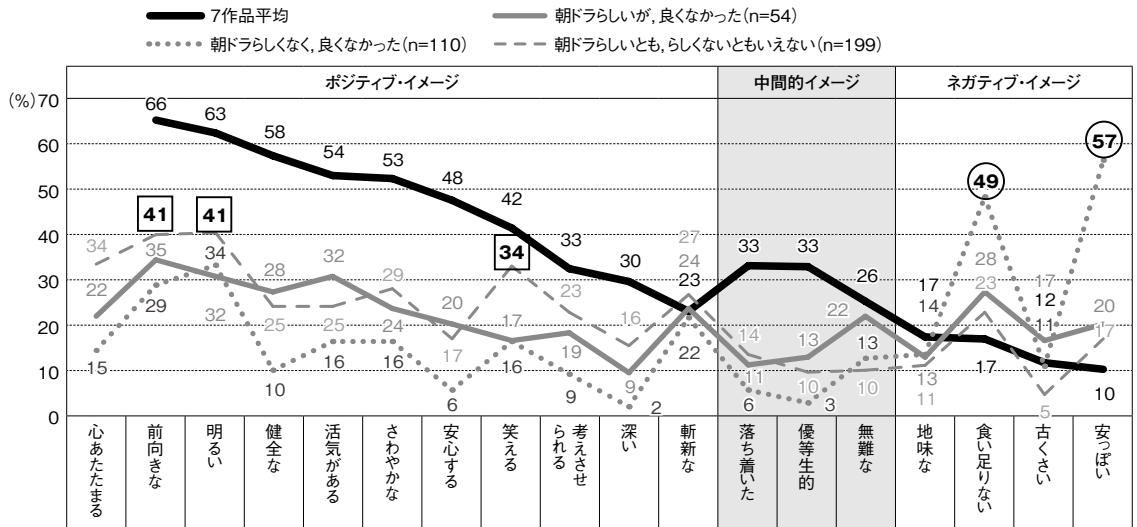
[朝ドラらしいが、良くなかったと思う]層は、ポジティブ・イメージで5割を超える項目はなく、

図Ⅲ-7-7 『半分、青い。』～情緒的イメージ比較（「そう思う」）
 <良かった派>～[朝ドラらしい/らしくない]比較



※「心あたたまる」は「半分、青い。」調査で追加した

図Ⅲ-7-8 『半分、青い。』～情緒的イメージ比較（「そう思う」）
 <良くなかった派・どちらともいえない派>～[朝ドラらしい／らしくない] 比較



※「心あたたまる」は「半分、青い。」調査で追加した

情緒的イメージがあまり高くないが、その一方で「地味な」「食い足りない」「古くさい」「安っぽい」といったネガティブ・イメージの数値も1～2割台と低い。

「どちらともいえない」層も高い項目は少ないが、図中□印のように「前向きな」「明るい」はともに4割台に乗り、「笑える」が34%であるなど、「朝ドラらしいが、良くなかったと思う」層よりは若干イメージの良い部分もあったようだ。

「朝ドラらしくなく、良くなかった」層は、ポジティブ・イメージがかなり低い。近年の朝ドラの代表的イメージ(=7作品平均値で数値の高い項目)が総じて低く、まさに「朝ドラらしい」とは思っていないようだ。また、図中○印のように、ネガティブ・イメージのうち「食い足りない」49%・「安っぽい」57%が高い。作品の出来にも不満が高いのかもしれない。いずれにしろ、気持ちよく楽しんで見られず、物足りなさも感じていた様子がうかがえる。

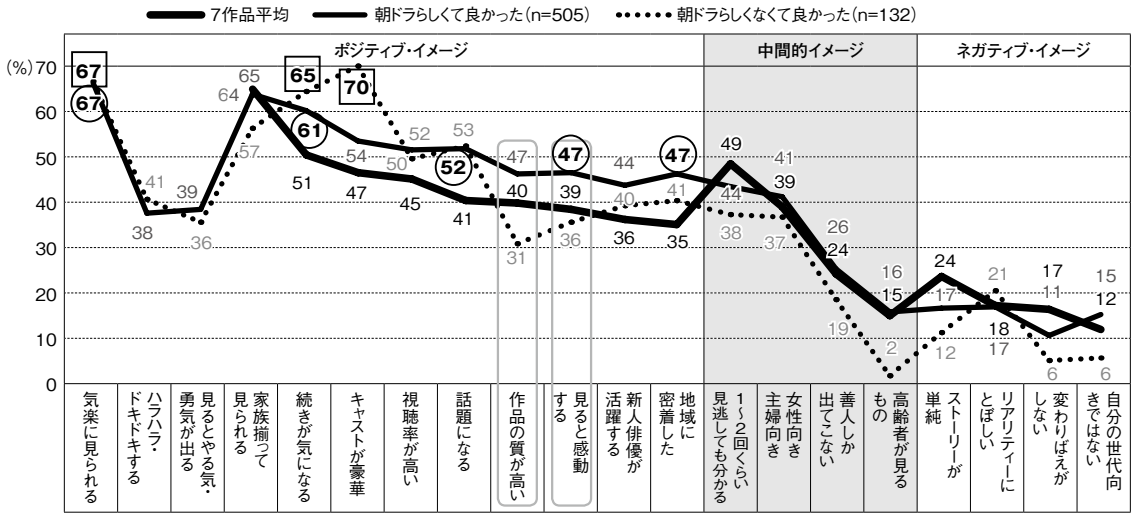
<機能的イメージ>

機能的イメージ「良かった派」のうち、「朝ドラらしくて良かった」層と「朝ドラらしくなくて良かった」層、および7作品平均値を比較したのが図Ⅲ-7-9である。

「朝ドラらしくて良かった」層は、情緒的イメージと同様に7作品平均値のグラフに近く、好評度が高いが、特に「続きが気になる」61%・「話題になる」52%・「地域に密着した」47%は7作品平均値より1割以上高く、また当調査で追加した「気楽に見られる」が67%と大変高い(図中○印)。作品を話題にしなが楽しんで見ていたことが伝わってくる。

「朝ドラらしくなくて良かった」層も、7作品平均値グラフに近い。そして、「続きが気になる」65%・「キャストが豪華」70%・「気楽に見られる」67%は6割を超える高さで(図中□印)、より一層ドラマを楽しんで見ていたことがうかがえる。しかし、「作品の質が高い」と「見ると感動する」は「朝ドラらしくて良かった」層より1割あ

図Ⅲ-7-9 『半分、青い。』～機能的イメージ比較（「そう思う」）
 <良かった派>～[朝ドラらしい／らしくない] 比較



※「気楽に見られる」「ハラハラドキドキする」「見るとやる気・勇気が出る」は『半分、青い。』調査で追加した

まり低い。情緒的・機能的の両イメージを通して見てみると、この層はドラマとして存分に楽しみながら、当作品の挑戦的な要素を「斬新な朝ドラらしくないもの」と捉えている。しかし、作品の質や感動性はやや低い作品と認めているようだ。

図Ⅲ-7-10は「良くなかった」派の「朝ドラらしいと思う」層と「朝ドラらしくないと思う」層、および「どちらともいえない」派の機能的イメージのグラフである。

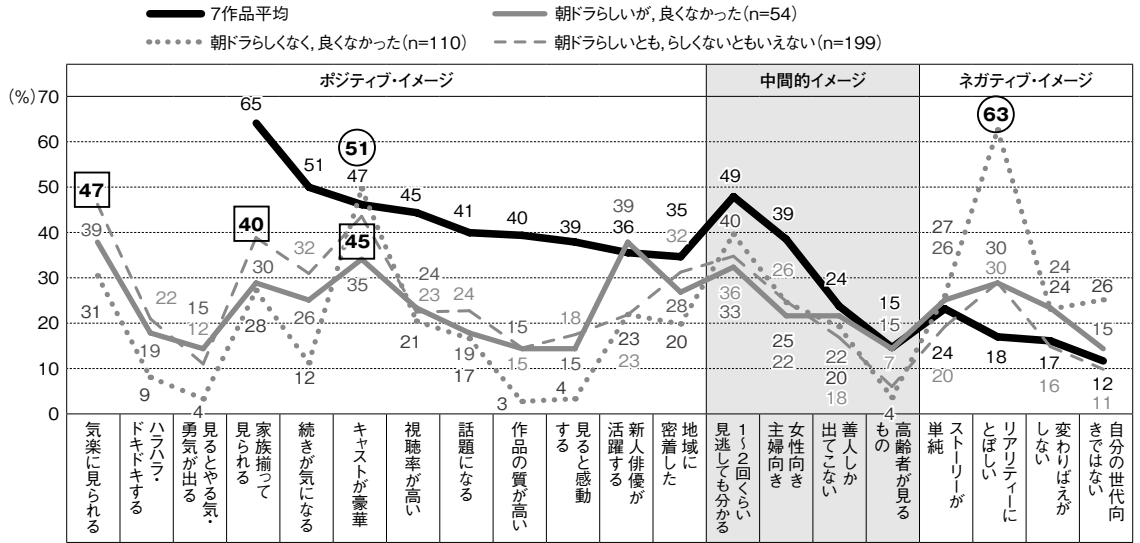
「朝ドラらしいが、良くなかった」層は、情緒的イメージ同様に4割を超えるような高評価のポジティブ・イメージはないし、ネガティブ・イメージも特に高いものはない。この層が何をもち『半分、青い。』を「朝ドラらしい」と感じ、「良くない」と思ったのかは、イメージからはよく分からなかったというべきであろう。

「どちらともいえない」層も、高評価項目は少ないが、「家族揃って見られる」40%・「キャスト

が豪華」45%・「気楽に見られる」47%は4割超で(図中□印)、「朝ドラらしいが、良くなかった」層よりは、見やすく楽しめる要素も少しはあるドラマと感じていたようだ。

「朝ドラらしくなく、良くなかった」層は、高評価の項目が少なく、「リアリティーにとぼしい」が6割を超える高さを示すなど、作品を楽しめなかった様子がうかがえる。この層は情緒的・機能的両イメージともに、近年の朝ドラの代表的イメージ(=7作品平均値で数値の高い項目)が総じて低く、当作品を「朝ドラらしくない」と感じていることが見えてくるが、同時に「リアリティーに乏しく」「安っぽくて」「食い足りない」評価の低いドラマと感じていることも分かる。そうした中で、「キャストが豪華」のみがポジティブ・イメージで5割を超えている(図中○印)。前述の(e)ドラマ主要要素評価でも、この層は「出演者・キャスティング」のみ評価が特に高かった。「朝ドラらしくなく、良くなかった」層は、ほとんど唯一“出演者”要素を楽しみに見続け

図Ⅲ-7-10 『半分、青い。』～機能的イメージ比較（「そう思う」）
 <良くなかった派・どちらともいえない派>～[朝ドラらしい／らしくない] 比較



※「気楽に見られる」「ハラハラドキドキする」「見るとやる気・勇気が出る」は『半分、青い。』調査で追加した

ていたとさえ思わせる結果であった。これは、“出演者”要素が視聴者に作品を見続けさせる強い力を持っているということでもあろう。『わろてんか』でも、視聴者の作品評価を下支えたのは主人公の周囲の人物であったが²³⁾、「出演者・キャスティング」の重要性が再度確認されたといえよう。

(g) 印象に残る登場人物

表Ⅲ-7-2は、5層の人たちで5割以上の人が

「印象に残る登場人物」として挙げたキャストを列挙したものである。その人数は「朝ドラらしくて良かった」層は6人、「朝ドラらしいが、良くなかった」層は3人、「どちらともいえない」層4人、「朝ドラらしくなくて良かった」層9人、「朝ドラらしくなく、良くなかった」層8人であった。ここでもやはり、ドラマ主要要素や機能的イメージで“出演者”要素の評価が高かった「朝ドラらしくない」派で、5割以上の人が選んだ登場人物の数が多い。しかも、漫画家編のパートで

表Ⅲ-7-2 『半分、青い。』～印象に残る登場人物（5割以上）比較

	役名	榎野 鈴愛	萩尾 律	秋風 羽織	榎野 晴	萩尾 和子	榎野 仙吉	浅葱 裕子	藤堂 誠 (ボクテ)	菱本 若菜	朝井 正人
	出演者	【永野 芽郁】	【佐藤 健】	【豊川 悦司】	【松雪 泰子】	【原田 知世】	【中村 雅俊】	【清野 菜名】	【志尊 淳】	【井川 遥】	【中村 倫也】
朝ドラらしくて良かった (n=505人)	順位 (%)	① (93)	② (72)	③ (63)	④ (57)	⑤ (53)	⑥ (52)				
朝ドラらしいが、良くなかった (n=54人)	順位 (%)	① (70)	② (54)	② (54)							
朝ドラらしくなくて良かった (n=132人)	順位 (%)	① (87)	② (80)	③ (74)	⑨ (53)	⑤ (57)	⑥ (55)	⑥ (55)	④ (61)		⑧ (54)
朝ドラらしくなく、良くなかった (n=110人)	順位 (%)	③ (69)	② (72)	① (83)	⑦ (56)	④ (59)	⑤ (57)	⑧ (50)		⑥ (56)	
どちらともいえない (n=199人)	順位 (%)	① (76)	② (66)	③ (65)	④ (52)						

□ 注目する点

活躍した人物たちが多く選ばれており、パート別評価の高さと一致している。

そして、[朝ドラらしくなく、良くなかった]層では秋風83%がトップで、ヒロイン鈴愛69%は14%低い第3位であった。この層が、(e)ドラマ主要要素評価で「ヒロインの性格・人物像」の評価が23%と大変低かったことに通じる傾向を示した。

(h) ヒロイン鈴愛に対する印象

前述の「印象に残った登場人物」においては、主人公・鈴愛は[朝ドラらしくて良かった]層93%から[朝ドラらしくなく、良くなかった]層69%までバラつきがあるものの、必ずしも数値は低くはなかった。「印象に残る」ということは、良い印象の場合も悪い印象の場合もあるので、これだけでは主人公・鈴愛の評価は分からない。そこで、主人公・鈴愛の印象について、あえてネガティブな印象を並べて、[そう思う]か

どうかを聞いた(図Ⅲ-7-11)。

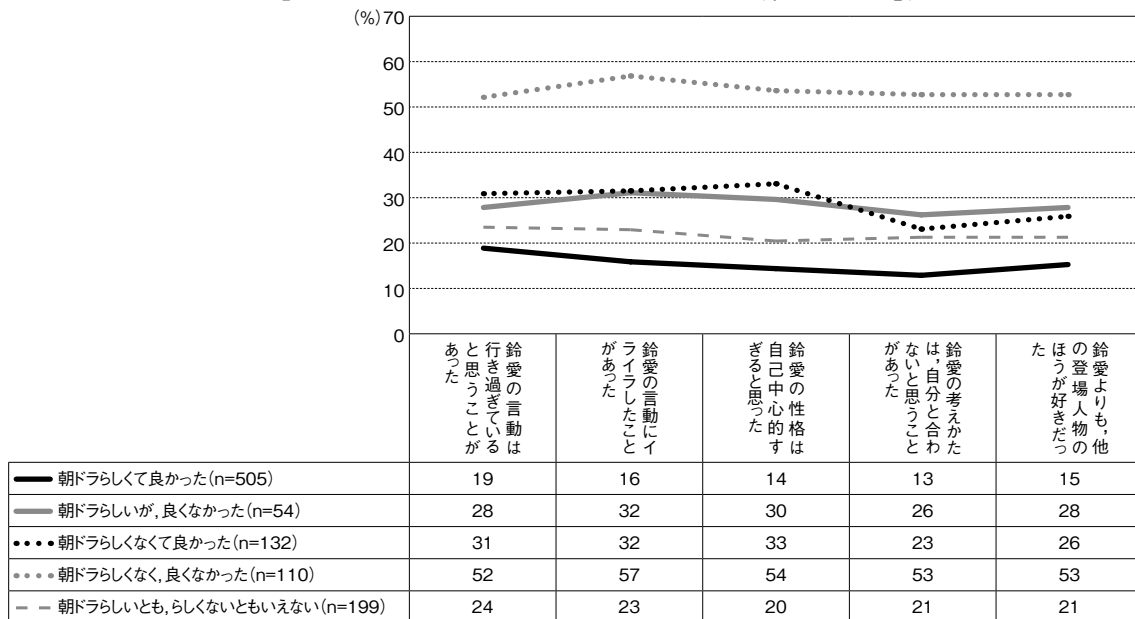
[朝ドラらしくなく、良くなかった]層は5項目すべて5割以上に達し、主人公・鈴愛の印象が良くないことが示された。[朝ドラらしくなく、良くなかった]層にとっては、主人公・鈴愛の“ありよう”が受け入れられなかったようだ。

それ以外の4層は、どの項目も3割台以下で、主人公・鈴愛の印象はさほどネガティブではないようだ。

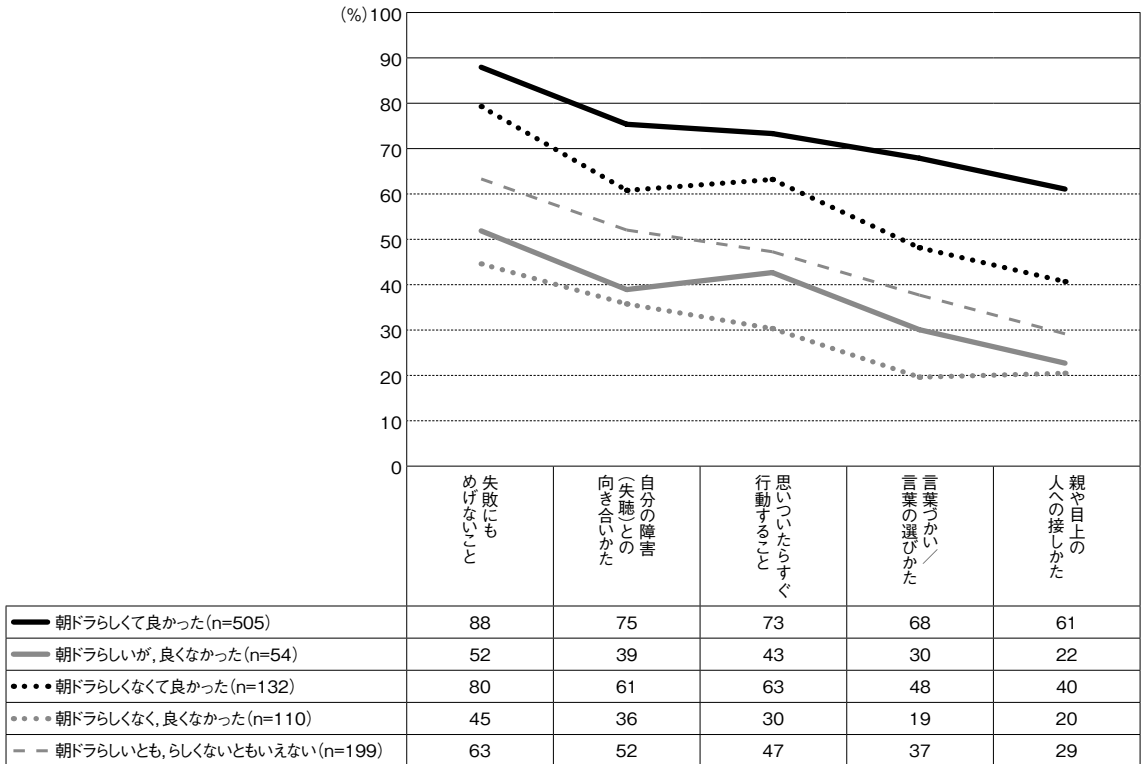
今回の調査では、もう少し踏み込んで、主人公・鈴愛の具体的な言動を提示して、好ましい(好き)と思ったかどうかを[好ましい(好き)][どちらともいえない][好ましくない(嫌い)]の3段階で聞いている。この質問で、主人公・鈴愛の具体的な言動に対して、5層で感じかたに違いがあることが分かった。

図Ⅲ-7-12のように、主人公・鈴愛の言動5項目をすべて「好ましい」と肯定的に受け止めたのは[朝ドラらしくて良かった]層のみであっ

図Ⅲ-7-11 『半分、青い。』～主人公・鈴愛の印象～ネガティブな印象(「あてはまる」)



図Ⅲ-7-12 『半分、青い。』～主人公・鈴愛の言動について（「好ましい（好き）」）



た（全項目6割以上）。

「朝ドラらしくなく、良くなかった」層は「失敗にもめげないこと」だけは45%と比較的高いが、それ以外の項目では「好ましい（好き）」という人は3割以下と低い。

「自分の障害（失聴）との向き合いがた」は「良かった」派と「良くなかった」派で評価が分かれた。「どちらともいえない」層は両派の中間の52%であった。

「思いついたらすぐ行動すること」は、「良かった」派は「好ましい（好き）」という人が6～7割と多く好意的に受け止められているが、それ以外の3層では3～4割台にとどまり、「思慮不足の行動」と感じた人が少なくないようであった。

「言葉づかい／言葉の選びかた」「親や目上の

人への接しかた」は「らしくなくて良かった」層でも5割に届かず、「良くなかった」派や「どちらともいえない」派では2割前後～3割台と低く、「好ましい」という人は少ない。「言葉づかい／言葉の選びかた」「親や目上の人への接しかた」の2項目は、「良くなかった」派・「らしくなくて良かった」層・「どちらともいえない」派で主人公・鈴愛の評価を引き下げていると考えられそうだ。

5層の鈴愛の言動に対する感じかたの違いをまとめると、

- ・「朝ドラらしくて良かった」層：鈴愛を全面的に肯定し好感を持って見ていた。
- ・「朝ドラらしくなくて、良かった」層：基本的には鈴愛に好感を抱きながらも、「言葉づかい／言葉の選びかた」「親や目上の人への接しか

- た]については若干懸念を持って見ていた。
- ・[朝ドラらしいが、良くなかった]層と[どちらともいえない]層：「言葉づかい／言葉の選びかた」「親や目上の人への接しかた」に加えて、行動に思慮不足を若干感じていた。
 - ・[らしくなく、良くなかった]層：鈴愛の多くの言動・ありように大きな反発を感じていた。

に分かれるように思われる。(e)ドラマ主要要素評価において、「ヒロインの性格・人物像」の評価が5層で分かれていたが、それは、主人公・鈴愛の、いわゆる“朝ドラ・ヒロインらしくない”言動を、どう感じ、好感を持てたかどうかに由来する側面があるように思われる。

(i) 展開を楽しめたのか、ついていけなかったのか

『半分、青い。』は、物語がこの先どう展開していくのかが読めないことが少ないドラマであるとの声があった。そこで、今回の調査では、「物語の意外な展開」を楽しめたのか、ついていけないと思ったのかを聞いてみた。その結果が図Ⅲ-7-13である。「物語の意外な展開に、ついていけないと思うことがよくあった」という人は、5層すべてで5割以上と多かった。やはり、『半分、青い。』は、思いがけない展開が多い作

品だったようで、それに「ついていけない」と感じていた人も多かったようだ。

その一方で、[朝ドラらしくて良かった]層と[朝ドラらしくなくて良かった]層では「物語に意外な展開が多く、楽しめた」という人も8割前後と大変多かった。(e)ドラマ主要要素評価において、「話の展開の速さ」は[良かった]派とそれ以外の3層で評価が大きく分かれていたが、それは、「物語の意外な展開に、ついていけない」と思いながらも、その「意外な展開」を「楽しい」と思えたかどうかの違いによるもののようなものである。

(j) まとめ

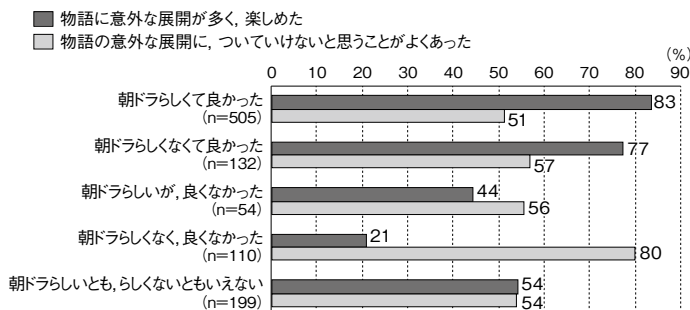
以上、これまでで行ってきた分析をもとに、調査で行った自由記述を援用しながら、5層についてまとめてみよう。

[朝ドラらしくて良かった]層

全体の51%を占める多数派。満足度92%。従来の朝ドラ作品同様に、『半分、青い。』を明るく前向きな作品と感じ、楽しめた人たちである。自由記述でも、

「元気な女性・自分の障害にも明るい・いつも前向き・見ていてさわやかさを感じた」(女)

図Ⅲ-7-13 『半分、青い。』～「意外な展開」に対する気持ち



性60代)

「さわやかで前向きなヒロインは朝ドラにぴったりで見ていて元気が出た」(女性30代)
 「深夜ドラマとか社会派ドラマみたいに頭を使って社会や人生を斜めから見るようなドラマじゃなく、人生の幸せと多少の困難を明るいテンポで描いているのが朝ドラらしいと思った」(男性20代)

「さわやかなストーリーで、ハラハラすることや、どうなるんだろうということもあり、楽しめた」(男性70代)

「バタバタしたが楽しかった」(女性70代)

「展開の速さについていけなくなることもあったが、最後にそうした課題すべてを乗り越え自分らしく輝く主人公の姿がよかった」(男性20代)

といったものが多い。

挑戦的な要素を、「朝ドラらしくない」とまでは思わず、「新鮮」と捉え、楽しんだ人も多い。

「今までの朝ドラとちょっとちがって新鮮でした」(女性20代)
 「鈴愛が優等生ではないが前向きなところが良い」(女性50代)
 「朝ドラの中でも突拍子のないことをしたりとやや変わった主人公だったので、逆にそれが次はどんなことをするのだろう、と気になった(良かった)」(男性30代)

品行方正とはいえない鈴愛を等身大と感じ、共感・親しみを持った人がいた。

「苦難に負けない姿勢を貫くヒロインがとても素敵であり、身近にいそうな雰囲気があって親しみを感じたから(良かった)」(男性50代)
 「人生成功も失敗、挫折もある。現代を舞台に等身大の主人公が経験することが心配、応援、共感できた作品」(女性40代)

展開についていけないという思いはあったが、それらも含めて意外な展開を楽しめた人も少なくない。

「毎日何かが起こる気がして見るのが楽しかった」(女性60代)
 「展開の意外さが良かった」(女性60代)

[朝ドラらしいが、良くなかった] 層

全体に占める割合は5%とごく少数派。満足度48%。「いわゆる朝ドラらしい」部分を見つけて「朝ドラらしい」と感じながら、それを破っていく展開(挫折後の人生パートなど)が不満だったようだ。自由記述でもそうした発言が目立った。

「ヒロインの元気で明るく突っ走っていく姿や、幼なじみのさわやかな印象、家族や友人との関わりで成長していくストーリーなどは良いと感じた。しかし、急展開が不満だった」(男性20代)

「漫画家として出てきたのにそれを途中であきらめてやめてしまうシーン。何をしたいのかははっきりしなくて分かりにくい」(男性70代)

「いい子ちゃんばかりが主人公じゃなくてもいいと思うが、鈴愛みたいな自己中(心的)な人とはかかわりたくないで(良くなかった)」(男性40代)

「主人公の成長っぷりに理解が追いつかない」(男性30代)

[朝ドラらしくなくて良かった] 層

全体に占める割合は13%。満足度82%。挑戦的な要素を「斬新」で「朝ドラらしくない」と感じた人。そして、そうした要素を大いに楽しんだ人。また、「ついていけない展開」も楽しめた人である。

「ユニークなシーンがたくさんあって、朝ドラらしくないけどとても新鮮でよかった」(女性20代)

「朝ドラらしくないし、それがいいとも思わないが、もうとにかく理屈抜きに圧倒的に面白く、録画してまで見続けたのは今回が初」(男性50代)

「刺激の少ない大人しい無難な感じのする今までの朝ドラと違い、リアリティはないが人生ってそんなものかもしれないと思わせるような突然だったり流されたりするような展開に珍しさを感じたし面白かった」(女性30代)

「律と結ばれると思ったのに他の人と結婚して子どもが生まれたり、漫画家の夢をかなえていくのかと思ったら挫折してやめてしまったり、でもやりたいことを見つけて向かっていく姿勢が良かった」(女性30代)

この層には、従来の朝ドラにマンネリ感を覚えていた人も少なからずいる。

「いつも同じような朝ドラパターンでは息苦しく感じるので、“らしくない”雰囲気よかった」(女性40代)

「近年の朝ドラはマンネリ化している感じがしていたから、朝ドラらしくないところがある意味面白かった」(女性50代)

「新しい試みが感じられたのは良かった。それが成功していないところもあったが、マンネリよりは良い」(男性50代)

[朝ドラらしくなく、良くなかった] 層

全体に占める割合は11%。満足度16%と低く、満足していない合計は65%に達する。当作品の挑戦的要素に対する評価が低く、ヒロイン・鈴愛の言動にも否定的。“出演者要素”が視聴をつなぎとめた。

「「死んでくれ」などのセリフ、鈴愛の自己中心的で共感できない性格、リアリティに欠けた設定が好きではなかった」(女性10代後半)

「配役の個性があり、ワクワク見ることができた。(中略)結婚や人つきあう姿勢や別れが軽すぎてついていけないときがあり、子どもが子どもを産んだような感じでリアリティがなかった」(女性50代)

「役者陣はおおむね良かった。(中略)話の転がし方、登場人物の性格、演出などに悪い意味で民放トレンドドラマみたいな安っぽさを感じた。漫画家を志すのを途中で諦めてからどんどん話がおかしくなっていった気がする」(女性30代)

「俳優陣はとても素晴らしいが(中略)主人公は何をしたかったのか…人を踏み台にして簡単に投げ出す人生だった」(女性40代)

「キスシーンとか一緒に毛布にくるまるとかやめてほしい。朝ドラはさわやかで明るくて、家族の誰でも楽しめるものであってほしい」(女性50代)

震災エピソードに強く反発する発言もあった。

「悲しかったりやりきれない思いになった。311で裕子ちゃんが亡くなったがあと数回で最終回というときに、なぜ今?と思った」(女性50代)

「わざわざ東日本大震災を持ち出すこと自体が理解できない」(女性50代)

「震災をドラマに出してくるなんてひどいと思った。被災した方々の傷をえぐるようなことをしてほしくなかった。北川悦吏子さんのドラマはもう二度と見たくない」(女性30代)

[どちらともいえない] 層

全体に占める割合は20%。満足度59%。前半パートは好評で、後半パートが不評という自由記述が多い。前半は“朝ドラらしく”“後半は

朝ドラらしくない”と感じているようで、その結果 [朝ドラらしいともらしくないともいえない] という判断に至ったようだ。そして、作品全体の満足度も中程度 (59%) となったようだ。

「漫画家篇までは、ストーリー、配役ともに最高でした。しかし、物語が進むにつれ、一貫性がなかったり、出演者が多かったり、ストーリーが急展開すぎたり、主人公の描きかたが物足りなかった」(男性30代)

「家族の絆や律を含めた友人の絆は良かったが、ポロポロ話題が目まぐるしく変わりすぎ」(女性60代)

「ベテラン俳優さんの演技力は良かったが、話がぶっ飛ぶところ。スズメの幼いところ。いろいろとあり得ないことが起こるところは良くなかった」(女性30代)

「セリフなどに面白みを持たせて、笑って見られるところは良かったが、展開が変わりすぎて、ちぐはぐな感じがした」(男性40代)

今回の調査で分かった“朝ドラらしさの感じかた”と“作品評価に影響した主要素”は次の4つである。

- ①主人公の人物像…たとえば、品行方正か、等身大 (自己中心的) か
- ②主人公の歩む人生…たとえば、一直線に目標に向かって突き進むのか、挫折し模索しながら歩むのか
- ③主人公の言動…たとえば、言葉づかい、目上の人との接しかた、行動の思慮深さなど
- ④意外な展開…楽しめたかどうか

これらを、[朝ドラらしい／らしくない] と思ったのかと、「面白いもの」「意味のあるもの」と思ったのか否かの、かけ合わせで5層に分かれたようだ。

今回の調査では、『半分、青い。』の視聴者

の中に占める割合としては [朝ドラらしくて良かった] 層が5割と多数派であるが、その人たちは求めるものや感じかたが異なる人々も存在していた。中には、今までの朝ドラにマンネリ感を覚えている人もいた。

そして、この多様な人たちは途中脱落せず最後まで『半分、青い。』を見続けた人たちでもある。朝ドラ視聴者は、多少面白くなくても見続ける傾向があるが²⁴⁾、許容範囲広く見続ける中で、自分なりに楽しめる部分を見つけ出す力を持った人々でもある²⁵⁾。今回の調査で見たような視聴者の多様性と、作品を楽しむ力が、『半分、青い。』のような従来の朝ドラとは異なる要素を持つ作品 (= 作品の多様性) と出会う中で、人々の中の [朝ドラらしさ] が揺さぶられ、その反応が作り手にも伝わって、朝ドラを時代に合った新しいものにしていく力になっていくのであろう。『半分、青い。』が“挑戦的な”作品であったことで、調査によってそうした部分を少しではあるが垣間見られたのではないだろうか。

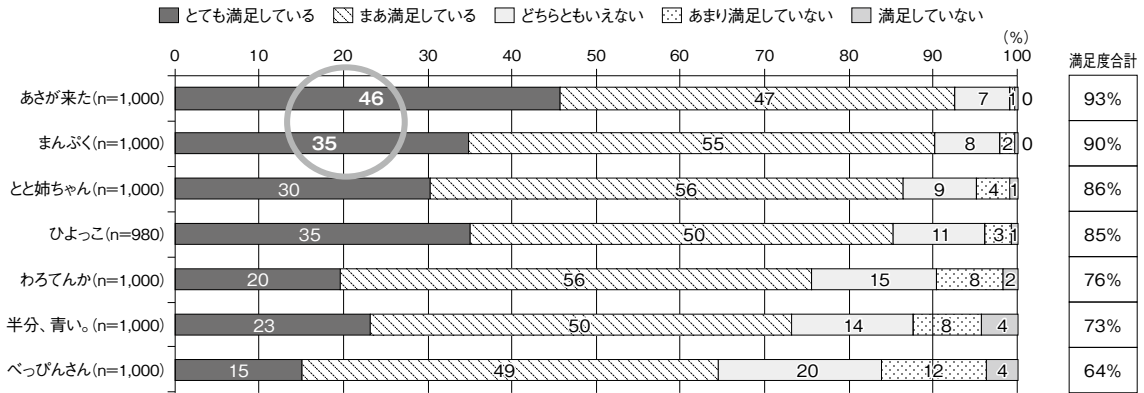
②『まんぷく』個別調査結果分析

(a) 満足度から分析の方向性を考える

【総論編】Ⅱ-2「各作調査比較」で見たように、『まんぷく』は各作調査を実施した作品の中で総合評価点数・満足度ともに『あさが来た』に次いで2番目に高く、ドラマ主要要素の評価も総じて高い、いわば、“王道”をいく作品であった。したがって、今回の分析の主眼を、『まんぷく』の好評要因をより深く探ることに置くのが妥当といえよう。

ここでもう一度、7作品の満足度を見てみよう (図Ⅲ-7-14)。『あさが来た』と『まんぷく』を比べると、満足合計は『あさが来た』93%、『まんぷく』90%でその差は3%と小さいのに対し、

図Ⅲ-7-14 朝ドラ7作品の満足度比較



*小数点以下第1位を四捨五入しているため、合計値が100%にならない場合がある

満足度が最も高い [とても満足している] を比べると、『あさが来た』46%に対して『まんぶく』35%と、『まんぶく』が11%低く、やや差があることが分かる。そこで、今回は、『あさが来た』と『まんぶく』を比較することが可能な要素については、両作品を比べることも行って『まんぶく』の特徴をより明らかにすることを目指したいと思う。

(b) ドラマ主要要素

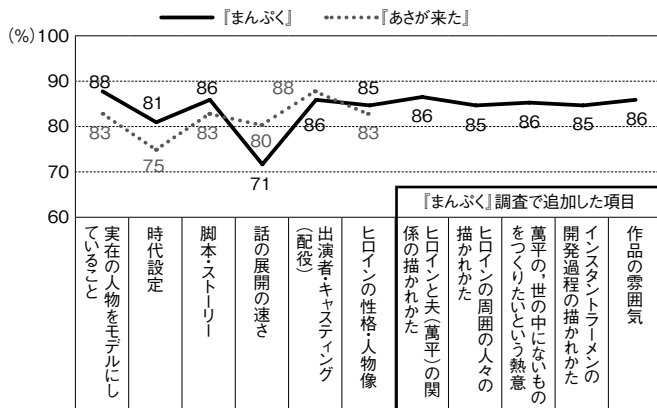
『まんぶく』と『あさが来た』のドラマ主要要素

素を比較したのが図Ⅲ-7-15である。[良かった] [まあ良かった] [どちらともいえない] [あまり良くなかった] [良くなかった] の5段階で聞き、「良かった」合計 ([良かった] + [まあ良かった]) を示した²⁶⁾。

『まんぶく』を『あさが来た』と比べると、数値の大きさは近く、「時代設定」と「実在の人物をモデルにしていること」では『まんぶく』が5～6%高く、「話の展開の速さ」は『あさが来た』が9%高いものの1割以上差のある項目はなく、両作品はほとんど変わりなく高評価であったと

いべきであろう。『まんぶく』調査で追加した要素5項目について見ると、すべて8割以上に達しており、追加調査項目についても大変高い評価であった。

図Ⅲ-7-15 『まんぶく』と『あさが来た』～ドラマ主要要素比較（「良かった」合計）



(c) パート別の視聴状況と評価

今回の調査では、『まんぶく』の物語の展開に合わせて5つのパートに分けて視聴状況と評価を聞いている。

まず、パート別視聴状況 (図Ⅲ

-7-16) を見てみると、女性層は5パートとも [すべて見た] + [だいたい見た] 合計が88～89%と変化がないが、男性層は後半の2パートで若干(4～5%)上昇している。

パート別の評価(図Ⅲ-7-17)を見ると、第3パートが男性で8%, 女性で13%下がっている。このパートでは、主人公・福子の夫・萬平がGHQに逮捕・監禁されるということが2回続く。自由記述でも、同じような理不尽なことが繰り返されることに対する不満の声が多かった。

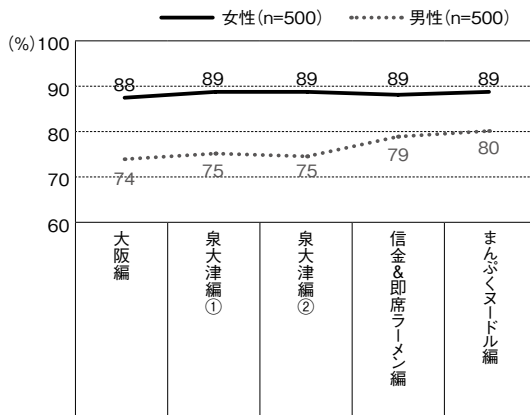
「萬平さんが(放送期間)3か月(の間)で(憲兵隊と進駐軍に)牢屋に(合わせて)3回も入れられて、かわいそうだった」(男性30代)
 「何度も萬平さんが捕まるが、そこの話しの進みが遅くつまらなかった」(女性30代)
 「主要人物が収監される場面が多く描かれ、ストレスを感じた」(女性40代)
 「理不尽な逮捕だけで終わった週はじれったかった」(女性50代)
 「進駐軍の拘留等の場面でもっと爽快な反撃を期待していたのにガッカリした」(男性60代)

その後の後半2パートでは、女性層では評価が前半パート・レベルに戻る。それに対して男性層では、評価が第3パートより12%上がり、前半2パートよりも5%ほど高くなる。

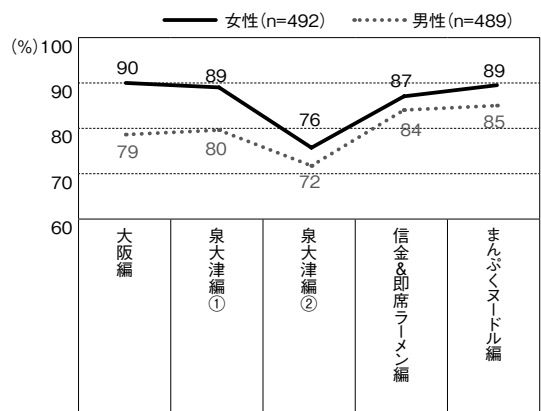
後半パートは、即席ラーメンやカップヌードルの開発・事業成功物語がドラマ展開の中心になるが、男性層はこうした歴史的発明品の開発話に対する興味・関心が高いようで、見た満足感も高いことに言及する記述が多かった。

「史実に基づき、即席ラーメンが開発されるまでのストーリーを再現できていたところが良かった」(男性20代)
 「カップラーメンが誕生するまでの過程が上手く表現されていた」(男性30代)
 「商品開発の苦労の過程がよくわかるところが良かった」(男性40代)
 「よく食べているインスタントラーメンやカップヌードルの開発状況が分かった」(男性50代)
 「安藤百福の人生を重ね合わせて毎朝見られたところが良かった」(男性60代)
 「即席ラーメンやカップラーメンの開発が面白かった」(男性70代)

図Ⅲ-7-16 『まんぶく』～パート別視聴状況～男女比較(「すべて見た」+「だいたい見た」)



図Ⅲ-7-17 『まんぶく』～パート別評価～男女比較(「良かった」+「まあ良かった」)



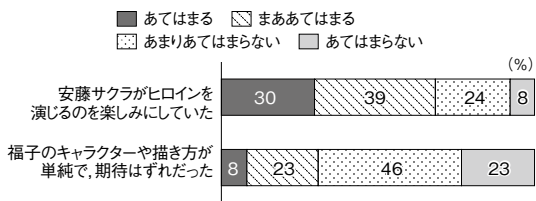
こうした自由記述を読むと、後半パートの評価向上度合いは数値的には微増レベルではあるが、男性層の中には事業開拓・商品開発エピソードが好きな人がある程度のボリュームで存在していて、その人たちにとっては『まんぷく』の後半パートは満足度の高いものだったようである。

(d) 主人公・福子 (安藤サクラ) について

『まんぷく』のヒロイン・福子を演じたのは女優の安藤サクラである。朝ドラのヒロインは10代後半から20代の女性が演じることが多く、新人俳優が起用されることも多かった。それに対して、安藤サクラは『まんぷく』出演時は32歳であり、すでに演技派という定評も得ていた。このように、彼女の起用は、朝ドラ・ヒロインとしてはやや異例ともいえる。しかも、これまでは“だらしない女性”や“ニート”など、どちらかというと暗く屈折した役柄が少なくなかった。そんな彼女が『まんぷく』では、どんな苦境にあっても明るく朗らかで、周囲の人々に力を与える、今までとは180度違う役を演じた。こうした点を朝ドラの視聴者はどのように見ていたのかを確認する質問を設定してみた (図Ⅲ-7-18)。

まず、「安藤サクラがヒロインを演じるのを楽しみにしていた」という質問に [あてはまる] [まああてはまる] と答えた人の合計は69%で、期待度はかなり高かった。演技派の安藤サクラへの期待の高い人にとっては、全編終始変わらず

図Ⅲ-7-18 『まんぷく』主人公・福子 (安藤サクラ) について



*小数点以下第1位を四捨五入しているため、合計値が100%にならない場合がある

“明るく朗らか”な性格一辺倒であったことが物足りなく感じられていたのではないかと、との危惧もあった。しかし、「福子のキャラクターや描き方が単純で、期待はずれだった」との設問に対して、[あてはまる] (合計) と答えた人は31%にとどまった。自由記述においても、福子 (安藤サクラ) を讃える声が多かった。

「安藤サクラさんは好きではなかったが、この作品で印象が180度変わった」(女性50代)
 「10代から50代まで演じ分けた安藤サクラさんの演技に引き込まれた」(女性40代)
 「安藤サクラの演技がとてもし上手! 福ちゃんは彼女以外想像つかない」(女性30代)
 「福子のキャラクターがおおらかなが、強い芯のある女性で好感が持てる」(男性10代後半)
 「安藤サクラの福子がいつも笑顔で元気づけられた」(女性40代)
 「主役のあたたかな表情がとても良い」(女性60代)

そして、主人公夫婦の関係の良さに言及する記述も多かった。

「夫婦ともどもお互いをリスペクトしているところが良かった」(男性40代)
 「福ちゃんが時々突っ走り気味でハラハラさせる夫をどこまでも献身的に支える所が良かった」(女性50代)
 「福ちゃんがいつまでもいい奥さんでありいいお母さんであったこと。萬平さんが、福ちゃんの意見をしっかり聞いて考えることができる夫婦の関係性が良かった」(女性20代)
 「萬平さんが福子さんに感謝の気持ちを口にする。夫を支える福子さんの行動力が素敵でした」(女性60代)
 「福ちゃんのどんなことにもめげないプラス思考なところ、どんなときも旦那さんを尊敬し信じているところが良かった」(女性70代)

一見したところ朝ドラの典型のような『まんぷく』だが、その中で“典型”とは異なる30代の安藤サクラのヒロイン起用は、好評を持って迎え入れられたようである。

(e) 作品のイメージ

㊦ 情緒的イメージと「笑える」要素

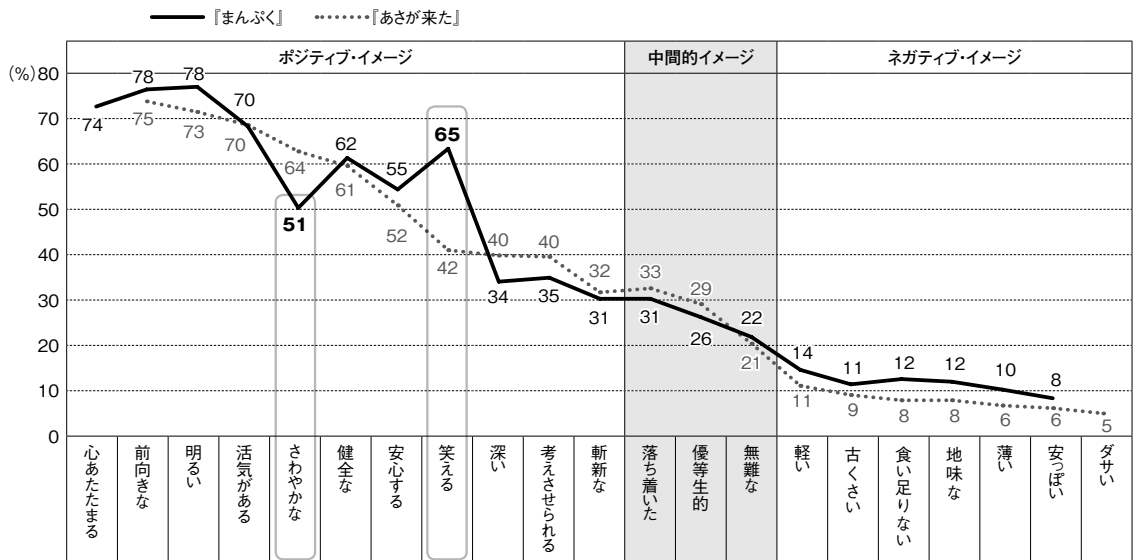
情緒的イメージ・機能的イメージについては、再び『あさが来た』と比較しながら見ていこう。

図Ⅲ-7-19の情緒的イメージのグラフの形は『まんぷく』と『あさが来た』はかなり近い。そうした中で、『まんぷく』のほうが「さわやかな」が低く、「笑える」が高い。特に「笑える」は差が23%あり、『あさが来た』より大幅に高い。当作品には、「また出てきた」とすぐ分かるようなワンパターン性が強く、笑いを誘う要素(=“お約束”的要素)がちりばめられている。そのほかに、メインのストーリーとは直接の関係性は薄い、微笑ましかったり、ちょっと笑えるエピソードも随所に配置されていた。こうした笑える

要素やメイン・ストーリーとは直接の関係性は薄い短期的エピソードのいくつかを提示して面白かったかどうかを聞いたのが図Ⅲ-7-20である。「覚えていない」「なくてよい」「面白くない」という人は少なく、「面白かった」合計はすべての項目が5割を超えている。「咲(福子の亡くなった姉)が、福子や鈴の夢に出てくること」は「面白いが長い(多い)と思った」が30%で、「面白くて良かった」34%とほぼ同レベルであった。“繰り返しすぎ”“何度も出すすぎ”という側面があるながらも、こうした“お約束”的要素やメイン・ストーリーとは直接の関係性は薄い小さなエピソード群も『まんぷく』の明るく笑える雰囲気作りに役立っていたといえよう。

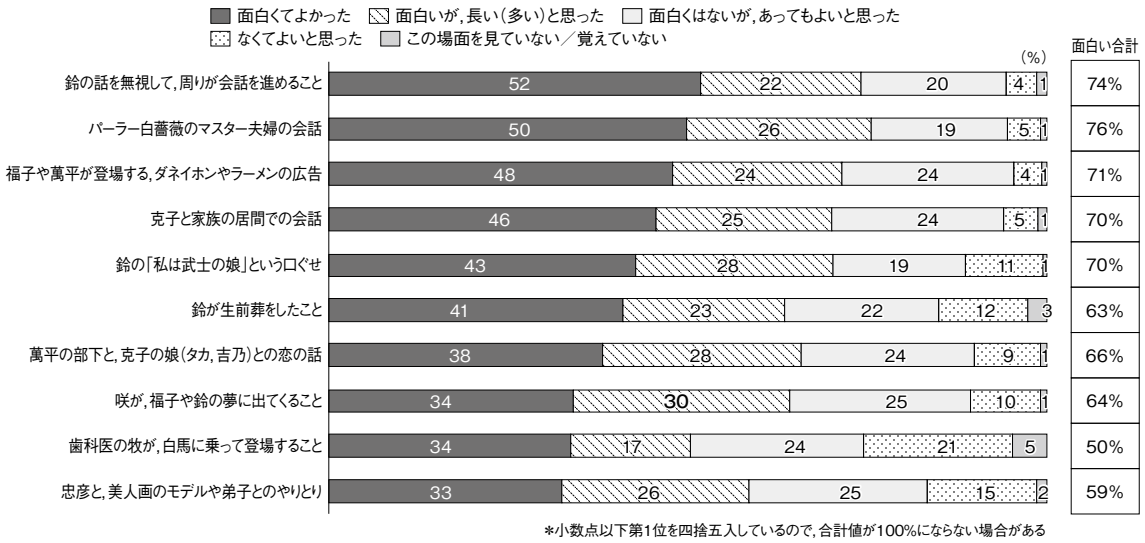
その中で特に主人公の母・鈴(松坂慶子)の存在は大きかったと思われる。自由記述を見ると、鈴(松坂慶子)への好評価が高いことがうかがえる。

図Ⅲ-7-19 『まんぷく』と『あさが来た』～情緒的イメージ比較(「そう思う」)



※「心あたたまる」は『まんぷく』調査で追加した。 ※「ダサイ」は『まんぷく』調査では項目に入れていない

図Ⅲ-7-20 『まんぷく』～「笑える」要素・短期的エピソードの評価



「(鈴が発する)“武士の娘”の語感の良さ」(男性30代)
 「鈴さんの口癖がすきだった」(女性20代)
 「鈴さんの天真爛漫かつ心配性なところが良いスパイスになっていたと思う」(女性40代)
 「鈴さんには多少いらっとさせられましたが松坂さんが可愛く演じてて憎めなかった」(女性50代)
 「松坂慶子の演技が個性的でとても面白かった」(女性60代)

① 機能的イメージ

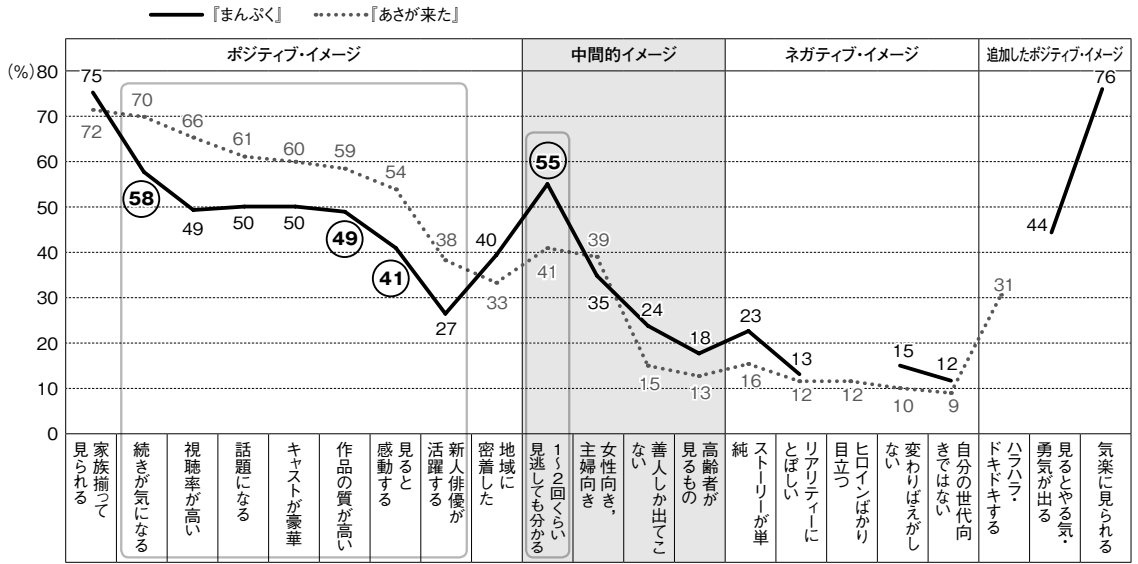
図Ⅲ-7-21は、機能的イメージのグラフである。『まんぷく』も『あさが来た』同様に、基本的にはポジティブ・イメージが高く、ネガティブ・イメージは低い。そうした中で、10%以上差がある項目がいくつかある(図中の□部分)。その中で注目しておきたいのは、「続きが気になる」「作品の質が高い」「見ると感動する」が低く、「1～2回くらい見逃しても分かる」が高い点である(図中の○部分)。『あさが来た』は、主人公がさまざまな分野で新しいことを次々始めて成

功させる物語であった。それに比べると当作品は、即席ラーメンの発明・成功に向かって進むという最終到達点に分かりやすい物語であるが、反面で「同じことの繰り返しが多い」「1つのエピソードが長すぎる」「テンポが遅い」という声も少なくなかった。

「もの作りをして捕まると同じことの繰り返しで飽きてしまった」(60代女性)
 「失敗してのちに成功するの繰り返しで、ワンパターン感が強い。教訓のようで、面白みやワクワク感はない」(女性30代)
 「1つのエピソードが長いと感じることが多かった」(女性40代)
 「前半戦が暗く長かった。ラーメン開発も長かった。もっとテンポよくしてほしい」(女性30代)

物語展開がやや定型的でゆっくり進むところも多く、「1～2回くらい見逃しても分かる」と感じる人が多めで「続きが気になる」度合いがやや低かったと思われる。そうしたことの影響も

図Ⅲ-7-21 『まんぷく』と『あさが来た』～機能的イメージ比較（「そう思う」）



※『まんぷく』調査では「ヒロインばかりが目立つ」「ハラハラドキドキする」は項目に入れていない
 ※『あさが来た』調査では「見るとやる気や勇気が出る」「気楽に見られる」は項目に入れていない

あって、「作品の質」や「感動」も『あさが来た』に比べて低めの結果となったのだろう。

(f) 視聴熱～高視聴意欲要素、生活面への波及、不満要素や視聴離脱意識

【総論編】Ⅱ-2「朝ドラ各作品はどう見られたか」⑥ 視聴熱を測る試みでも述べたように、視聴熱の高低を具体的に知るために、視聴態度や見る意欲、作品への不満や視聴離脱意識、生活面への波及効果などでその視聴熱を測定している。『まんぷく』では図Ⅲ-7-22のような8つの項目を並べて視聴熱の高低の傾向を、「あてはまる」かどうかの4段階で聞いている。

総じて、視聴意欲要素や生活面への波及度合いは高く、低視聴熱要素（不満要素・視聴離脱意識）のうち「見続けてはいたが、物足りなさを感じていた」「見続けるのをやめようと思ったことが、時々あった」は「あてはまる」合計が3割前後と低めである。しかし、「登場人物の葛藤や、悩み成長する姿をもっと見たかっ

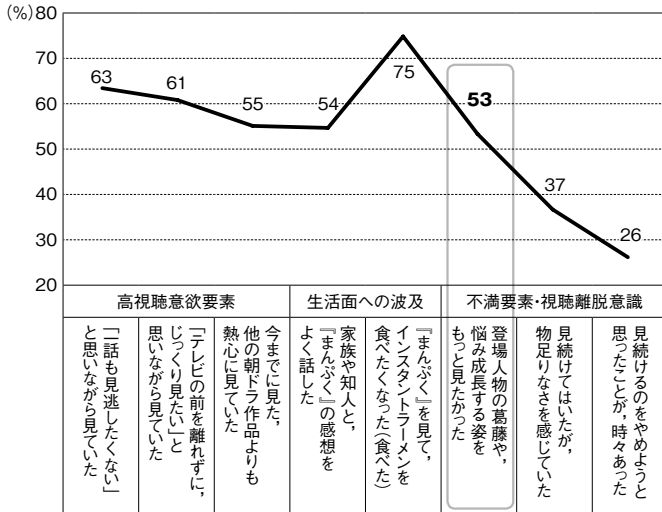
た」は53%と過半数を超えている。総じて評価の高い『まんぷく』ではあるが、登場人物の苦勞（苦闘）や成長の描き方という面では不満もあったことがうかがえる。自由記述でも、

「登場人物をもっと掘り下げて欲しいと思ったときがある」（男性30代）
 「もう少し奥深く切り込んだ内容が見たかった」（男性40代）
 「主人公の人の好きはあまりにも現実離れ」（男性70代）
 「まんぷくらーメンを作るうえでの大変さがあまり伝わらない」（女性50代）

などの意見が散見された。

また、主人公・福子とその夫・萬平は、特異な部分はあるものの、はじめからかなり完成された人物で、信念や方向性がブレない良さがある一方で、物語を通しての人間的成長を感じさせる部分はやや弱かったきらいがあるのではないだろうか。

図Ⅲ-7-22 『まんぷく』の視聴熱～高視聴意欲要素、生活面への波及、不満要素・視聴離脱意識（「あてはまる」合計）



(g) まとめ

『まんぷく』は、戦前・戦中・戦後の3時代を背景に、実在した人物をモデルにして、起業～事業発展を描く物語であるが、こうした外観からすると、過去の朝ドラにも同様のパターンの作品が多くあった、いかにも“朝ドラらしい”典型的（類型的）な作品に見える。調査結果を通して見ると、『まんぷく』は満足度も大変高く、ドラマ主要要素の評価も高く、「明るく」「前向き」で「活気」があり、「笑える」部分も多くて、楽しく「安心」して見られる“王道”朝ドラ作品といえるものであった。その一方で、より詳しく見ていくと、エピソードに、似たような繰り返し感があったり、登場人物の葛藤や成長という側面が薄かったりするなど、ややマイナスな部分もあったことが見えてきた。そうしたことが作用して、『あさが来た』に比べて「感動」要素が少なめで、「作品の質」としても『あさが来た』ほどには高いと思われない結果になったのではないかと思われる。

このように、『まんぷく』は固有の特徴や欠点を持っており、朝ドラの典型でありながらも、多様性の一翼を担う側面も併せ持つ作品であったといえよう。

そして、視聴者は、そうした『まんぷく』の固有性を見分けつつ十分に楽しんでいる様子もかがえた。

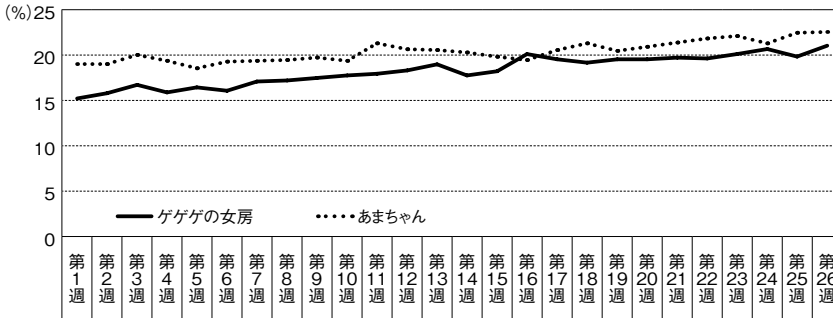
『まんぷく』調査を通して、朝ドラの作品の多様性と、視聴者の見方についての理解を一步深めることができたといえるのではないだろうか。

（さいとう けんさく／にへい わたる）

注:

- 『ゲゲゲの女房』と『あまちゃん』の週平均視聴率の推移。

～ビデオリサーチ社 関東地区・世帯視聴率
(NHK 総合テレビ朝8時台放送分)



- 番組の最初と最後の比較を4週間ずつという広めの幅にしたのは、累積到達率や視聴頻度を集計するのに、1週間のような短い期間ではデータがぶれる(安定しない)おそれがあると考えたためである。
- これに関連して次のようなデータもある。『半分、青い。』についての各作調査では、この作品が「朝ドラらしくなくて良くなかった」と感じている人が11%いた。詳細は【各論編】Ⅲ-7「『半分、青い。』と『まんぶく』～挑戦と王道～」を参照。
- 3)と同様に『半分、青い。』については、この作品が「朝ドラらしくなくて良かった」と感じている人が13%いた。「朝ドラらしくない」と感じる事が必ずしも否定的とは限らないということの好例として、やはり【各論編】Ⅲ-7「『半分、青い。』と『まんぶく』～挑戦と王道～」で分析を深めたい。
- 参考までに、2018秋・視聴者調査で、その当時放送中だった『半分、青い。』を半分以上見ている人を母数とすると、朝ドラは「習慣的に見るもの」と答えた人は63%となり、各作調査の『まれ』の結果(67%)にかなり近い数字となる。
- なお、念のため付記すると、この集計は各年層を母数としたものである。母数自体は高齢層のほうが大きいから、実数では20代の「習慣視聴」が多いわけではない。近年視聴者全体(n=1,324)を母数としてみると、20代の「習慣視聴」が5%であるのに対して、60代が12%、70代が12%となり、実数では高齢層のほうが2倍以上いることになる。

7) 因子分析の結果。

作品名	因子		
	1	2	3
半分、青い。	.727	.157	.148
わろてんか	.799	.189	.197
ひよっこ	.784	.241	.201
べっぴんさん	.775	.271	.265
とと姉ちゃん	.716	.216	.382
あさが来た	.629	.210	.440
まれ	.517	.304	.526
マッサン	.394	.248	.621
花子とアン	.364	.355	.674
ごちそうさん	.341	.424	.616
あまちゃん	.176	.447	.457
純と愛	.276	.662	.298
梅ちゃん先生	.233	.727	.280
カーネーション	.284	.750	.249
おひさま	.257	.819	.175
てっぱん	.230	.788	.151
ゲゲゲの女房	.042	.629	.164

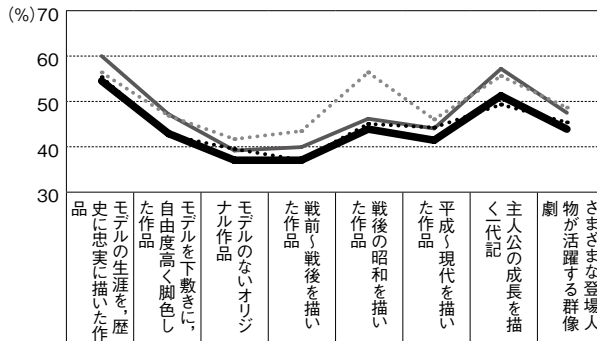
因子抽出法: 最尤法
回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法
a. 5回の反復で回転が収束しました。

- 「朝ドラ」研究 視聴者は朝ドラ『ひよっこ』をどう見たか～柔軟に見方を変えて楽しむ視聴者～『放送研究と調査』2018年3月号参照。
- 8)と同様。
- 「朝ドラ」研究 視聴者は朝ドラ『わろてんか』をどう見たか～過半数の“まあ満足派”が支えた評価～『放送研究と調査』2018年9月号参照。
- その成果については【総論編】Ⅱ-3「朝ドラのイメージ」を参照されたい。
- 「朝ドラを見続けるうえで重要なこと」の重要度合い

の“強さ”と“広がり具合”をより詳しく知るために、通常よく使用する5択（[とても重要] [まあ重要] [どちらともいえない] [あまり重要ではない] [まったく重要ではない]）ではなく、より細かい7段階の選択肢を使用した。その結果、今回提示した9項目は重要度の広がりが大変大きい＝（少しでも重要と思う人を含めて）重要と思う人が多いことが分かった。

- 13) 8) と同様。
- 14) 朝ドラの典型的タイプを8つ提示して、見たい度合いを聞く質問であるが、「見たい」という思いの強さの度合いをより詳しく知るために、通常よく使用する5段階ではなく、7段階の選択肢を使用した。この選択肢を使ったことで、「かならず見る」[たぶん見る]という、より“強度の強い視聴意向”という明確な指標で中間派を区分けすることができた。
- 15) 下記グラフ参照。

見たい朝ドラのタイプ～長期視点派・短期視点派・
中間派高視聴意欲層の比較（「かならず見る」＋「たぶん見る」）



- 16) 中間派高視聴意欲層が中間派の2/3を占めるので、中間派全体の調査結果の値は中間派高視聴意欲層とほぼ同じレベルになる。そこで今回は、中間派全体（175人）の結果は表示せず、回答者全体（1,000人）・中間派高視聴意欲層（110人）・中間派低視聴意欲層（65人）の3層の比較を行うこととし、図表の煩雑化も回避した。
- 17) 『まんぶく』全体のパート別視聴状況と評価のより詳しい分析については、【各論編】Ⅲ-7②『まんぶく』個別調査結果分析（c）パート別の視聴状況と評価参照。
- 18) 「1～2回くらい見逃しても分かる」というのは、物語の進展が遅いので「1～2回くらい見逃しても分かる」というネガティブな意味合いのイメージともとれるが、「1～2回くらい見逃しても分かる」ので“途中で視聴脱落しにくく”“最後まで見続けやすい”という利点としてとらえる人が朝ドラ視聴者の中で

は少なくないことが、これまでの調査で分かってきている。

- 19) 『まんぷく』と『半分、青い。』の調査概要は、【総論編】Ⅱ-2「各作調査比較」の調査概要表Ⅱ-2-1参照。
- 20) 各作品を見たことがある人に、作品それぞれについて「朝ドラらしいと思う」「どちらかといえば朝ドラらしいと思う」「どちらともいえない」「どちらかといえば朝ドラらしくないと思う」「朝ドラらしくないと思う」の5択を提示して聞いている。
- 21) 【総論編】Ⅱ-2「各作調査比較」⑤視聴熱を測る試み参照。
- 22) 『半分、青い。』調査では、作品の特徴をより明らかにすることを旨として、情緒的イメージに「心あたまる」、機能的イメージに「気楽に見られる」「ハラハラ・ドキドキする」「見るとやる気・勇気が出る」を追加。これまでの調査で数値が低く、しかも、作品間の差がほとんど出ない「ダサイ」(情緒的イメージ)を削除した。
- 23) 10)と同様。
- 24) 【総論編】Ⅱ-1「視聴者はどのように朝ドラを見ているか」④朝ドラを見る理由・効用参照。
- 25) 「朝ドラ」研究「視聴者は朝ドラ『ひよっこ』をどう見たか～柔軟に見方を変えて楽しむ視聴者～」『放送研究と調査』2018年3月号および、【各論編】Ⅲ-5「長期視点・短期視点～視聴者の多様性理解への試み～」①長期視点派・短期視点派の特徴～『まんぷく』調査における検証参照。
- 26) 『あさが来た』調査の時点では、ドラマ主要要素として質問項目化した要素は「実在の人物をモデルにしていること」「時代設定」「脚本・ストーリー」「出演者・キャスティング(配役)」「ヒロインの性格・人物像」「話の展開の速さ」の6項目であったが、次の『とと姉ちゃん』調査から「作品の雰囲気」「ヒロインの周囲の人々の描かれかた」を追加した。以降、この8項目を基本にしつつ、作品ごとにその作品の特徴を析出するのにふさわしいと思われる項目を加えて調査を行った。『まんぷく』では、「ヒロインと夫(萬平)の関係の描かれかた」「萬平の、世の中にないものをつくりたいという熱意」「インスタントラーメンの開発過程の描かれかた」を追加して調査を実施した。

IV

シンポジウム編

吉川 邦夫

この章では、2019年3月8日(金)にNHK放送文化研究所《文研フォーラム2019》で行ったシンポジウム『検証<100%>朝ドラ!!～視聴者と歩む 過去・現在・未来～』のパネルディスカッションを抄録する。

【シンポジウムの主旨】

1961年から放送が開始された連続テレビ小説は、「朝ドラ」の愛称で広く視聴者に親しまれてきた。テレビ史上最長のドラマ枠といえるが、1983年度の『おしん』をピークに視聴率は低下の一途をたどり、20世紀の終わりごろには、ドラマ枠としての歴史的役割を終えたのではないかと内外で語られたこともあった。しかし、2010

年の『ゲゲゲの女房』から潮目が変わり、以後2019年まで、10年にわたって視聴率的には緩やかなV字回復が続いている。これはテレビドラマ全体の視聴率低下の流れが続く中では特殊といってもよい現象である。シンポジウムではこのことが持つ意味について、テレビドラマというジャンルにおける位置づけの視点、大きく変化する現在のメディア状況からの視点、社会的な視点など、多角的な見方を踏まえた総合的な分析を試みた。

社会学者としてドラマ研究の論文・書籍を多数発表している法政大学教授の藤田真文氏がモデレーターを務め、女性の教養文化史の視点から朝ドラ主人公を題材とする研究を進めている京都大学教授の稲垣恭子氏、ネット社会の最新事例研究の視点から朝ドラを研究対象としている関西学院大学准教授の鈴木謙介氏、2018年に『朝ドラには働く女子の本音が詰まってる』¹⁾を上梓したコラムニストの矢部万紀子氏、ドラマ制作現場で朝ドラを多数作ってきたNHK札幌放送局長の若泉久朗。以上5人のパネリストが登壇し、文研の視聴者調査報告や資料映像を材料に議論を進めた。



<パネリスト>

- 藤田 真文：
法政大学社会学部教授（司会）
- 稲垣 恭子：
京都大学大学院教育学研究科教授
- 鈴木 謙介：
関西学院大学社会学部准教授
- 矢部 万紀子：
コラムニスト（元朝日新聞記者）
- 若泉 久朗：
NHK札幌放送局長（元ドラマ部長）

<報告者>

- 放送文化研究所メディア研究部 二瓶 亙
放送文化研究所メディア研究部 齋藤 建作

<総合司会>

- 放送文化研究所メディア研究部 吉川 邦夫

【パネリストと朝ドラの関わり】

藤田： 朝ドラは放送開始から58年ということで、怖いことにほとんど私の人生と同じぐらいなんです。パネリストの皆さんに、それぞれ印象に残った朝ドラや、朝ドラとの付き合い方ということから、まず話していただきたいと思います。



私も2010年代ぐらいから、朝ドラ視聴者として復活してきました。子どものころはもちろん親と一緒に見ていて、一番印象に残っているのは、『マア姉ちゃん』の田中裕子さん。準主役なのに、主役を食ってしまうようなものすごく新鮮なイメージがありました。

稲垣： 小学校のころ『おはなはん』をリアルタイムで家族と一緒に見ていたという記憶がありまして、近所とか同級生の親たちがそのことをよく話題にしていたなという記憶があります。



そのあと実は長い間見ていなかったんです。朝、気ぜわしい時間にドラマを見る習慣がつかなくて。ですから、朝ドラをずっと視聴されている方というのは、ちゃんと朝の放送時間に見ていらっしやるみたいですが、どうやって仕事の前に見ておられるのかなと思います。

私が再び朝ドラに関心を持つようになったのは『あまちゃん』が面白かったのと、研究上、女学生に興味があるので、女学生ものを見るようになったことがあります。私も2010年代以降

の作品が面白いと思って見えています。私は、夜に帰宅してから、1日のほこりを落とすという感じで見えています。

鈴木： 僕はたぶん、今日登壇している方の中で一番見ていないです。自分の中の記憶にす



ごく残っている作品は、『カーネーション』以降のものになるのですが、見ていないのに何でこんなに記憶に残っているんだ

ろうかというと、毎回見るのとは別に、ネットで話題になる文脈というのがあって、いろいろな朝ドラ由来のブームみたいなものが起きましたよね。『あまちゃん』もそうでしたし、『あさが来た』の五代ロスなどもありましたし、いろいろな朝ドラ経由で起きた話題が勝手に入ってくるから、その流れで、どういうお話だったのか、まさにつまみ食いのような感じで見る。それでも、しっかり頭に残っています。熱心に1回1回丹念に追いかけていなくても心に残る、朝ドラにはそういう魅力があるというのを感じます。

矢部： 私は2007年の『ちりとてちん』を何気なく見始めたら、“お仕事ドラマ”になってい



て、大変びっくりして夢中で見たんです。ところが、最終回の2回前ぐらいから突然、主人公が引退してお母さんになるとい

う展開になって、何だこれは!と怒りに燃えてしまって、その後しばらく見なかったんです。

2010年度から8時スタートになるということで、『ゲゲゲの女房』をNHKが非常に力を入れて宣伝していて、それなら久しぶりに見てみようかと

思ったところ、向井理さんにしてやられて、そこからもう夢中で見るようになりました。『カーネーション』とか、あんなによくできたドラマを半年も見られたということが本当に感動的で、基本ほぼ全部見えています。

若泉： ちょうど私は1961年生まれで、まさに朝ドラができた年ですから、まったく人生そのものです。



私はNHKに入って5本、朝ドラの現場を担当したのですが、最初は演出の一員として『青春家族』『君の名は』『ひらり』。その

後プロデューサーになって『ほんまもん』と『てるてる家族』を作りました。『ゲゲゲの女房』以降の数年間はドラマ部全体を統括する立場で、いろいろな朝ドラの企画に携わってきました。

【文研の朝ドラ視聴者調査報告 1】

テレビドラマ全体の視聴率がじりじりと下がっている中で、朝ドラは2010年前期の『ゲゲゲの女房』で平均18.6%となり、一気に前作より5%上昇した。その後、2015年後期の『あさが来た』が今世紀最高の23.5%を記録。以後、3年間連続で20%を超えた。現在の朝ドラを視聴者がどのように見ているのか、基本状況を5W1Hという形で紹介する。

・誰が見ているか (who)

調査では、ほぼ半数が「ある程度続けて見た作品がある」と答えた。「たまたま見た」が18%。およそ3人に2人が少しでも見たことがある。その内訳は、女性6対男性4。60歳以上が約5割だった。

・いつどこで見ているか (when, where)

朝8時総合テレビ視聴が全体の半分。録画視聴やオンデマンド視聴がほぼ4分の1。残りはBSや総合の昼の時間帯での視聴。

・何を見たか (what)

2010年以降では視聴率23.5%の『あさが来た』がトップ。『とと姉ちゃん』『花子とアン』『ごちそうさん』が22%台、『まんぷく』が21.4%。

・なぜ見ているか (why)

朝ドラを見る理由のトップは「面白そうだから」（あるいは「興味をひかれる」）だった。2位は「何となく」。続いて「習慣になっている」「家族が見ている」「評判がいい」が理由として挙げられた。

・どのように見ているか (how)

20%、5人に1人の視聴者が「朝ドラに熱中したことがある」と答えた。

朝ドラを見ている半数以上が「できるだけ見逃さないように見ている」「新しい作品が始まったら最初のほうは見る」と答えた。「多少つまらなくても、なるべく見続ける」人が4割いた。

・朝ドラのイメージ

18個のイメージワードからどれがあてはまるかを聞いた。トップは「健全である」「さわやかである」「明るい」。一方、「優等生的な番組」「無難な番組」も多く選ばれた。

10年前と比べて「朝ドラの俳優がいろいろなところで目立って活躍している」「朝ドラの配役が豪華になった」「朝ドラのニュースや記事をネットなどでよく見る」と感じている人が多い。世間一般の中で朝ドラのプレゼンスが上がっていると考えられる。

【朝ドラ復活の秘密は何か】

藤田： 2010年以降、朝ドラが再評価され、視聴率が2000年代にずっと下がっていたのが、常時20%をキープするようになった。テレビドラマは、今や13%や14%で大ヒットといわれる中、常時20%のドラマ枠は希有です。朝ドラの視聴

実態を見ると5割の方が60歳以上となっていて、次が40代、50代。20代、30代は若干少ない。また、朝8時にリアルタイムで見ている視聴者が半数近くいます。この60歳中心で朝見ているという年齢構成や視聴の仕方などについて、どう思うかということを少しお伺いしたいのですが、矢部さんはリアルタイムで見ているのですよね。

矢部： 私は家を出る時間に合わせて、8時に見たり7時半のBSで見たり、どちらかで必ず見るようにしています。

藤田： 『朝ドラには働く女子の本音が詰まっている』という矢部さんの本で、ドラマのテイストが2010年代からかなり変わってきたと書かれています。2010年代に朝ドラが復活した理由を、矢部さんはどう考えていますか。

矢部： 朝ドラって、かつては女優さんの登竜門みたいな感じでよく語られていて、大竹しのぶさんのような将来の大女優さんがオーディションで選ばれて抜擢という感じだったと思うのですが、このごろは、『ゲゲゲの女房』の向井理さん、『カーネーション』の綾野剛さんとか、男の人が格好いいという評判が多く聞かれて、女優さんを抜擢してあげる感は薄まっていますよね。

藤田： 視聴者の6割が女性で、女性のドラマだから女性主人公でというのはよく分かりますが、男性についても注目が集まってきたのは、新しい形の様ですね。

鈴木： いくつか大きなトレンドを捉えたほうがいいと思います。民放も含めた全日視聴率の数字を見ると、90年代の後半から右肩下がりで視聴率が全体として下がっているのですが、2010年代に入って、特に2010年代後半ぐらいからテレビが全体として盛り返してきています。

先ほど視聴者の年代に高齢の方が多いという話がありました。2010年代は、団塊の世代の方々が皆さん退職される時期です。つまり人口のボリュームゾーンが退職して自由な時間を得たという現象は、見逃してはいけないと思います。数字で見られるところというなら、テレビがそういう引退されたシニアの方々の見るものになっているという量的な話を、まず押さえておく必要がある。

質的なところでは、たとえば話題性です。先ほど矢部さんがおっしゃっていたように、女性、女優のほうに話題になるというだけではなくて、ドラマの内容や男性の俳優さんが話題になったりしている。もちろん視聴者層の変化も背景にあると思いますが、量的なところとはまた別の、質的に注目される部分の変化が、どうも朝ドラのプレゼンス、存在感、朝ドラって何か面白いなという空気を盛り上げている気がします。

藤田： 稲垣さんは朝ドラ視聴者のインタビュー調査で、今、朝ドラを若い人や30代の人はどう見ているかという調査もされていますね。

稲垣： 女性を主人公とした物語が受ける時期というのがあって、さかのぼると明治30年代に新聞連載の女学生小説が爆発的に受けたこともあるんです。朝ドラが定着した1960年代から70年代は、いろいろな形でみんなが自分の人生を考えなければならなくなって。特にこの時期は、女性の進学率は上がるけど、同時に専業主婦化が進んでいくという中で、女性がどう生きていくかというのが大きなテーマになりました。人生論も非常に流行った時期です。2010年代以降は、今まで考えてきた成長とは違う、もう1つ別の物語が模索され始めているようです。そういう中で、女性の人生ドラマが改めて面白くなってきていると思うんですね。

インタビューをしますと、実在の人物を扱っている朝ドラでも、ちょっと現代風に読み直す視点を持って見えています。「女性の一代記」という言葉自体は非常に古めかしい感じがするんですが、それを少し違う視点から、女性の新しい成長物語として自分なりに見ている。そういうところが面白いと思っています。

藤田： たとえば『あさが来た』は明治の話ですね。明治、大正の話だけれども、今の女性の生き方のモデルとして見ているということですか。

稲垣： 『あさが来た』は、もともとと思っていたのとは違うストーリーになっていて、私自身も非常に面白く見られました。成功する女性の一代記は、だいたい少女から大人になるまでは、元気で明るくて前向きでけなげな女の子として描かれて、視聴者からは頑張れという応援を集めるんですが、そこから先はたいがい立派な人になりすぎて、社会の母みたいになってしまうのが、ちょっと残念な気がしていたんです。でも、『あさが来た』では、主人公はいつまで経ってもチャレンジャーで、結婚して子どもができて、変わらずファンタジーを追いかける夢見る少女。女傑ではなく、一生涯少女で居続けるところがすごく面白いと思いました。

藤田： 女性の就業率が上がって、今はだいたい64歳ぐらいまでの7割ぐらいの女性が就業しているという時代です。30代、40代ぐらいにいったん子育てのために仕事を辞めて、また仕事に戻るといって、就業率のM字カーブの谷が深くなるといわれていたのですが、近年はだんだんその谷が浅くなってきて、辞めずに働き続ける女性がとても多くなってきている。そういう時代に朝ドラがどういう意味を持つのかということもテーマになってくると思うのですけれども、若

泉さんは制作者として2010年代を境に何か変わってきたという実感はありますか。

若泉： 『ゲゲゲの女房』までは、何をやってもどんどん視聴率が落ちてしまって、朝ドラの使命はもう終わったのではないかとされていました。非常に苦しい時期だったんですけど、みんな毎回毎回、一生懸命ここが勝負だという意識でやるのですが、うまくいかなかった。これはですね、今にして思うと、当時、長年の経験に基づく「朝ドラ勝利の方程式」というのがドラマ部に伝わってしまっていて、比較できるドラマ枠がよそにないものですから、つついそれに引っ張られていたように思います。

藤田： 「勝利の方程式」、よかったら教えてくださいませんか。

若泉： 稲垣さんの話にもありましたが、たとえばヒロインは夢に向かってまっしぐらでなければいけない。ヒロインは1人に決める、群像劇は駄目というのもありました。それから、大きな物語にすること、というのもありました。

逆にこれをやっては駄目というのが、まずはヒロインの不倫。不倫は絶対に駄目。最後に死ぬ、これも駄目。男の主人公はなるべく避ける。タイトルは、片仮名は避けたほうがいい。それから、バックステージものといひまして、いわゆる放送業界や芸能界の裏は、間口が狭くなるのでやめなさいということでした。この縛りにとらわれて、みんなで一生懸命考えてタコつぼ化していった、結局これがスベりました。振り返ってみると、これを守っていない作品のほうが、100作の中には多いのではないかと。

藤田： 『カーネーション』は不倫もしっかり描いていましたね。

若泉： 『あまちゃん』はまさにバックステージものでした。つまり、当時の勝利の方程式が間

違っていたということです。

藤田： 今、制作サイドの反省の弁も聞かれましたが、ただこの視聴率が下がっていった時期、朝ドラ低迷期のようにいわれていますが、僕の見方は少し違っていて、模索期だったと思っているところがあります。

必ず太平洋戦争を境にして、女性の人生が変わったというぐらいのスパンで描かなければいけないとか、女性の一代記として幼少期から死ぬ直前ぐらいまで描かなければいけないとかってというような、朝ドラの決まりみたいなものが、だんだん視聴者からつまらなくなってきたなと思われたときに、1990年代から2000年代の前半にかけては、描く時代が現代化していくということを結構していたと思うんです。

それから、必ずしも結婚というのがゴールではない、そういうヒロインも出てきたように思います。だから、そういう新しい女性像ってどうなの？というのを模索して、新しいドラマを作ったんだけど、必ずしもそれが旧来の朝ドラを期待する視聴者と合わなくなって、そのトライアルがうまく成功しなかった時代というのが、この時期かなというふうに思います。

鈴木： とすると、今までどんなトライアルが成功して、こうなったんでしょうね？ まさに『おしん』もそういう旧来型のドラマだったはずですが、女の一代記、成長、成功というのが、『おしん』以降、女性が社会に進出していく時代に、新しいロールモデルを描いたのに当たらなかった。これがなぜか、今は当たる。

矢部： 2000年代以降と言いきれるかどうかは分かりませんが、世の中が浮かれているときに朝ドラの枠はあまり合わなかったかもしれないという気がします。自分の中でも、バブルがはじけたといっても2000年になるまでは、ま

だ日本中が浮かれていたような記憶が残っています。

民放の元気がよくて、私がよく覚えているのは、『東京ラブストーリー』で、「カンチ、セックスしよ」なんて言っているわけですね。そのときに朝ドラはちょうど『君の名は』をやっていたんですよ。これは駄目だろうと思いました。

藤田： そのずれがあったということですよ。それをうまくアジャストしてきたのが、この2010年代ではないかと思っているんですけど。

鈴木： 先ほど稲垣さんから「人生論」という言葉が出ましたが、今の朝ドラには、主婦がおうちで見ているというイメージはもうないじゃないですか。おそらく女性の生き方、「人生論」のようなものをそこに投影して見ている。それは今この時代に、次にどこを目指しているのか、みんなが分からなくなっているということではないかと。

昔は理想の時代といって、何か理想に向けてみんなが輝いていたから、その成就を目指していくところにごく惹かれたし、それがいつの間にかはつきりとしなくなっていったけれど、それでも何か夢をかなえるんだと、具体的な夢に向かっていく人たちを描くというのも共感できた。

ところが、80年代のバブル時代は、何に向かってみんなが浮かれているのか分からなくなるんですね。分からないけれども、みんながお金だ、土地だ、株だと言っているときには、純粋な理想に向けて、夢に向けて頑張ろうと言う人は、どうもピュアすぎると感じられた。

それが今ぐっと時代が変わってきて、みんなが求めるようになったものと、朝ドラがずっと描いてきたものがシンクロしてきたのかもしれない。

藤田： 文研は2010年代の『あまちゃん』などの作品がどういうふうに朝ドラを変えたのかと

いうことを調査しているので、それについて報告してもらいます。

【文研の朝ドラ視聴者調査報告 2】

- ・2013年『あまちゃん』は、前々作『梅ちゃん先生』と視聴率は変わらなかったが、「じぇじぇじぇ」が新語・流行語大賞をとるなど世の中で大きな話題となる作品になった。その要因として、SNSでの反応が大きかったことが挙げられる。『あまちゃん』について、1人で100件以上ツイートした視聴者が7,261人。熱心な投稿者が生まれたことが浮かび上がった。視聴率だけではよく見えなかった、「視聴熱」とでも呼ぶべきものが可視化されたと考えられる。
- ・2010年『ゲゲゲの女房』は、第1週の放送から最終週の放送までに、視聴率が3割程度上昇した。しかし、視聴世帯数の増加は1割程度。残りは、視聴回数が増えて習慣化していくという「視聴頻度」の増加だった。朝ドラの視聴がそれ以前よりも継続性を増し、習慣化していったと考えられる。
- ・実際にアンケート調査では、朝ドラを最近「よく見るようになった」という人が5割を超えていた。「以前より好きになった」という人も44%。熱心な視聴者が増えているが、興味深い結果として、「つまらなくても見続ける」という人が4割もいた。

つまらなくても見た人に、最後まで見続けた理由を聞くと、「習慣だから」「行動パターンに組み込まれているから」というような継続性に加えて、「途中でやめるのは嫌だから」「結末が気になるから」という独特の気持ちが生まれていることが分かった。「これから面白くなると期待した」という、朝ドラに対する信頼感や安心感を理由に挙げた人もいた。

このことは、朝ドラの習慣的視聴者層が、物語の大きな柱の展開を楽しむ長期視点と、エピソードごとの小さな事象を楽しむ短期視

点という、2種類の見方を持っていると分析することができる。大きな物語に乗りなかつた視聴者も、途中から短期視点に見方を切り替えることで視聴を継続していた。視聴者が自分で積極的・自発的に作品の面白さを見つけ出していくという傾向がうかがえる。

- ・作品単位での視聴者の流入を見ても、5つのグループに分類することができた。どの作品もずっと見続けているグループと作品ごとに入り出るグループのほかに、『あまちゃん』から見始めてずっと見ているグループ、『あさが来た』から見始めてずっと見ているグループ、そして、『あまちゃん』から入って見続けたが、3作ほど視聴を継続したあとに離れてしまったグループ。

数作を継続して見るグループは、作品のスタイルやジャンルを越えて見ている。すなわち、一度見始めると、内容にかかわらず数作は視聴を継続する、という視聴者層が一定数存在することが明らかになった。

【朝ドラ独自の視聴形態の分析】

藤田：『あまちゃん』と『あさが来た』がNHK朝ドラ復活に貢献したことはよく分かりましたが、その後、タイプが違って少なくとも2、3作は見るという視聴者がいるのはどういうことなのでしょう。

鈴木：継続性は要するにずっと習慣でやっているから、やめられないという話ですよ。ちょうど『ゲゲゲの女房』のときから放送開始時間が8時になって、人々の視聴習慣が、だんだん「8時に始まる朝ドラ」として定着していった。そういう時期だと思うのですが、習慣になったので急に始まったりもしないけれども、急に終わったりもしないというのが、先ほどの調査分析から読み取れるのではないかと思います。

藤田：朝ドラに対して、何となく持った期待

感を保ち続けている？

鈴木： 期待感というよりは、そもそもテレビはそういうものだったと思うのですが、つい「つけてしまう」ということですね。8時台ということでいうと、競合のドラマ番組はほかの局にはありませんが、民放の朝の情報番組のあとというのは大きいと思います。他局の占いが終わったらNHKに行くというような。そういうテレビの視聴習慣ができている方にとっては、まず情報番組を見て、占いを見てから、NHKに替えるというのが定着していて、そのまま自動的にチャンネルが替わるといったパターンの方がいらっしゃるということだと思います。

藤田： あと15分は家において、朝ドラを見ていこうという習慣になっているということですね。

さて、2つの盛り上がりとなった、『あまちゃん』と『あさが来た』はかなり違うタイプのドラマですね。『あさが来た』は、女性の一生を描く作品で、やはり女性の人生モデルをある程度提示していたと思うのですが、稲垣さん、『あさが来た』というのはどういうモデルを提示していて、みんなが見るようになったと思われませんか。

稲垣： どういうモデルを提示したかというよりも、今までの一代記もののモデルをちょっと壊すというか、ずらすというか、そこに新鮮さがあったのではないかと私は思っています。インタビューした人たちも非常に現代的な見方をしていました。

つまり、女性の一代記というと先ほどありましたけど、途中で苦難に打ち勝って、波乱万丈で、そして成功していく。立派になって社会的にも成功して、という話ですが、『あさが来た』が面白いなどと思って見ている人たちは、確かに波乱万丈なんだけど、事業がどんどん成功した

りするのは、多くの人にとってはまったくリアリティーがなくて、あんなにトントン拍子みたいに行ってしまうというのは、むしろファンタジーとして非常に面白かったんだと思います。いろいろな苦難に打ち勝ってというよりも、新次郎さんとかいろいろな良い人たちに支えられて、ひょいひょいと。しかも、いろいろ奇想天外な、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりの発想があると。それが今までのモデルを破って、男性・女性にかかわらず新しいチャレンジ、新しいアンビション、そういうものをたきつけるというところが面白かった。その点では、『あまちゃん』とはまったく違う方向の面白さかなと思いました。

藤田： 新次郎さんと五代さんについては、たぶん矢部さんが語りたいのでは？

矢部： 語りたいです。

藤田： 先ほど、女性主人公でずっと来たのに男性を起用する、それも女性主人公と拮抗するような形で使おうみたいな、そういうことが向井さん以降出てきたとおっしゃっていましたが、たとえばこういうふうにはチャレンジングにやっていく女性主人公に対して、五代さんや新次郎さんは女性目線からするとものすごくありがたい、男性からすると、私もよく家内と一緒に見て、すごく肩身が狭くなるみたいな存在でした。女性視点からすると、この2人の男性はどういうふうに見えるんでしょうか。

矢部： 私は新次郎さんと五代さん、おディーン様といわれたんですけど、先ほど稲垣先生がファンタジーとおっしゃいましたが、まさにファンタジーで、家の中において、あんなにハンサムな人が、好きにしているよ、任せたとって仕事にまい進させてくれるわけですね。それで、モテモテなのに浮気をするわけでもない。あまちゃんに夢中という人が夫ですよ。

職場に行けばおディーン様が「あなたはFirst Penguinだ」と。自転車も乗れる、あなただったら飛び込んでいける、とすぐく励ましてくれるんですよ。家の中でも外でもハンサムな人が自分を100パーセント応援してくれるなんて、そんな実際にはないに決まっているけれど。私は『ゲゲゲの女房』の向井理さんもそう思ったんです。

すぐく彼女を励ますんですよ。「あんたはいざというとき力が出るタイプだと思うよ」とか、結婚しても「あんたは手先が器用だね」とか言ってくれるんです。現実にはそういう人がいますか？という話で、もう熱くなってしまいました。

藤田： 矢部さんはまさに「(朝ドラには)働く女性の本音が詰まっている」と、今働く女性の本音を言っていたいたわけですが、やはり『あさが来た』は稲垣さんが言ったように明治、大正の話ですが、働く女性のメンタリティーはそんなに変わっているわけではなくて、家庭でも働いていてもいまだに「家事をやりなさい」と言われたり、職場でも見えない天井みたいなのがあって、なかなかそれを突破できないとか、いろいろなつらいことがあるのは全然変わらないんですが、そのときに自分を支えてくれる男性みたいな、そういうことがドラマの中にあるというのが、2010年代以降のドラマの1つの組み合わせ方かなと思いますけど、若泉さんは、ドラマの中の女性像と男性像について、どういうふうに考えていますか。

若泉： 『ゲゲゲの女房』から変わってきたというお話がありましたが、これも当初はそんなにねらっていたわけではなかったんです。今でも覚えていますけど、直前までの低迷で、みんなやや疑心暗鬼になっていまして、「これ、本当に当たるのか？」みたいなところで、企画もなかなか

決まらずにいました。最後に脚本家の山本むつみさんがどうしてもこの本をやりたいということで、これでいこうかとなったんですが、それが奇跡だったというか、良い結果を残せたのにはいくつか具体的な要素があると思います。

ここから8時15分から8時になったという編成的な変化は、もちろんものすごく大きいことだったと思うんですが、内容的な面についていうと、朝ドラというのは基本的にホームドラマなんです。設定はいろいろな形があるけど、とにかく疑似家族も含めてホームドラマ。

たとえば寅さんの『男はつらいよ』と一緒に、寅さんが主人公なんですけど、妹のさくらがヒロインになったと思えば、『男はつらいよ』も朝ドラになるわけです。風来坊のとんでもないお兄ちゃんに来て、ガッチャガチャになるんだけど、ヒロインは下町の団子屋さんでけなげに働いている。これが朝ドラの切り口だと思うのですが、そういったホームドラマを今の時代設定で描くことはとても難しくなっています。

なぜかという、いろいろ要素があると思うのですが、まず核家族化があります。民放でも『渡る世間は鬼ばかり』が終わりましたよね。かつては恒常的にホームドラマがあったのに、今は作りにくい時代になっていて、ワイドショーの時間でも親が子どもを殺したり、逆に子どもが親を殺したりと、そういう殺伐とした平成の現代を舞台にして、大家族で、おばあちゃんまでいるような3世代家族で、ヒロインが夢に向かってまっしぐらとやればやるほど、どんどんスベっていくという状況でした。そんな中で、企画として『ゲゲゲの女房』を選んだことで、必然的に舞台が平成ではなく昭和になった。昭和になった瞬間にすべてが解決しました。そこには普通にちゃぶ台があります。家族の暮らしがありま

す。そして、貧しいけど夢がある、これがやはり大きかった。そして、もう1つは水木しげるです。誰もが知っている名前で、「ゲゲゲ」と聞いただけで伝わりました。

これ以降、昭和ものということと、モデルがあるというのがキーワードになりました。数えてみると、『ゲゲゲの女房』から先日発表した今度の『エール』まで、全部で21作あるんですが、21作中、昭和を舞台にしたのが16作。モデルがあるのが10作という状況です。もちろん、この流れがいつまでも続くとは思いませんが、こういうドラマの中の人物設定の考え方が今あるとは思いますが。

藤田： この新たな成功の法則が続くかどうか、また問題ですね。

若泉： まったくそのとおりです。いつまでもやっている、見ていただける人はどんどんいなくなると思いますし、それはもう考えなければいけないと思います。

藤田： それからもう1つ、先ほど報告にあった長期的視点と短期的視点を考えてみたいのですが、長期的視点では一生をどういうふうに成長していくかということが分かるんですが、もう1つの短期的視点では朝ドラ特有の部分があります。1週に6回で15分ずつ、その15分だけでも楽しい回が結構ありますし、全体的な半年の物語とは別に、その1週間で完結する小さなドラマがある。今の『まんぷく』は、1週間で完結するようにいろいろ作っていますね。次の週に持ち越さない物語を本筋とは別に入れていく作り方は、結構難しいのではないかと思うのですが、こういう短期的な視点で、その時々に出てくる小ネタとか、本筋に関係ない小さなエピソードを楽しんでしまうという見方が結構できるのが、朝ドラの良いところの1つではないかと思

います。鈴木さん、この短期的な視点をどう思いますか。

鈴木： ことし、朝ドラではないけれども、朝ドラっぽいと話題になった『みかづき』²⁾というドラマがありました。あれをなぜみんなが朝ドラっぽいと思ったのか。私の捉え方を一言でいうと、「超展開」と「回収されない伏線」です。

皆さんが朝ドラに感じる不満のだいたいの部分がそこだと思ってます。つまり長期的視点だと思っていた出来事が、実は短期的に今日を盛り上げるためのネタだったと分かったときの不満。長い目で見る話だと思っていたのに、「え、待って、この2人の関係はどこに行ったの?」みたいな、そういうところに視聴者が朝ドラっぽさを感じたということは、それがただちに悪いということではないんですが、どうもこの短期的視点と長期的視点の盛り込み方が、視聴者と送り手の間でずれている可能性があるんじゃないかと。それがずれているからこそ受ける場合もあるし、逆に怒られる場合もあるという、そんな感じなのかなという気がするんです。

藤田： 回収されない伏線というのは、重要な話がいつの間にか物語から消えてしまうということですね。長い作品ですからもちろん脚本家の方も、書いているうちにどんどん変わっていくということが大いにありえると思うのですが、若泉さん、実際に制作の現場で回収されない伏線、「これ、どこへ行ったのよ?」とかがあっていうことはありますか。

若泉： 脚本家にもよると思うんですね。作り込んでいって、将来これはこうなるよねと作っていく完璧な脚本家があります。一方で、出たとこ勝負なんだけど、最後につじつまを合わせるのがすごくまい人もいます。宮藤さんは後者のタイプだと思います。影武者の話がこんな最後に

大きなテーマになるとは聞いていなかったです。でも、どんどうまく回収して、生き生きと持っていました。これは2つタイプがあるんだと思っています。

藤田： 短期的な視点でも見る事ができるというのは朝ドラの貴重ところで、短期的な視点で、私の神回を1つ挙げさせてください。『ひよっこ』で、豊子という登場人物がクイズ番組に出る話を15分の1回で見せてしまうエピソードがありました。それも8月15日の終戦の日前後の放送で、本来ならそういう話題を振らなければいけないと思うようなところで、ハワイ旅行が当たるといふクイズに挑戦して、正解して、最後のオチは、ものすごく読みにくい名字が^{なげため}出題されるというもの。この名字は何と読む？と。「青天目」というんですが、それが豊子の同僚の名前だったんです。こういう15分で楽しめる1回を書けるというのは、すごい力量だなと思いました。

【文研の朝ドラ視聴者調査報告 3】

・「朝ドラらしさ」について

調査対象者が朝ドラらしいと思う朝ドラ上位6作は、対象者全体では『あさが来た』『とと姉ちゃん』『おしん』『ゲゲゲの女房』『ひよっこ』『あまちゃん』の順。『おしん』と『あまちゃん』は、「らしくない」の回答でも上位に入っている。



年代別で見ると、『あさが来た』はどちらかという高い年層のほうで朝ドラらしい作品と思われている。『とと姉ちゃん』と『ゲゲゲの女房』は全体にわりとまんべんなく選ばれている。『おしん』は40代以上のみで現れる。『ひよっこ』はどちらかという若い世代のほうが朝ドラらしいと考えている。

それ以外の作品では、30・40代は『ちゅらさん』を、10・20代は『半分、青い。』を「らしい作品」として選んでいる。対象者全体では、『半分、青い。』『ちゅらさん』というのは、「朝ドラらしくない」に出てくる作品だった。

この中で、朝ドラらしいほうにも、らしくないほうにも選ばれている脚本家として、『ひよっこ』『ちゅらさん』の2作を書いた岡田恵和さんに、「朝ドラらしさ」について伺ったインタビューを紹介する。

【岡田恵和氏インタビューVTR①】



岡田： 今ある朝ドラという枠をぶっ壊してやろうみたいな野心は皆目ない。そこにはモチベーションはないです。朝ドラというものがずっと愛されてきて、それを楽しみにしている人がいて、どんどん世代も新しくなっていく中で、どういう気持ちで見たいのか、どんなものを見たいのか、ということに答えたいということは大前提としてあって。あとは何が朝ドラらしいかという、僕が思うのは読後感であるとか、見ているときの感情であることに関しては、朝ドラらしさというか、僕が思う気持ちよさみたいなことをやるけれども、フォーマットに関してはあまり気にしないですね。

【「朝ドラらしさ」とは何か】

藤田： 稲垣さんは「朝ドラらしさ」はどのようなものだと思いますか。

稲垣： 主人公の人生を追いかけていくとき

は未来志向の時間軸でドラマが展開するのですが、時代設定はちょっと前の昭和だったり、ぐっと昔の明治の初めだったり、過去の時間を振り返って、未来志向の時間と振り返る時間と一緒になっています。それが教養娯楽的な意味で、ドラマとしての安定感を生み出している。それが「朝ドラらしさ」かなと思っています。

藤田： 「朝ドラらしい」上位3作は、確かにそういうドラマですね。時代設定としては、『あさが来た』は明治以前から始まり、『とと姉ちゃん』にしても昭和の戦争を挟んでいますし、『おしん』もそうですね。矢部さんは「朝ドラらしさ」とは、どういうものだと思いますか。

矢部： 私は自分の好き嫌いで申し上げるなら、女性が何者かになろうとしているというものに惹かれます。それは職業に就くことでなくてもいいんです。何者かになるというのは、己として立っていくということ。そういう朝ドラが私は好きです。だから、『あさが来た』も、あさちゃんだけではなくて、お姉さんがいて、お姉さんが己として立っていこうとしている、夫婦で。まずそういうところが好きで、そこに恋愛のような現代的な要素とか、わくわくさせてくれる、弾ませてくれるいろいろな要素が上手に入ると、もうたまらぬという感じになります。

『とと姉ちゃん』は、こういう意味で朝ドラらしいと選ばれるのはよく分かるのですが、真面目な女性が真面目に真面目に生きていて、何か息苦しくて、私としてはあまり乗れないんです。だから、意外な感じで女性が自立していく感じが好きですね。それを私は期待していると思います。

藤田： 矢部さんの著書の中で、若い人が見て、これから自分のロールモデルにしようという話ではなくて、50代になった自分がどう生きて

きたかを振り返ることができたり、自分が18歳で志を立てたところに戻れる話だということを書かれています。その部分も朝ドラらしいということになりますか。

矢部： 何かになりたいと人はいつでもやっ決めて決めるんだろう、といつも思うんですね。今の人はものすごく早くから就活させられたりして、お気の毒だなと本当に思っていて、『ちりとてちん』の主人公は、高校を卒業するときに何になりたいかさっぱり分からないんですよ。でも、何かになりたいんです。それがすごく好きで、よく分かるんです。

高校を卒業したときに医学部へ行きたい人とか、私は本当に尊敬するんです。18歳の段階で何かになりたいということがきちんと見えるのは、すごいことだと思って。たいがいの人はそうではないと思うのです。大学を卒業してもそんなことはたくさんあって、40になっても50になっても、私は何になりたいんだろうということを、ずっと考えて生きてきているところがあるので、そういう迷う気持ちとか、決めきれない気持ちとか、そういうものを描いてくれていることに惹かれます。

藤田： そういうときに誰かが支えてくれるとか、ちょっとしたきっかけを与えてくれるということが、朝ドラを見る心の癒やしになる。そんな感じでしょうか。

矢部： はい、そうです。

藤田： 鈴木さんはどうですか。

鈴木： 先ほどの何者かになりたいという話。世の中がどうあれ、主人公がどうその中で成長していくかということを描いて、そこに対して元気をもらおうという見方をしている人たちがいる一方で、若い世代というのは、もっと日常とか変化しないものとか、そういうものをドラマに求め

るようになっているのだらうと思います。

立身出世したいというのは、立身出世が許されなかった時代にはまさに憧れとして機能するけれども、今、大学生は大学に入った瞬間から何者かになるように、自分の人生のグラフを描いて、まさにドラマのように現実を生きろと言われていたから、ドラマではできる限りそういうことが起こらずに、すごく優しい人たちに囲まれて、何も起こらない場面が見たいのではないだろうかと思うんですよね。

藤田： 文科省から言われているキャリア教育みたいな話ですね。

鈴木： そうですね。そういうまさに人生の現実がドラマになってきたときには、ドラマにはむしろファンタジーとしての安心を求める。逆に立身出世ということに対して、自分で壁を打ち破っていかなければいけなかった人たちにとっては、それを応援してくれるイケメンがいるというのが最高のファンタジーであるという意味で、どちらの人たちもある種のファンタジー、虚構というものをドラマに求めているんだけど、その求めているファンタジーがそれぞれの生きている環境や生きてきた環境で違って来るから、まさに「人生論」として朝ドラが見られているということなのではないかなと思うんです。

藤田： 稲垣さん、先ほどのロールモデルという話で、実際に実在の人がいることについては、どうお考えですか。たとえば、今の『まんぷく』でも『チキンラーメンの女房』³⁾という本が出ていますが、結構あれは一代記を忠実に書いています。

なので、先のことが結構分かってしまうんですけど、功成り名遂げたということが分かっている、この人はどういう人生を歩むかが分かっている人をベースにしてドラマを作っているとい

うことについては、どういうふうにお考えですか。

稲垣： 実在の人物がいて、それをめぐる一般的な理解というのは定番の物語がだいたいあると思うんですが、そのままなぞったらたぶんあまり面白くないと思うんです。それに、そもそもそれがリアルかどうかも本当には分かりませんよね。

藤田： 伝記も1つのフィクションということですね。

稲垣： そうですね。だから、一応事実としての結末が見えていても、それこそ短期的視点の面白さではないですけど、1回1回にこんなふうなエピソードがあって、長期的なストーリーもそれによって違うように見えてくるという、そういう楽しみ方はやはりあるんだろうと思うんですね。

藤田： だから、モデルがいてもドラマはドラマとして成立するという。『あさが来た』のあさと新次郎のやりとりなんて誰もものぞいたことがないはずなのに、すごくリアルに描いていますね。

若泉さんは、実際にモデルがいて、一代記を作る原作がある話ということは、ドラマ作りはどう関係してきますか。

若泉： 確かに結末が分かっているということではいえばそうなんですけど、逆に見やすくて安心感があるというのかな。

まさに50代、60代の方が挙げた『あさが来た』『とと姉ちゃん』『花子とアン』『ゲゲゲの女房』はみんなそうですね。一方で、若い人たちが選んだ『ひよっこ』『あまちゃん』『半分、青い。』はオリジナルで現代を描いているので先が読めない。どちらをとるかということですね。両方あるのではないかという気はいたします。

【朝ドラと戦争描写】

藤田： 朝ドラに欠かせない要素の1つとして戦争があると思うんですね。太平洋戦争を境にして、人の人生はガラッと変わってしまうというところがあって、連れ合いが亡くなったり、周りの人が亡くなったり、自分の家がなくなったり。戦争を挟むことによって、ドラマとしては非常にドラマチックなものが生まれるんですけども、一方において、戦争の体験がない人が視聴者の中でどんどん増えていっているわけですね。

この、朝ドラに戦争を挟むということがどう見えているのか、という調査もされていますね。朝ドラの戦争描写について、「戦争の描写を見たくない」という人が56%ですが、モデルのある作品では戦争を描くことはやむをえないというような意見もあると。ドラマが実際に戦争場面を描くことによって、重くなったり暗くなったりすることになります。朝ドラは安心感を与えたり、幸せな気持ちになるものだという捉え方がある一方で、人の人生をリアルに描くという中で、戦争描写というのが何らかの形で入り込んでくるのですが、矢部さんはこのことについて、どう思われますか。

矢部： 『カーネーション』がすごいなと思っている理由の1つにそれが 있습니다。ヒロインの視点から、戦争が非常にばかばかしいものであるということが心の声として語られるんですけど、「勝つなり負けるなり、ちゃっちゃと終わらせてほしいわ」というんですね。そういう視点に加えて、私がもう1つ『カーネーション』が大好きなのは、昭和40年代の場面で、加害責任のことが話題に出てくるからです。加害という視点が入ってくるということ自体に、私は驚いてしまっています。それこそ書かなくてもいいんですよ。戦争

の場面は見たくない人もいるし、史実として主人公のモデルがここで加害責任に気づいたというわけでもないと思うんですが、主人公の脇にいる非常に重要な女性が、自分の息子が亡くなったことについて加害責任を感じると言うことに、私は本当に驚きました。

NHKが8月15日に戦争を特集する番組を作るのとは違う形で、日本に戦争があり、日本は負けたんだと、ひどくむなしいことが起きたんだと、悲惨でむなしいことが起きたということ、今見てくれる人に率直に訴えられるのは、朝ドラだけではないかと思っています。

藤田： 稲垣さんはどう思われますか。

稲垣： 私もまったく同じで、『カーネーション』の戦争の描き方は、本当にリアリティーがあったなという感じがします。

『ひよっこ』もうまく扱っているんだけど、やや定番的というか、観念的な感じがして、『カーネーション』のほうが、我々が戦争を体験してなくてもその感覚を実感できた。生活の中で痛みというのはどういうことかということにつながるような、よくできた描写だったと思います。

藤田： 自分の商売はもう上がったみたいになって、その中で、日常の中でじわじわと来る重圧や重みみたいなものを、どういうふうに感じるかみたいなことですね。具体的な戦争場面とか、誰が死んだという話以前に、庶民が感じる実感としての重苦しさみたいな、そういうものをよく描いていたと思います。鈴木さんはどうですか。

鈴木： ドラマが戦争を描くことの最大のメリットは、戦争がいかにも理不尽かについて分かりやすく説明できるということなんです。先ほどもおっしゃったように、ドラマのストーリーを追いかけているから、順風満帆にいきそうだと思う

たのに旦那が戦争に連れていかれるとか、そういう出来事が起きてしまう。これは一言でいうと理不尽です。

ところが、朝ドラとは関係ないですが、最近のたとえば『この世界の片隅に』⁴⁾のヒットを見ると、おそらく若い人の受け取り方は、理不尽というのは、要するにこうあるはずだったのにそうならないのは理不尽だ、つまり理想形とかこうなってほしいという願望があって、それに対して距離感があるから理不尽だということになるんです。もしそういう期待を最初から持っていなかったりすると、それは悲劇なんですね。理不尽ではなくて悲劇。「何でこんなことが起こるんだ」ではなくて、「かわいそう」になってしまう。

だから、おそらく同じようなことを描いていて、同じようにストーリーを追いかけていても、もしかするとその受け取り方は、「なんて理不尽なことが起きているんだ」ではなくて、「なんてこの人たちはかわいそうなんだ」になってしまうかもしれないなど、そんなことを考えました。

藤田： 他者化してしまうということですか。

鈴木： 他者化というか、むしろ自分事化かもしれないです。他人事だったら「理不尽だな」かもしれないですが、要するに自分と重ねて「かわいそうだな」で終わってしまうと。そうすると、先ほど加害という話もありましたが、理不尽ではなくて自分に降ってきた「かわいそう」なので、なぜかわいそうなことが起きたのかまで話がいけないかもしれないですね。

藤田： ドラマの中でそれをどこまで深く追求していけるか、描けるかというのも大事なところですね。

鈴木： 多くの人に戦争についての知識や、それなりのバックグラウンドがあるという前提で

描くと、「こうなってくるということは、じわじわ戦争の足音が近づいてきているな」というふうに見られる人と、「何で、うまくいっていたのに急に変なことが起きてかわいそうなことになるの」と思う人の間では、同じストーリーでも受け取り方が違って来るかもしれない。

そう考えると、作り手の戦争をこう受け取ってほしいという受け取り方を若い世代の視聴者がしているかどうかというのは、また別途検証が必要なのではないかとは思っています。

【東日本大震災で見た朝ドラの「日常性」】

若泉： まもなく3・11なので震災のことも少しお話しさせてください。これは内容ということではなくて、朝ドラがどう見られているかということなんですが、3・11があったときに1週間すべての定時番組がなくなりました。

再開するにあたって、そのときに定時番組で真っ先に再開したのが、当時朝ドラでやっていた『てっぱん』、そして『のど自慢』。この2つから番組を戻したんですね。『てっぱん』は瀧本美織さんと富司純子さんが10秒メッセージをつけて、「今日から再開します」と言って始めて、『のど自慢』のほうは久慈の公開生放送の会場に大漁旗がわーっと出る中で、八代亜紀さんがゲストで歌って始まりました。

要するに、朝ドラはあって当たり前のものがなくなる不安というのでしょうか、それこそ今まであったものがなくなってしまう不安というのがすごく大きくて、やはり日常に戻る一番最初だった。

やはり、長寿番組がずっと続いているというのは、民放さんにもそういう番組がありますが、

何か役割があるのではないかなと思います。

藤田： 今、若泉さんが言われたことも、朝ドラの性格の一面をよく表していると思います。私たちは朝ドラをずっと見続けていけば、半年付き合うんですね。そうすると、身近な家族、身近な友達みたいになる。誰々さんは今日はどうしているかな？みたいな感じで、毎日朝ドラを見ますよね。そうすると、震災などで急にそれが途絶えてしまったときに、ドラマとともに自分の日常がなくなってしまうというような感覚を持つ、というのが朝ドラの特異なところだと思います。1クール、3か月で終わってしまうものなら、最初から先が見えてしまっているんですが、半年はとても長いんですね。その間に自分の日常のようになるということだと思うんです。つまらなくても見続けるとか、自分は習慣になっているから見るみたいな話が出ましたが、それもやはり朝ドラそのものが日常になって、見ることが自分の日常にどんどん織り込まれてしまうという感覚ではないでしょうか。

その要素の1つは、15分というサイズですね。これは連続テレビ小説として、15分の短いものがポンポンと毎日必ず自分のところに送り届けられ、それを見続けながら1週間を過ごすみたいな、そういう自分の生活の時間に15分が織り込まれているという、ちょうどいいサイズというか。

これが1時間だとすると、毎日見続けるのはなかなか難しい。夜遅く飲んで帰ってきて15分だったら見ようかなと思えるんですね。それから、最近NHKはすごく丁寧で、「5分で朝ドラ」とか、週末にずっと1週間分やってくれるということも含めて、放送が必ず毎日あるということが、朝ドラ習慣化の大きな側面だと思います。鈴木さん、連続して毎日見るみたいなものは、

ほかにはなかなかないですね。

鈴木： 連続テレビ小説ということは、連続小説とテレビ小説という2つの方面から考えることができます。連続小説というと皆さんご存じの新聞連載の小説、古くは『大菩薩峠』とか、『砂の器』から『失楽園』『愛の流刑地』まで、新聞連載でヒットした小説がずっと存在しました。

これがラジオ小説になったのが放送メディアの始まりで、そしてそのラジオ小説のテレビ版として連続テレビ小説が始まったということで、新聞の朝刊を開いて小説を読むというような習慣の延長線上にあるものです。ご存じの方もいるかもしれませんが、日本の新聞は世界で一番読まれていて、世界の新聞購読者数の上位を占めているのはすべて日本の新聞なんです。そういう意味で新聞を読むとか、朝何かメディアに接するという習慣が身についている私たちにとって、実は連続テレビ小説が一番なじみのある形態の1つかもしれない。

ただ、毎日習慣で同じようなことをするというのが、最近そうもできなくなっているのではないかという意見もあります。若い世代の中では今、習慣化というのがキーワードになっていて、放っておくと毎日同じリズムで生活することができなくなるというんですね。そうすると何が必要かという、たとえば何時になったら必ずこれをするとか、毎週何曜日には何時から何時までこれをするというふうに、スマートフォンのアプリ等を使ってアラームをつけて1週間を規律していく、そういうのが流行っていたりします。その手軽な1つのきっかけとして、朝になったらそれこそ占いを見たらNHKに替えるみたいな。

藤田： 自分のルーティンみたいなことを朝ドラが作ってくれるということですね。

鈴木： なぜならば、私たちの生きる社会が

どんどん不安定で流動的になっていて、サービス業で働いていれば、今週だけは土日に出るとか、この日は夜に入るとか、生活リズムがバラバラになるわけですね。そうしたときに、自分の生活の1つの鍵になるところで、毎日は見られないかもしれないけれども、何時から何時までこれが動いているんだということが、先ほど藤田さんがおっしゃったように、安心感を与えてくれるのではないかなと思うんです。

藤田： 毎週とか毎日何かをするみたいなのが、メディアを中心として回転していくということがありますね。かつての新聞小説もそうですし、『少年ジャンプ』の発売日には必ず真っ先に本屋に行くみたいに、定期的に物語が届けられて、それに必ず接触していくみたいなのが、かつてはあったんですが、だんだんそれが少なくなってきました。

稲垣さんは新聞小説の時代も研究されていますが、こういう習慣化みたいなことについて、どう思われますか。

稲垣： 新聞小説は私の場合、女学生小説の時代だけだったのですが、新聞小説で女学生を扱うというのが大変珍しい。だから、日常の新聞購読者層とは違う人たちをぐっと集めて、毎日毎日買う人が増え新聞の売り上げが10倍ぐらいになったというのはありました。ただ、それと今の習慣化ということは違うように思います。明治になって、時計を置くようになったのが近代学校ですから。

藤田： 定時で生活するようになったということですね。

稲垣： そうですね。時間を区切って時間割どおりに生活するという規律ができたのですが、その規律訓練が今おそらくだんだんなくなってきました。それとは別のもっと楽しい習慣化

というのが必要になっている気がします。

藤田： 矢部さんは毎朝8時にだいたい見ているんですね。

矢部： そうですね。

藤田： どういうふうに見ているんですか。何かやりながらとか。

矢部： 私はだいたい朝食をとりながらでちょうどいい。ずっとそんな感じですけども、やはり同じように働いている女性でよく聞くのは、とにかく朝ドラはつけていると。面白いときはちゃんと前を向いて見るけれど、そうではないときは、背中で見ると言い方をする人がいます。

藤田： 声は聞いているということですか。

矢部： そういう感じですね。そして、同時にほかの用事に気をとられる。今日は何をしなきゃとか、洋服は何を着ようとか。でも、その話をしてくれた人は、面白いとつい前を向いて見てしまうから、それを頭に入れて時間を計算しないと駄目だと言っていました。

藤田： 若泉さん、画面の向こうのこういう視聴者を、何となくでも想定しながら朝ドラは作るものですか。

若泉： もちろんです。ご家庭以外でも朝ドラはよく見られていますし。空港で出張のフライトを待っていると、ちょうど朝ドラの時間ということがありますが、だいたい空港の待合室はNHKの画面になっているんですよ。自分が演出した回だったりすると、本当に冷や汗ものです。皆さん、じーっと見ていただいているので。それから病院ですね。病院で皆さんが見ているので、やはり患者の皆さんが傷つくような内容は気をつけたほうがいいとか、そういうのはすごくあります。

あと、『ゲゲゲの女房』で8時15分が8時に

なったときの最初は大変でした。送出機が壊れているんじゃないかとか、間違ってるんじゃないかとか、電話がかかってきて、15分早くなるとさんざん周知したんですが、皆さんそれだけ習慣化していたんだと思います。

藤田：話を戻しますが、声だけ聞いてもいいみたいな、そういう作り方、集中しなくてもいいというのは何となく意識している？

若泉：『おしん』を書かれた橋田壽賀子先生の有名な言葉があるんですけど、「画面を見ていなくても筋が分かるようにしなさい」と言われました。ナレーションとセリフを聞いていれば分かるように、と。これが絶対にいいかどうかというのは、またいろいろ議論があると思うのですが、「見なくて分かるように作らなければいけないのが朝ドラだ。みんな忙しい時間なのだから」というお話を、昔されていました。

藤田：すごく説明的にしなければいけないという感じですか。

若泉：ある意味そうです。

【SNSによる朝ドラの新たな「共有化」】

藤田：2010年以降、SNSを通じて皆さんが話題を共有しているという話が出てきましたけれども、その一方で、「昨日何を見た？」とドラマが教室で話題になることが、だんだん若い世代で減っていつているともいわれています。現代の話題のされ方というのは実際、どういった感じになっていると思われますか。

矢部さんは、職場の周りの女性と朝ドラの話をすることはありますか。

矢部：私はやはり向井さんからだと思んですが、女子飲み席で向井さんがどれだけかわいいかという話をみんなしていました。その第

2弾が綾野剛さんだったんです。向井さんの顔はグーより小さいんじゃないかと私の友達が言っていたんですが、みんな、グーよりは大きいだろうと思うけれども、飲んで席で「そうだよね、そうだよね」って。

そういう空気を共有できるというのが朝ドラにはすごくあって、私の会社の後輩などがママ友と話すときに、保育園だといろいろな立場の人たちが来ますよね。会社なら一応似たような環境にはいるわけですが、保育園のママ友や公園のママ友は誰がいるかよく分からない。立場もそれぞれ違うだろうというときに、朝ドラはすごくいいと言っていました。

たとえばですが、全然つまんなくない？という話でもすごく盛り上がるという。『まれ』のときに、お母さんになってからの主人公があんまりつまらないので、ママ友同士でみんなで怒って、「でも毎日見てるじゃん」となったと会社の後輩が言っていました。

藤田：職場やママ友のような対面的な世界の中で話題になることはもちろんかつてからずっとあったし、家の中で1人で見ている、独り言でしゃべっているとか、突っ込みを入れているとかいろいろあるのですが、SNSが登場することによって、それが表面化して、ほかの人がどんな感情でいるかを見られるようになってしまった。今はそういう時代ですね。鈴木さん、この共有化みたいなことをどう思いますか。

鈴木：まず、共有ということについて言うと、もちろん昔からあります。会社に行けば、「経済紙を読んでいるか」「今朝の記事を読んだか」と言われるわけですから、それは朝ドラを共有しているのと一緒といえば一緒なんです。

ただ、やはり「ああ、そのシーンを覚えている」「そのセリフを覚えている」みたいなことで、同

じところについて他人が楽しく語るのを知ると自分も楽しいというのが明らかになったのは、おそらくSNS以降だろうと思うんです。

これは社会学の研究の中でも、最近の文化の研究では、SNSが他人のコンテンツや文化を楽しんでいく大きなきっかけになっているというのがいわれるようになっていきますから、そこはあると思うんです。

スベっているなあとか、この超展開はありえないとか、そういう実際に見ているものと、見た感想のレベルで誰かにつながるのが、同時に進行しているのが今なんだろうと思います。

藤田： 自分と同じ見方をしている人がほかにもいる、という。

鈴木： そうですね。やはり私の見方は正しかったと思える。その一方で、つながっていくことが楽しいとどうなるかという、外れたくないと考えがちになります。誰に何を言われようと自分が楽しいものよりも、私と同じように楽しんでいる人がいたという方向にどんどん人が流れていきますから、どうしても鉄板のもの、定番のものに行ってしまうし、新しいものにチャレンジして外れたとか、違ったとなったら損をするので、できる限りみんなが見ていそうな安定のものに行ってしまうということになりかねない。作る側もそれを意識しているように思いますが、ドラマを作るモチベーションとしては、はたしてそれだけでいいのかなというのはこのごろ感じます。

藤田： 若泉さん、今SNSでそういう反応が見られるようになった時代みたいなことについて、テレビドラマの作り手としてどういうふうに思いますか。

若泉： 全然違いますね。自分がかつて担当した『てるてる家族』が1昨年BSで再放送になったんですが、ツイッターの反響がすごかった

んです。本放送のときにはそんなものはなかったんで、こんなふうに見られていたんだとか、こんなところまで見てくれていた、というのがすごく面白くて。ただ、あれは再放送だからいいのですが、リアルで作っていると、気にし始めたらしきりがないなと感じましたね。

藤田： ものすごく心臓に悪いという、そういう感じでしょうか。

若泉： はい。一方、北川悦吏子さんみたいにご自身で「今日は神回です」とおっしゃる、ああいう新たな手法もあるので、可能性は未知数だと思いますが。

【この先見たい朝ドラは？】

・シンポジウム参加者に、会場アンケートで「この先見たい朝ドラ」について書いてもらい、一部を紹介した。

「海外ロケもしくはグローバルな展開のドラマ」
「兼高かおるさんをモデルとした朝ドラ」
「美空ひばりさん、もしくは島倉千代子さんが主人公のドラマ」
「王貞治さんと長嶋茂雄さんが主人公のドラマ」
「理科系女子の話」
「性格がものすごく悪いヒロインの話」
「マイノリティーに関するもの」
「未来の家庭を舞台にしたもの、2050年の日本」

・続いて、脚本家・岡田恵和氏へのインタビュー取材で「今後書きたい朝ドラ」について聞いた回答を紹介した。

(岡田恵和氏インタビューVTR②)

岡田： ちょっとだけ思うのは、現代。つまり、時代ものでないことをやっていないので、放送時と同じ年代を(やりたい)。一番現代に



近いのは『あまちゃん』ですかね、ここ最近だと。それよりも、本当にたとえば2020年に放送するんだったら、2020年の人たちが出てくるのを朝ドラでやってみたいという感じはあります。

あと、やはり『ひよっこ』の時代は好きなんですよね。せっかく『いだてん〜東京オリムピック噺〜』であんなに素敵な（オープン）セットができたから、そこでやりたいというのはあります。

藤田： アンケートで出た「2050年」ではなかったですが、見ている2019年の人たちが生きている時代とドラマを接続するみたいな、ものすごく画期的なドラマができそうですね。現代をどう捉えているかという視聴者の厳しい目線があると思いますが、トライしてもいいと思います。では、結びになりますが、パネリストの皆さんが見てみたいと思う朝ドラについて伺います。

稲垣： 会場から、兼高かおるといのが出ましたけど、私は朝ドラのヒロインの選び方は結構渋くていいと思っています。私は個人的には石垣綾子さんの評伝みたいなのを考えています。戦後のアメリカナイゼーションの際に女性がグローバルに活躍するという時代があって、振り返って今の時代と比較するという設定でもちょっと面白いかなと思います。

それから、矢部さんがおっしゃっていたことに関連しますが、『あさが来た』や『あまちゃん』でちょっと出てきたような、女性目線で男子の新しい生き方を描くような男子の成長物語、立身出世ではない物語があったらいいなと思います。

藤田： 今に生きる男性モデルみたいなことですね。

鈴木： 技術的な話になってしまうんですけど

ど、『ゲゲゲの女房』で変わったことがもう1つあって、レターボックスサイズといって横長の画面で放送するようになったんですね。朝ドラは基本的には外ロケがあまりないから、寄りの画角が多くて、人の顔が全面に映る。昔の朝ドラで皆さんが印象的に思い出すのは、だいたいヒロインがアップで画面に向かって必死になって、こうしたいんだと、そういうふうに語っていた場面だったと思うんですね。

でも、これが横長の広い画角になると、私はこうしたいんだという画面にもう1人映ることができるようになる。だから、私は「あなた」にこうしてほしいんだというシーンが作れます。僕が今思い出すのは、「ダサいくらい何だよ、我慢しろよ!」という『あまちゃん』の場面。ああやって「私とあなた」の話が書けるようになる。

藤田： 誰かに呼びかけてほしいとか、話かけてほしい。

鈴木： 朝ドラのいいところは、若者がクールになっている時代、外したくないとか、こういうダサいのは嫌とかっていう時代に、そこで必死になっている人が出てくるところにあると思っています。その必死さを「私が1人で必死になる」のではなく、せっかくの横長の画角を生かして、「私とあなたの話」として誰かに熱い気持ちを届けるような、そういうお話が書けるものになってきたのではないかと思うので、そのへんが気になっているところです。

矢部： 朝ドラは今のところ非常に手堅い枠ではないですか。20%があらかじめ約束されているような枠になったのだとすれば、その中でもっと挑戦的なのとか、たとえば先ほど話に出た、学生さんがずっと自分の未来さえマーケティングしていくような時代にあって、あえて企画をマーケティングしない感じで、誰かがすごく

面白がれるものができればそれでいいのではな
いかという気もしていて。

先ほどマイノリティーの朝ドラという案もありま
したが、今は男の子の生きづらさみたいなこと
がすごくあると思うんです。生きづらいのは女性
より男性かもしれないと思うくらい。財務省トッ
プのセクハラ事件みたいなことを聞くと、やっぱ
りおやじは駄目じゃんとは思うんですけど、生き
づらいのは、そういうことも含めて男の子かもし
れないとしたら、男の子の生きづらさみたいな
ことが女性との対比で何かできたりとか。

そういうのを、たとえばその男の子がゲイなら
ゲイでもいいんです。このシチュエーションは面
白いと誰かが思って、ぐいぐい攻めてもらえる枠
になったら。よその局とかがヒットした外国ド
ラマの焼き直しとかをしていると、すごくがっか
り感があって、人のまねしてんよと心から思う
ので、私はぜひ挑戦的なものをやってもらいた
いと思っています。

藤田： 若泉さん、もし制作者として現場に
戻るとしたらどういうドラマを作りますか。

若泉： いろいろ刺激的なご意見をありがと
うございます。私が思っているキーワードは、「ふ
るさと」です。「昭和」と「モデル」というのを
ずっとこのところ引っ張ってきたわけですが、
いつまでもこれが続かないだろうとは思っていま

す。その一方、「ふるさと」というのは世代を問
わず誰にでもあるので、それぞれが自分の「ふ
るさと」や地域を誇りに思えるような朝ドラがで
ければなど。

前例はすでにあります。『あまちゃん』の東北
ですとか、『半分、青い。』の岐阜、これはだ
いたい脚本家の「ふるさと」が書かれているので、
思いが乗りやすいんですが、今後、新しい形で
「ふるさと」を描く流れができなかなと思っ
ています。

藤田： 僕は朝ドラをずっと見続けているの
ですが、『ひよっこ』が僕が子どもだった60年
代を舞台にしている、あの時代がすごくクリアに
描かれていると、懐かしさを覚えたんです。

朝ドラには前に向かっていくヒロイン像みたい
なものもあるんですが、もう一方で何歳になつても
自分の気持ちを振り返ることができる場みたい
なところがあると思います。

視聴者はだんだん移り変わっていきます。60
年代を懐かしいと思う人もだんだんなくなる
かもしれないんですが、70年代のある数年間の
リアルとか、80年代のある数年間のリアルとか
いうものは、やはり、今、人が生きていくう
えに必要な時代感覚なのではないかと思うん
です。いつの時代になつても、30年前の自分
を振り返られるような、ある一定の時間を描
いたコミュニティのお話を見てみたいので、岡
田さんに70年代、80年代をまた書いてもら
えると嬉しいですね。岡田さんは何歳まで書
けばいいんだみたいな話ですけど。

今を生きる自分の背中をちょっと押してく
れて、明日を生きる力を与えてくれるための自
分の振り返りみたいな、そういう朝ドラを見
てみたいと思います。



総合司会： 時間になりましたので、今の未来のお話をもって、今回のシンポジウムを終了とさせていただきます。パネリストの皆さん、本当にどうもありがとうございました。ご参加の皆さまには、これからも続いていくであろう朝ドラに引き続きご期待いただき、制作サイドも頑張っていますので、これからもご意見、ご感想、そして応援をどうぞよろしくお願いいたします。

(よしかわ くにお)

注：

- 1) 矢部万紀子著『朝ドラには働く女子の本音が詰まっている』ちくま新書 (2018)
- 2) NHK 土曜ドラマ『みかづき』2019年1月26日～2月23日放送 (全5回)。原作：森絵都、脚本：水橋文美江
- 3) 安藤百福発明記念館『チキンラーメンの女房 実録 安藤仁子』中央公論新社 (2018)
- 4) こうの史代の同名漫画を原作とするアニメーション映画。監督・脚本：片渕須直、配給：東京テアトル、制作：MAPPA、製作：「この世界の片隅に」製作委員会。2016年公開

おわりに

長年、視聴者がどのようにテレビを見ているのかを調べる仕事をしてきて、しばしば感じる難しさがある。テレビ視聴という行為はたいていの場合、最も意識を使わなくて済むリラックしたものだ。ところがほとんどの調査手法は、対象者に意識を問うものだ。アンケートにせよインタビューにせよ、問いに対する答えは、言葉、あるいはそれに準ずる表現の形で求めることになる。最も意識していないものを意識化してもらわなければならない。

加えて今回私たちが対象にした朝ドラは、数ある番組の中でもとりわけ軽い意識で見られているものの1つに違いない。多くの視聴者にとって朝ドラは生活時間の中に組み込まれた生活習慣の一部となっている。その一部をわざわざ取り出してあれやこれや聞く。それが私たちの仕事だ。しかし答えるほうも困るだろう。簡単に答えられる問いもあるが、中には聞かれても答えにくい問いもあったのではないか。そのへんはこちらも長年の経験で心得ているから、いろいろな配慮を施してはいる。それでも調査というものを持ついくつかの問題を感じている。たとえば、最も意識化しやすいものや言葉にしやすいものが前面に出てきがちになる。あるいは、同じ視聴者の中でもより強く朝ドラに意識を持っている人の答えが集まりやすい。そのような傾向がある。もちろんそれも心得てはいる。

だが、とりわけ難しいのはあれこれ聞いてもあまり答えが返ってこない人々。そういう人の多くは、私たちの調査にも参加してくれていないかもしれない。しかし、そういう人々こそが一番たくさんいて、朝ドラの視聴者としては一番普

通で、一番本当の姿で、結局のところ実は一番大事な人々なのではないか。

もしかしたら【各論編】Ⅲ-5「長期視点・短期視点～視聴者の多様性理解への試み～」で行った「中間派・低視聴意欲層」の分析には、上記のような人々の一端が垣間見えたのかもしれない。「朝ドラに没頭しすぎず、心揺さぶられることより気楽にほっとすることを求める」ような人々であった。そして見方は緩いのに視聴量は多い人々であった。調査では7%を占めるにすぎないが、現実にはずっと大きな割合なのではないかと思う。

そんな感触を、別の形でかねてから感じていた。視聴率をウォッチしているとたいていの番組は話題のテーマを取り上げたり、人気者が出演したりすると視聴率が上がるし、その逆なら視聴率が下がる。だが朝ドラの日々の視聴率は、内容に多少のことがあってもほとんど変化しない。せいぜい上下1～2%の中に納まってしまう。何があっても毎日見てくれる「鉄板視聴層」が土台を支えていて、上下するのは表層の一部の視聴者だけだ。だから朝ドラ視聴率の分析には往生したものだ。

一方、そんな鉄板視聴層に支えられているはずの朝ドラだが、長期スパンで見ると2000年代のころは前世紀以来長らく平均視聴率がじりじりと下がっていた。その当時、この大きな流れの向きを変えることができると考える者は少なかったように思う。だが現実には、2010年代に入って風向きがガラッと変わった。

その背景には何があるのか。大きく分けると2つの契機がある。朝ドラの送り手側と受け手側である。受け手側についてはさらに、視聴者自

体とそれを取り巻く時代環境とに分けられる。私たちの仕事は主に、このうち視聴者を対象としたもので、視聴者がどのように朝ドラを見ているのか、各種の調査を行った。

その結果、調査対象者の1割程度の人々は朝ドラをほぼ全部見ている。この人たちが朝ドラ視聴率を下支えしているのは間違いない。そこに新たな視聴層がいくつかの波となって流入している様子も見えた。注目したいのは、朝ドラの中に突出した作品や話題作があって、その作品だけが多くの人に見られる、という実態があるのではなく、いわば朝ドラという「枠」として見始め、見続けるという傾向が見られることだ。そこには「習慣的に見る」という視聴意識がある。「多少つまらなくても見続ける」という人さえ少なくない。だからといって、本当につまらない朝ドラが続いたらマンネリに陥り、じり貧になるだけである。

近年の朝ドラが視聴者から支持され続けているということは、何かマンネリを防ぐ要素を備えていたのではないか、その視点を持って分析を行った。私たちが見いだしたキーワードは「多様性」であった。

朝ドライメージの分析からは、朝ドラといえば「前向きで」「明るく」「健全な」もので、「家族そろって見るのにふさわしい」などスタンダード・イメージがある一方、それぞれの作品イメージについてはかなりの多様性があることが分かった。

「朝ドラらしさ」に関する分析では、「朝ドラらしさ」が年層によって多様であるだけでなく、時代とともに新たな「朝ドラらしさ」が登場して付け加えられ、それらが視聴者の中で同時に混在している様子が分かった。

作品をまたいだ継続視聴ということが行われていることも、クラスター分析の結果見えてき

た。そして、朝ドラ視聴を始めた時期によって朝ドラとの付き合い方にも違いがあることも分かった。

朝ドラを見る「長期視点」「短期視点」の分析は、視聴者の見方にも多様性があることを示したが、それと同時に、視聴者は作品に合わせて見方を変える柔軟性を備えていることも指摘した。また、今回の分析では「中間派」の実態解明に注力した。

朝ドラに関してSNSを利用する人も少しずつ増えている。今回の調査では朝ドラに関連してSNSを閲覧する、または投稿するという人は14%であった。この人たちは朝ドラ視聴にも積極的な様子が分かった。

各作調査8回の最後に行った『半分、青い。』と『まんぷく』は、作品の傾向も見られ方も大変対照的な2作だった。朝ドラ作品の多様性を示す好例として、詳細な分析を試みた。

朝ドラがこうしたさまざまな多様性を備えることで、視聴者に飽きられずに支持され続けているのではないだろうか。ただ、現在の朝ドラ視聴にこのような状況があることはある程度解明できたが、それが00年代から10年代にかけてなぜどのように変化したのかについては、私たちの仕事では解き明かすことができなかった。

朝ドラ視聴に変化をもたらした受け手側の背景として、時代環境の変化もあったはずだ。

00年代から10年代に向かう時期、朝ドラの視聴を後押しするような時代の変化があったであろうか。いわゆるバブル崩壊からほぼ20年経ち「失われた20年」といった言葉も生まれた時期であり、人々の気持ちにも何らかの変化があったのかもしれない。そこへ東日本大震災が発生したことは、人生を肯定するような朝ドラ的

な生活観や人生観に目を向ける気分を後押ししたかもしれない。

また2011年には地上デジタル放送への完全移行が行われた（東北3県は2012年）。これに向けてテレビや録画機器のハイビジョン化、デジタル化が進み、録画視聴を中心とする視聴環境を大きく変えたと思われる。

このような時代の流れの中に位置づけて考察することについては課題を残した。

もう1つ、私たちができなかった分野は送り手側の背景についてである。今回は朝ドラの内容および演出に関わる領域の研究・分析に手を伸ばすことはできなかった。ドラマ番組が面白いか否かは、内容要素とその描き方・演出によるところが大きいので、この領域の研究は、好調要因分析には必要不可欠というべきであろう。これも今後の課題としたい。

主な文献：

- NHK 放送世論調査所編『テレビ視聴の30年』日本放送出版協会（1983）
- NHK 放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』日本放送出版協会（2003）
- 牧田徹雄「NHK 連続テレビ小説の考察」（『NHK 放送文化研究 年報21』日本放送出版協会（1976））
- 岩崎修「テレビ小説の誕生」（『放送文化』日本放送出版協会1962年7月号）
- 『放送研究と調査』2019年3月号ほか
- 『NHK年鑑2011』ほか
- 小林由紀子「新興の文化—テレビドラマの源流—」（立命館大学文学部『日本文化の源流を求めて 第4巻』文理閣（2012））
- NHK大阪放送局編『こちらJOBK～NHK大阪放送局七十年～』日本放送協会大阪放送局（1995）
- 日本放送協会総合放送文化研究所編『放送学研究』28「日本のテレビ編成」日本放送出版協会（1976）
- 田幸和歌子著『大切なことはみんな朝ドラが教えてくれた』太田出版（2012）
- 矢部万紀子著『朝ドラには働く女子の本音が詰まっている』ちくま新書（2018）
- 安藤百福発明記念館『チキンラーメンの女房 実録 安藤仁子』中央公論新社（2018）

付表1 NHK連続テレビ小説【作品一覧表】

	作品名	放送開始年	放送期間	初回番組平均世帯視聴率★	最高番組平均世帯視聴率★	期間平均視聴率★	原作／作／脚本	主人公のモデル	男性主役	主な出演者
	1 娘と私	1961	昭和36年度				獅子文六「娘と私」より／脚本：山下与志一	獅子文六	男1	北沢彪 村田貞枝（北林早苗に改名） 北城由紀子
	2 あしたの風	1962	昭和37年度				壺井栄「あしたの風」ほか／脚本：山下与志一	壺井栄		渡辺富美子 小畑絹子（小島絹子に改名）
	3 あかつき	1963	昭和38年度				武者小路実篤「幸福な家族」ほか／脚本：山下与志一		男2	佐分利信 荒木道子 村松英子
※	4 うず潮	1964	昭和39年度	23.2	47.8	30.2	林芙美子作品集より／脚本：田中澄江	林芙美子		林美智子 津川雅彦 渡辺文雄
	5 たまゆら	1965	昭和40年度	30.2	44.7	33.6	原作：川端康成／脚色：山田豊、尾崎甫		男3	笠智衆 加藤道子 亀井光代
	6 おはなはん	1966	昭和41年度	34.9	56.4	45.8	林謙一「随筆・おはなはん一代記」より／作：小野田勇	原作者（林謙一）の母・林はな		櫻山文枝 高橋幸治 中村俊一
	7 旅路	1967	昭和42年度	44.5	56.9	45.8	平岩弓枝「旅路」より／作：平岩弓枝		男4	横内正 日色ともゑ 宇野重吉
注1)	8 あしたこそ	1968	昭和43年度	46.4	55.5	44.9	森村桂作品より／脚本：橋田壽賀子、中沢昭二	森村桂		藤田弓子 中畑道子 原田清人
	9 信子とおばあちゃん	1969	昭和44年度	40.5	46.8	37.8	獅子文六「信子」「おばあさん」より／脚本：井手俊郎			大谷直子 毛利菊枝 加藤道子
	10 虹	1970	昭和45年度	37.3	48.8	37.9	作：田中澄江			南田洋子 仲谷昇 小柳ルミ子
	11 蘭子ひとり	1971	昭和46年度	36.9	55.2	47.4	三浦哲郎「蘭子ひとり」より／脚本：高橋玄洋			山口果林 北林谷美 草苗光子
	12 藍より青く	1972	昭和47年度	42.9	43.3	47.3	作：山田太一			真木洋子 大和田伸也 佐野浅夫
	13 北の家族	1973	昭和48年度	42.4	51.8	46.1	作：橋田芳子			高橋洋子 清水章吾 左幸子
	14 鳩子の海	1974	昭和49年度	42.2	53.3	47.2	原作・林秀彦／脚本：林秀彦・中井多津夫			藤田三保子 斎藤こず恵 小林千登勢
	15 水色の時	1975	昭和50年度前	43.2	46.8	40.1	作：石森史郎			大竹しのぶ 篠田三郎 香川京子
※	16 おはようさん	1975	昭和50年度後	41.5	44.0	39.6	田辺聖子「甘い関係」より／脚本：松田暢子			秋野暢子 中田喜子 三田和代
	17 雲のじゅうたん	1976	昭和51年度前	34.3	48.7	40.1	作：田中正健			浅茅陽子 中条静夫 船越英二
※	18 火の国に	1976	昭和51年度後	41.5	43.9	35	作：石堂淑朗			鈴鹿景子 山内賢 堀雄二
	19 いちばん星	1977	昭和52年度前	30.5	44.9	37.2	結城亮一作「あゝ東京行進曲」より／脚本：宮内婦貴子	佐藤千夜子		高瀬春奈 五大路子 伴淳三郎
※	20 風見鶏	1977	昭和52年度後	45.2	48.2	38.3	脚本：杉山義法			新井春美 美目良 大木実
	21 おていちゃん	1978	昭和53年度前	36.6	50.0	43.0	沢村貞子「私の浅草」より／脚本：寺内小春	沢村貞子		友里千賀子 長門裕之 日色ともゑ
※	22 わたしは海	1978	昭和53年度後	41.3	42.1	35.9	作：岩間芳樹			相原友子 井上昭文 三島ゆり子
	23 マー姉ちゃん	1979	昭和54年度前	35.0	49.9	42.8	長谷川町子「サザエさんうちあけ話」より／脚本：小山内美江子	長谷川穂子		熊谷真実 藤田弓子 田中裕子
※	24 鮎のうた	1979	昭和54年度後	40.7	49.1	42.7	作：花登筐			山咲千恵 ミヤコ蝶々 仲真貴
	25 なっちゃんの写真館	1980	昭和55年度前	38.0	45.1	39.6	脚本：寺内小春	立木香都子		星野知子 滝田栄 萬田久子
※	26 虹を織る	1980	昭和55年度後	38.7	45.7	38.5	作：秋田佐知子			紺野美沙子 高松英郎 西村晃
	27 まんざくの花	1981	昭和56年度前	38.3	42.4	37.1	脚本：高橋正園			中村明美 生井健夫 倍賞千恵子
	28 本日も晴天なり	1981	昭和56年度後	34.5	43.3	36.6	作：小山内美江子	近藤富枝		原日出子 津川雅彦 宮本信子
	29 ハイカラさん	1982	昭和57年度前	32.5	44.9	36.2	作：大藪郁子			手塚理美 三國一朗 藤村志保
※	30 よーいドン	1982	昭和57年度後	32.7	43.1	38.8	作：杉山義法			藤吉久美子 山田吾一 馬淵晴子
	31 おしん	1983	昭和58年度	39.2	62.9	52.6	作：橋田壽賀子			乙羽信子 田中裕子 小林綾子 北村和夫
	32 ロマンس	1984	昭和59年度前	41.7	47.3	39.0	作：田中正健		男5	榎木孝明 樋口可南子 辰巳琢郎
※	33 心はいつもラムネ色	1984	昭和59年度後	35.4	48.6	40.2	作：富川元文	秋田實	男6	新藤栄作 藤谷美和子 美木良介 真野あずさ
	34 滞つくし	1985	昭和60年度前	37.1	55.3	44.3	作：ジェームス三木			沢口靖子 川野太郎 明石家さんま
※	35 いちばん太鼓	1985	昭和60年度後	37.7	39.9	33.4	作：井沢清		男7	岡野進一郎 三田寛子 渡辺美佐子
	36 はね駒	1986	昭和61年度前	37.2	49.7	41.7	作：寺内小春	磯村春子		斎藤由貴 樹木希林 沢田研二 渡辺謙

語り 注3)	主人公の名前	主人公の職業	ヒロインの生年	主人公の年齢	作品で描いた時代(年) 注4)	一代記 など 注5)	主人公の 結婚	舞台
(北沢彪)	私	作家(小説家)	明治26年 1893	32歳~58歳	1925-51 大正14年~昭和26年	半生記	○死別⇒再婚	東京
竹内三郎アナ	安江	主婦(養子を育てる)	明治35年 1902	43歳~60歳	1945-63 昭和20年~昭和38年現代	半生記	○	東京、香川(小豆島)
平光淳之助アナ	佐田正之助	大学教授⇒画家	不明	50歳代	1960年代現代(詳細不明)	数年	○	東京
白坂道子	林フミ子	作家(小説家)	明治36年 1903	19歳~没(1951年・47歳)後まで	1922-51 大正11年~昭和26年	半生記	○	尾道、天草、東京、広島
坂本和子	直木良彦	定年退職後	不明	60歳代	1960年代現代(詳細不明)	数年	○	鎌倉、宮崎、東京
永井智雄	浅尾はな	主婦⇒医学校⇒助産婦	明治18年 1885	18歳~81歳	1903-1966 明治36年~昭和41年	一代記	○	松山、大洲、鹿児島、弘前、東京
山内雅人	室伏雄一郎	鉄道員夫婦	明治38年 1905	10歳~57歳	1915-1962 大正4年~昭和37年	一代記	○	尾鷲、小樽、塩谷、三重
川久保潔	香原拱子	広告会社⇒新聞社⇒作家	昭和15年 1940	18歳~25歳	1959-1966 昭和34年~昭和41年4月	7年	○	東京
青木一雄アナ	小宮山信子	浪人生	昭和25年 1950	18歳~19歳	1969-1970 昭和44年~昭和45年現代	1年	しない	佐賀、唐津、東京
白坂道子	三谷かな子	主婦	大正4年 1915	28歳~50歳	1943-1965 昭和18年~昭和40年ごろ	半生記	○	東京、長崎、鳥取、京都、東京
石坂浩二	加野繭子	雑誌記者	昭和24年 1949	21歳~23歳	1970-1972 昭和45年~昭和47年現代	2年	しない	三戸、八戸、鳴子、東京、広島、東京
中畑道子・ 丹阿弥谷津子	田宮真紀	かつぎ屋、アイスキャンデー屋、中華料理店	大正14年 1925	18歳~41歳	1943-1966 昭和18年~昭和41年	半生記	○	熊本、大分、福岡、東京
緒形拳	佐々木志津	喫茶店アルバイト⇒県立連⇒水産試験場の研究補助員	昭和28年 1953	18歳~21歳	1971-1974 昭和46年~昭和49年現代	3年	しない	函館、金沢、横浜、宇和島
(藤田三保子)	鳩子	音楽家の内弟子⇒紙芝居屋⇒せんべい行人⇒主婦⇒織物問屋勤務	昭和14年 1939 注6)	6歳~36歳	1945-1975 昭和20年~昭和50年現代	一代記	○離婚	上関、東京、東海村、結城、東京
岸田今日子	松宮知子	高校生⇒浪人生(医大受験生)	昭和31年 1956	17歳~19歳	1974-1975 昭和49早春~昭和50年秋現代	1年半	しない	松本、東京
(秋野暢子・ 中田喜子)	殿村鮎子	化粧品会社OL⇒美容学校生・美容室アルバイト(美容師を目指す)	昭和31年 1956	18歳~19歳	1975 昭和50年4月~12月現代	8か月	しない	大阪
田中絹代	小野間真琴	女流飛行家⇒飛行学校教官	明治35年 1902	16歳~74歳	1918-1976 大正7年~昭和51年現代	一代記	○	秋田、東京
渡辺美佐子	桜木香子	造園師	昭和31年 1956	19歳~21歳	1975-1977 昭和50年夏~昭和52年春現代	2年未満	婚約まで	熊本
三國一朗	佐藤千夜子	流行歌手	明治30年 1897	15歳~71歳	1913-1968 大正2年~昭和43年	一代記	しない	山形、東京
八千草薫	松浦さん	パン屋	明治33年 1900	14歳~78歳	1914-1978 大正3年~昭和53年春現代	一代記	○	和歌山、兵庫
相川浩アナ	大沢てい子	女優	明治41年 1908	生まれる前~39歳	1902-1947 明治35年春~昭和22年5月	一代記	○離婚⇒再婚の約束	東京
倍賞千恵子	川村ミヨ	病院のハウスキーパー⇒戦争孤児を育てる	大正5年 1916	18歳~36歳	1934-1952 昭和9年9月~昭和27年春	半生記	○	広島、京都
飯塚長彦アナ	磯野マリ子	挿絵画家⇒出版社立ち上げ	大正5年 1916 注7)	17歳~41歳	1934-1957 昭和9年3月~昭和32年9月	半生記	○戦死	福岡、東京、鹿児島、福岡
フランキー堺	浜中あゆ	大阪商人(糸問屋)	明治44年 1911	17歳~41歳	1929-1952 昭和4年~昭和27年	半生記	○	長浜、大阪船場
川久保潔	西城夏子	写真館経営(写真家)	大正3年 1914	5歳~43歳	1919-1957 大正8年春~昭和32年夏	一代記	○	徳島、東京
井上善夫アナ	島崎佳代	宝塚歌劇団生徒⇒バレエ教室講師	大正9年 1920	17歳~44歳	1937-1965 昭和12年~昭和40年春	半生記	○	山口萩
(中村明美)	中里祐子	美大受験生	昭和36年 1961	18歳~20歳	1980-1981 昭和55年1月~56年10月現代	1年9か月	しない	秋田(横手)、東京
青木一雄	桂木元子	アナウンサー⇒ホルライター⇒作家	昭和元年 1926	18歳~47歳	1944-1973 昭和19年夏~昭和48年秋	半生記	○	日本橋、松江
川久保潔	野沢文	外国人専用ホテル経営	元治元年 1864	18歳~48歳	1882-1912 明治15年末~大正元年8月	一代記	○死別	横浜、伊豆
真屋順子	浦野みお	陸上短距離選手⇒芝居茶屋のお茶子⇒若御寮人さん⇒駅弁当屋⇒そば屋	明治45年 1912	15歳~35歳・71歳	1927-1947-1978 昭和2~22年8月・58年3月現代	一代記	○	大阪、舞鶴
奈良岡朋子	谷村しん	髪結⇒子ども洋服店⇒めしや⇒魚屋⇒スーパーマーケット経営	明治34年 1901	6歳~83歳	1907-1984 明治40年~昭和59年3月現代	一代記	○	山形、東京、佐賀、山形、三重(伊勢・津)
八千草薫	加治山平七	映画監督	明治27年 1894	18歳~40歳	1912-1934 明治45年冬~昭和9年	半生記	○	北海道、東京
ミヤコ蝶々	赤津文平	漫才作家	明治41年 1908	20歳~47歳	1928-1956 昭和3年春~昭和31年5月	半生記	○	大阪、東京
葛西聖司アナ	古川かをる	醤油醸造屋の跡を継ぐ	明治43年 1910	16歳~36歳	1926-1946 大正15年11月~昭和21年7月	半生記	○(死別)再婚死別	銚子
加藤治子	沢井銀平	大衆演劇一座	昭和18年 1943	22歳~32歳	1965-1975 昭和40年夏~昭和50年4月	10年	○	大阪、筑豊
細川俊之	橋りん	新聞記者	明治9年 1876	14歳~35歳	1890-1912 明治23年秋~明治45年7月	半生記	○	福島(相馬)、宮城(仙台)、東京

	作品名	放送開始年	放送期間	初回番組平均世帯視聴率★	最高番組平均世帯視聴率★	期間平均視聴率★	原作／作／脚本	主人公のモデル	男性主役	主な出演者
※	37 都の風	1986	昭和61年度後	38.6	44.9	39.3	脚本：重森孝子			加納みゆき 松原千明 黒木瞳
	38 チョッチャン	1987	昭和62年度前	36.8	46.7	38.0	黒柳朝「チョッチャンが行くわよ」より／脚本：金子成人	黒柳朝		古村比呂 佐藤慶 由紀さおり
※	39 はっさい先生	1987	昭和62年度後	34.9	44.5	38.1	脚本：高橋正園			若村麻由美 中村嘉津雄 渡辺徹
	40 ノンちゃんの夢	1988	昭和63年度前	37.2	50.6	39.1	作：佐藤繁子			藤田朋子 中村梅之助 山下真司
※	41 純ちゃんの応援歌	1988	昭和63年度後	35.4	44.0	38.6	作：布勢博一			山口智子 白川由美 高嶋政宏
	42 青春家族	1989	平成元年度前	35.8	44.2	37.8	作：井沢満			いしだあゆみ 清水美砂 橋爪功
※	43 和っこの金メダル	1989	平成元年度後	39.2	40.5	33.8	作：重森孝子			渡辺梓 桂三枝 柴俊夫 竜雷太
	44 蕭蕭と	1990	平成2年度前	29.4	39.5	33.9	作：矢島正雄	川原田政太郎	男8	田中実 荻野目洋子 野村宏伸
※	45 京、ふたり	1990	平成2年度後	33.6	41.6	35.6	作：竹山洋			山本陽子 畠田理恵 中条静夫 篠田三郎
	46 君の名は	1991	平成3年度	31.8	34.6	29.1	原作：菊田一夫／脚本：井沢満、横光晃、宮村優子、小林政広、星川泰子			鈴木京香 倉田てつを いしだあゆみ
※	47 おんなは度胸	1992	平成4年度前	31.0	45.4	38.5	原作・脚本：橋田壽賀子			泉ピン子 桜井幸子 藤岡琢也 藤山直美
	48 ひらり	1992	平成4年度後	34.9	42.9	36.9	作：内館牧子			石田ひかり 伊東四朗 伊武雅刀 伊東ゆかり
※	49 ええによぼ	1993	平成5年度前	34.7	44.5	35.2	作：東多江子			戸田菜穂 柴田恭兵 板東英二 和田アキ子
	50 かりん	1993	平成5年度後	35.3	35.7	31.4	作：松原敏春			細川直美 つみきみほ 筒井道隆 小林桂樹
※	51 びあの	1994	平成6年度前	28.2	30.6	25.5	作：富川元文／原案：富川元文／脚本：宮村優子			純名里沙 竹下景子 萬田久子 国生さゆり
	52 春よ、来い	1994	平成6年度後～7年度前	27.0	29.4	24.7	作：橋田壽賀子	橋田壽賀子		安田成美 中田喜子 高橋英樹 いしだあゆみ
※	53 走らんか!	1995	平成7年度後	25.1	28.0	20.5	脚本：金子成人／原案：長谷川法世		男9	三国一夫 田中好子 中江有里 菅野美穂
	54 ひまわり	1996	平成8年度前	25.3	29.6	25.5	作：井上由美子			松嶋菜々子 夏木マリ 藤村志保 上川隆也
※	55 ふたりっ子	1996	平成8年度後	24.3	31.9	29.0	作：大石静			岩崎ひろみ 菊池麻衣子 手塚理美 段田安則
	56 あぐり	1997	平成9年度前	25.4	31.5	28.4	吉行あぐり「梅桃が実るとき」より／脚本：清水有生	吉行あぐり		田中美里 野村萬斎 里見浩太郎 星由里子
※	57 甘辛しゃん	1997	平成9年度後	24.4	30.0	26.6	作：宮村優子・長川千佳子			佐藤夕美子 樋口可南子 風間杜夫
	58 天うらら	1998	平成10年度前	26.3	35.6	27.7	原案：門野晴子／脚本：神山由美子			須藤理彩 池内淳子 原日出子 小林薫
※	59 やんちゃくれ	1998	平成10年度後	24.0	26.3	22.5	作：中山乃莉子、石原武龍			小西美帆 八千草薫 柄本明 藤真利子
	60 すずらん	1999	平成11年度前	23.1	30.4	26.2	作：清水有生			遠野風子 橋爪功 倍賞千恵子 石倉三郎
※	61 あずか	1999	平成11年度後	25.9	27.6	24.4	作：鈴木聡			竹内結子 藤岡弘 紺野美沙子 芦屋雁之助
	62 私の青空	2000	平成12年度前	23.9	28.3	24.1	作：内館牧子			田畑智子 伊東四朗 加賀まりこ 筒井道隆
※	63 オードリー	2000	平成12年度後	23.2	24.0	20.5	作：大石静			岡本綾 賀来千香子 段田安則 大竹しのぶ
	64 ちゆらさん	2001	平成13年度前	21.3	29.3	22.2	作：岡田恵和			国仲涼子 堺正章 田中好子 平良とみ
※	65 ほんまもん	2001	平成13年度後	23.1	25.1	22.6	作：西荻弓絵			池脇千鶴 風吹ジュン 根津基八 佐藤慶
注2)	66 さくら	2002	平成14年度前	20.3	27.5	23.3	作：田淵久美子			高野志穂 小澤征悦 江守徹 大滝秀治
※	67 まんてん	2002	平成14年度後	20.3	23.6	20.7	作：マキノノゾミ			宮地真緒 浅野温子 藤井隆 宮本信子
	68 こころ	2003	平成15年度前	22.5	26.0	21.3	作：青柳祐美子			中越典子 岸恵子 伊藤蘭 寺尾聰
※	69 てるてる家族	2003	平成15年度後	20.9	22.0	18.9	原作：なかにし礼「てるてる坊主の照子さん」より／脚本：大森寿美男	石田ゆり		石原さとみ 浅野ゆう子 上野樹里 岸谷五朗
	70 天花(てんか)	2004	平成16年度前	18.6	20.0	16.2	作：竹山洋			藤澤恵麻 片平なぎさ 香川照之
※	71 わかば	2004	平成16年度後	18.9	19.9	17.0	作：尾西兼一			原田夏希 田中裕子 内藤剛志

語り 注3)	主人公の名前	主人公の職業	ヒロインの生年	主人公の年齢	作品で描いた時代(年) 注4)	一代記など 注5)	主人公の結婚	舞台
藤田弓子	竹田悠	旅館の女将⇒下着販売	大正14年 1925	15歳~31歳	1940-1956 昭和15年7月~昭和31年	半生記	○	京都, 奈良, 大阪
西田敏行	北山蝶子	バイオリニストの妻	明治44年 1911	16歳~38歳	1927-1949 昭和2年12月~昭和24年	半生記	○	北海道, 東京, 青森
櫻山文枝	早乙女翠	旧制中学の英語教師⇒塾教師⇒中学教師	明治43年 1910	20歳~37歳	1931-1948 昭和6年~昭和23年4月	半生記	○	東京, 大阪, 近江八幡
中村メイコ	結城暢子	雑誌編集者	昭和元年 1926	19歳~62歳	1945-1988 昭和20年8月~昭和63年8月現代	一代記	○	高知, 東京
杉浦直樹	小野純子	食堂女将, 旅館女将	昭和4年 1929	18歳~33歳	1947-1962 昭和22年6月~昭和37年	半生記	○	和歌山, 大阪, 兵庫
杉浦圭子アナ	阿川咲 阿川麻子	娘:漫画家志望 母:デパート勤務	娘:昭和43年1968 母:昭和22年1947	20歳~21歳 41歳~43歳	1988-1989 昭和63年1月~平成元年夏現代	1年半	○ ○	静岡, 東京
立子山博恒アナ	秋津和子	実業団バレーボール選手⇒化粧品会社起業	昭和15年 1940	18歳~50歳	1958-1990 昭和33年夏~平成2年3月現代	一代記	○死別	山口, 大阪
(荻野目洋子)	畠山幸吉	テレビジョン開発者	明治27年 1894	18歳~38歳	1912-1932 明治45年早春~昭和7年夏	半生記	○	富山, 東京
野際陽子	中村愛子 能田妙子	娘:京漬物店 母:旅行代理店勤務	娘:昭和45年 1970 母:昭和22年 1947	20歳~21歳 43歳~44歳	1990-1991 平成2年8月~平成3年夏ほほ現代	1年	娘:しない 母:○離婚 ⇒再婚	京都
八千草薫	氏家真知子	ホテル勤務, 洋裁工房勤務	大正14年 1925	19歳~29歳	1945-1955 昭和20年5月~昭和30年2月	10年	○離婚⇒再婚の約束	東京, 佐渡, 志摩, 北海道, 箱根
奈良岡朋子	山代玉子	老舗旅館女将	昭和27年 1952	28歳~39歳	1980-1991 昭和55年冬~平成3年ほほ現代	11年	○	大阪, 東京
倍賞千恵子	藪沢ひらり	専門学校生:キングサイズ用品店員⇒栄養士を目指す相撲部屋マネージャー見習い	昭和47年 1972	20歳	1992-1993 平成4年7月~平成5年3月現代	9か月	しない	東京, 秋田
室井滋	朝倉悠希	医師	昭和40年 1965	24歳~28歳	1989-1993 平成元年秋~平成5年夏現代	4年	○	京都(伊根町・舞鶴), 神戸
松平定知アナ	小森千晶	信州味噌屋	昭和5年 1930	18歳~34歳	1948-1964 昭和23年4月~昭和39年10月	16年	○	諏訪
都はるみ	桜井ひあの	童話作家を目指す	昭和47年 1972	20歳~21歳	1993-1994 平成5年3月~平成6年9月	1年半	しない	大阪
奈良岡朋子	高倉春希	脚本家	大正14年 1925	18歳~64歳	1943-1989 昭和18年3月~平成元年未	一代記	○	大阪, 東京, 伊豆
(三国一夫)	前田汐	高校生⇒人形製作の作業場勤務	昭和52年 1977	17歳~19歳	1994-1996 平成6年6月~平成8年11月ほほ現代	2年	しない	博多, 京都
萩本欽一	南田のぞみ	OL⇒弁護士	昭和42年 1967	24歳~29歳	1991-1996 平成3年秋~平成8年8月ほほ現代	5年	しない	東京, 福島
上田早苗アナ	野田香子 野田麗子	女流棋士 豆腐屋を継ぐ	昭和41 1966	生まれる前~39歳	1966-2005 昭和41年夏~平成17年(未来)	一代記	○離婚 ○	大阪
堀尾正明アナ	川村あぐり	美容師	明治40年 1907	生まれる前~48歳	1907-1955 明治40年~昭和30年	一代記	○死別⇒再婚	岡山, 東京, 山梨, 東京
上田早苗アナ	榊 泉	酒造家	昭和24年 1949	11歳~46歳	1960-1995 昭和35年8月~平成7年秋	一代記	○	兵庫(丹波篠山), 神戸(灘)
有働由美子アナ	川崎うらら	女性棟梁	昭和38年 1963	7歳~35歳	1970-1998 昭和45年冬~平成10年夏ほほ現代	半生記	しない	栃木(日光), 東京
中川緑アナ	水嶋渚	新聞記者⇒ノンフィクションライター	昭和37年 1962	17歳~36歳	1979-1999 昭和54年初夏~平成11年早春現代	半生記	○離婚⇒再婚死別	大阪
(倍賞千恵子)	萌	食堂で働く孤児院:保育園	大正12年 1923	生まれる前~没(1983年60歳)後まで	1923-1999 大正12年冬~平成11年6月ほほ現代	一代記	○死別⇒再婚死別	北海道, 東京
有馬稲子	宮本あすか	和菓子職人	昭和35年 1960	生まれる前~40歳	1959-2000 昭和34年6月~平成12年4月現代	一代記	○	京都, 奈良
久保純子アナ	北山なずな	魚貝加工センター勤務⇒給食調理員	昭和49年 1974	19歳~26歳	1993-2000 平成5年秋~平成12年秋現代	7年	しない(未婚の母)	青森, 東京
(岡本綾)	佐々木美月	女優⇒旅館女将⇒映画監督	昭和28年 1953	生まれる前~47歳	1953-2000 昭和28年9月~平成12年ほほ現代	一代記	しない	京都
平良とみ	古波蔵恵里	看護師	昭和47年 1972	生まれる前~29歳	1972-2001 昭和47年5月~平成13年現代	半生記	○	沖縄, 東京
野際陽子	山中木葉	料理人	昭和48年 1973	18歳~28歳	1992-2001 平成4年2月~平成13年現代	9年	○	和歌山, 大阪
大滝秀治	エリザベス・さくら・松下	中学英語教師	昭和53年 1978	23歳~24歳	2002-2003 平成14年1月~平成15年4月ほほ現代	1年	しない	ハワイ, 飛騨高山, 東京
藤村俊二	日高満天	気象予報士⇒宇宙飛行士	昭和53年 1978	18歳~31歳	1997-2009 平成9年3月~平成21年(未来)	半生記	○	屋久島, 鹿児島, 大阪
岸恵子	未永こころ	客室乗務員⇒うなぎ屋女将	昭和52年 1977	23歳~26歳	2000-2003 平成12年夏~平成15年6月ほほ現代	3年	○死別⇒再婚の予感	東京, 新潟
(石原さとみ)	岩田冬子	宝塚音楽学校生徒⇒パン屋	昭和24年 1949	生まれる前~21歳	1946-1971 昭和21年9月~昭和46年春	半生記	しない	大阪
山根基世アナ	佐藤天花	保育士	昭和51年 1976	17歳~28歳	1994-2004 平成6年夏~平成16年9月現代	10年	○	仙台, 東京
内藤裕子アナ	高原若葉	造園家	昭和53年 1978	21歳~26歳	2000-2005 平成12年4月~平成17年3月現代	5年	○	宮崎(日南), 兵庫(神戸)

	作品名	放送開始年	放送期間	初回番組平均世帯視聴率★	最高番組平均世帯視聴率★	期間平均視聴率★	原作／作／脚本	主人公のモデル	男性主役	主な出演者
	72 ファイト	2005	平成17年度前	16.9	21.9	16.7	作：橋部敦子			本仮屋ユイカ 緒形直人 酒井法子
※	73 風のハルカ	2005	平成17年度後	18.3	21.3	17.5	作：大森美香			村川絵梨 渡辺いっけい 真矢みき
	74 純情きらり	2006	平成18年度前	17.7	24.2	19.4	脚本：浅野妙子／ 原案：津島佑子『火の山—山猿記』			宮崎あおい 寺島しのぶ 西島秀俊 井川遥
※	75 芋たこなんきん	2006	平成18年度後	20.3	20.3	16.8	原案：田辺聖子／脚本：長川千佳子	田辺聖子		藤山直美 國村隼 いしだあゆみ 田畑智子
	76 どんどど晴れ	2007	平成19年度前	14.9	24.8	19.4	作：小松江里子			比嘉愛未 内田朝陽 草苗光子 宮本信子
※	77 ちりとてちん	2007	平成19年度後	17.1	18.8	15.9	作：藤本有紀			貴地谷しほり 和久井映見 松重豊 渡瀬恒彦
	78 睡	2008	平成20年度前	16.5	18.5	15.2	作：鈴木聡			榮倉奈々 西田敏行 飯島直子
※	79 だんだん	2008	平成20年度後	16.8	18.7	16.2	作：森脇京子			三倉茉奈 三倉佳奈 吉田栄作 石田ひかり
	80 つばさ	2009	平成21年度前	17.7	17.7	13.8	作：戸田山雅司			多部未華子 高畑淳子 中村梅雀
※	81 ウェルかめ	2009	平成21年度後	16.0	20.6	13.5	作：相良敦子			倉科カナ 石黒賢 羽田美智子 室井滋
	82 ゲゲゲの女房	2010	平成22年度前	14.8	23.6	18.6	原案：武良布枝／脚本：山本むつみ	武良布枝		松下奈緒 向井理 竹下景子 松坂慶子
※	83 てっぱん	2010	平成22年度後	18.2	23.6	17.2	作：寺田敏雄、今井雅子、関えり香			瀧本美織 富司純子 安田成美 遠藤憲一
	84 おひさま	2011	平成23年度前	18.4	22.6	18.8	作：岡田恵和			井上真央 高良健吾 樋口可南子 若尾文子
※	85 カーネーション	2011	平成23年度後	16.1	25.0	19.1	作：渡辺あや	小篠綾子		尾野真千子 夏木マリ 小林薫 麻生祐未
	86 梅ちゃん先生	2012	平成24年度前	18.5	24.9	20.7	作：尾崎将也			堀北真希 高橋克実 南果歩 ミムラ 小出恵介
※	87 純と愛	2012	平成24年度後	19.8	20.2	17.1	作：遊川和彦			夏菜 風間俊介 武田鉄矢 館ひろし
	88 あまちゃん	2013	平成25年度前	20.1	27.0	20.6	作：宮藤官九郎			能年玲奈 小泉今日子 宮本信子
※	89 ごちそうさん	2013	平成25年度後	22.0	27.3	22.3	作：森下佳子			杏 東出昌大 宮崎美子 近藤正臣
	90 花子とアン	2014	平成26年度前	21.8	25.9	22.6	原案：村岡恵理「アン」のゆりかご 村岡花子の生涯／脚本：中園ミホ	村岡花子		吉高由里子 伊原剛志 室井滋 仲間由紀恵
※	91 マッサン	2014	平成26年度後	21.8	25.0	21.1	作：羽原大介	竹鶴政孝・ 竹鶴リタ	男10	玉山鉄二 シャーロット・ケイト・フォックス 堤真一
	92 まれ	2015	平成27年度前	21.2	22.7	19.4	作：篠崎絵里子			土屋太鳳 大泉洋 常盤貴子 田中裕子
※	93 あさが来た	2015	平成27年度後	21.2	27.2	23.5	原案：古川智映子／ 脚本：大森美香	広岡浅子		波瑠 玉木宏 近藤正臣 宮崎あおい
	94 とと姉ちゃん	2016	平成28年度前	22.6	25.9	22.8	作：西田征史	大橋綴子		高畑充希 西島秀俊 木村多江 唐沢寿明
※	95 べっぴんさん	2016	平成28年度後	21.6	22.5	20.3	作：渡辺千穂	坂野惇子		芳根京子 生瀬勝久 菅野美穂 市村正親 中村玉緒
	96 ひよっこ	2017	平成29年度前	19.5	24.4	20.4	作：岡田恵和			有村架純 沢村一樹 木村佳乃 宮本信子
※	97 わろてんか	2017	平成29年度後	20.8	22.5	20.1	作：吉田智子	吉本せい		葵わかな 松坂桃李 鈴木保奈美 遠藤憲一
	98 半分、青い。	2018	平成30年度前	21.8	24.5	21.1	作：北川悦吏子			永野芽郁 松雪泰子 佐藤健
※	99 まんぶく	2018	平成30年度後	23.8	23.8	21.4	作：福田靖	安藤仁子・安 藤百福		安藤サクラ 長谷川博己 内田有紀 松下奈緒 松坂慶子
	100 なつぞら	2019	平成31年度前	22.8	23.8	21.0	作：大森寿美男			広瀬すず 松嶋菜々子 草刈正雄
※	101 スカーレット	2019	令和元年度後	20.2			作：水橋文美江			戸田恵梨香 北村一輝 富田靖子
	102 エール	2020	令和2年度前					古閑裕而	男11	窪田正孝 二階堂ふみ
※	103 おちよやん	2020	令和2年度後					浪花千栄子		杉咲花

語り 注3)	主人公の名前	主人公の職業	ヒロインの生年	主人公の年齢	作品で描いた時代(年) 注4)	一代記など 注5)	主人公の結婚	舞台
柴田祐規子アナ	木戸優	中学生⇒旅館中居⇒牧場経営を目指す	昭和56年 1981	15歳~24歳	1996-2005 平成8年夏~平成17年夏ほぼ現代	9年	○	群馬(高崎・四万温泉)、東京
中村メイコ	水野ハルカ	ツアープランナー	昭和53年 1978	9歳~26歳	1988-2005 昭和63年4月~平成17年春ほぼ現代	半生記	○	大分湯布院、大阪
竹下景子	有森桜子	八丁味噌蔵元	大正9年 1920	7歳~没(1948年・28歳)後まで	1928-1948 昭和3年1月~昭和23年10月	ほぼ一代記 注8)	○	愛知(岡崎)、東京
住田功一アナ	花岡町子	小説家	昭和3年 1928	10~17歳 37歳~78歳	1965-2007 昭和40年~平成19年3月現代 (回想編:昭和13年~昭和20年)	一代記	○	大阪
木野花	浅倉夏美	旅館女将	昭和56年 1981	23歳~25歳	2005-2007 平成17年春~平成19年春ほぼ現代	2年	○	盛岡、横浜
上沼恵美子	和田善代美	上方落語家	昭和48年 1973	9歳~33歳	1982-2007 昭和57年12月~平成19年春ほぼ現代	半生記	○	福井(小浜)、大阪
古野晶子アナ	一本木瞳	ヒップホップダンサー・里親	昭和61年 1986	20歳~22歳	2007-2008 平成19年2月~平成20年9月現代	1年7か月	○	東京(月島)、札幌
竹内まりや	田島めぐみ 一条のぞみ	歌手⇒介護福祉士 芸妓⇒歌手⇒祇園置屋の女将	昭和57年 1982	18歳~29歳	2000-2011 平成12年8月~平成23年2月(未来)	半生記	○	松江、京都
イッセー尾形	玉木つばさ	コミュニティFMのパーソナリティ	昭和62年 1987	20歳~21歳	2007-2009 平成19年10月~平成21年4月ほぼ現代	1年7か月	○	埼玉(川越)
桂文枝	浜本波美	雑誌編集者	昭和55年 1980	12歳~29歳	1992-2009 平成4年7月~平成21年夏ほぼ現代	半生記	○	徳島、大阪、東京
野際陽子	飯田布美枝	漫画家の妻	昭和7年 1932	7歳~54歳	1939-1986 昭和14年夏~昭和61年9月	一代記	○	島根(安来)、東京
中村玉緒	村上あかり	お好み焼き店	平成2年 1990	17歳~20歳	2008-2011 平成20年夏~平成23年春現代	3年弱	○	広島(尾道)、大阪
若尾文子	須藤陽子	国民学校教師⇒安曇野そば店	大正11年 1922	10歳~34歳・89歳	1932-1956 & 2011 昭和7年秋~昭和31年・平成23年現代	半生記	○	長野県安曇野
(尾野真千子・夏木マリ・二宮星)	小原糸子	洋服店	大正2年 1913	11歳~没(2006年・92歳)後まで	1924-2011 大正13年~平成23年10月現代	一代記	○死別	大阪府岸和田市
林家正蔵	下村梅子	医学専門学校生⇒大学病院勤務⇒町医者	昭和4年 1929	16歳~33歳	1945-1962 昭和20年8月~昭和37年春	半生記	○	東京蒲田
(夏菜・風間俊介[心の声])	狩野純	ホテルマン	不明 注9)	21歳~24歳	不明 (平成21年~24年ごろと想定)注9)	3年	○	宮古島、大阪
(宮本信子・能年玲奈・小泉今日子)	天野アキ	高校生⇒海女⇒地元アイドル	平成3年 1991	16歳~20歳	2008-2012 平成20年夏~平成24年7月	4年	○	岩手県久慈市、東京
吉行和子	卯野めい子	主婦、創作料理を投稿、蔵座敷で料理屋	明治37年 1904	6歳~42歳	1911-1947 明治44年春~昭和22年3月	一代記	○	大阪、東京
美輪明宏	村岡花子	小学校教師⇒雑誌出版社⇒翻訳家	明治26年 1893	7歳~59歳	1900-1952 明治33年秋~昭和27年6月	一代記	○	甲府、東京
松岡洋子	亀山政春 亀山エリー	ウイスキーメーカー経営者とその妻	夫:明治27年 1894 妻:明治30年 1897	26歳~77歳 23歳~没(1961年・64歳)後まで	1920-1971 大正9年~昭和46年	一代記	○	広島・大阪・北海道余市
戸田恵子	津村希	パティシエ⇒塗屋女将⇒パティシエ	昭和58年 1983	0歳~32歳	1983-2015 昭和58年8月~平成27年8月ほぼ現代	一代記	○	石川(外浦村・輪島)、横浜
杉浦圭子アナ	今井あさ	女性事業家(銀行・生命保険会社・女子大を経営)	嘉永2年 1849	7歳~60歳	1857-1910 安政4年正月~明治43年3月	一代記	○	京都、大阪
榎ふみ	小橋常子	雑誌編集者	大正9年 1920	10歳~68歳	1930-1988 昭和5年~昭和63年夏	一代記	○	静岡、東京
菅野美穂	坂東すみれ	子供服メーカー起業	大正14年 1925	9歳~59歳	1934-1984 昭和9年~昭和59年3月	一代記	○	神戸、大阪
増田明美	谷田部みね子	ラジオ部品工場勤め⇒洋食屋「ウエイトレス」	昭和21年 1946	18歳~22歳	1964-1968 昭和39年秋~昭和43年	4年	○	婚姻届けを出しに行くまで 茨城、東京
小野文恵アナ	藤岡てん	寄席経営者	明治26年 1893	9歳~53歳	1902-1946 明治35年~昭和21年	一代記	○	大阪、京都
風吹ジュン	楡野鈴愛	漫画家⇒100円ショップ店員⇒起業家	昭和46年 1971	生まれる前~40歳	1971-2011 昭和46年~平成23年7月	一代記	○離婚⇒再婚の予感	岐阜、東京
芦田愛菜	今井福子	発明家、起業家の妻	大正9年 1920	18歳~51歳	1938-1971 昭和13年~昭和46年春	一代記	○	大阪
内村光良	奥原なつ	アニメーター	昭和12年 1937	9歳~38歳	1946-1975 昭和21年~昭和50年夏	半生記	○	北海道、東京
中條誠子アナ	川原喜美子	陶芸家	昭和12年 1937	10歳~	1947- 昭和22年~		○	滋賀、大阪
	古山裕一	作曲家	1909-1989				○	
	竹井千代	喜劇女優	1907-1973				○	

この表は、台本とアーカイブ映像を可能な限り厳密に調べて作成した。年齢に関する記載は満年齢とする。

※印は、大阪放送局制作。

★印の欄は3項目とも、ビデオリサーチ社「週間高世帯視聴率番組10」の「NHK朝の連続テレビ小説【関東地区】」より。

注1)「あしたこそ」からカラー作品。

注2)「さくら」から全編デジタルハイビジョン制作。

注3) () は主人公自身による語り。

注4)「現代」とは放送された当時の現代を指す。

注5) ここでは「30年以上を描いたもの」を「一代記」、「10~29年」を描いたものを「半生記」、「10年未満」を描いたものを年数で表記した。

注6)「鳩子の海」の主人公鳩子は記憶喪失だったため仮の誕生日を「昭和14年8月15日」と設定するが、のちに「昭和13年生まれ」と判明する。

注7) 第1回のナレーションで主人公のマリ子は「大正7年生まれ」とあるが、のちに年齢のつじつまが合わなくなるのでここでは「大正6年生まれ」とした。

注8) 30年以上を描いていないが、最終回でヒロインの没後の場面まで描かれるため、「ほぼ一代記」とした。

注9) 描かれた年代を知る手がかりがなく、「不明」とした。

付表2 NHK連続テレビ小説【編成年表】

	作品名	放送期間	総合テレビ 本放送	総合テレビ 再放送	総合テレビ<ダイジェスト版>	総合テレビ 備考 欄<総集編・続編・ 特別編など>	総合テレビ 夕方アンコール 月一金 16:20-16:50	※2011年4月から、衛星ハイビジョンと 衛星第2を統合してはじまる		
								BSプレミアム	BSプレミアム 再放送	BSプレミアム 再放送
1	娘と私	1961年4月3日～ 1962年3月30日	月～金 8:40-9:00	月～金 13:00-13:20						
2	あしたの風	1962年4月2日～ 1963年3月30日	月～土 8:15-8:30	月～土 12:40-12:55						
3	あかつき	1963年4月1日～ 1964年4月4日	同上	同上						
4	うず潮	1964年4月6日～ 1965年4月3日	同上	同上						
5	たまゆら	1965年4月5日～ 1966年4月2日	同上	同上						
6	おはなはん	1966年4月4日～ 1967年4月1日	同上	月～土 12:45-13:00		1週分を1時間に編 集した「特集おはな はん」を放送				
7	旅路	1967年4月3日～ 1968年3月30日	同上	同上		1週分を1時間に編 集した「特集旅路」 を放送				
8	あしたこそ	1968年4月1日～ 1969年4月5日	同上	同上						
9	信子とおおあちゃん	1969年4月7日～ 1970年4月4日	同上	同上						
10	虹	1970年4月6日～ 1971年4月3日	同上	同上						
11	薔子ひとり	1971年4月5日～ 1972年4月1日	同上	同上						
12	藍より青く	1972年4月3日～ 1973年3月31日	同上	同上						
13	北の家族	1973年4月2日～ 1974年3月30日	同上	同上						
14	鳩子の海	1974年4月1日～ 1975年4月5日	同上	同上						
15	水色の時	1975年4月7日～ 10月4日	同上	同上						
16	おはようさん	1975年10月6日～ 1976年4月3日	同上	同上						
17	雲のじゅうたん	1976年4月5日～ 10月2日	同上	同上		総集編あり (12/20-12/29放 送。45分×10回)				
18	火の国に	1976年10月4日～ 1977年4月2日	同上	同上						
19	いちばん星	1977年4月4日～ 10月1日	同上	同上						
20	風見鶏	1977年10月3日～ 1978年4月1日	同上	同上						
21	おていちゃん	1978年4月3日～ 9月30日	同上	同上						
22	わたしは海	1978年10月2日～ 1979年3月31日	同上	同上						
23	マー姉ちゃん	1979年4月2日～ 9月29日	同上	同上						
24	鮎のうた	1979年10月1日～ 1980年4月5日	同上	同上						
25	なっちゃんの写真館	1980年4月7日～ 10月4日	同上	同上						
26	虹を織る	1980年10月6日～ 1981年4月4日	同上	同上						
27	まんざくの花	1981年4月6日～ 10月3日	同上	同上						
28	本日も晴天なり	1981年10月5日～ 1982年4月3日	同上	同上						
29	ハイカラさん	1982年4月5日～ 10月2日	同上	同上						

※1 1999年4月から、ハイビジョン試験放送。開始 2000年12月から本放送開始。		※衛星放送は1989年6月1日から本放送開始。1985年12月25日試験放送開始。(表の※部分は試験放送)						
デジタルハイ ビジョン ※1	アンコール放送 (デジタルハイビジョン)	衛星第1	衛星第1再放送	衛星第2	衛星第2再放送	衛星第2再放送	アンコール放送 (衛星第2)	アンコール放送 (衛星第2)

□ 部分は、未開局あるいは放送実施前

	作品名	放送期間	総合テレビ 本放送	総合テレビ 再放送	総合テレビ<ダイジェスト版>	総合テレビ 備考 欄<総集編・続編・ 特別編など>	総合テレビ 夕方アンコール 月一金 16:20-16:50	※2011年4月から、衛星ハイビジョンと 衛星第2を統合してはじまる		
								BSプレミアム	BSプレミアム 再放送	BSプレミアム 再放送
30	よーいドン	1982年10月4日～ 1983年4月2日	同上	同上						
31	おしん	1983年4月4日～ 1984年3月31日	同上	同上		総集編あり				
32	ロマンス	1984年4月2日～ 9月29日	同上	同上						
33	心はいつもラムネ色	1984年10月1日～ 1985年3月30日	同上	同上						
34	滝つくし	1985年4月1日～ 10月5日	同上	同上						
35	いちばん太鼓	1985年10月7日～ 1986年4月5日	同上	同上						
36	はね駒	1986年4月7日～ 10月4日	同上	同上						
37	都の風	1986年10月6日～ 1987年4月4日	同上	同上						
38	チョッちゃん	1987年4月6日～ 10月3日	同上	同上						
39	はっさい先生	1987年10月5日～ 1988年4月2日	同上	同上						
40	ノンちゃんの夢	1988年4月4日～ 10月1日	同上	同上						
41	純ちゃんの応援歌	1988年10月3日～ 1989年4月1日	同上	同上						
42	青春家族	1989年4月3日～ 9月30日	同上	同上						
43	和っこの金メダル	1989年10月2日～ 1990年3月31日	同上	同上						
44	凜凜と	1990年4月2日～ 9月29日	同上	同上						
45	京、ふたり	1990年10月1日～ 1991年3月30日	同上	同上						
46	君の名は	1991年4月1日～ 1992年4月4日	同上	同上						
47	おんなは度胸	1992年4月6日～ 10月3日	同上	同上						
48	ひらり	1992年10月5日～ 1993年4月3日	同上	同上						
49	ええによぼ	1993年4月5日～ 10月2日	同上	同上						
50	かりん	1993年10月4日～ 1994年4月2日	同上	同上						
51	びあの	1994年4月4日～ 10月1日	同上	同上						
52	春よ、来い	1994年10月3日～ 1995年9月30日	同上	同上						
53	走らんか!	1995年10月2日～ 1996年3月30日	同上	同上						
54	ひまわり	1996年4月1日～ 10月5日	同上	同上						
55	ふたりっ子	1996年10月7日～ 1997年4月5日	同上	同上						
56	あぐり	1997年4月7日～ 10月4日	同上	同上						
57	甘辛しゃん	1997年10月6日～ 1998年4月4日	同上	同上						

※1 1999年4月から、ハイビジョン試験放送。開始 2000年12月から本放送開始。		※衛星放送は1989年6月1日から本放送開始。1985年12月25日試験放送開始。(表の※部分は試験放送)						
デジタルハイ ビジョン ※1	アンコール放送 (デジタルハイビジョン)	衛星第1	衛星第1再放送	衛星第2	衛星第2再放送	衛星第2再放送	アンコール放送 (衛星第二)	アンコール放送 (衛星第二)
		※1984年5月 ~月-土8:15- 8:30	※1984年5月 ~月-土12:45- 13:00					
		※月-土 8:15-8:30	※月-土 12:45-13:00					
		※同上	※同上					
		※同上	※同上					
		※同上	※同上					
		※同上	※同上(～ 1987年1月ま でで終了)					
		※月-土 8:15-8:30(～ 1987年6月)	※	※1987年7月～ 月-土8:15-8:30				
				※月-土 8:15-8:30				
				※同上				
				※同上				
				同上	89年6月～ 月- 土12:45-13:00			
				同上	同上			
				同上	同上			
				同上	同上			
				同上	同上			
				同上	土 24:00-25:30 (1週間の再放送)			
				月-土 7:40-7:55				
				同上				
				月-土 7:30-7:45			1993年4月～ 月-土 8:30-8:45「おはなはん」 〔特集おはなはん〕を再編 集〕	
				同上			1993年10月～ 月-土 7:45-8:00「おしん」	
				同上	月-土 23:00-23:15		同上	
				同上	同上		1994年10月～ ♪「青春 家族」 1995年4月～ ♪「ひら り」	
				同上	同上		1995年10月～ ♪「なっ ちゃんの写真館」	
				同上	土9:30-11:00 『今週の連続テレ ビ小説』		1996年4月～ ♪「純ち ゃんの応援歌」	
				同上	同上		1996年10月 ♪「マー 姉ちゃん」	
				同上	同上		1997年4月～ ♪「ハイ カラさん」	
				同上	同上		1997年10月～ ♪「ふた りっ子」	

	作品名	放送期間	総合テレビ 本放送	総合テレビ 再放送	総合テレビ<ダイジェスト版>	総合テレビ 備考 欄<総集編・続編・ 特別編など>	総合テレビ 夕方アンコール 月一金 16:20-16:50	※2011年4月から、衛星ハイビジョンと 衛星第2を統合してはじまる		
								BSプレミアム	BSプレミアム 再放送	BSプレミアム 再放送
58	天うらら	1998年4月6日～ 10月3日	同上	同上						
59	やんちゃくれ	1998年10月5日～ 1999年4月3日	同上	同上						
60	すずらん	1999年4月5日～ 10月2日	同上	同上						
61	あすか	1999年10月4日～ 2000年4月1日	同上	同上						
62	私の青空	2000年4月3日～ 9月30日	同上	同上		続編あり				
63	オードリー	2000年10月2日～ 2001年3月31日	同上	同上						
64	ちゅらさん	2001年4月2日～ 9月29日	同上	同上		パート4まで 続編あり				
65	ほんまもん	2001年10月1日～ 2002年3月30日	同上	同上						
66	さくら	2002年4月1日～ 9月28日	同上	同上						
67	まんてん	2002年9月30日～ 2003年3月29日	同上	同上						
68	こころ	2003年3月31日～ 9月27日	同上	同上						
69	てるてる家族	2003年9月29日～ 2004年3月27日	同上	同上						
70	天花(てんか)	2004年3月29日～ 9月25日	同上	同上						
71	わかば	2004年9月27日～ 2005年3月26日	同上	同上						
72	ファイト	2005年3月28日～ 10月1日	同上	同上						
73	風のハルカ	2005年10月3日～ 2006年4月1日	同上	同上		特別編あり				
74	純情きらり	2006年4月3日～9 月30日	同上	同上		特別編あり				
75	芋たこなんきん	2006年10月2日～ 2007年3月31日	同上	同上						
76	どんと晴れ	2007年4月2日～ 9月29日	同上	同上		続編あり				
77	ちりとてちん	2007年10月1日～ 2008年3月29日	同上	同上		スピンオフあり				
78	睡	2008年3月31日～ 9月27日	同上	同上						
79	だんだん	2008年9月29日～ 2009年3月28日	同上	同上		スピンオフあり				
80	つばさ	2009年3月30日～ 9月26日	同上	同上		スピンオフあり				
81	ウェルかめ	2009年9月28日～ 2010年3月27日	同上	同上						
82	ゲゲゲの女房	2010年3月29日～ 9月25日	月～土 8:00-8:15	同上		スピンオフあり				
83	てっぱん	2010年9月27日～ 2011年3月26日	同上	同上		続編あり・スピン オフあり				
84	おひさま	2011年4月4日～ 10月1日	同上	同上	(日) 18:40-18:45 朝ドラダイジェスト (5分) (日) 10:05-「とっておきサンデー」内で 「おひさま1週間」(23分)			月・土 7:30-7:45	月・土 18:45- 19:00	土9:30-11:00 「今週の連続 テレビ小説」

※1 1999年4月から、ハイビジョン試験放送。開始 2000年12月から本放送開始。		※衛星放送は1989年6月1日から本放送開始。1985年12月25日試験放送開始。(表の※部分は試験放送)						
デジタルハイ ビジョン ※1	アンコール放送 (デジタルハイビジョン)	衛星第1	衛星第1再放送	衛星第2	衛星第2再放送	衛星第2再放送	アンコール放送 (衛星第二)	アンコール放送 (衛星第二)
				同上	同上		1998年4月～ ♪「おんなは度胸」	
				同上	同上		1998年10月～ ♪「ノンちゃんの夢」	
				同上	同上		1999年4月～ ♪7.46-8.02「本日も晴天なり」	
				同上	同上		1999年10月～ ♪7.46-8.02「雲のじゅうたん」	
				同上	同上		2000年4月～ ♪7.46-8.02「鮎のうた」	
				同上	同上		2000年10月～ ♪7.46-8.02「はね駒」	
				同上	同上		2001年4月～ ♪7.46-8.02「虹を織る」	
				同上	同上		2001年10月～ ♪7.46-8.02「よーいドン」	
月・土 7:30-7:45 (デジタルハイビジョン)				同上	同上		2002年4月～ ♪7.46-8.02「心はいつもラムネ色」	
同上				同上	同上		2002年10月～ ♪7.46-8.02「チョッちゃん」	
同上(デジタル衛星ハイビジョン)				同上	同上		2003年4月～ ♪7.46-8.02「びあの」	2003年4月～ 月・土 19:30-19:45 連続テレビ小説名作アンコール「おしん」
同上				同上	同上		2003年10月～ ♪7.46-8.02「ひまわり」	同上
同上				同上	同上		2004年4月～ ♪7.46-8.01「滞つくし」	2004年4月～ 月・木 19:30-19:45 金 19:30-20:00「ちゆらさん」
同上				同上	同上		2004年10月～ ♪7.46-8.01「ええによぼ」	2004年10月～ 月・木 19:30-19:45 金 19:30-20:00「あぐり」
同上				同上	同上		2005年4月～ ♪7.46-8.01「あすか」	月・木 19:30-19:45 連続ドラマアンコール
同上				同上	同上		2005年10月～ ♪7.46-8.01「かりん」	月・木 19:30-19:45 連続ドラマアンコール
月・土 7:45-8:00				同上	同上		2006年4月～ ♪7.46-8.01「君の名は」	月・木 19:30-19:45 連続ドラマアンコール
同上				同上	同上	2007年1月～ 月・土 19:30-19:45「芋たこなんさん」再放送	2006年10月～ 同上	月・木 19:30-19:45 連続ドラマアンコール
同上				同上	同上	月・土 19:30-19:45「どんと晴れ」再放送	2007年4月～ ♪7.45-8.00「さくら」	
同上				同上	同上	月・土 19:30-19:45「ちりとてちん」再放送	2007年10月～ ♪7.45-8.00「都の風」	
月・土 7:30-7:45				月・土 7:45-8:00	同上	月・土 19:30-19:45「瞳」再放送		
同上	2008年10月～ 月・土 19:45-20:00「純情きらり」			同上	同上	月・土 19:30-19:45「だんだん」再放送		
同上				同上	同上	月・土 19:30-19:45「つばさ」再放送		
同上				同上	同上	月・土 19:30-19:45「ウェルかめ」再放送		
同上(衛星ハイビジョン)				同上	同上	月・土 19:30-19:45「ゲゲの女房」再放送		
同上				同上	同上	月・土 19:30-19:45「てっぱん」再放送		

	作品名	放送期間	総合テレビ 本放送	総合テレビ 再放送	総合テレビ<ダイジェスト版>	総合テレビ 備考 欄<総集編・続編・ 特別編など>	総合テレビ 夕方アンコール 月一金 16:20-16:50	※2011年4月から、衛星ハイビジョンと 衛星第2を統合してはじまる		
								BSプレミアム	BSプレミアム 再放送	BSプレミアム 再放送
85	カーネーション	2011年10月3日～ 2012年3月31日	同上	同上	(日)18:40-18:45 朝ドラダイジェスト(5分) (日)10:05-『とっておきサンデー』 内で「カーネーション1週間」(23分)		同上	同上	同上	
86	梅ちゃん先生	2012年4月2日～ 9月29日	同上	同上	(日)18:40-18:45 朝ドラダイジェスト(5分) (日)11時～『とっておきサンデー』内で 「梅ちゃん先生1週間」(20分)	続編あり		同上	月・土 23:00- 23:15	同上
87	純と愛	2012年10月1日～ 2013年3月30日	同上	同上	(日)18:40-18:45 朝ドラダイジェスト(5分) (日)11時～『とっておきサンデー』内で 「純と愛1週間」(20分)	スピノフあり		同上	同上	同上
88	あまちゃん	2013年4月1日～ 9月28日	同上	同上	(日)5:45-5:50、24:05-24:10 朝 ドラダイジェスト(5分) (日)11時～『とっておきサンデー』内で 「あまちゃん1週間」(20分)			同上	同上	同上
89	ごちそうさん	2013年9月30日～ 2014年3月29日	同上	同上	(日)5:45-5:50、24:05-24:10 「5分でごちそうさん」(5分) (日)11時～『とっておきサンデー』内で 「ごちそうさん1週間」(20分)	スピノフあり		同上	同上	同上
90	花子とアン	2014年3月31日～ 9月27日	同上	同上	(土)14:50、22:45-(日)5:45-「5分 で花子とアン」(5分) (日)11時～『とっておきサンデー』内で 「花子とアン1週間」(20分)	スピノフあり		同上	同上	同上
91	マッサン	2014年9月29日～ 2015年3月28日	同上	同上	(土)14:50、22:45-(日)5:45-「5分 でマッサン」(5分) (日)11時～『とっておきサンデー』内で 「マッサン1週間」(20分)	スピノフあり		同上	同上	同上
92	まれ	2015年3月30日～ 9月26日	同上	同上	(土)14:50-(日)5:45、17:55-「5分 でまれ」(5分) (日)11時～『とっておきサンデー』内で 「まれ1週間」(20分)	スピノフあり		同上	同上	同上
93	あさが来た	2015年9月28日～ 2016年4月2日	同上	同上	(土)14:50-(日)5:45、17:55-「5分 であさが来た」(5分) (日)11時～『とっておきサンデー』内で 「あさが来た1週間」(20分)	スピノフあり		同上	同上	同上
94	とと姉ちゃん	2016年4月4日～ 10月1日	同上	同上	(土)14:50-(日)5:45、17:55-「5分 でとと姉ちゃん」(5分) (日)11:00-11:20「とと姉ちゃん1週 間」(20分)	スピノフあり		同上	同上	同上
95	べっぴんさん	2016年10月3日～ 2017年4月1日	同上	同上	(土)14:50-(日)5:45、17:55-「5分 でべっぴんさん」(5分) (日)11:00-11:20「べっぴんさん1週 間」(20分)	特別編あり・スピ ノフあり		同上	同上	同上
96	ひよっこ	2017年4月3日～ 9月30日	同上	同上	(土)14:50-(日)5:45、17:55-「5分 でひよっこ」(5分) (日)11:00-11:20「ひよっこ1週間」 (20分)	続編あり		同上	月・土 23:30- 23:45	同上
97	わろてんか	2017年10月2日～ 2018年3月31日	同上	同上	(土)14:50-(日)5:45、17:55-「5分 でわろてんか」(5分) (日)11:00-11:20「わろてんか1週間」 (20分)	スピノフあり		同上	同上	同上
98	半分、青い。	2018年4月2日～ 9月29日	同上	同上	(日)5:45、17:55-「5分で半分、青 い。」(5分) (日)11:00-11:20「半分、青い。1週 間」(20分)		2018年4月～ 「カーネーション」	同上	同上	同上
99	まんぶく	2018年10月1日～ 2019年3月30日	同上	同上	(日)5:45、17:55-「5分でまんぶく」 (5分) (日)11:00-11:20「まんぶく1週間」 (20分)		2018年11月～ 「あさが来た」	同上	同上	同上
100	なつぞら	2019年4月1日～ 9月28日	同上	同上	(日)5:45、17:55-「5分でなつぞら」 (5分) (日)11:00-11:20「なつぞら1週間」 (20分)	スピノフあり	2019年6月～ 「ゲゲゲの女房」	同上	同上	同上
101	スカーレット	2019年9月30日～ 2020年3月28日	同上	同上	(日)5:45、17:55-「5分でスカーレ ット」(5分) (日)11:00-11:20「スカーレット1週 間」(20分)			同上	同上	同上
102	エール	2020年3月30日～	月～金 8:00-8:15	月～金 12:45-13:00						

※1 1999年4月から、ハイビジョン試験放送。開始 2000年12月から本放送開始。		※衛星放送は1989年6月1日から本放送開始。1985年12月25日試験放送開始。(表の※部分は試験放送)						
デジタルハイ ビジョン ※1	アンコール放送 (デジタルハイビジョン)	衛星第1	衛星第1再放送	衛星第2	衛星第2再放送	衛星第2再放送	アンコール放送 (衛星第二)	アンコール放送 (衛星第二)
	(↓以下はBSプレミアムでのアン コール放送)							
	月・土 7:15-7:30 『ゲゲゲの女房』							
	月・土 7:15-7:30, 19:00-19:15 『おひさま』							
	月・土 7:15-7:30『純情きらり』 月・土 19:00-19:15『てっぺん』 (日)10:00-11:30『おしん』 (2013年1月～)							
	月・土 7:15-7:30 『ちりとてちん』 月・土 19:00-19:15 『ちゆらさん』 (日)10:00-11:30『おしん』 (2013年1月～)							
	月・土 7:15-7:30 『カーネーション』							
	月・土 7:15-7:30 『梅ちゃん先生』							
	月・土 7:15-7:30, (土)18:00- 19:30『あまちゃん』							
	月・土 7:15-7:30 『どんど晴れ』							
	月・土 7:15-7:30 『てるてる家族』							
	月・土 7:15-7:30 『ごちそうさん』							
	月・土 7:15-7:30『こころ』							
	月・土 7:15-7:30『花子とアン』							
	月・土 7:15-7:30『マッサン』							
	月・土 7:15-7:30 『べっぴんさん』							
	月・土 7:15-7:30『おしん』							
	月・土 7:15-7:30『おしん』							

